財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第324集

荒砥宮田遺跡 I

昭和58年度県営圃場整備事業荒砥北部
地区に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書

縄文・古墳時代の調査

《本文・写真図版編》

2003

群　馬　県　教　育　委　員　会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

荒砥宮田遺跡 I

昭和58年度県営圃場整備事業荒砥北部
地区に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書

縄文・古墳時代の調査

《本文・写真図版編》

2003

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

前橋市の旧荒砥地区では、昭和56年度から国道50号の北側地域を対象にした県営荒砥北部圃場整備事業が始まり、平成３年度まで行われました。圃場整備の対象になった地域は、県内でも有数の埋蔵文化財密集地で、多くの埋蔵文化財が記録保存の対象となりました。

当事業団では昭和56年度から59年度にかけて、事業地域内の埋蔵文化財の発掘調査を行いました。本来なら発掘調査後、直ちに報告書を刊行する予定でしたが、諸般の事情により、平成５年度から整理事業を開始し、これまでに６遺跡、９冊の調査報告書を刊行いたしました。

平成14・15年度には、昭和58年度に発掘調査を実施した荒砥宮田遺跡の整理事業を実施し、ここにその報告書を上梓することとなりました。

荒砥宮田遺跡は、縄文時代から中・近世にかけての複合集落遺跡です。多くの遺構・遺物を検出したことから、整理事業は２年計画で行うこととしました。第１年次は、縄文時代から古墳時代の竪穴住居や土坑・古墳とその出土遺物を対象に整理作業をおこない、その成果を本報告書で報告しました。赤城山南麓地域の縄文時代や古墳時代の集落研究に新たな資料を加えることとなりました。

発掘調査から報告書刊行まで、群馬県農政部土地改良課、前橋土地改良事務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、地元関係者の皆様には、一方ならぬご指導・ご協力を賜りました。厚く感謝の意を表します。

最後に、本報告書が、地域の歴史解明のため、多くの人々によって有効に活用されることを願い序といたします。

平成15年10月

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長　小野宇三郎

1区133号土坑出土の刀子
呑口式の刀子で柄木と鞘材が残っている。柄の背にはU字形の金具が見える。

1区8号住居出土の鍬・鋤先

鉄製の方形鍬・鋤先2点が古墳時代前期の住居とその周辺から出土した。メタル部分が多く残る。切断し、断面観察用の試料を作成した。切断試料の断面観察から、炭素量の異なる鋼を合わせ鍛えて製作していることが判明した。

例　　言

1．本書は1983(昭和58)年度の県営圃場整備事業荒砥北部地区に伴う荒砥宮田遺跡の発掘調査報告書の第１分冊である。

2．荒砥宮田遺跡は、群馬県前橋市荒口町80番地等に所在した。遺跡名は、遺跡のある旧村名である「荒砥(あらと)」に、字名の「宮田(みやた)」を付して「荒砥宮田」とした。

3．発掘調査は、群馬県農政部・前橋土地改良事務所・群馬県教育委員会の委託により、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。発掘調査時の組織体制は次の通りである。

期　　間　1983(昭和58)年８月23日～1984(昭和59)年３月24日

管理・指導　小林起久治(常務理事)、白石保三郎(事務局長)、大澤秋良（管理部長)、松本浩一(調査研究部長)、細野雅男(調査研究第３課長)

事務担当　国定　均、笠原秀樹、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏(主事)
野島のぶ江、吉田恵子、吉田芙子、並木綾子、今井もと子(補助員)

調査担当　細野雅男、下城　正、鹿田雄三(調査研究員、現県立伊勢崎東高等学校教諭)、
相京建史、藤巻幸男、小島敦子、徳江秀夫、斉藤利昭(調査研究員)

4．発掘資料の整理および報告書の作成は、群馬県教育委員会の委託により、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。整理・報告書の作成の期間・体制は次の通りである。

期　　間　2002(平成14)年４月１日～2003(平成15)年10月31日

管理・指導　小野宇三郎(理事長)、吉田　豊・住谷永一(常務理事)、神保侑史(事業局長)、萩原利通(管理部長)、巾　隆之・右島和夫(調査研究部長)、植原恒夫(総務課長)、西田健彦・相京建史(資料整理課長)

事務担当　小山建夫・高橋房雄(経理係長)、竹内　宏(総務係長)、須田朋子・吉田有光(係長代理)、
森下弘美・田中賢一・阿久沢玄洋(主事)
今井もと子、内山佳子、若田　誠、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子、
松下次男、吉田　茂(補助員)

編　　集　小島敦子(専門員)

本文　執筆　徳江秀夫(専門員)：第１章－２、小島敦子：その他

遺構　写真　調査担当者

遺物　写真　佐藤元彦(係長代理)

遺物　観察　藤巻幸男(専門員)：縄文土器、小島敦子：その他

保存　処理　関　邦一(係長代理)、土橋まり子(嘱託員)、小材浩一(補助員)

器械　実測　田中富子、富沢スミ江、伊東博子、岸　弘子(補助員)

遺物整理および図面作成　木暮芳枝、馬場信子、儘田澄子、新井雅子、丸橋富美子、田中のぶ子、田中富美子、
石井伸彦、泉　悦子、今井千秋、斎木洋子、高野淑江、三橋博之、山本千晶、金井隆明、
小池次男、桜井次男、白石満美子、竹之内芳明、三浦　尚、山岸洋一、吉尾千鶴(補助員)

委託関係　財団法人岩手県文化振興事業団　　(株)測研

5．石材同定にあたっては飯島静雄氏(群馬県地質研究会会員)にご教示を得た。
6．発掘調査および本書の作成にあたり、下記の諸氏よりご助言を得た。記して感謝の意を表したい。
井上唯雄　鹿田雄三　岡口巧一　前原　豊　赤沼英男(敬称略)
群馬県農政部土地改良課　群馬県農政部前橋土地改良事務所　荒砥北部土地改良区　群馬県教育委員会
7．出土遺物は一括して群馬県埋蔵文化財センターおよび(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が保管している。

凡　　例

1．本調査に用いたグリッドは、調査区全体をカバーできるように、100mの大グリッドを設定し、その中を5×5mの小グリッドとした。グリッドの呼称は100mの大グリッドを独立した単位とし、北西コーナーの交点をA－0とし東から西方向に1から20まで、北から南方向にaからtまでとし、Aa－1のように呼称した。グリッドの南北ラインは、西へ26°偏っている。
2．本書における遺構番号は、調査時に付されたものをそのまま使用した。
3．遺構図の中で使用した北方位は、すべて座標北を使用している。
4．本書で使用した国家座標は日本測地第Ⅸ系によるものである。
5．遺構図・遺物図の縮尺は、原則として以下の通りである。縮尺の異なるものが併載される場合は、それぞれにスケールを付した。
遺構図　住居1：80　周溝墓1：80　古墳1：80　土坑1：60
遺物図　土器1：4　土器拓影1：3　石器・石製品1：3　大型石器1：5　小型石器1：1
6．遺物番号は種類ごとの連番で、下記のように種類の記号を付した。記号番号は本文・挿図・表・写真図版ともに一致する。
土器　記号無し　　石器　S　　金属器　M
7．図中で使用したスクリーントーン・インレタは以下のとおりである。
遺構図　浅間B軽石層　浅間C軽石層　古墳の床石部分
焼土
遺物図　土器赤彩　石器磨り面　石器摩滅部分

8．遺物写真図版の倍率は、土器は原則として１／４、石器は礫・剥片石器は１／３、石鏃等の小型のものは１／１に近づけるようにした。

9．遺物の重量の計測にあたっては6000ｇまでは１ｇ単位、20kgまでは50ｇ単位、20kg以上は100ｇ単位の秤を使用して計測した。

10．各地図の使用は以下のとおりである。

第１図　国土地理院発行、20万分の１地勢図(長野・宇都宮)

第２図　前橋市土地改良事務所発行、県営圃場整備事業荒砥北部地区計画概要

第３図　『群馬県史』通史編１付図を簡略化した『荒砥上ノ坊遺跡Ⅰ』第５図を修正して使用。

第４図・第６図・第７図・第127図・第128図　前橋市発行、昭和49年測図現形図47

第５図　国土地理院発行、２万５千分の１地形図(大胡)

第８図・第129図　前橋市発行、平成10年測図現形図47

11．各遺構の記述にあたっては以下のような点に留意して記述した。

住居　位置は、その遺構が含まれるグリッドをすべて記載した。重複は、重複する遺構とその新旧関係を述べた。形状は方形・長方形・隅丸方形・隅丸長方形にほぼ分類して記載した。規模は遺構確認面での上場で計測した。なお、竈付設住居では竈の部分を含んでいない。面積は住居の上場でプラニメーターの３回平均値を計測した。方位は北方向に最も近い壁の方向を計測した。床面は傾斜や凹凸の有無、硬化面の残存状況を記述した。埋没土は埋没土の全体的傾向や特徴的な埋没土について記述した。炉・竈はそれぞれの位置と規模を記載し、遺存状態を述べた。周溝・柱穴・貯蔵穴等の住居施設については、検出された位置・規模・遺存状態を記述した。遺物は、住居全体の遺物の出土状態と、特徴的な遺物について記述した。所見では各住居の調査から考えられることがらがあれば記述した。また出土遺物・重複関係等から、遺構の時期を記載したが、表現は不統一である。縄文時代は土器型式名、古墳時代については前期は時代区分、中後期は世紀で表した。特に古墳時代前期の歴年代については確定していない状況があることから記載を避けたが、基本的な考え方は第６章で述べた。

その他の遺構　土坑・溝・墓等については、住居に準じて記述した。

目　次

《本文・図版編》
序
口絵
例言
凡例

第１章　調査に至る経過
１．県営圃場整備事業と発掘調査 ……1
２．試掘調査と調査区の設定 ……3

第２章　遺跡の立地と環境
１．遺跡の位置と地形 ……5
２．周辺の遺跡……10

第３章　発掘調査の方法と経過
１．発掘調査の方法……16
（１）グリッドの設定……16
（２）基本土層と遺構確認……16
（３）遺構・遺物の記録……18
２．調査の経過……18
３．発掘区の概要……20

第４章　検出された遺構・遺物
１．縄文時代の遺構・遺物……23
（１）概要……23
（２）竪穴住居……23
（３）土坑……23
（４）遺構外の出土遺物……32
２．弥生時代終末期の遺構・遺物……32
（１）概要……32
（２）土坑……32
（３）遺構外の出土遺物……34
３．古墳時代前期の遺構・遺物……35
（１）概要……35
（２）竪穴住居と土坑・溝……35
（３）周溝墓……84
４．古墳時代中後期の遺構・遺物……87
（１）概要……87
（２）竪穴住居と土坑……87
（３）古墳 ……142
５．遺構外の出土遺物 ……146

第５章　科学分析報告 ……151
１．出土遺物の組成に基づく荒砥宮田遺跡古墳時代出土鉄器の分類とその意味
赤沼英男

第６章　調査の成果と問題点
１．荒砥宮田遺跡の遺構分布とその変遷 ……168
２．荒砥宮田遺跡の出土遺物 ……172
（１）古墳時代前期の土器 ……172
（２）古墳時代前期の礫石器 ……172
（３）鉄製方形鋤・鋤先について ……177
（４）１区333号土坑出土刀子について……179

写真図版

付図　古墳時代遺構全体図

《遺構一覧・遺物観察表編》
１．住居一覧表
２．土坑一覧表
３．墓一覧表
４．土器観察表
５．石器観察表
６．金属器観察表

挿図目次

第 1図 荒砥宮田遺跡の位置 ……1
第 2図 県営圃場整備事業荒砥北部地区と昭和58年度工事区 ……2
第 3図 試掘トレンチと調査区 ……4
第 4図 群馬県中央部の地形と荒砥宮田遺跡 ……5
第 5図 荒砥宮田遺跡周辺の地形 ……6
第 6図 荒砥宮田遺跡周辺の土層 ……8
第 7図 荒砥宮田・諏訪西遺跡土層観察地点 ……9
第 8図 荒砥宮田遺跡周辺の遺跡分布 ……11
第 9図 弥生時代から古墳時代前期の遺跡分布 …14
第 10図 古墳時代中・後期の遺跡分布……15
第 11図 荒砥宮田遺跡調査区の設定……16
第 12図 荒砥宮田遺跡の基本土層……17
第 13図 荒砥宮田遺跡調査区の位置（調査時）……21
第 14図 荒砥宮田遺跡調査区の位置（現状）……22
第 15図 1区10号住居と出土遺物……24
第 16図 1区82号・2区33号・56号土坑と出土遺物…26
第 17図 2区58号土坑と出土遺物……27
第 18図 2区59号土坑……28
第 19図 1区の縄文時代遺構と縄文土器出土位置略図…29
第 20図 2区の縄文時代遺構と縄文土器出土位置略図…30
第 21図 遺構外出土の縄文土器……31
第 22図 1区の弥生時代終末の土坑と出土遺物……33
第 23図 遺構外出土の弥生時代終末の土器……34
第 24図 1区2号住居……35
第 25図 1区7号住居と出土遺物……36
第 26図 1区8号住居と出土遺物……37
第 27図 1区9号住居と出土遺物……39
第 28図 1区12号住居と出土遺物……40
第 29図 1区13号住居と出土遺物……41
第 30図 1区15号住居……43
第 31図 1区15号住居出土遺物（1）……44
第 32図 1区15号住居出土遺物（2）……45
第 33図 1区15号住居出土遺物（3）……46
第 34図 1区15号住居出土遺物（4）……47
第 35図 1区17号住居と出土遺物……48
第 36図 1区20号住居……49
第 37図 1区20号住居出土遺物（1）……51
第 38図 1区20号住居出土遺物（2）……52
第 39図 1区20号住居出土遺物（3）……53
第 40図 1区20号住居出土遺物（4）……54
第 41図 1区21号住居と出土遺物（1）……57
第 42図 1区21号住居出土遺物（2）……58
第 43図 1区23号住居出土遺物……59
第 44図 1区23号住居……60
第 45図 1区24号住居と出土遺物（1）……61
第 46図 1区24号住居出土遺物（2）……62
第 47図 1区26号住居出土遺物……63
第 48図 1区26号住居……64
第 49図 1区38号住居出土遺物……65
第 50図 1区38号住居……66
第 51図 1区43号住居と出土遺物……67
第 52図 1区45号住居と出土遺物……68
第 53図 1区80号・81号溝と出土遺物（1）……69
第 54図 1区80号・81号溝出土遺物（2）……70
第 55図 1区88号土坑と出土遺物……71
第 56図 2区2号住居……72
第 57図 2区2号住居出土遺物……73
第 58図 2区5号住居……74
第 59図 2区5号住居出土遺物……75
第 60図 2区6号住居……76
第 61図 2区6号住居出土遺物（1）……77
第 62図 2区6号住居出土遺物（2）……78
第 63図 2区東谷地土坑群の位置と74号・75号・79号土坑……79
第 64図 2区60号土坑と出土遺物……80
第 65図 2区76号土坑と出土遺物……81
第 66図 2区77号土坑と出土遺物……82
第 67図 2区78号土坑と出土遺物……83
第 68図 2区1号周溝墓出土遺物……84
第 69図 2区1号周溝墓……85
第 70図 1区1号住居……88
第 71図 1区1号住居出土遺物……89
第 72図 1区3号住居……90
第 73図 1区3号住居出土遺物……91
第 74図 1区4号住居と出土遺物（1）……92
第 75図 1区4号住居出土遺物（2）……93
第 76図 1区5号住居……94
第 77図 1区6号住居と出土遺物……95
第 78図 1区11号住居……96
第 79図 1区11号住居出土遺物……97
第 80図 1区14号住居と出土遺物……99
第 81図 1区16号住居と出土遺物……100
第 82図 1区18号住居と出土遺物……102
第 83図 1区19号住居と出土遺物……103
第 84図 1区22号住居……105
第 85図 1区22号住居出土遺物……106
第 86図 1区25号住居と出土遺物……107
第 87図 1区27号住居と出土遺物……109
第 88図 1区28号住居と出土遺物……110
第 89図 1区29号住居……111
第 90図 1区29号住居出土遺物……112
第 91図 1区30号住居と出土遺物……113
第 92図 1区31号住居……114
第 93図 1区31号住居出土遺物……115
第 94図 1区33号住居……116
第 95図 1区33号住居出土遺物……117
第 96図 1区36号住居・333号土坑と出土遺物……118
第 97図 1区37号住居出土遺物（1）……119
第 98図 1区37号住居出土遺物（2）……120
第 99図 1区37号住居……121
第100図 1区39号住居と出土遺物……123
第101図 1区40号住居と出土遺物……124
第102図 1区41号住居……125

第103図　1区42号住居と出土遺物 ……126
第104図　1区44号住居と出土遺物 ……127
第105図　1区46号住居と出土遺物 ……128
第106図　1区128号土坑・196号土坑と出土遺物 …129
第107図　1区73号・75号・80号・334号土坑と出土遺物 ……131
第108図　1北区1号住居 ……133
第109図　1北区1号住居出土遺物（1） ……134
第110図　1北区1号住居出土遺物（2） ……135
第111図　1北区2号住居と出土遺物 ……135
第112図　1北区3号住居と出土遺物 ……136
第113図　1北区4号住居 ……137
第114図　1北区5号土坑と出土遺物 ……138
第115図　1北区5号住居と出土遺物 ……139
第116図　2区1号住居と出土遺物 ……140
第117図　2区3号住居と出土遺物 ……141
第118図　2区1号古墳と堀り方 ……143
第119図　2区1号古墳石室と出土遺物 ……145
第120図　1区遺構外の出土遺物（1） ……146
第121図　1区遺構外の出土遺物（2） ……147
第122図　1区遺構外の出土遺物（3） ……148
第123図　1区遺構外の出土遺物（4） ……149
第124図　2区遺構外の出土遺物 ……150
第125図　1・2区の遺構分布の変化 ……170
第126図　荒砥宮田遺跡出土の敲き石・砥石・磨り石 …174
第127図　荒砥宮田遺跡出土の抉り入り鏃の分類 …176
第128図　群馬県出土の鉄製方形鍬・鋤先 ……177

表目次

第1表　県営圃場荒砥北部地区における昭和58年度埋蔵文化財発掘調査一覧表 ……3
第2表　周辺遺跡の概要 ……12
第3表　各調査区の遺構 ……20
第4表　2区東谷地土坑群一覧表 ……80
第5表　遺構出土石器器種一覧表 ……173
第6表　錆とメタルの分析値の比較 ……178

写真目次

PL1－1　1区10号住居全景（東から）
2　1区10号住居遺物出土状態（東から）
3　1区82号土坑全景（西から）
4　2区33号土坑全景（北東から）
5　2区56号土坑全景（北西から）
6　2区58号土坑全景（北西から）
7　2区59号土坑全景（西から）
8　1区1号竪穴土層断面（東から）
9　1区1号竪穴全景（東から）
PL2－1　1区2号住居全景（南から）
2　1区7・10号住居全景（東から）
3　1区7号住居全景（東から）
4　1区8号住居全景（西から）
5　1区8号住居炉全景（東から）
6　1区8号住居貯蔵穴全景（東から）
7　1区9号住居全景（南から）
8　1区9号住居西半床面（北東から）
PL3－1　1区9号住居東半床面（北東から）
2　1区9号住居貯蔵穴遺物出土状態（南東から）
3　1区9号住居貯蔵穴遺物出土状態（西から）
4　1区12号住居全景（西から）
5　1区12号住居貯蔵穴全景（西から）
6　1区13号住居全景（西から）
7　1区13号住居貯蔵穴全景（西から）
8　1区13号住居北東隅遺物出土状態（南西から）
PL4－1　1区15号住居全景（南から）
2　1区15号住居炉全景（西から）
3　1区15号住居北壁土坑全景（東から）
4　1区15号住居西壁土坑全景（北から）
5　1区15号住居床面遺物出土状態
6　1区15号住居北西隅遺物出土状態（西から）
7　1区15号住居南東隅遺物出土状態（東から）
8　1区15号住居南西部遺物出土状態（西から）

PL5－1　1区17号住居全景（西から）
2　1区20号住居全景（北から）
3　1区20号住居南西部近景（東から）
4　1区20号住居炉全景（西から）
5　1区20号住居南東隅土坑全景（東から）
6　1区20号住居南西隅遺物出土状態（東から）
7　1区20号住居南西隅遺物出土状態（西から）
8　1区20号住居南西隅遺物出土状態（北から）
PL6－1　1区20号住居南西部遺物出土状態（北西から）
2　1区21号住居全景（北西から）
3　1区21号住居炉全景（北東から）
4　1区21号住居貯蔵穴全景（北西から）
5　1区21号住居北壁土坑全景（北西から）
6　1区21号住居北西壁土坑全景〔北東から〕
7　1区21号住居北東壁間仕切溝全景（北から）
8　1区21号住居貯蔵穴遺物出土状態（北東から）
PL7－1　1区22・23号住居全景（西から）
2　1区23号住居北西隅遺物出土状態（南から）
3　1区24号住居全景（東から）
4　1区24号住居土層断面（北から）
5　1区24号住居炉全景（南から）
6　1区26号住居全景（西から）
7　1区38号住居全景（北から）
8　1区38号住居炉全景（西から）
PL8－1　1区38号住居南東隅土坑・柱穴検出状況（西から）
2　1区38号住居南東隅遺物出土状態（北から）
3　1区43号住居全景（西から）
4　1区43号住居南隅土坑全景（北から）
5　1区45号住居北東柱穴遺物出土状態
6　1区東谷地80・81号溝全景（北から）
7　2区2号住居全景（東から）
8　2区2号住居炉全景（東から）
PL9－1　2区2号住居炉土層断面（東から）
2　2区2号住居貯蔵穴遺物出土状態（東から）
3　2区2号住居貯蔵穴東脇遺物出土状態（東から）
4　2区2号住居南東隅遺物出土状態（北から）
5　2区2号住居西壁際遺物出土状態（北から）
6　2区2号住居南隅遺物出土状態（南から）
7　2区5号住居全景（南東から）
8　2区5号住居炉土層断面（西から）
PL10－1　2区5号住居焼土脇遺物出土状態（北東から）
2　2区5号住居中央部礫（S127）出土状態（東から）
3　2区5号住居南西隅遺物出土状態（南東から）
4　2区6号住居遺物出土状態（東から）
5　2区6号住居全景（東から）
6　2区6号住居炉土層断面（南西から）
7　2区60号土坑全景（南西から）
8　2区60号土坑土層断面（西から）
PL11－1　2区東谷地西溝群全景（北から）
2　2区74・75号土坑全景（南東から）
3　2区東谷地西溝群作業風景
4　2区76号土坑全景（北東から）
5　2区76号土坑土層断面（北東から）
PL12－1　2区76号土坑S字甕（407）出土状態（北東から）
2　2区76号土坑S字甕（407）出土状態（北東から）
3　2区77号土坑全景（東から）
4　2区77号土坑全景（東から）
5　2区77号土坑土層断面（北東から）
6　2区77号土坑遺物出土状態（東から）
7　2区80号土坑全景（南から）
8　2区80号土坑土層断面（南東から）
PL13－1　2区1号周溝墓全景（北東から）
2　2区1号周溝墓南西溝A－A′土層断面（南東から）
3　2区1号周溝墓北東溝A－A′土層断面（南東から）
4　2区1号周溝墓北西溝B－B′土層断面（南西から）
5　2区1号周溝墓南東溝B－B′土層断面（南西から）
PL14－1　2区1号周溝墓南隅溝C－C′土層断面（西から）
2　2区1号周溝墓北東溝壺（337）出土状態（北から）
3　2区1号周溝墓北東溝壺（337）出土状態（南から）
4　2区1号周溝墓北東溝坩（338）出土状態（南から）
5　2区1号周溝墓作業風景（東から）
6　1区1号住居全景（南から）
7　1区1号住居貯蔵穴全景（西から）
8　1区1号住居南西壁際遺物出土状態（東から）
PL15－1　1区3号住居全景（南から）
2　1区3号住居竈全景（西から）
3　1区3号住居竈・貯蔵穴全景（西から）
4　1区3号住居竈・貯蔵穴全景（北から）
5　1区4・5・6号住居全景（北から）
6　1区4号住居南半全景（西から）
7　1区5号住居全景（西から）
8　1区11号住居全景（西から）
PL16－1　1区11号住居竈全景（西から）
2　1区11号住居貯蔵穴遺物出土状態（西から）
3　1区11号住居貯蔵穴周辺遺物出土状態（西から）
4　1区14号住居全景（西から）
5　1区14号住居竈全景（西から）
6　1区14号住居竈全景（北から）
7　1区14号住居竈周辺遺物出土状態（西から）
8　1区16号住居全景（西から）
PL17－1　1区16号住居竈全景（西から）

2　1区16号住居貯蔵穴全景（北から）
3　1区16号住居竈左脇遺物出土状態（西から）
4　1区16号住居南周溝内遺物出土状態（西から）
5　1区18号住居全景（西から）
6　1区18号住居竈全景（西から）
7　1区18号住居貯蔵穴全景（西から）
8　1区18号住居南西部遺物出土状態（北から）

PL18－1　1区19・20号住居全景（北から）
2　1区作業風景
3　1区作業風景
4　1区作業風景
5　1区19号住居全景（西から）
6　1区19号住居竈全景（西から）
7　1区19号住居竈全景（北から）
8　1区19号住居竈・貯蔵穴全景（西から）

PL19－1　1区22・23号住居全景（西から）
2　1区22号住居竈・貯蔵穴全景（西から）
3　1区22号住居東張出部全景（南西から）
4　1区22号住居南西壁検出状況（北西から）
5　1区25号住居全景（北東から）
6　1区25号住居竈全景（北東から）
7　1区25号住居竈袖断ち割り土層断面（北東から）
8　1区25号住居竈支脚断ち割り土層断面（北東から）

PL20－1　1区25号住居貯蔵穴全景（東から）
2　1区25号住居南壁炭化物出土状況
3　1区27号住居全景（西から）
4　1区27号住居竈全景（西から）
5　1区28号住居全景（西から）
6　1区28号住居竈全景（西から）
7　1区28号住居竈遺物出土状態（西から）
8　1区28号住居貯蔵穴周辺遺物出土状態（北から）

PL21－1　1区28号住居貯蔵穴周辺遺物出土状態（西から）
2　1区29号住居全景（西から）
3　1区29・30号住居全景（西から）
4　1区29・30号住居全景（北から）
5　1区29号住居竈全景（西から）
6　1区29号住居貯蔵穴全景（西から）
7　1区29号住居北西隅炭化材出土状態（南西から）
8　1区30号住居全景（西から）

PL22－1　1区30号住居竈全景（西から）
2　1区30号住居貯蔵穴全景（西から）
3　1区31・33号住居全景（北から）
4　1区31号住居竈全景（西から）
5　1区31号住居焼土範囲全景（西から）
6　1区31号住居北東隅甕(216)出土状態（西から）
7　1区33号住居竈全景（西から）
8　1区33号住居貯蔵穴全景（西から）

PL23－1　1区36号住居全景（北から）
2　1区333号土坑全景（北から）
3　1区37号住居竈全景（西から）
4　1区37号住居全景（西から）
5　1区37号住居中央部遺物出土状態（西から）
6　1区37号住居南東部遺物出土状態（西から）
7　1区39号住居全景（南西から）
8　1区39号住居南東壁際遺物出土状態（南西から）

PL24－1　1区40号住居貯蔵穴土層断面（南から）
2　1区41号住居全景（西から）
3　1区42号住居竈全景（西から）
4　1区42号住居全景（西から）
5　1区42号住居貯蔵穴全景（西から）
6　1区44号住居南西隅土坑全景（北から）
7　1区46号住居全景（北から）
8　1北区1号住居全景（南西から）

PL25－1　1北区1号住居竈全景（南西から）
2　1北区1号住居竈全景（東から）
3　1北区1号住居竈袖断ち割り状況（南西から）
4　1北区1号住居竈縦断断ち割り土層断面（南東から）
5　1北区1号住居竈遺物出土状態（南西から）
6　1北区1号住居竈右脇遺物出土状態（南西から）
7　1北区1号住居竈脇遺物出土状態（北西から）
8　1北区1号住居掘り方全景（南西から）

PL26－1　1北区1号住居掘り方土層断面（北西から）
2　1北区1号住居竈掘り方（南西から）
3　1北区2号住居全景（南西から）
4　1北区2号住居竈全景（西から）
5　1北区3号住居全景（東から）
6　1北区3号住居土層断面（東から）
7　1北区3号住居炉全景（東から）
8　1北区3号住居炉土層断面（北東から）

PL27－1　1北区3号住居炉掘り方全景
2　1北区4号住居全景1・2・3号土坑（北西から）
3　1北区5号住居全景（南東から）
4　1北区5号土坑土層断面（西から）
5　1北区5号土坑瓶〔401〕出土状態（北西から）
6　1北区5号土坑瓶〔401〕出土状態（北東から）
7　2区1号住居全景（西から）
8　2区1号住居竈遺物出土状態（西から）

PL28－1　2区1号住居竈全景（西から）
2　2区3号住居全景（東から）
3　2区3号住居炉全景（東から）
4　2区3号住居炉土層断面（南から）
5　2区1号古墳全景（南から）

PL29－1　2区1号古墳残存状況（北から）
2　2区1号古墳残存状況（南西から）
3　2区1号古墳石室全景（南から）
4　2区1号古墳石室全景（東から）
5　2区1号古墳石室全景（北から）

PL30－1　2区1号古墳左側壁玄室南側部分
（南東から）
2　2区1号古墳左側壁玄室北側部分
（南東から）
3　2区1号古墳玄室から羨道部分（北から）
4　2区1号古墳羨道部右壁掘り方裏込土層
断面（南から）
5　2区1号古墳掘り方全景（東から）
6　2区1号古墳掘り方全景（南から）
7　2区1号古墳掘り方近景（南から）
8　2区1号古墳右壁掘り方（南から）
9　2区1号古墳奥壁裏込掘り方土層断面
（南から）
PL31　1区10号住居・2区33号土坑・2区58号土坑・
遺構外出土遺物(縄文時代)
PL32　1区14号土坑・1区1号竪穴状遺構・1区7号
住居・1区8号住居・1区11号溝・
遺構外出土遺物（弥生時代終末）
PL33　1区9号住居・1区12号住居・1区13号住居・
1区15号住居出土遺物
PL34　1区15号住居出土遺物
PL35　1区15号住居出土遺物
PL36　1区17号住居・1区20号住居出土遺物
PL37　1区20号住居・1区80号溝出土遺物
PL38　1区20号住居出土遺物
PL39　1区20号住居出土遺物
PL40　1区21号住居・1区23号住居・1区24号住居出土遺物
PL41　1区24号住居出土遺物
PL42　1区26号住居・1区38号住居・1区43号住居・
1区80号溝出土遺物
PL43　1区81号溝・1区88号土坑・
2区2号住居出土遺物
PL44　2区5号住居・2区6号住居出土遺物
PL45　2区76号土坑・2区77号土坑・1区20号住居・
2区2号住居・2区1号周溝墓出土遺物
PL46　1区1号住居・1区3号住居・1区4号住居出土遺物
PL47　1区4号住居・1区6号住居・
1区11号住居出土遺物
PL48　1区14号住居・1区16号住居・1区18号住居・
1区19号住居出土遺物
PL49　1区22号住居・1区25号住居出土遺物
PL50　1区27号住居・1区28号住居・1区29号住居出土遺物
PL51　1区29号住居・1区30号住居・1区31号住居出土遺物
PL52　1区33号住居・1区37号住居・
1区333号土坑出土遺物
PL53　1区37号住居・1区39号住居・1区40号住居・
1区42号住居・1区46号住居出土遺物
PL54　1北区1号住居・1区196号土坑出土遺物
PL55　1北区1号住居・1北区3号住居・1北区5号住居・
1北区5号土坑・2区1号住居・
2区3号住居・2区1号古墳・
1区遺構外出土遺物
PL56　1区遺構外出土遺物
PL57　1区遺構外出土遺物
PL58　2区遺構外出土遺物

第１章　調査に至る経過

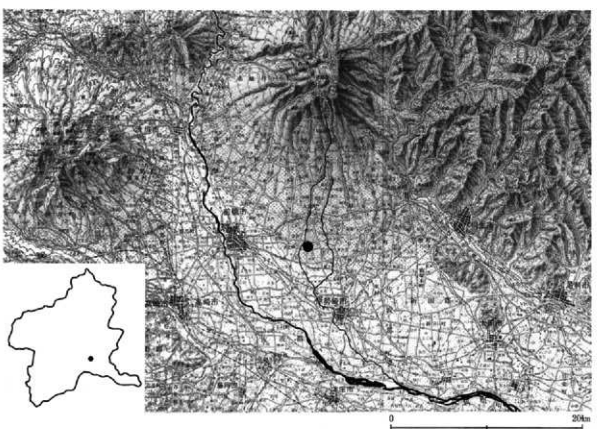
１．県営圃場整備事業と発掘調査

荒砥宮田遺跡は、群馬県前橋市の東南部、荒口町にあり、ＪＲ両毛線の駒形駅から北北東に約3.7km の距離に位置する(第１図)。荒砥宮田遺跡のある地域は赤城山南麓の裾野で、市街地の東に広がる農村地帯である。遺跡は、そのうち旧荒砥村地域で実施された県営圃場整備事業荒砥北部地区に伴って発掘調査された。

荒砥北部地区において圃場整備事業が実施されたのは1981(昭和56)年から1991(平成３)年にかけてのことであり、その範囲は、旧荒砥村地域の内、荒口町、荒子町、泉沢町、下大屋町、西大室町、二之宮町におよぶ地域で、総事業量の対象面積は821haに及んだ。圃場整備事業の対象地内には多数の古墳群や女堀遺跡をはじめとした周知の遺跡が多数存在し、古くから考古学的に著名であり、注目されてきた地域である。

荒砥北部地区の圃場整備事業が実施されるにあたって群馬県農政部と群馬県教育委員会との間で、文化財の保護を前提とした協議がなされた。その結果、埋蔵文化財の包蔵地を圃場整備事業の対象区域から除外することが不可能であり、かつ事業の実施によって埋蔵文化財が破壊される区域においては、事前に発掘調査を実施することとなった。これらの地域における発掘調査は、原則として、新たに計画される道水路や切り土部分を対象とすることで合意された。

発掘調査は1981(昭和56)年度から1984(昭和59)年度まで群馬県埋蔵文化財調査事業団が対応してきたが、調査量の増加に伴い、1982(昭和57)年度以降の発掘調査は事業団と群馬県教育委員会が分担し、1984(昭和59)年度以降の調査は、群馬県教育委員会と

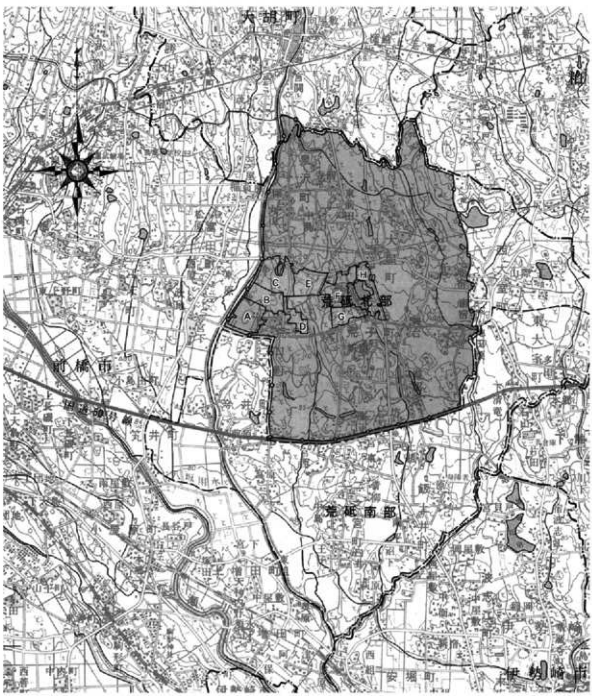


第１図　荒砥宮田遺跡の位置

荒砥北部遺跡群調査会に引き継がれ、1991(平成３)年度で全て終了した。

荒砥宮田遺跡を調査した昭和58年度は、県営圃場整備事業荒砥北部地区の第４工区、荒口町・荒子町地内が事業対象地域であった(第２図)。第４工区はＡ～Ｈ工事に分かれていたが、後述するように委託者との調整の結果、Ａ・Ｂ工事の区域について財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を担当した。他の工事区域では、第１表に記したとおり、荒砥諏訪西遺跡、荒砥諏訪遺跡、諏訪遺跡、諏訪西遺跡、柳久保遺跡、川籠皆戸遺跡、堤東遺跡が発掘調査されている。

本書で報告する荒砥宮田遺跡は縄文時代から中・近世までの複合集落遺跡である。調査は、切り土部



第２図　県営圃場整備事業荒砥北部地区と昭和58年度工事区

分・新設の道水路部分を対象とした6カ所の調査区で、その面積は、試掘調査分の5,700㎡を含め36,620㎡で実施された。

整理事業は、1981(昭和56)年度から1984(昭和59)年度まで調査をした8遺跡について、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(以下事業団)が群馬県教育委員会の委託を受け、1993(平成5)年度から整理事業を実施し、2002(平成14)年度までに6遺跡9冊の発掘調査報告書を刊行している。本年度はその第11年次にあたる。

2．試掘調査と調査区の設定

調査を開始するに先立ち、工事行程との調整を測り、発掘調査を円滑に実施するため分布調査を実施した。分布調査は5月に調査担当3名が第4工区全域を踏査し、遺物分布の地点、密集度、種類、時期などを記録した。

さらに7月に発掘調査区とその対象面積を確定することを目的に、分布調査の成果をもとにした試掘調査を実施した。先の分布調査で荒砥川に面したA・B・C工事対象地では広範囲にわたり古墳時代の土器片の散布が見られ、集落の存在が充分想定された。このため、切り土工事対象地は20mに1カ所の割合で、道水路新設地域は対象地の幅に最低1カ所のトレンチを配置し、大型掘削重機による試掘調査を実施した。試掘調査の記録にあたっては遺構および遺物包含層の有無、遺構確認面の深さ、軽石を主とした土層の堆積状況を明らかにするようにした。

その結果、表土下に竪穴住居あるいは溝、土坑などの諸遺構あるいは浅間B軽石の堆積が確認された地域は発掘調査を実施することとし、遺構が確認されなかった部分については調査対象地から除外することとした。また工事による掘削高が遺構確認面までおよばないと確認された場合も調査対象区から除外した。

これらの事前作業を基礎資料として前橋土地改良事務所と協議を重ねた。結果、当初予定していたA・B・C工事区内の全ての調査対象地域について事業団の体制だけでは終了できない状況が生まれた。そこで、C工事区については群馬県教育委員会文化財保護課が担当し、A・B工事については事業団が対応した。1983(昭和58)年度の調査担当は第1表の通りである。

事業団が担当したA・B工事は、集落遺跡のある台地部分がほとんど切り土部分となったため、試掘調査の対象地は広範囲にわたった。第3図はA・B工事部分の試掘トレンチ(細線)の位置と、確定した発掘区(太線)を示した。これらの試掘調査結果および上述の事前調整の結果、本図のように調査区を確定した。

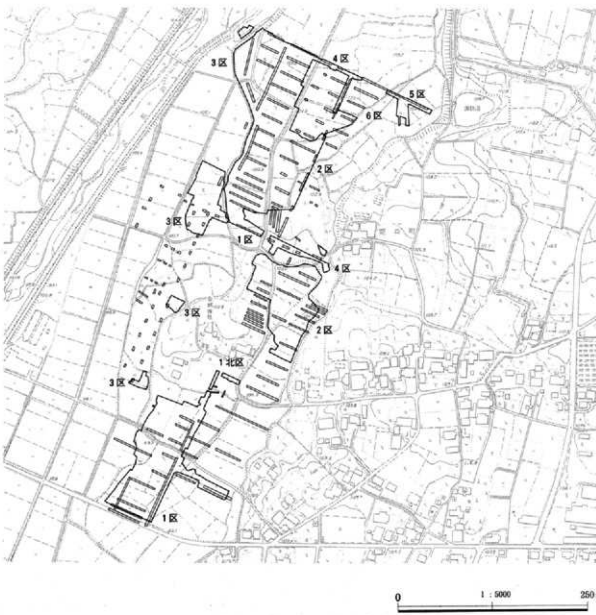
B工事(荒砥深詰西遺跡)では、台地部分のほぼ全域を調査区としたが、2区の南側は試掘トレンチを5mに1カ所に数を増やして試掘をおこなった結果、

第1表　県営圃場整備荒砥北部地区における昭和58年度埋蔵文化財発掘調査一覧表

工事	遺跡名	調査主体	調査担当者	面積	期間
7－1区	荒砥荒子遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団	鹿田雄三・相原雄史・中沢　悟 小島敦子・菊池　実・斉藤利昭	9,800㎡ 前年度含	1983(昭和58)年4月1日 ～1984(昭和58)年5月10日
4　区	荒砥宮田遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団	鹿田雄三・藤巻幸男・小島敦子 徳江秀夫・斉藤利昭・細野俊男 下城　正・相原雄史	20,265㎡	1983(昭和58)年8月23日 ～1984(昭和59)年3月24日
4　区	荒砥深詰西遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団	鹿田雄三・藤巻幸男・小島敦子 徳江秀夫・斉藤利昭	36,620㎡	1983(昭和58)年8月23日 ～1984(昭和59)年3月24日
4　区	荒砥深詰遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団	鹿田雄三・藤巻幸男・小島敦子 徳江秀夫・斉藤利昭	1,930㎡	1983(昭和58)年8月23日 ～1984(昭和59)年3月24日
4　区	深詰西遺跡 深詰遺跡	群馬県教育委員会 文化財保護課	井上唯夫・徳江　紀・神保衛史 西田健彦・松田　猛・調査補助員 松村和男	9,300㎡	1983(昭和58)年12月1日 ～1984(昭和59)年2月28日
4　区	柳久保遺跡	群馬県教育委員会 文化財保護課	徳江　紀・神保衛史・西田健彦 松田　猛	1,200㎡	1983(昭和58)年12月1日 ～1984(昭和59)年2月28日
4　区	川端谷戸遺跡 堤東遺跡	群馬県教育委員会 文化財保護課	徳江　紀・神保衛史・西田健彦 松田　猛・調査補助員松村和男	10,500㎡	1983(昭和58)年12月1日 ～1984(昭和59)年2月28日

遺構が確認できなかったので調査区から除外した。また、6区の下層は、計画高を変更することによって調査対象から除外した。

A工事(荒砥宮田遺跡)では1区の西側・東側に台地が広がるが、工事による掘削高が遺構面まで達しないことから調査区から除外した。また1区の東谷地の試掘調査では谷地に設定したすべてのトレンチで浅間B軽石層を確認したが、計画高が現状より高く、掘削が浅間B軽石層まで達しないことから道水路部分以外は調査区から除外した。1・2区の西側にのびる低地のトレンチでも浅間B軽石層を確認したが、計画高が現状より高く、掘削が浅間B軽石層まで達しないところは調査区から除外した。したがって3区として調査したのは掘削がおよぶ3－1区と、道水路にかかわる3－2・3区の3地点である。2区の台地西南端は試掘トレンチを5mに1カ所に数を増やして試掘をおこなった結果、遺構が確認できなかったので調査区から除外した。



第3図　試掘トレンチと調査区

第２章　遺跡の立地と環境

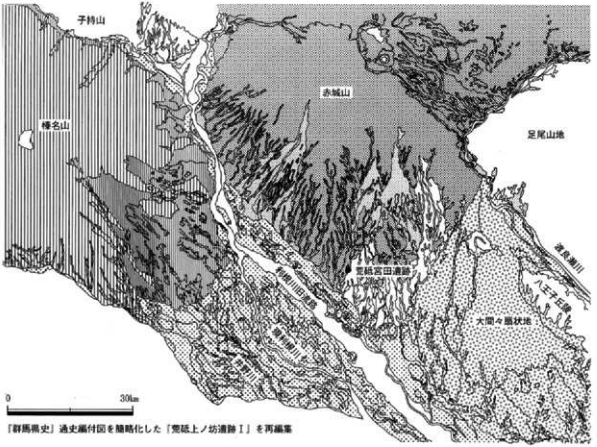
１．遺跡の位置と地形

荒砥宮田遺跡は、県北の山地と南東平野部が接する群馬県中央部に位置する。県央地域には西に榛名山、東に赤城山があり、その裾野には丘陵性の台地が広がっている。遺跡はこのうち東側に位置する赤城山の南麓に形成された火山麓扇状地端部にある。

赤城山は40～50万年前から活動を始めた複合成層火山で、3.1～3.2万年前に大規模な軽石噴火をおこして中央火口丘群を形成した後は、現在まで目立った火山活動はなく、火山山麓扇状地の形成期となっている。山麓の扇状地にはさらに新期の扇状地が一部にのるが、荒砥宮田遺跡はその西端にある。遺跡の西側を流下する荒砥川以西は同じ赤城山の山体でも、基底に大胡火砕流が堆積する古い地形面である（第３図）。

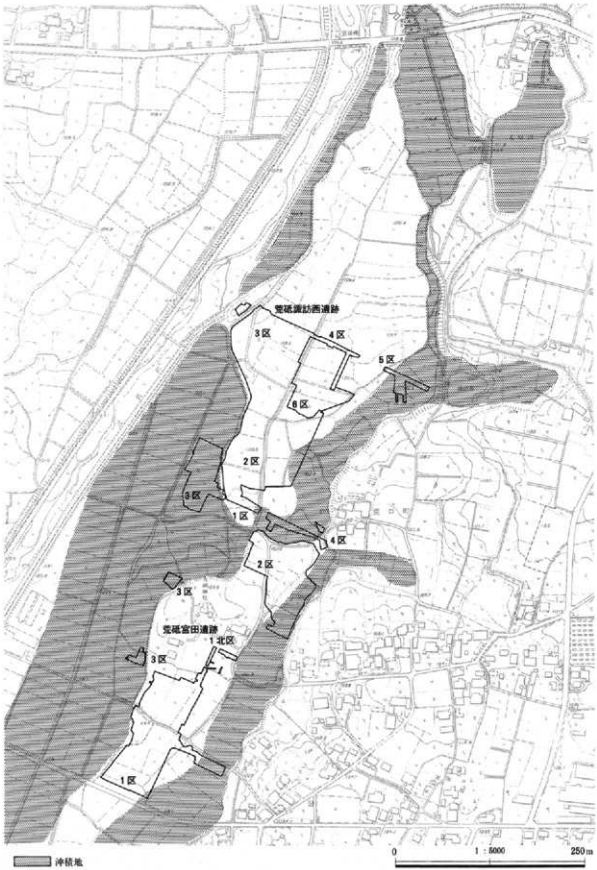
山麓には荒砥川、宮川、神沢川、江竜川などの中小河川が流下している。これらの河川や台地端部からの湧水により火山麓扇状地に樹枝状の開析が進み、台地と沖積地が複雑に入り込む地形が形成されている。特に荒砥北部地区では帯状の沖積地が発達し、起伏に富んだ地形が広がっている。

本遺跡周辺の地形はローム台地の原形面、砂壌土からなる微高地、沖積地に分類される。ローム台地はいわゆる暗色帯の堆積が認められ、その下に厚さ40㎝のハードローム層があり、さらに下に直径20～30㎝の礫を含む青白灰色砂礫層が堆積している。（第６図No.２）　ローム台地に付随するように存在する微高地は、縄文時代早期から前期にかけて、赤城山の山体が降雨災害等によって崩壊し、河川の運



『群馬県史』通史編付図を簡略化した「荒砥上ノ坊遺跡Ⅰ」を再編集

第４図　群馬県中央部の地形と荒砥宮田遺跡



第5図　荒砥宮田遺跡周辺の地形

撒作用の結果、流速が衰える山麓端部に再堆積することにより形成されたと考えられている。隣接する荒砥諏訪西遺跡は主にこの地形に立地する。

荒砥宮田遺跡は中央のローム台地と、東西の沖積地に展開する。発掘した1区および2区は一連のローム台地で、古墳時代および平安時代の集落と、中近世の遺構群が重複して確認された。このローム台地には、姶良丹沢パミスの層準である暗色帯とブロック状の浅間板鼻褐色軽石群が鍵層として堆積するローム層である。赤城山南麓地域の更新世ローム台地の一般的土層堆積である。しかしその下層に一般的に堆積が確認できる八崎軽石層ではなく、砂礫層が確認できた。荒砥川沿いに特有の層位と考えられるが、詳細は確認できなかった。旧石器は一部で暗色帯を中心に確認調査をおこなったが、旧石器は確認できなかった。

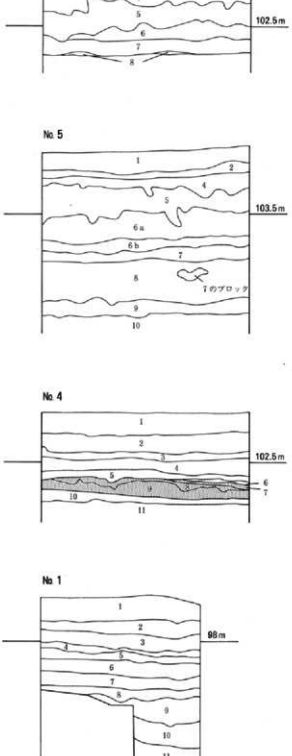
このローム台地の東側には台地を開析した帯状低地がある。試掘調査で設定したトレンチのすべてで浅間B軽石の堆積が認められた。2区の東谷地では、浅間B軽石が厚さ10～15cmで堆積していた。この谷は北側半分は幅8ｍの凹地状の堆積であるが、南側は浅間B軽石堆積範囲の幅が広くなり、西端には幅2ｍの畔に区切られた水路も検出されている。低地を横断する畔は検出されなかったが、平坦面を造成しており、水田面であると考えた。またここには浅間C軽石が浅間B軽石層下40cmのところに厚さ10～20cmで堆積していた。浅間C軽石下面での土地利用については調査で判明しなかったが、古墳時代初頭には低地が存在していたことは明らかである。

この沖積地は現状では、2区の北側の低地とつながっている。しかし東側のローム台地には開析された帯状の低地が伸びており、東谷地の谷頭となる可能性が高い。この地点を調査した4区では、東半はローム台地になっており、浅間B軽石が堆積土の中位にある溝が確認された。本来は台地であったところに、浅間B軽石降下以前に東と北の双方の低地をつなぐために掘られた可能性もある。地形改変を受ける前の地形環境の復元や、溝の性格については本地域の同様な遺構を検討する中で明らかにしたい。

1区・2区のあるローム台地の西側は、荒砥川まで低平な低地で、川沿いに一部自然堤防状の微高地が形成されている。低地内の試掘調査のトレンチでは砂礫層が厚く堆積する地点と、それを切るように堆積する浅間B軽石層が検出される地点に大きく分かれた。このうち浅間B軽石層が確認できる地点は、第6図のように台地に沿った帯状の低地になっていると推定される。この低地は、現在の北原沼や諏訪沼を谷頭とする荒砥諏訪西遺跡東側の低地から、2区の北側・西側に廻り込んで、荒砥諏訪西遺跡1区の南側で、荒砥諏訪西遺跡西側の低地と合流し、1区の西側から南側に廻り込んでいる。1区南西部にはこの帯状低地がかかるものと見られるが、南東隅の一部で浅間B軽石の純層を確認できただけである。1区南西部では浅間B軽石下位に洪水砂層が堆積している。それを鋤込んだ畠や洪水砂層下の水田が広範囲に検出された。この洪水層の時期は調査では判明しなかったが、その後の周辺の発掘調査で確認された天仁元(818)年の洪水堆積物と同じである可能性が高い。また3区および4区ではこの低地内で浅間B軽石直下面を調査した。(第5図)低地部で検出されたこれらの遺構は第Ⅱ分冊で報告する。

さらに3区周辺の西側の沖積地内にも浅間B軽石層より古い砂礫層が堆積するが、成因等を明確にすることはできなかった。

以上のように遺構と地形の関係をみると、縄文時代前期の遺構は、谷頭に近いローム台地縁辺にごく少数分布する。これは、赤城山南麓の典型的な当該期の遺構分布に合致した状況を示している。古墳時代前期の遺構は、ローム台地東縁辺と細長いローム台地南半に立地する傾向がある。荒砥諏訪西遺跡の当該期の遺構も細長い台地の南端に分布する。これらはいずれも帯状低地の合流点「落合」地形に望んでおり、本地域の古墳時代前期遺跡の立地の典型的なあり方を示しているといえよう。



No 6・No 5 共通

１，灰色土　表土。　２，黄灰褐色土　軟質。５層との間に鉄分凝集層が入り遺物を包含する。浅間Ｃ軽石を混じる黒色土は確認できない。　３，灰黄色土　粒子の細かいソフトな層で、１～３mm大の砂粒を少量含む。(遺構確認層)　４，３層と５層との混土。５，黒色土　１～３mm大の砂粒を多量に含む。(氾濫層)
６ａ，黄灰色砂粒層　１～５mm大の砂粒で構成される。(氾濫層)
６ｂ，黄灰色細砂層(氾濫層)　７，灰黄色土と８層の混土層(縄文包含層)　粒子の細かいソフトな層で、３層と酷似する。黄色粒子を少量含む。　８，黒褐色土　硬質。白色微粒子を多量に含む。黄色粒子(２～３mm)を少量含む。　９，灰褐色砂質土　大きな斑鉄塊を含む。硬質。　10，白灰色砂壌土　５～20cm大の斑鉄塊を含む。軟質。

No 4

１，灰色土　表土。　２，灰褐色土　斑鉄が著しく、かたい。
３，黒灰色土　軽石粒、砂粒、黄色土粒を少量含む。かたい。
４，灰褐色土　黄色土粒を多量に含む。かたい。　５，灰褐色土　４層よりも褐色が強い。　６，黒褐色土と浅間Ｂ軽石の混土。二次堆積か。　７，灰色火山灰純層。　８，崇灰色火山灰、浅間Ｂ軽石を混在している。　９，浅間Ｂ軽石純層　10，灰黒色粘質土　11，砂礫層

No 1

１，灰白色土　表土。　２，灰褐色土　軽石を混じる。全体に斑鉄あり。２～５mmの石を含む。　３，灰褐色土　２～５mm大の石を多量に含む。　４，黒褐色土　浅間Ｂ軽石を含む。斑鉄が著しい。ガチガチ。　５，黒褐色土　浅間Ｂ軽石を含む。斑鉄なし。ソフト。　６，黄灰色砂状土　軽石を少量含む。(氾濫層)
７，灰黒色土　浅間Ｃ軽石を多量に含む。しまっている。
８，黒褐色土　浅間Ｃ軽石を多量に含む。粘性があり軽石は７層よりも多量。　９，黄褐色シルト質土　軟質。　10，効黒色粘質土　11，黄褐色粘質土

No 9

１，灰黒色土　表土。　２，灰黒色土　斑鉄あり。　３，黒褐色土　浅間Ｂ軽石、黄色粒子を多量に含む。硬質。　４，浅間Ｂ軽石と黒褐色土の混土。　５，黒褐色土　榛名二ツ岳軽石(２～３mm・1.5cm)を多量に含む。黄色粒子を含む。　６，黄色粒子と黒褐色土の混土。榛名二ツ岳軽石を少量含む。　７，灰黒褐色土　浅間Ｃ軽石を少量含む。　８，浅間Ｃ軽石と黒色土の混土。
９，浅間Ｃ軽石　10，灰黒色シルト。　11，黒黄灰色シルト。

No 3

１，表土。　２，褐色土　砂粒、軽石を少量含む。全体に斑鉄が認められる。３，灰褐色土　２層と同じ。　４，褐色土 砂粒、軽石粒、黄色粒を多量に含む。斑鉄が著しい。　５，灰褐色土　４層と同じ。６，灰褐色土　４層と同じ。５層より黒みが強い。
７，黒褐色粘質土　浅間Ｂ軽石を多量に含む。　８，浅間Ｂ軽石純層　上面に崇灰色火山灰が塊状に認められる。　９，効黒色粘質土　３～５cm程の斑鉄が認められる。粘性が強い。　10，黄灰色粘質土　３～５cm程の斑鉄が認められる。粘性が強い。

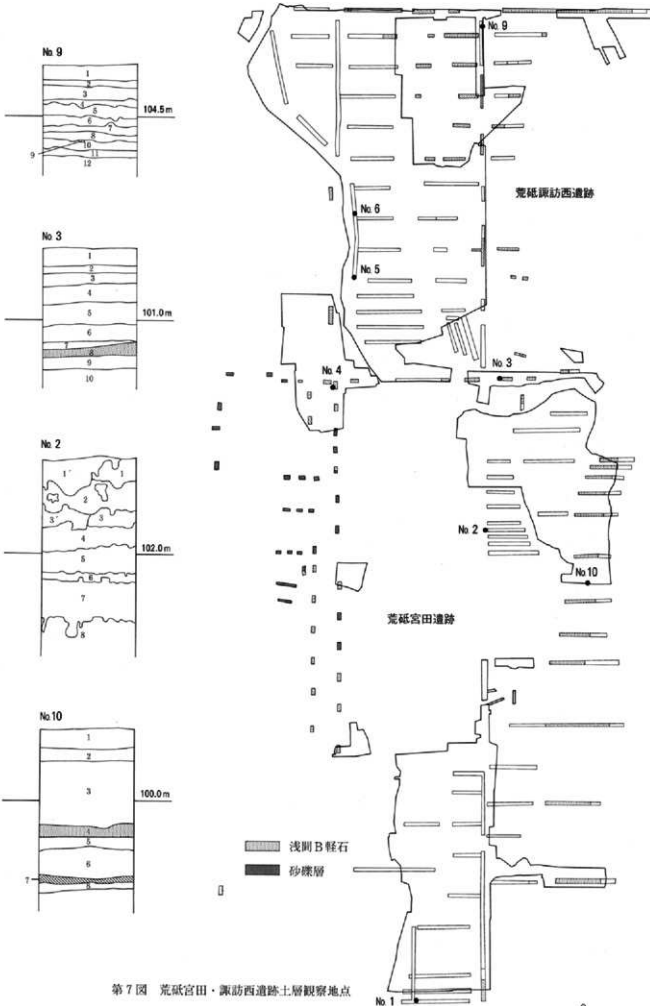
No 2

１，白色の大粒の軽石を混じるハードローム。　２，浅間板鼻褐色軽石層塊を混じるハードローム。　３，２より黒っぽいローム。浅間板鼻褐色軽石は含まない。　４，白色軽石を含む褐色のローム。(暗色帯)　５，４層にさらに混状に黒褐色のローム を混じる。(暗色帯)　６，灰黄色のハードローム。(暗色帯)
７，黄褐色のハードローム。８層の粒を多く含む。　８，砂、小石、青白灰色。直径20～30cmの礫も含む。

No10

１，灰色粘質土 現在の水田耕土。　２，灰褐色土 現在の水田スキ床。軽石、砂粒を含む。赤色化した植物痕が多量に含まれる。
３，褐色土 軽石、砂粒を多量に含む。　４，浅間Ｂ軽石純層上面に５cm程の崇灰色火山灰をのせる。また、上部に２cm程の灰色火山灰が部分的にある。　５，黒色粘質土 浅間Ｃ軽石を多量に、榛名二ツ岳軽石を微少含む。遺物を包含する。　６，黒褐色粘質土 榛名二ツ岳軽石、浅間Ｃ軽石を含む。７，浅間Ｃ軽石純層
８，灰黒色粘質層 黄色土粒を含む。

第６図　荒砥宮田遺跡周辺の土層



第７図　荒砥宮田・諏訪西遺跡土層観察地点

２．周辺の遺跡

ここでは荒砥宮田遺跡で検出された遺構・遺物を理解するために古墳時代に重点をおき、周辺の歴史的環境についてふれておきたい。概観する範囲は、荒砥地域とこれに隣接する大胡町南部、荒砥川右岸の桂萱地域の一部を含めるが、荒砥川以西については現時点では地域内の遺跡分布の在り方をを正しく反映させるほどの調査事例がない(第８図)。

弥生時代中期後半の住居は、荒砥前原遺跡、荒砥島原遺跡、頭無遺跡、荒砥北三木堂遺跡、荒口前原遺跡の５遺跡で検出されている。後期になると、荒砥前原遺跡、鍋谷遺跡群Ｂ区、梅本遺跡、北山遺跡で住居の検出が報告されている。これら弥生時代の遺跡は、沖積地を臨む台地縁辺や微高地上に立地している。この時期には居住域に接した沖積地の一部を生産域とする小規模な集落が形成されていたと考えられる(第９図)。

古墳時代初頭から前期の集落は、弥生時代後期の遺跡分布からは一転、きわめて濃密な分布状況を呈する。集落遺跡の分布は荒砥地域のほぼ全域におよんでいる。その分布は大胡町域にもみられ茂木山神Ⅱ遺跡、上ノ山遺跡、中宮関遺跡などが調査されている。それらの立地は、小河川の流域ごとにほぼ一定の間隔をおいて集落が形成されている。これらは、小河川に沿って、あるいは小河川の合流点を臨む台地縁辺や沖積地の谷頭周辺に立地している。小河川の流水や谷頭からの湧水に依拠して生産域を維持していたと思われる。

本遺跡の周辺では近接して、荒砥諏訪西遺跡(集落)、諏訪遺跡(方形周溝墓群)、荒砥諏訪遺跡(方形周溝墓群)が分布する。上流域に北原遺跡、丸山遺跡が、下流域に荒砥前田Ⅱ遺跡、荒砥北原遺跡が、対岸には宮下遺跡があり、まとまった数の住居が検出されている。

この他、多数の住居が検出された遺跡としては、江龍川上流域では熊の穴・熊の穴Ⅱ遺跡、大道遺跡、東原Ａ・Ｂ遺跡、村主遺跡、明神山遺跡、小稲荷遺跡などがある。江龍川下流域には荒砥上ノ坊遺跡がある。宮川上流域では柳久保遺跡がある。荒砥川右岸では宮下遺跡が大規模集落である。大泉坊川流域には富田西原遺跡や富田高石遺跡がある。

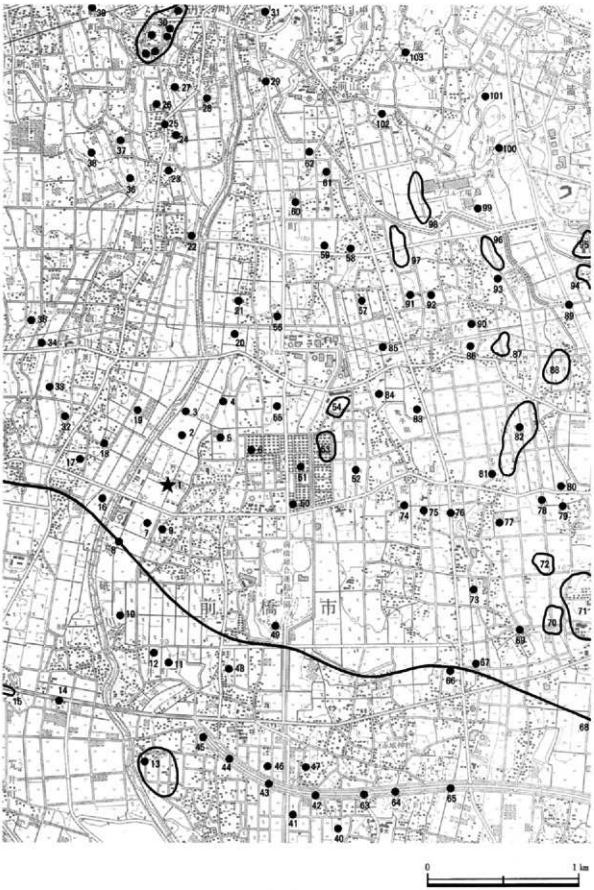
二之宮千足遺跡や二之宮宮下東遺跡では浅間Ｃ軽石に埋没した水田が検出された。また、荒砥天之宮遺跡Ｇ区や荒砥宮川遺跡の微高地上では浅間Ｃ軽石を鋤込んだ畠が確認されている。荒砥上ノ坊遺跡では浅間Ｃ軽石に埋没した畠が検出されている。

この時期の集落には近接して周溝墓が築造される事例が多い。前述の諏訪遺跡や荒砥諏訪遺跡のように居住域とはその占地を区別し、群在する状況が普遍的に見られる。その中、上縄引遺跡１基、阿久山遺跡１基、堤東遺跡１基、中山Ａ遺跡１基、東原Ｂ遺跡４基の合計８基、前方後方形周溝墓が検出されている。この他荒砥川以西の富田高石遺跡でも前方後方形周溝墓１基が検出されている。

上記のように、荒砥地域における前期の集落や周溝墓の検出例は、他地域に対して遜色のないものではないが現在のところ前期古墳の存在は知られていない。前橋天神山古墳や華蔵寺裏山古墳が本地域を包括しえる地点にある主要古墳といえようか。本地域における前方後円墳の出現は５世紀後半の今井神社古墳の築造を待たなければならない。

このような遺跡分布傾向に対し、この時期の土器は複雑な様相を呈している。弥生時代後期の赤井戸式土器や樽式土器の系譜を引く文様施文の土器群はこの時期まで残存し、土師器と共伴する。Ｓ字状口縁甕をはじめ北陸や南関東など他地域の土器の影響を受けた外来系の土器が荒砥上ノ坊遺跡や荒砥前原遺跡から出土している。本遺跡においても甕はＳ字状口縁台付甕・単純口縁台付甕・折り返し口縁台付甕、平底甕が共伴している。

前期の集落のうちの多くは中・後期に継続し、「伝統集落」となる。中・後期になると前期からの集落は占地の範囲を多少変えながら継続する。諏訪西遺跡も群馬県教育委員会調査部分で居住の継続性が認められている。それとともに新たな地点に「第



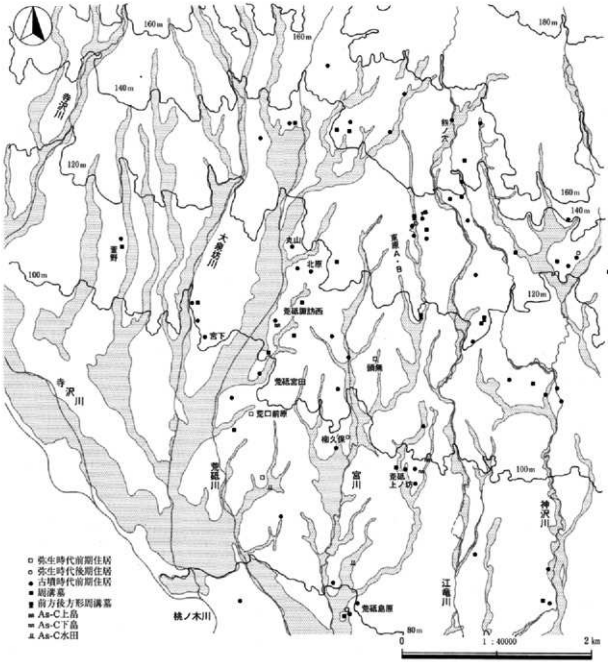
第８図　荒砥宮田遺跡周辺の遺跡分布

第2表　周辺遺跡の概要

No.	遺跡名	弥生 中後	古墳 前 住墓生	古墳 中 住墓生	古墳 後 住墓生	奈 住	平 住生	平 世	中 世	近 世	その他の遺構	遺跡の概要
1	荒砥宮田遺跡		○□	○	○○	○	○[7]		○	○	縄文前期住居	本報告書の遺跡
2	荒砥諏訪西遺跡		◎ ◪		○○		□		○	○	溝、土坑	
3	諏訪西遺跡		○	○	○						時期不明古墳2	荒砥諏訪西遺跡に近接
4	諏訪遺跡		□								As-B以前の溝	県教委調査方形周溝墓13基
5	荒砥諏訪遺跡		□								As-B以前の溝	荒砥諏訪西遺跡東側台地上
6	諏訪遺跡										As-B以前の溝	前橋市教委調査
7	荒砥前田遺跡						[7]					
8	荒砥前田Ⅱ遺跡		◎	○			○		○	○		
9	荒口前原遺跡	○					○					
10	荒砥北原遺跡		□	○	○	○	○				縄文前・中期住居、As-B上品	方形周溝墓2
11	荒砥北三本堂遺跡		○[7]		○○	○	○				中世墓坑	
12	荒砥北三本堂Ⅱ遺跡		◪				○	○	○			
							□					
13	今井神社古墳群			○	○		○					今井神社古墳他、古墳3調査
14	今井白山遺跡		○	○	○	○	○				縄文中期住居	
15	笂井八日市遺跡			○○			□					古墳時代中期の方形区画溝
16	富田細田遺跡						[7]	○				
							□					
17	宮下遺跡	○	◎	○	○○	○	○		○		中世墓坑、寺院	富田宮下遺跡と12同一遺跡
18	東原遺跡						○		○		中世墳墓群、寺院	古墳11
19	おとうか山古墳			○	○							
20	北原遺跡		○[7]	○	○		○					
21	丸山遺跡		○[7]	○	○							古墳時代中期居宅
22	稲荷前遺跡				○							
23	山神遺跡				○	○			○	○	縄文後期住居	
24	小林遺跡				○	○	○		○	○	中・近世道状遺構	
25	茂木山神Ⅱ遺跡		○		○	○	○				縄文中期住居	
26	諏訪東遺跡						○				縄文中期住居	
27	西小路遺跡				○				○		縄文中期住居	
28	上ノ山遺跡		○□	○	○				○	○		古墳7
29	下宮間遺跡			○								
30	天神風呂遺跡群			○	○	○	○				縄文前期住居	
31	中宮間遺跡		○				[7]					
32	富田西原遺跡		○	○			○		○	○	旧石器	
33	富田高石遺跡		○□	○	○				○	○		
34	富田漆田遺跡			○ ㊀	○	○	○□		○		平安須恵工房跡、窯跡	
35	富田下大日遺跡						○				古墳住居3	古墳1
36	稲荷窪A地点遺跡				○○	○					縄文中期住居	
37	稲荷窪B地点遺跡				○		○			○	縄文中・後期住居	
38	大日遺跡					○	○					
39	茂木夫道下遺跡						○		○	○		
40	荒砥天之宮遺跡			○	○	○	○□				溜井	
41	荒砥宮田遺跡	○	○ ◪?		○○	○	○□					
42	二之宮千足遺跡		◪	□ □		○	○□		○		古代小鍛冶、中世墓坑	As-C下水田以降7期の水田
43	二之宮洗橋遺跡				○	○	○					
44	二之宮谷地遺跡				□	○	○□				奈良溜井、特殊井戸	
45	今井道上道下遺跡		○	○	○	○	○		○	○	平安小鍛冶、中・近世道路状遺跡	古代方形区画溝
46	荒砥洗橋遺跡				○	○	○□			○		
47	荒砥宮西遺跡				○	○	○					
48	荒砥大日塚遺跡	○			○	○	○□					
49	鎧ケ谷遺跡群	○	○	○	○	○	○				中世墳墓	
50	下鎧谷遺跡					○	○				縄文前期住居、古代炭窯	
51	横久保遺跡群		◎	○	○○	○	○				旧石器、縄文早期	
52	頭無遺跡	○			○		○				旧石器	
53	中鎧谷遺跡				○○	○	○					
54	荒子小学校校庭遺跡				○	○	○				古代須恵器窯跡	

No.	遺跡名	弥生 中後	古墳 前 住	古墳 前 墓生	古墳 中 住	古墳 中 墓生	古墳 後 住	古墳 後 墓生	奈 住	平 住	平 生	中 世	近 世	その他の遺構	遺跡の概要
55	大久保遺跡							○	○	○					
56	新山遺跡			□		○		○							方形周溝墓２、古墳３
57	向原遺跡							○	○	○					
58	東原西遺跡					○									
59	東前田北遺跡					○		○						中・近世塚	
60	寺前遺跡					○									
61	寺東遺跡					○									
62	谷津遺跡					○		○○				○	○	縄文中期住居	方形周溝墓２、泉沢谷津遺跡と同一遺跡
63	二之宮宮下西遺跡							○		○	○	○	○	中・近世墓坑	
64	二之宮宮下東遺跡			Ⓒ				○		○	○○	○			
65	二之宮宮東遺跡										○□○	○	○	古代小鍛冶	Hr-FA下水田以降7層の水田
66	荒砥上ノ坊遺跡		○□Ⓒ		○			○	○		○			縄文前期住居、As-B上畠	方形周溝墓４
67	元屋敷遺跡										○			古墳住居16	
68	女堀													古代未完成用水路	
69	殿沼遺跡										○				
70	上經沼遺跡													弥生住居１、古墳住居15、古墳１	
71	天神山古墳群							○							古墳39を調査
72	西大窪丸山遺跡							○							古墳時代巨石祭祀
73	荒砥荒子遺跡					○		○		○	○□				古墳時代中期居宅
74	荒砥中屋敷Ⅰ・Ⅱ遺跡		○					○			○□			平安小鍛冶、As-B以前の溝	
75	荒砥下押切Ⅰ・Ⅱ遺跡							○○		○	○				
76	舞台西遺跡							○							古墳４、埴輪円筒棺１、獲棺１
77	舞台遺跡					○		○							舞台１号墳を含む古墳３
78	稲荷山Ⅱ遺跡										○		○		
79	地田栗田遺跡		○		○			○							
80	富士山Ⅰ・Ⅱ遺跡							○			○		○	近世塚	直径38ｍの円墳
81	下境Ⅰ・Ⅱ遺跡		○		○			○				○		中世寺院、中世墓	
82	阿久山古墳群														古墳22調査
83	荒東遺跡			□							○			平安小鍛冶	方形周溝墓２(前方後方形１)
84	川能宿戸遺跡			Ⓔ							○				
85	上西原遺跡									○	○			基壇建物、掘立柱建物	勢多郡衙と付属寺院と推定される遺跡
86	北田下遺跡		○								○				
87	明神山遺跡		○Ⓔ					○			○				
88	伊勢山古墳群							○							伊勢山古墳を含む古墳16
89	水口山遺跡			□				○							方形周溝墓２、古墳11
90	中畑遺跡										○				
91	村主遺跡		◎					○		○	○		○		
92	中山Ａ・Ｂ遺跡		◎□					○			○				方形周溝墓２(前方後方形１)
93	阿弥陀井戸遺跡		○												
94	大稲荷遺跡							○						古墳住居10	
95	小稲荷遺跡			□				○○							
96	山王遺跡		○		○			○			○				
97	東原Ａ・Ｂ遺跡		◎□								○				方形周溝墓17(前方後方形４)
98	上淵詰山Ａ・Ｂ遺跡									○	○	○			
99	大道遺跡		◎					○			○			縄文後期住居・配石遺構	
100	上横快遺跡			□				○			○			平安炭窯	方形周溝墓６、古墳27
101	熊の穴・熊の穴Ⅱ遺跡		◎					○○			○			旧石器、縄文前期住居	古墳17
102	上大屋下組遺跡		○											縄文前期土坑	
103	上大屋天王山遺跡		○									○			

住は住居、墓は墓域、生は生産域を表す。古墳の項、墓の□は方形周溝墓、Ⓔは円形周溝墓、○は古墳を、生の◎はAs-C下の畠を表す。
平安の項、生の□はAs-B下水田、Ⓕは818年洪水層下の水田、○は品を表す。

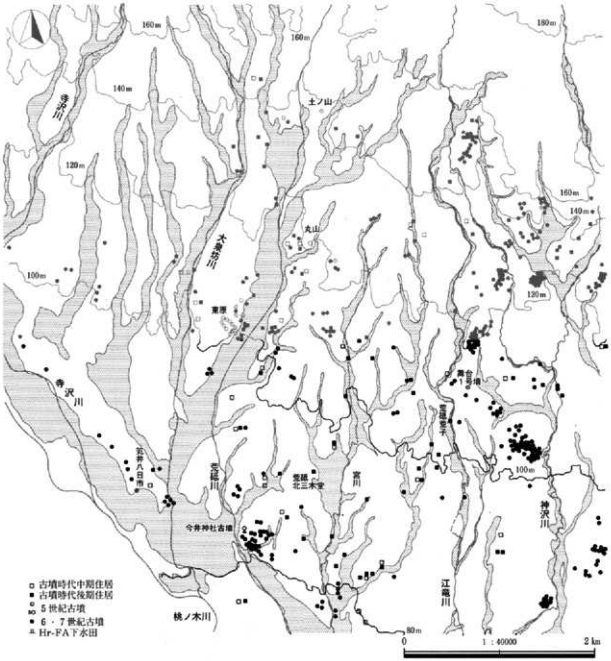


第９図　弥生時代から古墳時代前期の遺跡分布

一次新開集落」の形成がなされる。荒砥天之宮遺跡や荒砥北三木堂遺跡などに代表される集落である。こういった集落変遷の背景には従来からの河川灌漑の整備とともに荒砥天之宮遺跡で検出された溜井の掘削に見られる湧水を人為的、かつ積極的に利用するといった灌漑土木技術の導入とそれに支えられた生産域の拡大があったと考えられる。

中期の集落としては宮川上流域に丸山遺跡、北原遺跡、柳久保遺跡群が、荒砥川流域に本遺跡、荒砥前田Ⅱ遺跡がある。これらは前期から継続する遺跡である。宮川下流域では荒砥北三木堂遺跡や荒砥天之宮遺跡があるが、これらは５世紀後半になってから集落の形成が開始された遺跡である。

また、荒砥荒子遺跡や梅木遺跡、丸山遺跡で検出された方形区画遺構は、５世紀代、首長層の居宅と考えられるが、このような遺構の存在は古墳に見ら



第10図　古墳時代中・後期の遺跡分布

れる被葬者の多様性が居住施設にも現れたものと思われる。

荒砥宮田遺跡では6世紀の集落を検出しているが本遺跡の周辺で同時期の集落が形成された遺跡としては荒砥源訪西遺跡、荒砥北原遺跡、柳久保遺跡群、大久保遺跡、北原遺跡、丸山遺跡、新山遺跡などをあげることができる。古墳時代前期の集落は各河川の上流域に多く展開していたものが、中期になると上流域では減少、下流域の増加がみられ、居住域の範囲も拡大しているとの指摘がある。その傾向は6・7世紀になるとさらに強くなるという。宮川下流では荒砥洗橋遺跡、荒砥宮西遺跡、二之宮谷地遺跡などで6世紀になり集落の形成が開始される。

古墳の動向をみると、6世紀になり、前二子古墳に代表されるよう前方後円墳が数基ずつ築造されるようになる。小円墳は5世紀後半に群集墳の形成がはじまり、6世紀、7世紀と小地域ごとに立地、形成内容を変化させながら群集化が進行している。

第３章　発掘調査の方法と経過

１．発掘調査の方法

（１）グリッドの設定

調査の実施にあたっては第８図に図示したよう荒砥宮田遺跡および荒砥諏訪西遺跡を含めた調査区全体を一辺100ｍの方眼でカバーし、南側から北側に向かってＡ区、Ｂ区と順次Ｒ′区まで合計19区画の大グリッドを設定した。今回報告の荒砥宮田遺跡にかかわる区画はＡからＬ区に相当する。

大グリッド設定の基点には荒砥宮田遺跡１区内にあった圃場整備の工事用杭を利用した。南北基本線には新設道路支道34号の西縁を、これに直交する東西基本線には耕道25－1の北縁を充てている。南北基線と国家座標の南北ラインとの偏角は東に約26度である。

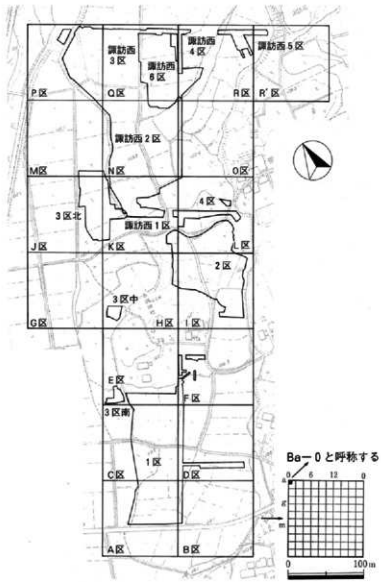
大グリッドの中には一辺５ｍの方眼を設定、これを小グリッドとした。

グリッドの呼称は、大グリッドを独立した単位とし、北西隅に基点を設定し、その点をａ－０とし、小グリッドは東西軸にアラビア数字を付し、西側から０から19まで、南北軸にアルファベッドを付し、北側からａからｔまでとし、第８図の凡例のように大グリッド(アルファベッド)小グリッド(アルファベッド－数字)でＢａ－０のように呼称した。

（２）基本土層と遺構確認

１区南西低地はＡ地点（第12図以下同じ)の土層を示す。表土下は砂粒を多く含んだ灰褐色土が堆積し、その下層には南東隅の一部で浅間Ｂ軽石が堆積する。その直下で水田面と考えられる平担な部分が確認できた。６層は洪水層でそれを鋤込んだ畠の痕跡が５層上面で確認できた。６層直下では傾斜地を開田した東西に細長い水田面を広範囲に検出した。

１区台地部はＢ地点の土層を示す。現耕作土の灰色砂質土と榛名二ツ岳軽石を含む黒褐色土を除去したローム層（４層)上面で古墳時代の住居や、中近世の遺構を確認した。１区東低地部はＣ地点の土層を示す。地表面下0.9ｍで浅間Ｂ軽石と火山灰の純堆



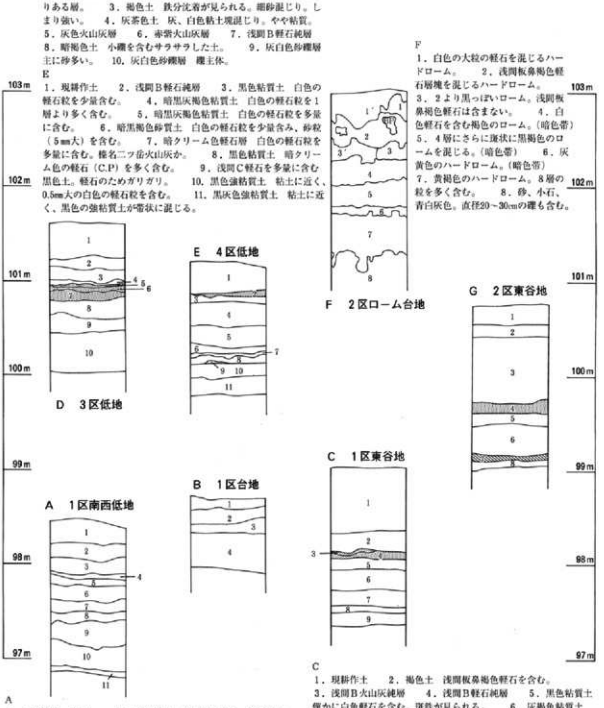
第11図　荒砥宮田遺跡調査区の設定

D

1．現耕作土　2．灰褐色土　白色軽石（2～5㎜）を含むしまりある層。　3．褐色土　鉄分沈着が見られる。細砂混じり。しまり強い。　4．灰茶色土　灰、白色粘土混じり。やや粘質。　5．灰色火山灰層　6．赤紫火山灰層　7．浅黄B軽石純層　8．暗褐色土　小礫を含むサラサラした土。　9．灰白色砂礫層　礫主体。　10．灰白色砂礫層　礫主体。

E

1．現耕作土　2．浅黄B軽石純層　3．黒色粘質土　白色の軽石粒を少量含む。　4．暗黒灰褐色粘質土　白色の軽石粒を1層より多く含む。　5．暗黒灰褐色粘質土　白色の軽石粒を多量に含む。　6．暗黒褐色砂質土　白色の軽石粒を少量含み、砂粒（5㎜大）を含む。　7．暗クリーム色軽石層　白色の軽石粒を多量に含む。接名二ツ岳火山灰か。　8．黒色粘質土　暗クリーム色の軽石（C.P）を多く含む。　9．浅黄C軽石を多量に含む黒色土。軽石のためガリガリ。　10．黒色強粘質土　粘土に近く、0.5㎜大の白色の軽石粒を含む。　11．黒灰色強粘質土　粘土に近く、黒色の強粘質土が帯状に混じる。



A

1．灰白色土　表土。　2．灰褐色土　軽石を混じる。全体に斑鉄あり。2～5㎜の石を含む。　3．灰褐色土　2～5㎜大の石を多量に含む。　4．黒褐色土　浅黄B軽石を含む。斑鉄が著しい。ガチガチ。　5．黒褐色土　浅黄B軽石を含む。斑鉄なし。ソフト。　6．黄灰色砂状土　軽石を少量含む。（泥炭層）
7．灰黒色土　浅黄C軽石を多量に含む。しまっている。
8．黒褐色土　浅黄C軽石を多量に含む。粘性があり軽石は7層より6多量。　9．黄褐色シルト質土　軟質。　10．幼黒色粘質土。　11.黄褐色粘質土

B

1．灰色土　水田耕作土。砂礫や角閃石安山岩を含みサラサラする。
2．灰色土　砂礫や鉄分凝集を多量に含むサラサラした土層。
3．黒褐色土　椎名二ツ岳軽石を多量に含み、鉄分凝集も含む。
4．ローム層

F

1．白色の大粒の軽石を混じるハードローム。　2．浅黄板鼻褐色軽石層塊を混じるハードローム。
3．2より黒っぽいローム。浅黄板鼻褐色軽石は含まない。　4．白色軽石を含む褐色のローム。（暗色帯）
5．4層にさらに薄状に黒褐色のロームを混じる。（暗色帯）　6．灰黄色のハードローム。（暗色帯）
7．黄褐色のハードローム。8層の粒を多く含む。　8．砂、小石、青白灰色。直径20～30㎝の礫も含む。

C

1．現耕作土　2．褐色土　浅黄板鼻褐色軽石を含む。
3．浅黄B火山灰純層　4．浅黄B軽石純層　5．黒色粘質土　僅かに白色軽石を含む。斑鉄が見られる。　6．灰褐色粘質土　浅黄C軽石、椎名二ツ岳軽石を含む。コシ、アシ茎の鉄分あり。
7．灰褐色土　灰色粘土と浅黄C軽石と思われる灰白色軽石が互層にふる。　8．灰黒色粘質土　椎名二ツ岳軽石がわずかに入る。
9．黒色粘土

G

1．灰色粘質土　現在の水田耕土。　2．灰褐色土　現在の水田スキ床。軽石、砂粒を含む。赤色化した植物痕が多量に含まれる。
3．褐色土　軽石、砂粒を多量に含む。　4．浅黄B軽石純層上面に5㎝程の灰紫色火山灰をのせる。また、上部に2㎝程の灰色火山灰が部分的にある。　5．黒色粘質土　浅黄C軽石を多量に、椎名二ツ岳軽石を僅かに含む。遺物を包含する。　6．黒褐色粘質土　椎名二ツ岳軽石、浅黄C軽石を含む。　7．浅黄C軽石純層　8．灰黒色粘質層　黄色土粒を含む。

第12図　荒砥宮田遺跡の基本土層

積層が確認でき、その直下で水田面と推定される平坦面が検出された。ここでは下層に堆積すると予想された榛名二ツ岳軽石と浅間Ｃ軽石の純堆積層は確認できなかった。２区台地部はＦ地点の土層を示す。厚さ15cmの表土の下に白色の大粒の軽石を含むハードローム層（１層）が堆積していた。この１層上面で縄文時代土坑、古墳時代前期および平安時代の住居等を検出した。東谷地へは緩やかに傾斜していくが、その緩斜面で古墳時代前期の土坑群を確認した。

２区東低地部はＧ地点の土層を示す。現水田耕土の下層には１ｍ近くの褐色土が堆積し、この下位に浅間Ｂ軽石と火山灰の純層（４層）が厚さ10cmほど堆積していた。この直下で谷沿いの水路や水田面と推定される平坦面を検出した。５層・６層は榛名二ツ岳軽石や浅間Ｃ軽石を含む黒色・黒褐色の粘質土が堆積し、水田耕土となっていた。その下層に厚さ５cmほどの浅間Ｃ軽石純層（７層）の堆積が確認できた。７層の堆積は２区東谷地調査区の南半部の谷中央に限られており、直下面の精査をおこなったが遺構は検出できなかった。

３区は低地部のみの調査区である。北方のＤ地点の土層を示す。厚さ50cmの現耕作土の下位に、下層の浅間Ｂ軽石を鋤き込んだ褐色土が堆積し、その下層に厚さ15cmの浅間Ｂ軽石純層（５～７層）が堆積していた。その直下で平坦面を検出した。明確な畔は検出されなかった。水田面かどうかは断定できない。その下層は砂礫層が１ｍ上堆積し、浅間Ｃ軽石層の純層は３区では確認できなかった。また砂礫層の下層がどうなっているかは調査では確認できなかった。

東西に長い４区は、西側の６割が低地部、東側の４割が台地部であった。低地部はＥ地点の土層を示す。厚さ30cmほどの現耕作土（１層）の下に厚さ５cmの浅間Ｂ軽石純層（２層）が確認された。その直下で緩斜面と平坦面を検出したが、畦等は検出されなかった。水田面であるかどうかは不明である。その下層に厚さ数cmの榛名二ツ岳火山灰（７層）が確認できたが直下での精査は火山灰層が不明瞭で実施できなかった。さらに黒色粘質土を挟んで浅間Ｃ軽石層（９層）が堆積していたが、その直下は東西方向の溝状凹地であり、人為的な遺構かどうかは断定できなかった。４区台地はロームが堆積していたが、その上面で４条の溝を検出した。最も東にある５号溝には浅間Ｂ軽石が最下層に堆積していた。現況からみると、この５号溝は、北側の谷から２区東谷地に抜ける自然の谷地形である可能性もあるが、調査所見のみでは不明な点が多い。

（３）遺構・遺物の記録

調査にあたっては、図面・写真および調査メモを記録した。図面は各遺構の断面図と平面図を作成した。各遺構の埋没状況については土層確認を行い、適時土層断面図を作成した。土層断面図はすべての遺構について記録できなかったが、調査メモで補足するようにした。古墳石室は10分の１、竪穴住居・溝・土坑等の遺構は20分の１、溝・古墳・水田・畠等については40分の１の個別の平面図を平板測量によって作成した。なお１区については個別の平面図ではなく、グリッド杭を利用して調査区を割り付け、20分の１の割り付け平面図を作成した。

遺構写真は35mmモノクロフィルムとカラースライドフィルムおよび、ブローニーモノクロフィルムを用いて地上撮影した。

２．調査の経過

1983（昭和58）年度の荒砥北部圃場整備事業に係わる埋蔵文化財調査は、荒口町、荒子町にわたる第４工区が対象となった。

前年度の実態を踏まえ、本格的な調査実施前に、分布調査、試掘調査を計画・実施した。工事行程と埋蔵文化財調査の進捗が整合性を有し、双方が円滑に進行するよう協議が重ねられたが、圃場整備対象面積が95.5haと膨大であったことなどの諸要因が重なり、充分な環境の中での調査実施には至らなかった。調査はＡ工事の荒砥宮田遺跡とＢ工事の荒砥諏

訪西遺跡が併行して実施された。荒砥宮田遺跡の調査経過の概略は次の通りである。

5月11～17日　前橋土地改良事務所から提示された施工計画に基づき、第4工区の圃場整備対象地内全域の遺跡分布調査を実施した。

5月下旬～7月上旬　分布調査の成果を整理、報告した。前橋土地改良事務所、荒砥北部土地改良区、群馬県教育委員会文化財保護課、事業団で調整を重ねた。本調査に先行して試掘調査を実施することを確認した。

7月8日　調査事務所設営。調査器材の搬入。当初は調査担当3名で対応。

7月13日　調査区確定のため、第4工区A工事対象地の試掘調査を開始した。

7月18日　第4工区B工事対象地の試掘調査を開始した。

7月22日　第4工区C工事対象地の試掘調査を開始した。

8月1日～8月15日　試掘調査の記録を整理した。その結果、A・B・C工事対象地における要調査対象面積は、約13万7千㎡が見込まれた。

8月19日　調査方針の打ち合わせを実施。

8月23日　1区表土掘削除去作業開始。合わせて、1区の遺構確認調査を開始した。

9月19日　2区でも表土掘削除去作業開始。

9月29日　3区も併行して表土除去作業開始。

今年度、事業団はA・B工事対象地の調査に対応することが決定された。要調査対象面積は約7万㎡。

10月1日　B工事対象地(荒砥諏訪西遺跡)表土掘削除去作業開始。

10月6日　1区水田部分調査開始。2区の遺構確認作業および遺構調査開始。調査担当5名の体制になる。

10月8日　3区の浅間B軽石面精査開始。

10月11日　1区洪水砂下水田全景写真撮影。

10月12日　1区洪水砂下水田測量開始。2区東谷地調査開始。

10月17日　2区東谷地浅間B軽石除去作業開始。3区浅間B軽石下面全景写真撮影。

10月18日　1区洪水砂下水田調査終了。1区の調査は一時中断する。

10月21日　荒砥諏訪西遺跡、調査開始。以後、11月24日まで宮田遺跡と諏訪西遺跡を併行調査。

10月24日　2区1号墳全景写真撮影。2区東谷地浅間B下水田全景写真撮影。

10月28日　荒砥諏訪遺跡、試掘調査開始。以降、3遺跡を併行して調査する。

10月29日　2区東谷地両側溝群全景写真撮影。3区浅間軽石下面調査終了。

11月1日　4区表土掘削除去作業開始。

11月2日　4区浅間B軽石面精査開始。

11月9日　1北区調査開始。

11月11日　2区台地・東谷地調査終了。

11月18日　1北区調査終了。

11月21日　4区浅間C軽石下面調査。

11月22日　4区調査終了。この後荒砥諏訪西遺跡の調査に担当5名が集中。

12月23日　土地改良工事の行程に間に合わせるため、調査体制を増強。宮田遺跡1区を別班で調査再開。

1月以降は、担当者8名の体制になる。荒砥諏訪西遺跡も調査続行。

1月28日　荒砥宮田遺跡1区東谷地、調査再開。

2月3日　荒砥諏訪西区の調査、全て終了。以後、調査体制の全てを荒砥宮田遺跡1区の調査に投入。

2月7日　1区68号溝全景写真撮影。

2月13日　荒砥宮田遺跡1区、調査終了。本年度の調査を全て終了した。

2月21日　調査器材の搬出、調査事務所の撤収。

2月14日～3月24日　記録図面・写真整理、土器洗浄・注記等の整理作業を実施。

3月24日　基礎整理作業を終了し、記録類・出土遺物を事業団へ搬出。

３．発掘区の概要

今回の荒砥宮田遺跡の発掘調査によって、１区・１北区・２区・３区・４区の５カ所の調査区で検出した遺構は第３表に示すとおりである。このうち、本書『荒砥宮田遺跡Ⅰ』では縄文時代から古墳時代の遺構・遺物を報告した。その遺構分布は第13図、時期ごとの遺構分布変遷は第６章第125図に示した。

１区は中央のローム台地で東側には浅間Ｂ軽石が堆積する帯状低地が、南西部には西側の浅間Ｂ軽石が堆積する帯状低地がまわりこむ。ここでは43軒の住居、掘立柱建物25棟以上、井戸67基、土坑334基、竪穴状遺構30基、溝99条、畠１面５カ所、水田２面が検出された。このうち掘立柱建物、井戸、竪穴状遺構、溝と土坑の多くは、中近世のものと思われ、縄文時代から古墳時代の遺構と著しく重複して検出された。これらの中近世の遺構については詳細を整理し、出土遺物を検討した上で、第２分冊『荒砥宮田遺跡Ⅱ』で報告する。

１区で調査した縄文時代の遺構は、前期の住居１軒と土坑１基である。出土した縄文土器も62点と少ない。１区の南西低地と台地縁辺には弥生時代終末期～古墳時代初頭と思われる長方形土坑が１基ずつ検出された。同時期の住居は１区からは検出されていない。この時期の土器破片は遺跡全体で17点と限られている。古墳時代前期の住居は16軒で、１区の台地中央部に散在していた。重複した住居はないが近接しているものがあり、すべてが同時期のものとはいえないが、土器の様相は大きな時間差を示していない。また住居規模には大型・中型・小型の３種があり、ある一定時期の竪穴に用途の差があった可能性もある。古墳時代中・後期の住居は26軒、土坑８基である。住居の分布は、古墳時代前期の住居と重なる。土坑は、長い楕円・長方形のものや円形のものがあるが、榛名二ツ岳軽石を含む黒色土で埋まっており、完形に近い土器が出土したものもある。

１区の台地の東谷地では、古墳時代前期の遺物を出土した溝２条が検出された。台地にある同時期集落との関連性が想定される。谷地内は、巾10ｍのトレンチ状の調査にとどまったが、浅間Ｂ軽石直下の平坦面を検出した。明確な畦・水路は検出されなかったので水田面とは断定できなかった。その下位には浅間Ｃ軽石層を確認したが、直下面の調査はできなかった。

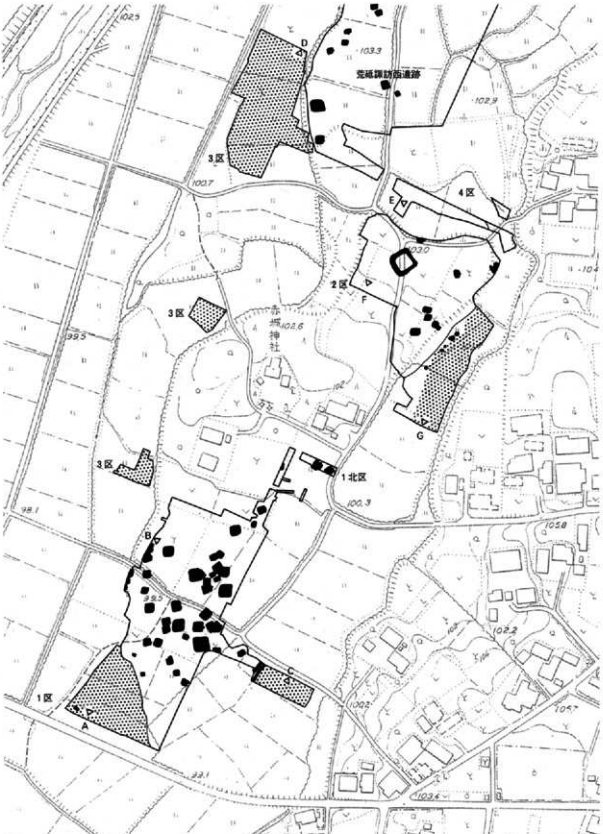
１区南西低地では、南東部の一部で浅間Ｂ軽石が残り、直下に水田面と思われる平坦面が検出された。浅間Ｂ軽石の下層には洪水砂があり、それを掘き込んだ畠の畝溝跡５ヵ所と、洪水砂直下の水田を広範囲に検出した。水田は傾斜地の水田で、巾の狭い長方形の水田面が並んでいた。これらの低地遺構についても第２分冊『荒砥宮田遺跡Ⅱ』で報告する。

１北区は、１区の北側に設定した道路部分の発掘区である。古墳時代後期の住居５軒と、土坑１基が検出された。古墳時代後期の住居分布域は、１区から台地の北方へ拡大していることになる。

２区は、１区からつながるローム台地の北端にあたる。２区で検出された縄文時代の遺構は前期の土坑１基、時期不明の落し穴３基である。出土した縄文土器は８点にとどまった。古墳時代前期の遺構は、方形周溝墓１基、住居３軒、土坑７基である。ほかに番号を付さなかったが、土坑状のおちこみが３基認められた。周溝墓は方形で、群在せず単独に立地している。土坑は粘土採掘土坑と小型の円形土坑で、２区東谷地の西側台地縁に並んでいた。台地縁辺の

第３表　各調査区の遺構

区	住居	掘立柱建物	井戸	土坑	竪穴状遺構	溝	畠	水田	周溝墓	古墳	その他
１区	43	9	67	334	30	99	１面５カ所	２面			
１北区	5		2	8		4					
２区	7		3	80	1	1		１面	1	1	
３区											浅間Ｂ下面
４区						6					浅間Ｂ下面・浅間Ｃ下面
合計	55	9	72	423	31	110	0	0	1	1	



第13図　荒祇宮田遺跡調査区の位置（調査時）　0　1：2500　100m

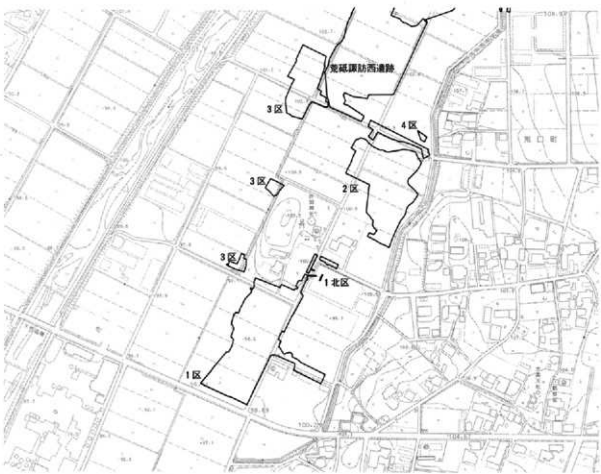
粘土化したローム層を採掘することを目的としたと思われる。古墳時代後期の住居は２軒で、５世紀１軒、６世紀に１軒と住居分布は希薄になる。台地東縁には、７世紀後半の両袖型横穴式石室をもつ円墳が１基検出された。居住域から墓域への転換があったと見られる。２区の台地上にはこの他に、平安時代の住居２軒、中近世の火葬墓壙、墓壙、土坑が72基検出された。これらは第２分冊『荒砥宮田遺跡Ⅱ』で報告する

２区東谷地では浅間Ｂ軽石と浅間Ｃ軽石の直下面が検出された。浅間Ｂ軽石面の谷巾が広くなる南半部分では水路や畦があり、水田面と考えた。下位の浅間Ｃ軽石下面は直下面の精査を行ったが、帯状の凹地を検出したにとどまった。

３区は、１・２区のある台地西側の低地内の発掘区である。工事内容との調整の中で、３区画が調査された。いずれの発掘区でも浅間Ｂ軽石直下面が検出できたが、水田面との確証は得られなかった。

４区は、道路新設の細長い発掘区である。中央から東側はローム台地で、溝６条が検出された。西側は低地であり、浅間Ｂ軽石直下で平坦面が、また下層の一部で、浅間Ｃ軽石が検出されたが、その直下面を水田面と確定することはできなかった。

調査で出土した資料は60×37×15cmの遺物収納箱に68箱、68×48×34cmの収納箱に８箱、57×35×30cmの収納箱に２箱である。本報告の中で資料化し、本文中に掲載した資料は619点である。資料の内訳は土器457点、鉄器12点、石器150点（うち68点は使用痕のない礫で写真・計測のみ）である。



第14図　荒砥宮田遺跡調査区の位置（現状）

第4章　検出された遺構・遺物

1．縄文時代の遺構・遺物

（1）概要

縄文時代の遺構は、1区で前期諸磯a式期の住居1軒、時期不明の落し穴1基、2区で前期諸磯a式の土坑1基、時期不明の落し穴3基が検出されている。それぞれの遺構の分布は大きく離れており、関連性を考える資料に乏しい。

また、103点の縄文土器が遺構に伴わない形で出土している。内訳は早期野島式1点、前期諸磯a式60点、黒浜式32点、中期加曽利E3式2点、後期堀ノ内2式5点、不明3点である。

早期野島式の土器破片（第21図440）は中世と見られる火葬墓壙（2区2号土壙）の埋設土から出土した。他に明確な遺構を確認することはできなかった。後期堀ノ内2式の土器破片は2区Ia－10グリッドに4点が偏在していた。層位は不明である。こちらも明確な遺構を確認することができなかった。

（2）竪穴住居

1区10号住居（第15図　PL1・2・31　遺物観察表P.5・38）

位置　Cs・t－17G　　**形状**　隅丸方形

規模　長軸3.5m　短軸3.32m　壁高0.2m

面積　10.65m²

北壁方位　N－26°－W

炉　北部ほぼ中央に床面埋設土器（第15図40）が検出された。埋用炉と考えられる。

柱穴　主柱穴が想定される位置には検出されなかった。北東隅に長径0.37m・短径0.32m・深さ0.2mの小穴（P1）が検出された。

周溝　周溝は検出されなかった。

貯蔵穴　貯蔵穴は検出されなかった。

床面および床下施設　南西部を14号溝に切られており、硬化した床面は検出できなかった。

遺物と出土状況　本住居からの出土遺物は、40の埋設土器以外はない。重複する7号住居の埋没土中から諸磯a式土器の破片が2点出土している。また北西壁際の床面直上で無縁の石皿（S14）が、埋没土中から打製石斧（S15）が出土した。

所見　床面に埋設された深鉢形土器（第15図40）の型式から、縄文時代前期諸磯a式期の住居と考えられる。

（3）土坑

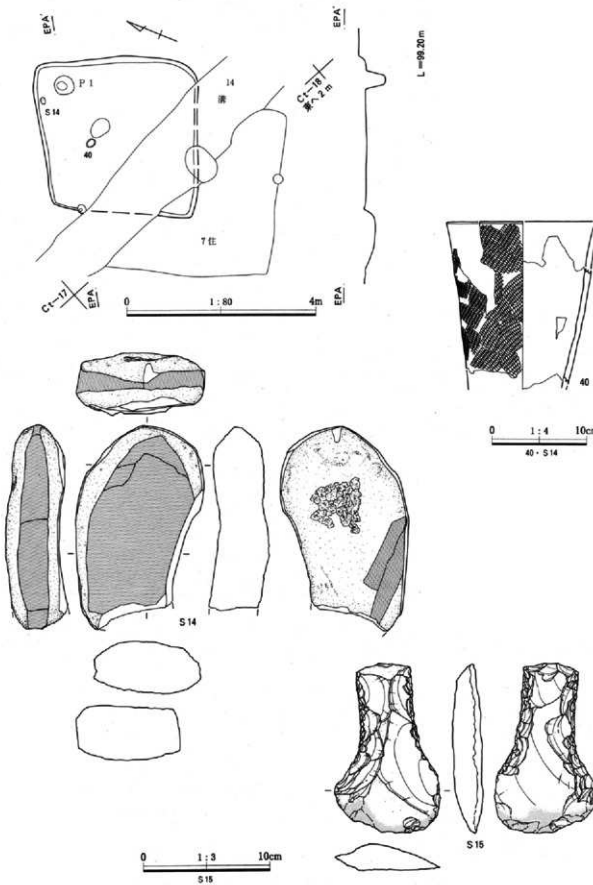
1区の土坑は古墳時代後期の36号住居床面で検出された82号土坑だけである。1区にはCs・t－17Gに諸磯a式期の10号住居があるが、82号土坑の位置は離れている。1区では古墳時代以降の住居や土坑埋没土、遺構確認作業時に表土中から黒浜式12点、諸磯a式47点、不明3点の縄文土器が出土している。これらの分布は第19図のように西側の1カ所と、10号住居周辺、82号土坑周辺の3カ所に偏在している。82号土坑の時期は不明であるが、これらの土器の分布からすれば前期の可能性が高い。

2区の土坑は南部で検出された33号土坑と、北部に群在していた56・58・59号土坑の4基である。33号土坑は黒浜式2点、諸磯a式1点が埋没土中から出土している。周辺では遺構外遺物も黒浜式・諸磯a式が集中して出土している。56・58・59号土坑は落し穴と考えられるが、埋没土中から出土したのは58号土坑の打製石斧（S148）のみであり、時期は確定できない。周辺の遺構外遺物も諸磯a式と黒浜式が8点散在しているだけであった。

1区82号土坑（第16図　PL1）

位置　Cg－16・17G

形状　隅丸長方形



第15図　１区10号住居と出土遺物

規模　長軸1.38m　短軸0.8m　壁高0.35m

長軸方位　N－19°－W

埋没土　白色粒子を多含する灰褐色土。硬質で焼土粒を少量含んでいる。浅間C軽石・榛名二ツ岳火山灰を含まない。

底面　長軸の中央に3個の小ピットが確認された。それぞれのピットの規模(直径×深さ)は、P1が12×34cm、P2が14×9cm、P3が15×10cmである。

遺物と出土状況　土坑に伴う遺物は出土していない。

所見　1区36号住居(6世紀)の床面で検出した。やや小型と思われるが、底面に小ピットをもつ方形の形態と、埋没土の特徴から縄文時代の遺構と考えた。細別時期は出土遺物がなく不明である。

2区33号土坑（第16図　PL1・31　遺物観察表P.5）

位置　Ig－10G

形状　隅丸台形

規模　長軸0.98m　短軸0.93m　壁高0.54m

長軸方位　N－54°－W

埋没土　ローム粒を含み、茶色味をおびる暗褐色土。上層はより黒い。締まりがある。

底面　北部がややへこむが、ほぼ平坦な底面である。特別な施設はない。

遺物と出土状況　埋没土中から前期黒浜式2点、諸磯a式1点、合計3点の縄文土器片が出土した。第16図には1点ずつ(449・450)を図示した。

所見　埋没土中から出土した土器と埋没土の特徴から、縄文時代前期の遺構と考えられる。

2区56号土坑（第16図　PL1）

位置　Lp－6G

形状　楕円形

規模　長軸2.43m　短軸1.66m　壁高0.73m

長軸方位　N－49°－W

埋没土　褐色土とローム層塊の混土で埋まっていた。

底面　ほぼ平坦で、特別な施設は検出できなかった。

遺物と出土状況　遺物は出土しなかった。

所見　形態の特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。細別時期は不明である。

2区58号土坑（第17図　PL1・31　遺物観察表P.38）

位置　Lo－11・12G

形状　楕円形

規模　長軸2.55m　短軸1.74m　壁高1.23m

長軸方位　N－57°－W

埋没土　褐色土とローム層塊の混土で埋まっていた。上層には白色軽石を含む黒褐色土が入り込んでいた。

壁　北側をのぞいて、壁は底面から1mの高さで斜め上方に開くように掘られていた。

底面　長軸のほぼ中央に4個の小ピットが確認された。それぞれのピットの規模(直径×深さ)は、P1が22×46.5cm、P2が20×41.5cm、P3が18×45cm、P4が12×50cmである。P1～P3は50cmほどの等間隔で掘られているが、P4はP3に接近した位置に掘られている。

遺物と出土状況　土器は出土しなかった。埋没土中から打製石斧(S148)が出土している。

所見　形態の特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。細別時期は不明である。

2区59号土坑（第18図　PL1）

位置　Lq－12G

形状　隅丸長方形

規模　長軸2.4m　短軸1.74m　壁高1.31m

長軸方位　N－78°－W

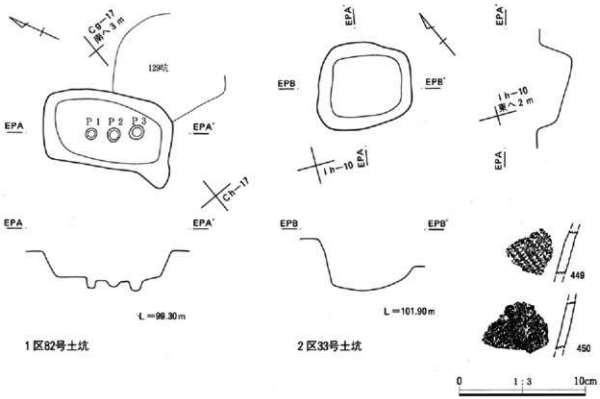
埋没土　褐色土とローム層塊の混土で埋まっていた。上層には白色軽石を含む黒褐色土が入り込んでいた。

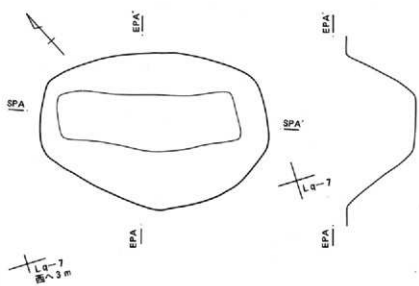
壁　壁は底面から1mの高さで直立し、そこから斜め上方に開くように掘られていた。

底面　長軸のほぼ中央に2個の小ピットが確認された。それぞれのピットの規模(直径×深さ)は、P1が27×25cm、P2が16×43cmである。P2は中軸線から南にはずれた位置に掘られている。

遺物と出土状況　遺物は出土しなかった。

所見　形態の特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。細別時期は不明である。



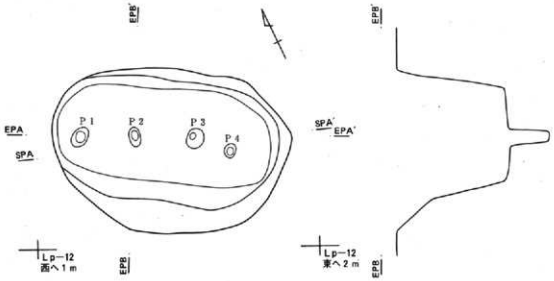


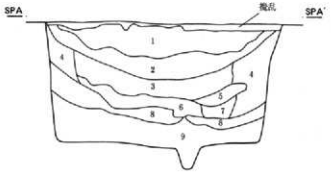
2区56号土坑　SPA−SPA'

1．暗褐色土　砂質。しまりがない。
2．暗褐色土　暗褐色土と茶褐色土の小礫の混土層。茶褐色土粒を含む。
3．暗褐色土　2層に類するが、茶褐色土粒の混入は著しく少ない。
4．茶褐色土　ソフトロームの混入したもの。
5．黒褐色土　茶褐色土との混土層。
6．暗褐色土　3層と類するが、茶褐色土の礫がベースになる。
7．暗褐色土　6層より更に茶味が強くなる。
8．茶褐色土　ソフトロームの汚れたもの。

0　1：40　2m

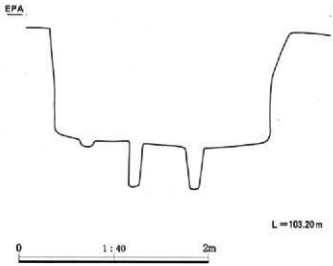
第16図　1区82号・2区33号・56号土坑と出土遺物

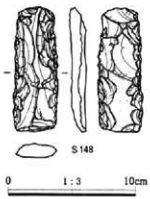




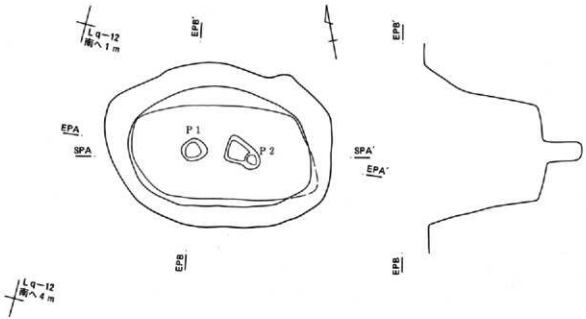
2区58号土坑　SPA−SPA'

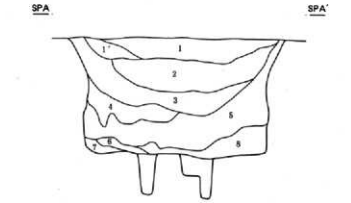
1．暗褐色土　白色軽石を多く含む。
2．暗褐色土　暗褐色土と茶褐色土が小塊状に混入。茶褐色土の小粒を含む。
3．暗褐色土　暗褐色土と茶褐色土が小塊状に混入。茶褐色土の塊が主体となる。
4．茶褐色土　ソフトロームが崩落したもの。
5．黒褐色土　あまりしまりなし。
6．茶褐色土　ハードロームの塊と暗褐色土の混土層。
7．黒褐色土　5層に類するが黒味が弱い。
8．茶褐色土　ロームの汚れたもの。
9．暗褐色土　ロームと暗褐色土の混土層。しまりなし。





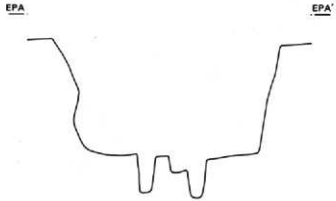
第17図　2区58号土坑と出土遺物





2区59号土坑　SPA−SPA'

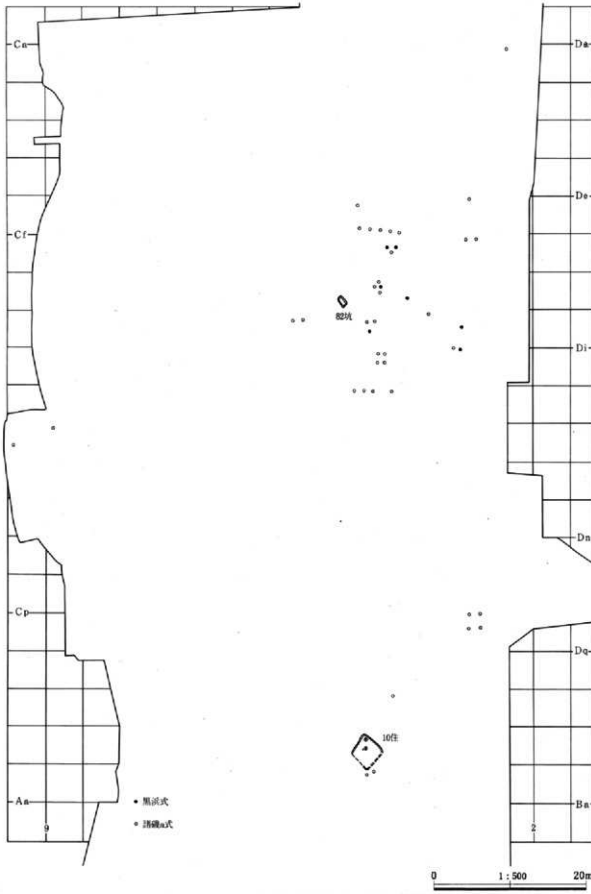
1，暗褐色土　白色軽石を多く含む。
1'，暗褐色土　軽石はやや少なくなり、ロームを含む。
2，暗褐色土　黒味の強くなった暗褐色土と暗褐色土の小塊の混土層。
3，暗褐色土　小塊の混入は少なくなる。
4，茶褐色土　茶褐色土主体の２層の黒味の強い暗褐色土との混土層。
5，茶褐色土　混入物なし。ソフトロームの汚れたもの。下層はやや締まる。
6，暗褐色土　暗褐色土とロームの塊状の混土層。
7，茶褐色土　ソフトロームの汚れた層。５層に比して、やや締まる。
8，暗褐色土　フカフカして締まりがない。



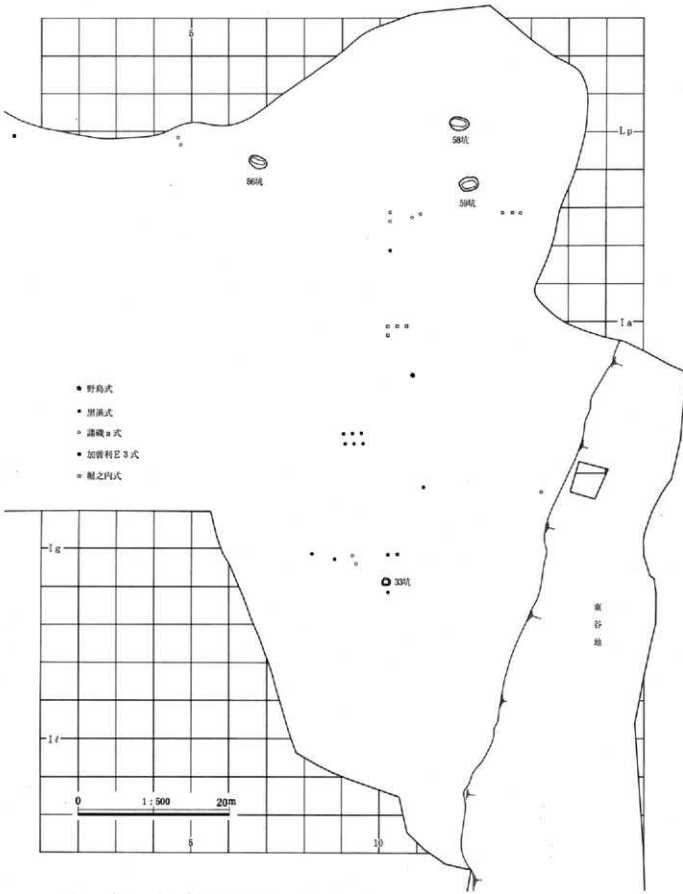
L＝103.20m

0　1：40　2m

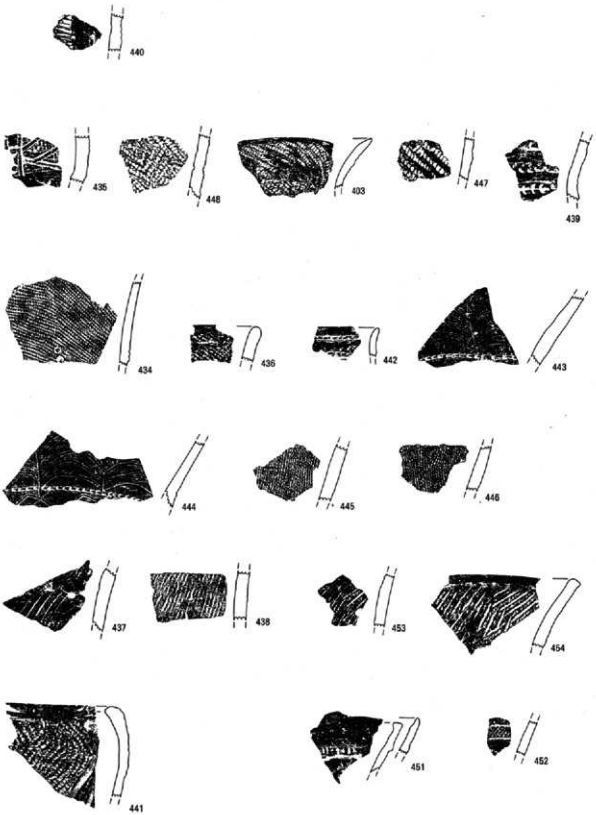
第18図　２区59号土坑



第19図　1区の縄文時代遺構と縄文土器出土位置略図



第20図　２区の縄文時代遺構と縄文土器出土位置略図



第21図　遺構外出土の縄文土器

（4）遺構外の出土遺物

（第21図　PL31　遺物観察表P.5・6）

縄文時代以降の遺構埋没土で検出した遺物・遺構確認時にグリッドで取り上げた遺物・表採遺物をまとめた。出土位置の分布は前項でまとめた通りである。

遺物の分布は、古墳時代の居住域とよく一致しているが、出土量は少なく、また断続的である。このようなあり方は、当時の主要な居住地ではなかった本遺跡の性格を良く示している。

2．弥生時代終末期の遺構・遺物

（1）概要

ここに記載するのは、弥生時代終末期の遺構・遺物である。これらの中には厳密には古墳時代のものも含まれると思われる。しかし、本遺跡の古墳時代の住居は明らかに古墳時代前期中葉から後葉のもので、弥生土器が残存する時期の遺構ではない。したがってここでは、これらの弥生土器を主たる出土遺物とする遺構は弥生時代終末期として扱った。また遺構に伴わないかたちで単独に出土した弥生土器片も、本章で扱うこととした。今後の編年や時期区分研究の結果、古墳時代と扱うことになる可能性も充分ある。

この時期の遺構が検出されたのは、1区の南寄りの地点である。古墳時代前期後半の住居の分布域とは区別される。1区14号土坑・1号竪穴はともに大型方形の土坑で、数点の土器を伴うが、住居と呼べるような施設はないので、土坑として報告した。

遺構に伴わない遺物は第22図のように出土位置や数は散漫で、弥生時代終末期の居住域を示すとは言い難い。

（2）土坑

1区で2基の土坑が検出された。

1区14号土坑（第22図　PL32　遺物観察表P.6）

位置　Aa－12・13G

形状　隅丸方形

規模　長軸2.55m　短軸1.74m　壁高0.13m

長軸方位　N－65°－W

重複　北壁の一部を19号溝に切られている。南壁の一部は5号掘立柱建物の柱穴が切っている。

壁　壁は斜め上方に立ちあがるが、残存壁高は小さいため、旧状を想定するまでには至らない。

底面　ほぼ平坦である。

遺物と出土状況　樽式系土器(354)と口縁を折り返す球胴の甕(355)、短いくの字口縁の甕(356)が出土している。いずれも土坑底面から5～7cmで出土している。埋没土中からは土師器破片7点や陶器破片1点も出土した。

所見　底面から少し浮いた状態ではあるが、甕が3個体まとまって出土したことから、土坑の時期を弥生時代終末期と考えたい。

1区1号竪穴状遺構

（第22図　PL1・32　遺物観察表P.6）

位置　Aj－8・9G

形状　長方形

規模　長軸3.48m　短軸2.11m　壁高0.42m

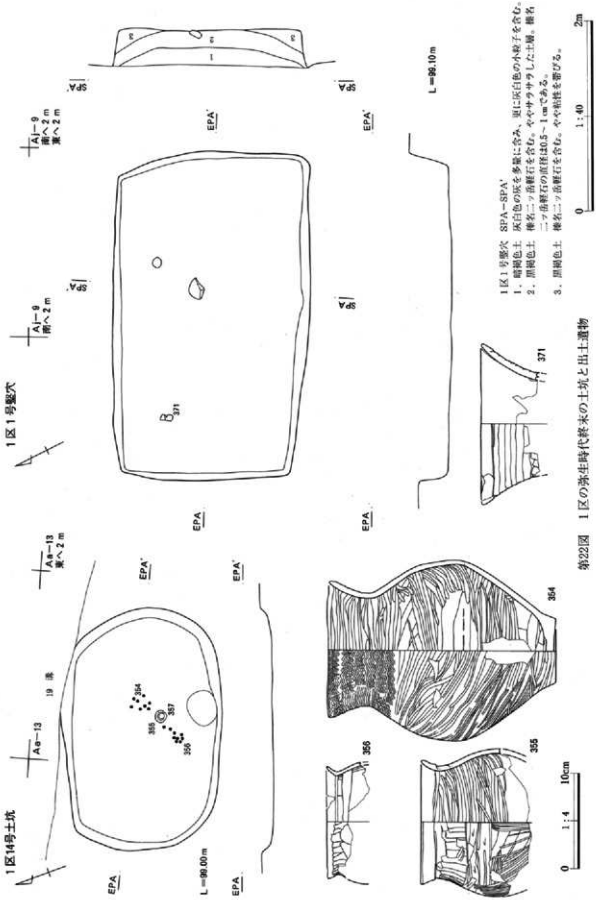
長軸方位　N－64°－W

埋没土　第1次埋没土は榛名二ツ岳軽石を含まない黒褐色土である。中層・上層の埋没土には同軽石の堆積が記載されている。また上層の暗褐色土には灰白色の灰が含まれている。

壁　壁はほぼ直立する。

底面　ほぼ平坦である。

遺物と出土状況　出土遺物は少なく、土器は赤井戸系の壺(371)が北部底面直上で出土しているだけである。また中央部で礫が1個出土しているが石器ではないと判断された。



第22図　1区の弥生時代終末の土坑と出土遺物

所見　本竪穴の時期は決しがたいが、底面直上で出土した壺(371)からすれば、弥生時代終末期と考えておきたい。

（3）遺構外の出土遺物

（第23図　PL.32　遺物観察表P.6・7）

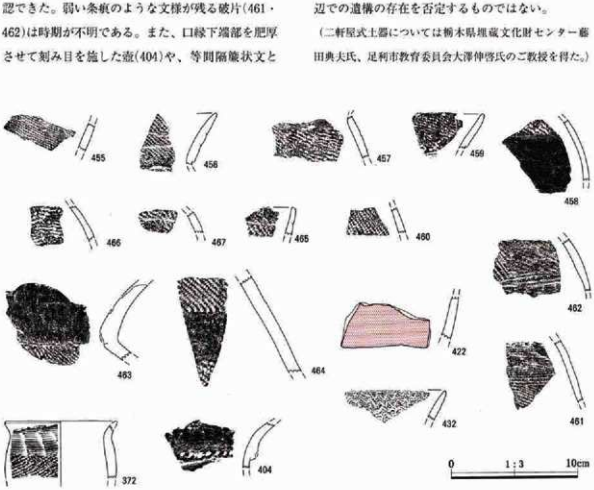
弥生時代終末期の遺物は、今年度整理した遺物の中では、第23図に図示した17点が確認できた。いずれも遺構に伴う出土状態ではない。ただし1区77号土坑からは赤井戸式土器破片が3点出土した。埋没土中からの出土で積極的に遺構の時期を示すとはいえないので、遺物のみ本節で扱った。

土器の内訳は赤井戸式土器破片が最も多く11点、粘土帯に縄文が施文された破片と、胴部・口縁部に縄文帯として施された破片がある。櫛式土器は赤色塗彩の壺破片(422)と波状文が施された甕(432)が確認できた。弱い条痕のような文様が残る破片(461・462)は時期が不明である。また、口縁下端部を肥厚させて刻み目を施した壺(404)や、等間隔簾状文と縄文帯が上下に施された小型甕(372)が出土した。

特に372は二軒屋式土器の文様の組み合わせと類似するが、二軒屋式土器の文様帯は頸部より下がるのが通例であり、頸部にある本例とは異なっている。また二軒屋式土器には内面に磨きが施されないのに対して、本例は磨かれている。類似資料は栃木県足利市赤松台遺跡出土の台付甕がある。頸部に簾状文、胴部に縄文が施された台付甕であり、やや赤みがかる。簾状文は赤松台遺跡例の方が直角である。栃木県では、赤松台遺跡で赤井戸式の縄文が施された小型甕と伴出していることから、これを赤井戸式土器の範疇でとらえている。本県での位置づけについては今後の課題である。

荒砥宮田遺跡で出土した弥生土器は図示したものがすべてであり、遺構も終末期以外検出されなかった。しかし土器が出土しているのは確かであり、周辺での遺構の存在を否定するものではない。

（二軒屋式土器については栃木県埋蔵文化財センター藤田典夫氏、足利市教育委員会大澤伸啓氏のご教授を得た。）



第23図　遺構外出土の弥生時代終末の土器

3．古墳時代前期の遺構・遺物

（1）概要

古墳時代前期の遺構は、住居・土坑・溝・方形周溝墓が検出されている。

住居は概ね古墳時代前期中葉～後葉で、1区で16軒、2区で3軒を調査した。また2区で調査した土坑7基は粘土採掘坑とその周辺の小型土坑で、2区の3軒の住居と同時期と考えられる。1区の土坑は長方形で、14号土坑と類似性が看取できる。方形周溝墓は2区で検出された。同時期住居群の西側の台地中央部にあった。発掘区内では群在する他の周溝墓はみつからなかった。単独で立地している可能性が高い。

1区東谷地・2区東谷地・4区西谷地では、浅間C軽石の純堆積層が検出された。このうち2区および4区では軽石を除去し、軽石直下面の精査を実施したが、畦等の施設は検出されなかった。台地上で確認された居住域に伴う水田生産域は明確にはできなかった。

（2）竪穴住居と土坑・溝

1区2号住居（第24図　PL2）

位置　C1・m－10・11G

形状　隅丸方形と推定される。西側が21号溝に切られており、全体形状は判明しなかった。壁はほぼ直立するが、残存壁高が低いため全容は判明しなかった。また住居東隅に壁の張り出しがあるが、埋没土の観察から住居に伴う施設ではないと判断した。

規模　長軸4.42m　壁高0.11m

面積　測定不能　　**主軸方位**　N－13°－E

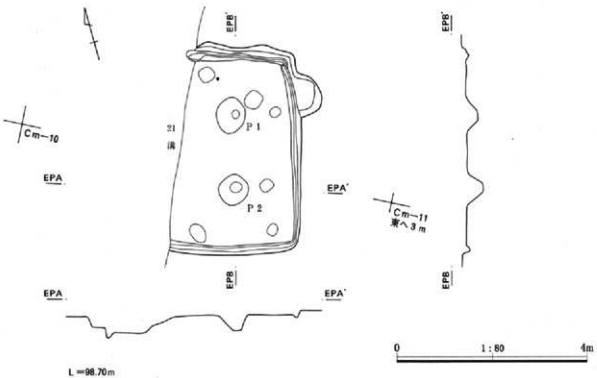
炉　調査できた範囲の中では確認できなかった。

柱穴　主柱穴と思われるP1・P2を検出した。それぞれの規模（長径×短径×深さ）は、P1が78×60×24cm、P2が60×58×33cmである。

周溝　調査できた範囲には全周する。概ね幅は25cm、深さは16cmである。

貯蔵穴　検出されなかった。

床面　床面はほぼ平坦である。主柱穴以外で小ピッ



第24図　1区2号住居

トが６基床面で検出されたが、住居に伴なうものではない。

遺物と出土状況　埋没土中から土師器破片30点が出土した。また北壁付近から床面直上で土師器甕胴部破片が出土したが、図示できるような大きさではない。

所見　出土遺物および住居形態から、古墳時代前期中葉～後葉の住居と考えられる。

１区７号住居（第25図　PL2・32　遺物観察表P.７）

位置　Cs・t－17・18G

形状　長方形と考えられるが、中央部を14号溝に切られており、10号住居と重複していることから、北東隅を明確に確認することができなかった。

規模　長軸測定不能　短軸3.5m　壁高0.13m

面積　測定不能　　**長軸方位**　N－16°－W

炉　調査できた範囲には炉は検出できなかった。

柱穴　主柱穴と思われるＰ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４を検出した。Ｐ１・Ｐ２は床面上で検出できたが、Ｐ３・Ｐ４はそれぞれ14号溝底面・10号住居床面で検出したものである。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、Ｐ１が79×64×27cm、Ｐ２が69×59×56cm、Ｐ３が41×38×68cm、Ｐ４が60×41×73cmである。

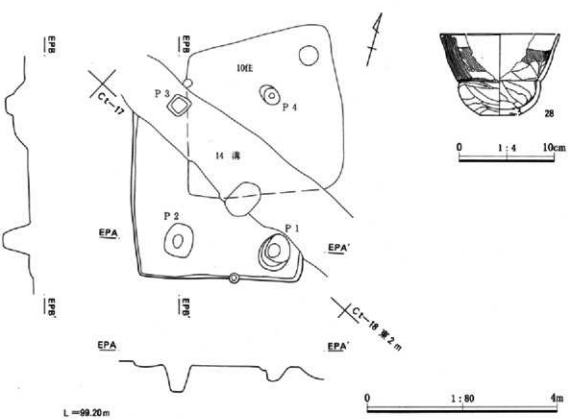
周溝　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

床面　床面は平坦である。柱穴以外の施設は検出されなかった。

遺物と出土状況　小型丸底土器(28)が埋没土中から出土した。図示した以外に土師器破片18点、縄文土器(諸磯ａ式)２点が出土している。

所見　床面直上の遺物はないが、埋没土中の遺物は重複する10号住居からの混入と考えられる縄文土器を除いて、古墳時代前期中葉～後葉の土器に限られることから、この時期の住居と考えた。



第25図　１区７号住居と出土遺物

1区8号住居（第26図　PL2・32　遺物観察表P.8・45）

位置　Aa・Ct－18・19G

形状　長方形。南西隅には攪乱があり、一部住居の立ち上がりが確認できないところがあった。また南東隅は11号溝に切られているが住居床面はかろうじて検出することができた。

規模　長軸4.2m　短軸3.39m　壁高0.22m

面積　13.64㎡　　**長軸方位**　N－91°－E

炉　北壁中央から0.6mほど中に入ったところに炉が検出された。炉の凹みの規模は長径0.83m、短径0.69mの楕円形で、深さは8.5cmである。粘土貼りや礫等の施設は無い。

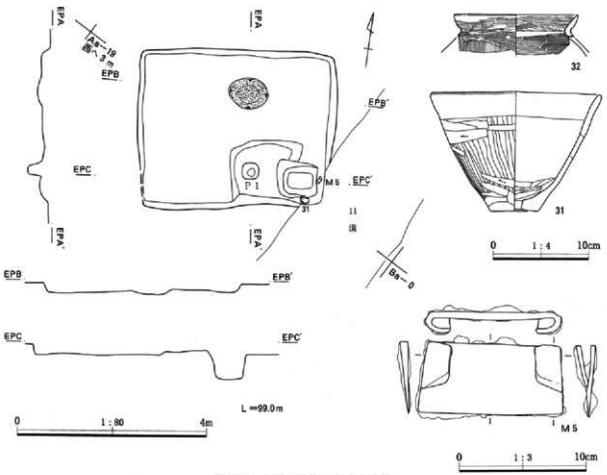
柱穴　主柱穴と考えられるピットは検出できなかった。

周溝　周溝は検出されなかった。

貯蔵穴　南東隅に長径0.85m、短径0.75m、深さ0.57mの長方形の貯蔵穴が検出された。底面は平坦で長方形である。

床面　床面は平坦であるが、南東隅の貯蔵穴の西側に一段高くなった方形の区画が検出された。区画の規模は長径1.18m、短径1.05mの正方形に近い形をしている。高さは3～5cmである。その区画内の西寄りに長径35cm、短径32cm、深さ29cmのほぼ円形のＰ１を検出した。

遺物と出土状況　堆積土中からは47点の土師器破片が出土した。土師器甑(31)は貯蔵穴底面上4cmのところで出土した。刷毛目の土師器甕(32)は堆積土中から出土した。鉄製方形鍬鋤先(Ｍ５)が貯蔵穴東縁の床面直上で出土した。この鉄製品は調査時には南東隅に重複する11号溝の出土遺物とされたが、上記のような出土状態が確認できたので本住居の遺物とした。なお11号溝からはもう１点鉄製方形鍬鋤先(Ｍ６)が出土している。こちらについては詳細な出土位置が不明であるので、11号溝出土遺物として第



第26図　１区８号住居と出土遺物

120図に掲載した。

所見　出土遺物から古墳時代前期中葉～後葉の住居と考えられる。

１区９号住居（第27図　PL２・３・33　遺物観察表P.８）

位置　Ｂａ・ｂ－０・１Ｇ

形状　隅丸方形

規模　長軸4.94ｍ　短軸4.38ｍ　壁高0.35ｍ

面積　20.68㎡　　**長軸方位**　Ｎ－63°－Ｗ

炉　北壁中央から0.8ｍほど中に入ったところに炉が検出された。炉の凹みの規模は長径1.2ｍ、短径0.58ｍの楕円形で、やや西側は凹んでいる。粘土貼りや礫等の施設は無い。

柱穴　主柱穴は検出できなかった。

周溝　全周する。概ね幅33㎝、深さ24㎝である。

貯蔵穴　南東隅に長径0.69ｍ、短径0.62ｍ、深さ0.63ｍの方形の貯蔵穴が検出された。底面は平坦で隅丸方形である。遺物が完形で出土した。

床面　西壁から南壁にかけての壁沿いと、北東隅に３～５㎝ほど高い部分が帯状につくられていた。西壁沿いは長さ2.6ｍ＋1.1ｍのＬ字形で幅0.8～0.9ｍである。北東隅は長さ1.9ｍ、幅0.7～0.9ｍである。南西隅には直径30㎝ほどの小ピットが検出されたが、柱穴とは断定できなかった。また中央部には直径１ｍほどの円形の掘り込みが検出されたが、新しい時代の撹乱である。

遺物と出土状況　埋没土中から184点の土師器破片と２点の須恵器破片が出土した。西壁沿いから土師器手づくね土器の破片が床面直上で出土している。この個体は図示できなかった。土師器台付甕(33)・器台(34)・高坏(35)は貯蔵穴埋没土の上層からほぼ完形で出土している。

所見　出土遺物から古墳時代前期終末の住居と考えられる。本住居のいわゆるベッド状遺構は、他の住居のように全周するのではなく、Ｌ字形を呈する。住居の規模や形状も異なっており、時期差なのか機能差なのか検討を要する。

１区12号住居（第28図　PL３・33　遺物観察表P.８・９）

位置　Ｃｒ－14・15Ｇ

形状　長方形と考えられるが、北半分を17号溝に南西隅を17号土坑に切られているので全体形状は判明しなかった。

規模　長軸4.70ｍ以上　短軸測定不能　壁高0.16ｍ

面積　測定不能　　**南壁方位**　Ｎ－75°－Ｗ

炉　調査した範囲の中では検出されなかった。

柱穴　西側に主柱穴と思われるＰ１を検出した。Ｐ１の規模は長径55㎝、短径47㎝、深さ25㎝である。

周溝　検出されなかった。

貯蔵穴　南東隅に長径0.51ｍ、短径0.50ｍ、深さ0.38ｍの方形の貯蔵穴が検出された。底面は平坦で隅丸方形である。遺物が多数出土した。

床面　床面は平坦である。

遺物と出土状況　土師器壺(51)、広口壺(52)が南東隅貯蔵穴底面直上で出土した。他の壺(53～55)は埋没土中から出土した。このほかに埋没土中から土師器破片29点が出土した。

所見　出土遺物から古墳時代前期中葉～後葉の住居と考えられる。

１区13号住居（第29図　PL３・33　遺物観察表P.９・38）

位置　Ｃｏ～ｑ－14～16Ｇ

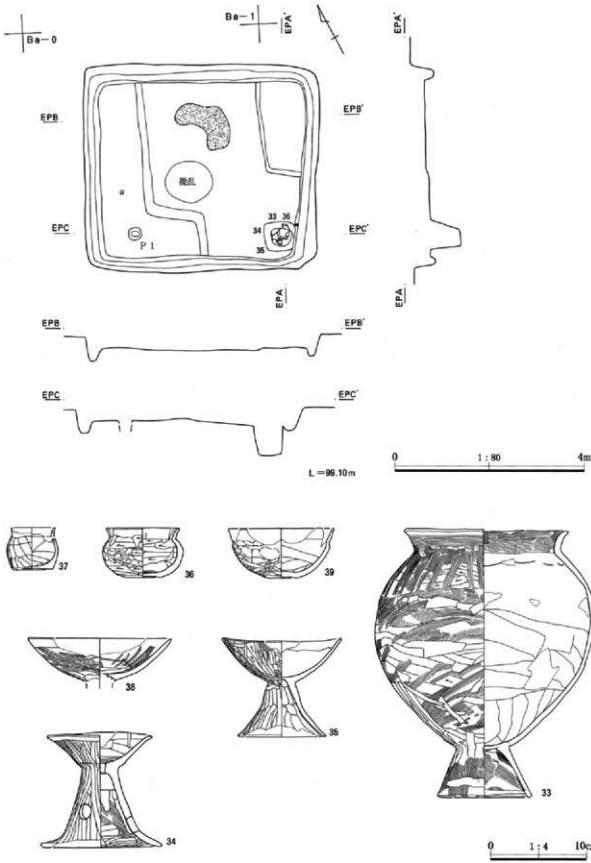
形状　長方形と推定される。北東隅がわずかに14号住居に切られている。また北西隅は削平されていて検出できなかった。

規模　長軸5.48ｍ　短軸4.48ｍ　壁高0.1ｍ

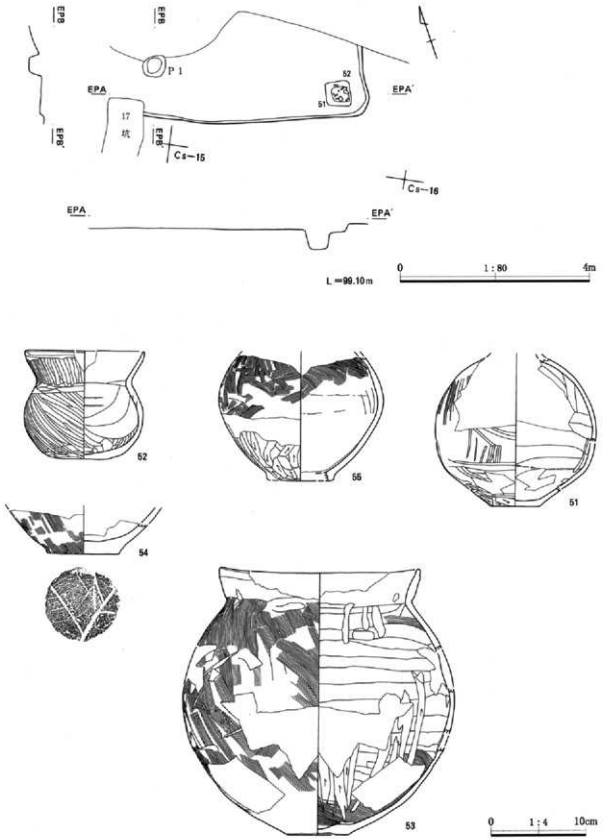
面積　22.20㎡　　**長軸方位**　Ｎ－69°－Ｅ

炉　炉は検出されなかった。北壁際に長径0.42ｍ、短径0.20ｍ、深さ0.40ｍの楕円形のピットが検出されているが、炉と断定できなかった。

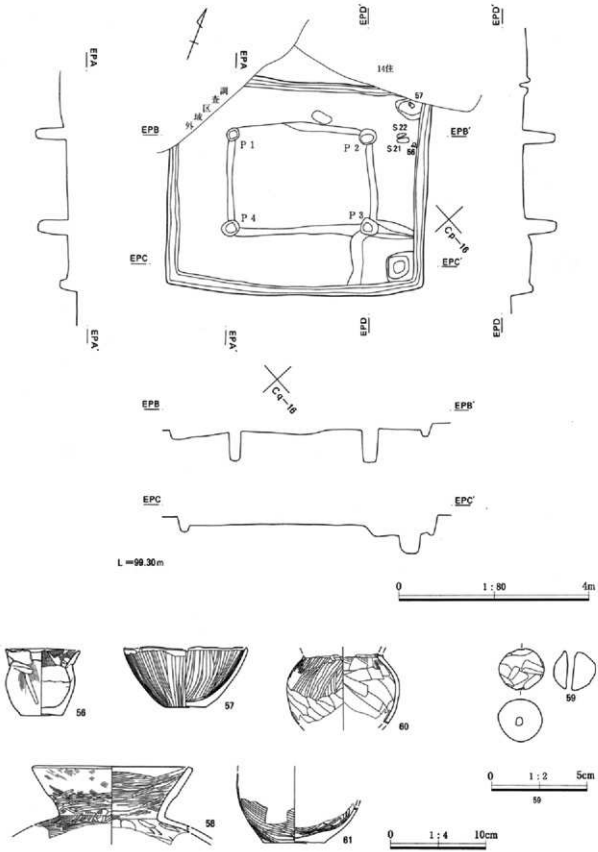
柱穴　主柱穴と思われるＰ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４を検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、Ｐ１が30×26×59㎝、Ｐ２が37×30×64㎝、Ｐ３が36×35×66㎝、Ｐ４が37×33×62㎝である。これらの柱穴は後述する床面の段差の四隅に位置している。



第27図　1区9号住居と出土遺物



第28図　1区12号住居と出土遺物



第29図　1区13号住居と出土遺物

周溝　全周する。概ね幅は23㎝、深さは35㎝。

貯蔵穴　南東隅に長径1.41ｍ、短径1.03ｍ、深さ0.77ｍの方形の貯蔵穴が検出された。貯蔵穴内は二段になっている。床面から0.20ｍほど下に平坦面があり、さらに南東隅が長軸0.62ｍ、短軸0.56ｍ、深さ0.58ｍの方形に掘り込まれている。遺物は出土していない。

また北東隅には長軸0.56ｍ、短軸0.40ｍ、深さ0.12ｍの楕円形の掘り込みが検出された。

床面　床面は主柱穴を結んだ線から外側が、0.8～1.1ｍの幅で、1～2㎝高くなっている。いわゆるベッド状遺構が全周する。

遺物と出土状況　北東壁際から手づくね土器(56)と棒状礫(Ｓ21・Ｓ22)がまとまって床面直上で出土した。棒状礫には使用痕跡はない。北東隅の土坑の底面直上で鉢(57)が底面直上で出土した。他の図示した遺物は埋没土中から出土した。このほかに埋没土中から土師器破片57点が出土している。

所見　出土遺物から古墳時代前期中葉～後葉の住居と考えられる。

1区15号住居

（第30～34図　PL4・33～35　遺物観察表P.9・10・38）

位置　Cn～p－15～17G

形状　正方形と推定される。東半部に13号溝が重複しており、北東隅や南壁中央部が確認できなかった。

規模　長軸7.67ｍ　短軸7.4ｍ　壁高0.21ｍ

面積　52.92㎡　　**長軸方位**　N－87°－E

埋没土　榛名二ッ岳軽石・ローム粒を含む灰褐色土・黒褐色土で埋まっていた。

炉　北半部中央の、主柱穴Ｐ２にやや寄ったところに炉が検出された。Ｐ１とＰ２を結んだ線よりは内側である。炉の凹みは一辺0.7ｍ、深さ0.09ｍの隅丸方形で、南側の縁に２個の礫(Ｓ35・Ｓ36)が燃焼部を囲むように置かれていた。このうち、Ｓ35は両側縁に敲打による抉りのある礫、Ｓ36は使用痕跡のない棒状礫である。

柱穴　主柱穴と思われるＰ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４を検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、Ｐ１が72×52×54㎝、Ｐ２が80×67×45㎝、Ｐ３が65×61×39㎝、Ｐ4が82×60×63㎝である。

周溝　周溝は西壁・南壁・東壁の南から2.4ｍのところまでは連続して検出された。周溝の幅は概ね25㎝、深さは８㎝である。北壁沿いは８㎝ほど壁に沿って床が高くなっており、その部分には周溝は掘られていなかった。また東壁も南壁から2.4ｍのところより北側は床面が５㎝高くなっており、ここにも周溝は掘られていなかった。

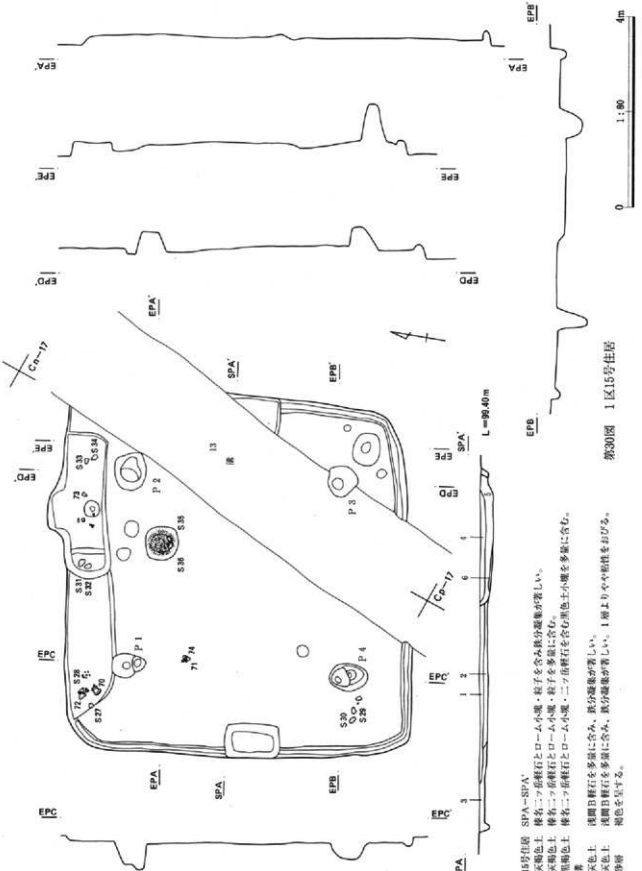
貯蔵穴　南東隅に長径0.69ｍ、短径0.57ｍ、深さ0.8ｍの楕円形の貯蔵穴が検出された。遺物はない。

床面　北側と東壁の北半分に沿ってＬ字形に、床面が0.9ｍの幅で、５～６㎝高くなっている。その他の部分は13号溝に切られた部分を除いて、ほぼ平坦な床面が検出された。

また、北壁東半部には壁に沿って、長軸3.1ｍ、短軸0.9ｍ、床面からの深さ0.11ｍの隅丸長方形の土坑が検出された。壁側の長辺中央は幅1.0ｍ、奥行0.36ｍの大きさに張り出している。土坑底面中央には直径32㎝、深さ11㎝の円形の小ピットが検出されたが、土坑に伴うかどうかは不明である。また土坑西端は幅50㎝、深さ13㎝ほど凹んでいる。北壁土坑は、底面付近から住居と同じ時期の遺物が出土しているので、住居に伴う遺構として調査した。

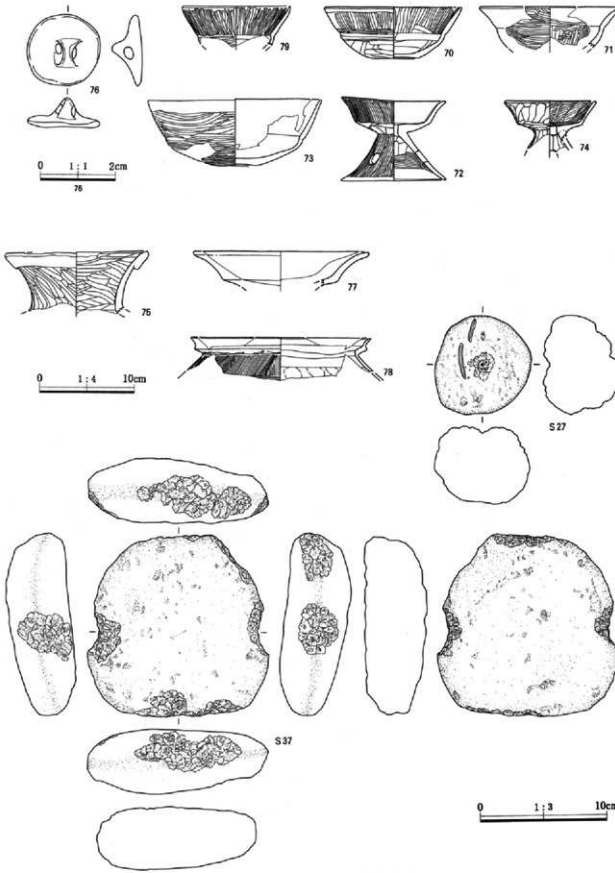
さらに西壁の中央やや北寄りに、長軸1.2ｍ、短軸0.72ｍ、深さ0.47ｍの隅丸長方形の土坑が壁に沿って検出された。その位置と埋没土中から出土した土器の時期が一致することから、この土坑も住居に伴うものとして調査した。

遺物と出土状況　図示できた遺物は北壁土坑と、西壁沿いに偏在している。土師器鉢(73)は北壁土坑のほぼ中央の底面直上で出土した。小型の鉢(79)も北壁土坑埋没土から出土した。また鉢(70)と小型器台(72)、鉢(71)と小型器台(74)はそれぞれ、北西隅と主柱穴Ｐ１の南側でまとまって出土した。土師器壺(75・77)、Ｓ字甕(78)は埋没土中から出土した。鏡形土製品(76)は炉の埋没土内から出土している。



1区15号住居　SPA−SPA'
1．灰褐色土　極名二ッ岳軽石とローム小塊・粒子を含み炭分凝集が著しい。
2．灰褐色土　極名二ッ岳軽石とローム小塊・粒子を多量に含む。
3．黒褐色土　極名二ッ岳軽石とローム小塊・二ッ岳軽石を含む黒色土小塊を多量に含む。
13号床
4．灰色土　浅間B軽石を多量に含み、炭分凝集が著しい。
5．灰色土　浅間B軽石を多量に含み、炭分凝集が著しい。1層より やや粘性をおびる。
6．砂層　褐色を呈する。

第30図　1区15号住居

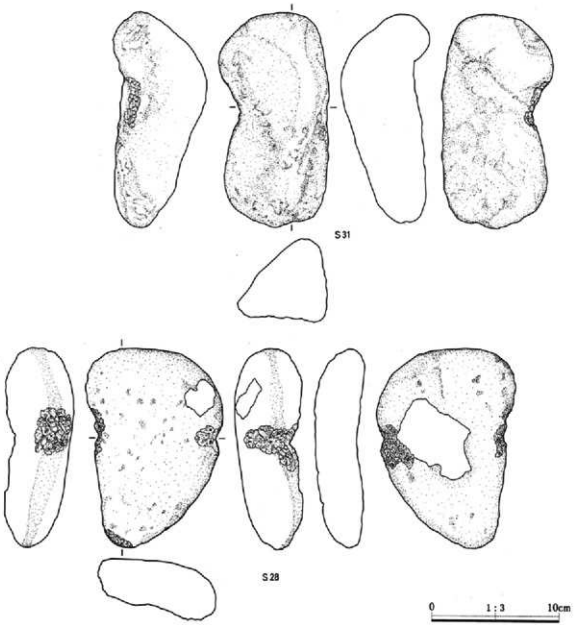


第31図　1区15号住居出土遺物（1）

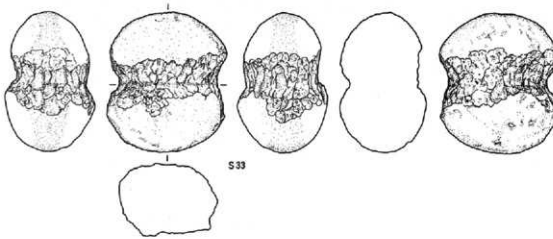
石器は敲打痕の残るものが数多くあり、それぞれが偏在している。両側縁に敲打による抉りのある礫（S28）と中央に敲打痕がある軽石（S27）が主柱穴P1の北西の壁際で出土している。ともに両側縁に敲打による抉りのある礫（S29・S30）はP4の西側の壁際で出土した。前述したように炉の南縁にはS35・S36が据えられていた。また北壁土坑では敲打痕が全周する礫（S33）と両側縁に敲打による抉りのある礫（S34）がP1寄りのところで出土している。また北壁土坑西端の凹んだ部分に、両側縁に敲打による抉りのある礫（S32）と片側縁に敲打による抉りのある礫（S31）が出土している。これらの石器はいずれも床面直上か床面に近い位置で出土したことから、本住居に伴う遺物と判断した。

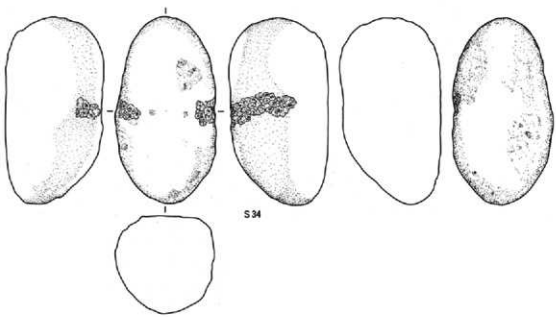
図示した遺物のほか土師器破片が177点出土した。

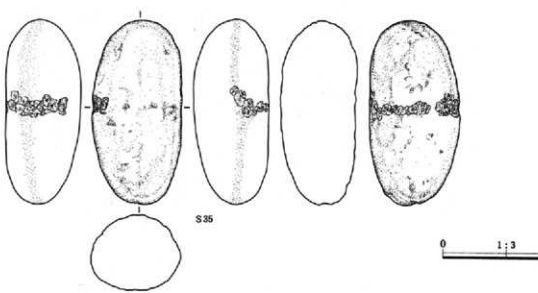
所見　出土遺物から古墳時代前期中葉～後葉の住居と考えられる。本住居の出土遺物は器種ごとの偏在傾向がある。土師器鉢形土器の偏在や、敲打痕のある礫が柱穴に関連した出土位置を示すことは遺物の用途を考えるうえで示唆的である。



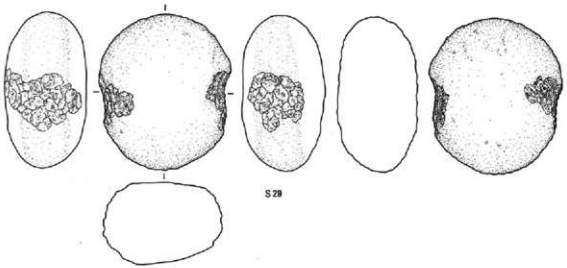
第32図　1区15号住居出土遺物（2）

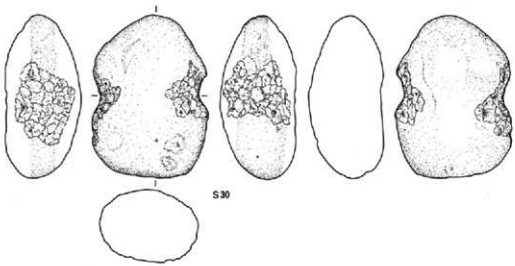


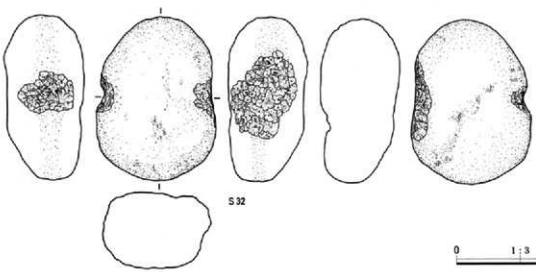


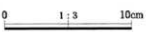


第33図　１区15号住居出土遺物（３）









第34図　1区15号住居出土遺物（4）

1区17号住居（第35図　PL5・36　遺物観察表P.10）

位置　Ab・c－14・15G

形状　隅丸方形。南西隅は18号溝に切られている。

規模　長軸3.03m　短軸3.01m　壁高0.33m

面積　8.95㎡　　**東壁方位**　N－3°－W

炉　住居中央部やや西寄りに小規模な炉が検出された。炉の凹みは長径0.47m、短径0.35mの楕円形で、焼土が溜まっていた。遺物は出土していない。

柱穴　主柱穴と思われるピットは検出できなかった。

周溝　周溝は南壁から東壁、北壁東端までUの字形にまわる。周溝の幅は概ね13cm、深さは4cmである。

貯蔵穴　検出されなかった。

床面　ほぼ平坦な床面である。

遺物と出土状況　甕(84)が北西隅、床面直上で、土師器壺(85)、甕(86)は堆積土上層で出土した。

所見　出土遺物から古墳時代前期中葉～後葉の住居と考えられる。同時期の住居のなかでは小形の住居である。

1区20号住居（第36～40図　PL5・6・18・36～39・45　遺物観察表P.10～14・39）

位置　C・Dn～q－19～1G　**形状**　隅丸正方形。

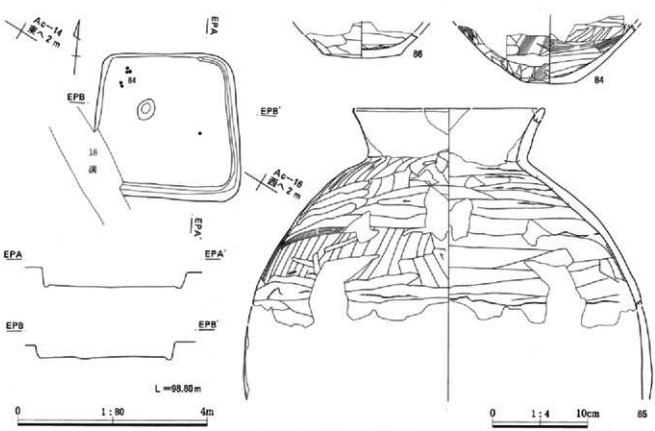
規模　長軸10.44m　短軸9.74m　壁高0.2m

面積　97.97㎡　　**長軸方位**　N－83°－E

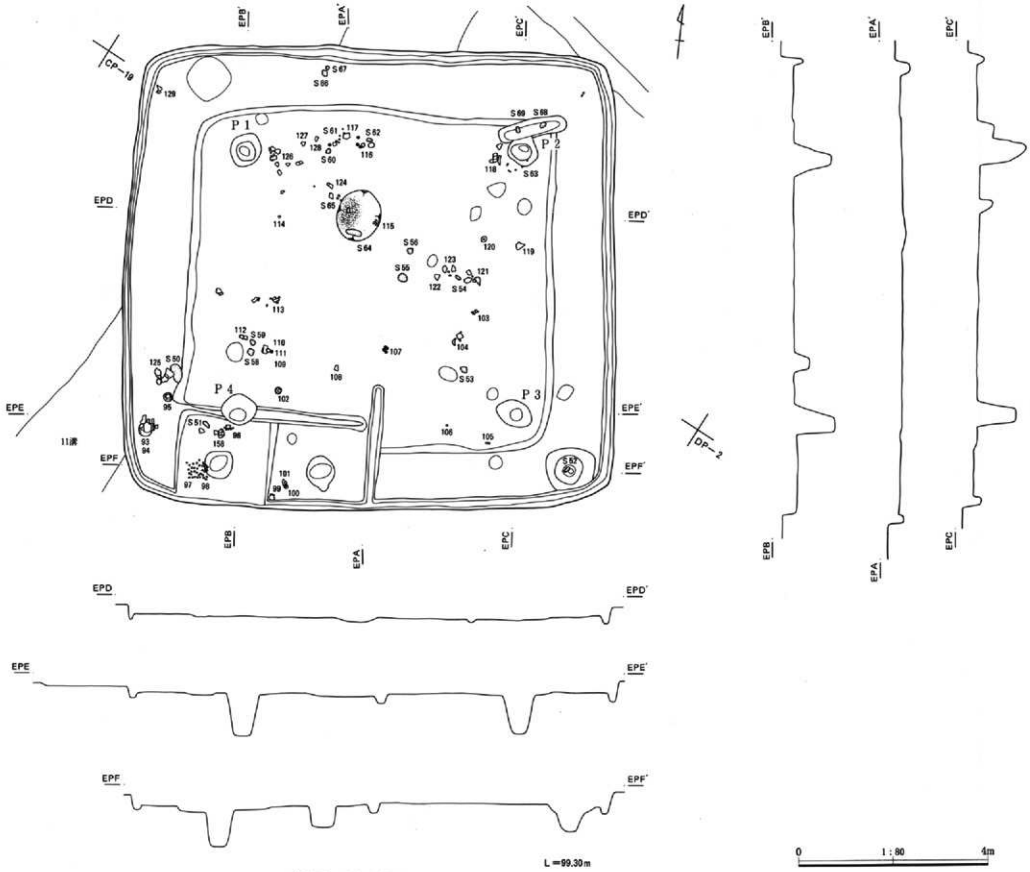
炉　住居中央やや北寄りに炉が検出された。P1とP2を結んだ線より内側である。炉の凹みは長径1.09m、短径0.96m、深さ0.10mの楕円形で、南側の縁のやや内側に1個の礫(S64)が炉に接して置かれていた。S64は使用痕跡のない棒状礫(ひん岩)で被熱による剥離がある。

柱穴　主柱穴と思われるP1・P2・P3・P4を検出した。主柱穴は床面が一段低くなった内区画のほぼ四隅にある。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が75×64×79cm、P2が65×65×94cm、P3が80×54×83cm、P4が75×66×85cmである。

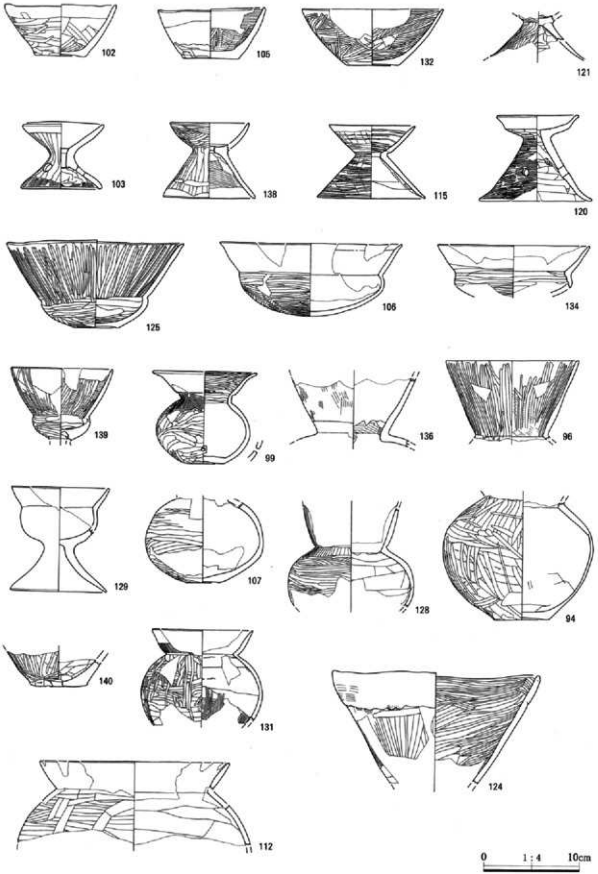
周溝　周溝は南壁の西寄りの一部を除いて、全周する。周溝の幅は概ね18cm、深さは2cmである。周溝



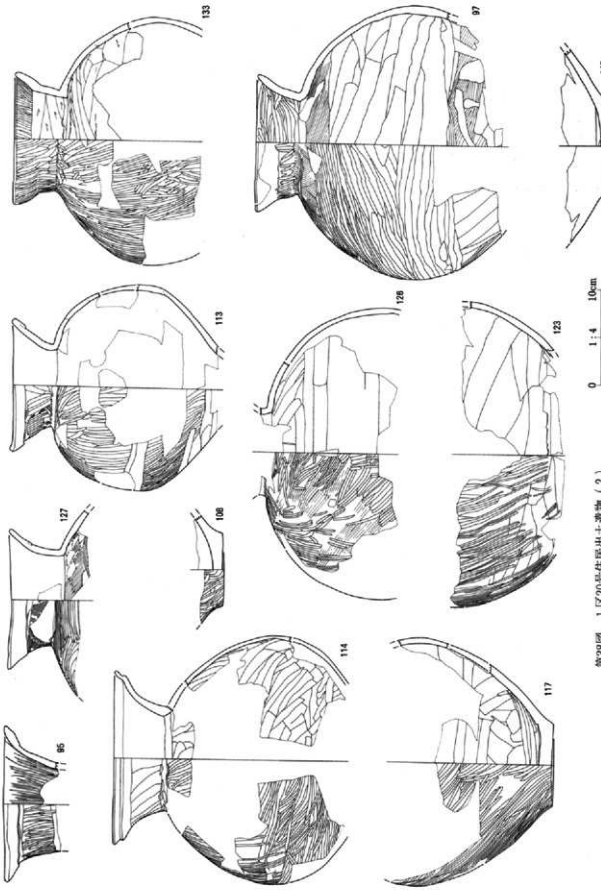
第35図　1区17号住居と出土遺物



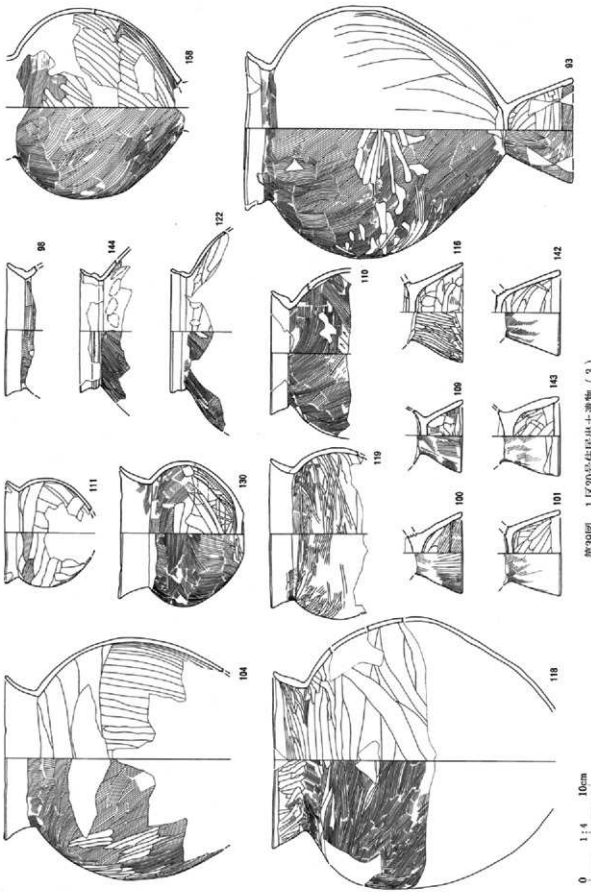
第36図　1区20号住居



第37図　1区20号住居出土遺物（1）

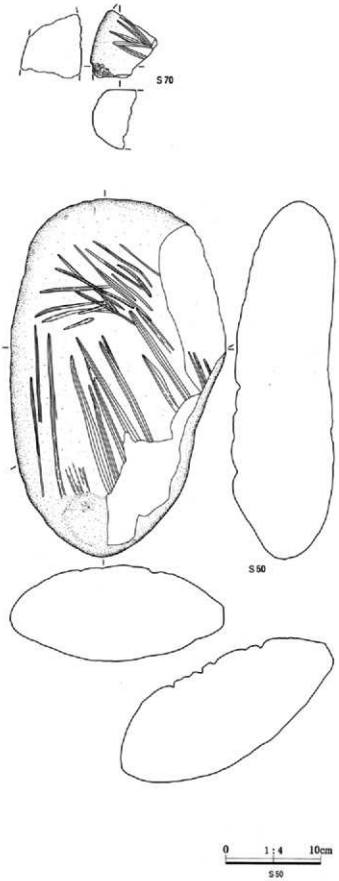


第38図　１区20号住居出土遺物（２）



第39図　1区20号住居出土遺物（3）

第40図　１区20号住居出土遺物（４）



のない部分は、床面に施設された一辺が1.9mほどの方形区画に面する部分である。

貯蔵穴　南東隅に長径1.04m、短径0.86m、深さ0.53mの楕円形の貯蔵穴が検出された。底面は直径20cmほどの円形である。底面直上で敲打痕による抉りのある礫（S52）が出土している。

床面　床面は幅1～1.2mで四周が、高さ1～6cm高くなっていた。いわゆるベッド状遺構が全周する。この外区画の床面はほぼ平坦で、西壁・北壁・東壁沿いは前述した貯蔵穴以外の施設はない。北西隅には円形の攪乱が及んでいた。

南壁外区画西半分は、南壁に直交する間仕切り溝と、南壁に平行して施設された細い帯状盛土、さらに西壁に平行した段差によって区切られていた。またほぼ中央に段差があり、二つの部分に区切られていた。

間仕切り溝は西壁から5.3m東に、南壁に垂直方向に掘られていた。溝の幅は22～30cm、深さ3～9cm、長さは2.4mである。南壁の周溝とつながって掘られていた。

細い帯状盛土は南壁から1.9m北側に、南壁に平行につくられていた。盛土の幅は20～32cm、高さ3～11cm、長さ4.1mである。盛土の東端は、12cmほどの間隔をあけて間仕切り溝と接していた。盛土と主柱穴P4は重なっており、間仕切りの延長線上に主柱穴が位置していたと見られる。

これらの間仕切り溝と帯状盛土の内側は、西端から1mのところで2～5cm東側が高くなる段差によって、ほぼ二分されていた。それぞれの区画の中央やや南寄りには、ピットが1基ずつ掘られていた。西側区画のピットは直径0.6m、深さ0.48mの隅丸方形、東側区画のピットは長径0.8m、短径0.6m、深さ0.43mの楕円形である。

内区画の床面はほぼ平坦で、堅く締まっていた。特に主柱穴に近接して直径20cm程度の円形小ピットが検出されたが、住居に伴うものと断定できなかった。

遺物と出土状況　遺物は内区画と外区画南西隅および南壁外区画西半に集中して出土した。多くの土器

が出土したが、器種ごとの偏在は後述する平底の甕以外ほとんどない。土師器鉢(105)は南東隅床面直上で、鉢(102)は南西隅床面上8㎝で出土した。小型器台(103・120)は中央部床面直上で出土した。X形の小型器台(115)は炉東縁の使用面直上で出土した。大型の鉢(125)・壺口縁部(95)・埴胴部(94)・S字甕(93)は、南西隅外区画で、大型砥石(S50)とともに床面近くで出土した。埴口縁部(96)・壺(97)・甕口縁部(98)・台付甕(158)は、南壁外区画西半西区画で床面近くから出土した。特に壺(97)・甕口縁部(98)は区画中央のピットに落ち込むように出土していた。小型壺(99)・台付甕台部(100・101)は南壁外区画西半東区画の南西隅に床面直上でまとまって出土した。大型の平底の甕(118・119・104)は内区画のそれぞれ北東隅、東壁際、中央部、東南部床面直上で出土した。同じ平底甕(110)は内区画西南部床面直上で出土した。台付鉢(129)は外区画北西隅床面直上で、単独で出土した。また土師器壺(113・114・126・127)は内区画北部と南西部の床面直上で出土した。

本住居では礫石器6点、礫13点が出土した。大型砥石(S50)は外区画南西部床面直上で出土した。敲打による抉りが側縁に入った礫(S54・S56)は住居中央やや東のそれぞれ床面上・床面直上で、S66は北壁沿い外区画床面直上で出土した。

図示した遺物のほか631点の土師器破片、4点の縄文土器破片が出土した。

所見　出土遺物から古墳時代前期中葉～後葉の住居と考えられる。本住居は、今回の発掘調査区全体で、最も大きい住居である。いわゆるベッド状遺構が全周する形態で南西部には開仕切り溝と細長い帯状盛土で区切られた空間が二つ作られた複雑な構造をしていた。このような構造の用途は調査では判明しなかったが、集落内の住居の大きさや構造の違いが何を示すかは今後の課題であろう。

また、本住居は15号住居と同様に礫の出土が多い。特に砥石(S50)は金属用の砥石と考えられ、重要である。

1区21号住居

(第41・42図　PL6・40　遺物観察表P.14・40)

位置　C・Dk～l－18～0G　**形状**　隅丸正方形。

規模　長軸6.52m　短軸6.84m　壁高0.23m

面積　43.99㎡　**長軸方位**　N－44°－E

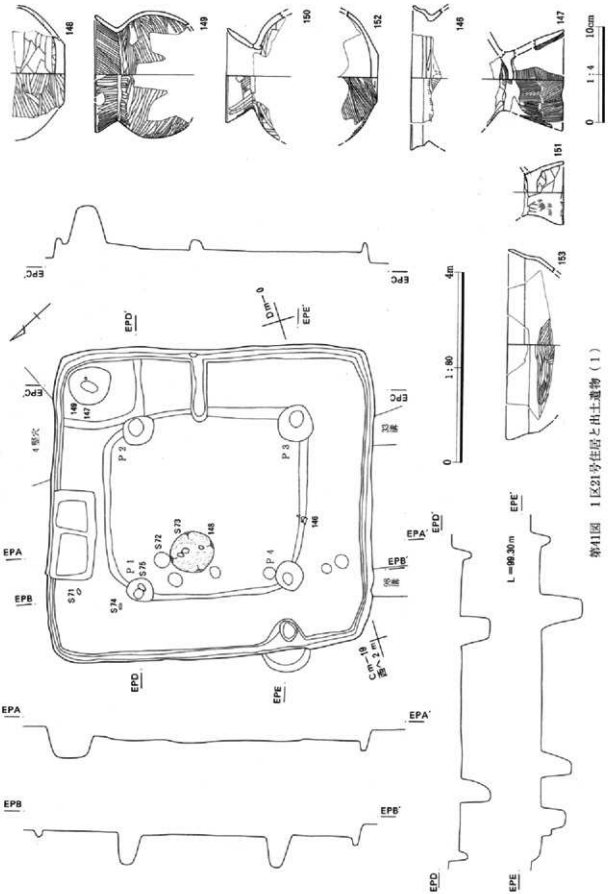
炉　住居中央やや北西寄りに炉が検出された。P1とP4を結んだ線より内側である。炉の凹みは長径0.94m、短径0.88m、深さ0.06mの楕円形で、中央やや北東寄りに2個の礫(S72・S73)が置かれていた。S72は使用痕跡のない棒状礫(粗粒輝石安山岩)で煤が付着している。S73は敲打痕のある楕円盤状礫である。いずれも炉の内側にあり、炉の施設として置かれたかどうかは判断できなかった。

柱穴　主柱穴と思われるP1・P2・P3・P4を検出した。主柱穴は床面が一段低くなった内区画のほぼ四隅にある。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が60×49×65㎝、P2が72×60×61㎝、P3が79×79×87㎝、P4が64×61×67㎝である。P1からは長さ15.2㎝、横12.1㎝の棒状礫(S75)が埋没土中から出土した。

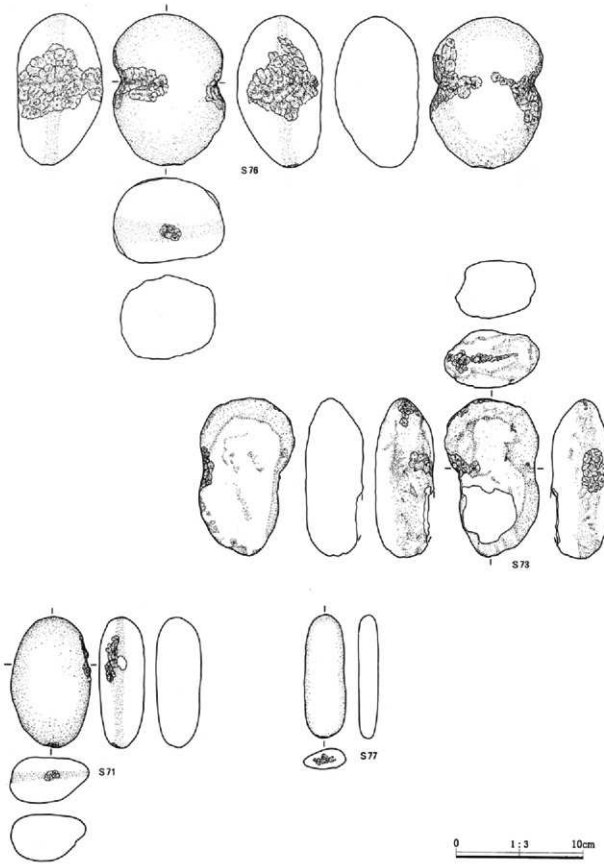
周溝　周溝は全周する。周溝の幅は概ね16㎝、深さは21㎝である。

貯蔵穴　東隅に長径0.90m、短径0.79m、深さ0.76mの楕円形の貯蔵穴が検出された。底面は長径0.40m、短径0.22mの楕円形である。貯蔵穴周囲は、長径1.7m、短径1.4mの隅丸方形に3～4㎝床面から下がっており、貯蔵穴はこの方形区画のなかでも住居東隅に片寄って掘られていた。貯蔵穴からは土師器台付甕(147)・小型壺(149)が埋没土中位で出土した。

床面　床面は0.90～0.95mの幅で四周が高さ1～6㎝高くなっていた。いわゆるベッド状遺構が全周する。主柱穴はこの段差上に位置するがP1・P2間は、段差の位置が0.4mほど外側になっていた。この外区画の床面はほぼ平坦である。また南東壁には、北東壁から2.9mのところに長さ1.26m、幅0.3～0.34m、深さ20㎝の間仕切り溝が南東壁に垂直方向に掘られていた。



第41図　1区21号住居と出土遺物（1）



第42図　１区21号住居出土遺物（２）

北東壁やや北寄りには長軸1.90m、短軸1.00m、床面からの深さ0.40mの長方形土坑が北東壁に接して住居内側に掘られていた。この土坑については埋没土断面を観察できなかったが、住居壁に接していることから住居に伴うと判断した。

また北西壁、住居西隅から1.08mのところに、長径1.12m、短径1.06m、床面からの深さ20～28cmの楕円形土坑が掘られていた。この南東隅には長軸26cm、短径19cm、床面からの深さ24cmの楕円形小ピットが掘られている。これも断面観察はできなかったが、主柱穴P3・P4を結んだ線の延長上にあることから、住居に伴う可能性があると判断した。

段差より内区画の床面はほぼ平坦で、炉の周辺は硬化していた。住居より新しい小ピットが数カ所検出されている。

遺物と出土状況　前述した貯蔵穴および主柱穴P1のほか、土師器坩底部(148)が炉使用面直上から、S字甕(146)が南西部内外区境界の段差付近から床面直上で出土した。土師器坩(150・152)、鉢(153)、台付甕(151)は埋没土中から出土した。石器は前述した炉およびP1内のほかに、敲き石(S71)が主柱穴P1の北東壁際で出土した。これら図示できた遺物のほか149点の土師器破片が出土した。

所見　出土遺物から古墳時代前期中葉～後葉の住居と考えられる。北東壁際長方形土坑と北西壁際の楕円形土坑は住居に伴わない可能性もある。

1区23号住居

（第43・44図　PL.7・19・40　遺物観察表P.15）

位置　C・D1～n－19～1G

形状　隅丸正方形と推定される。南東部を22号住居に切られているので、全体形状は判明しなかった。

規模　長軸5.8m　短軸5.72m　壁高0.24m

面積　測定不能　　**長軸方位**　N－34°－W

炉　床面の確認範囲内では炉は検出されなかった。

柱穴　主柱穴と思われるP1・P2・P3・P4を検出した。このうちP3は後出する22号住居の床面で確認できた。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が70×51×56cm、P2が64×56×81cm、P3が59×52×75cm、P4が65×63×90cmである。

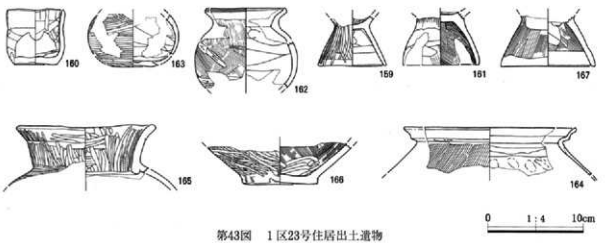
周溝　周溝は床面を検出できた範囲では全周する。周溝の幅は概ね14cm、深さは13cmである。

貯蔵穴　南東隅に長径0.70m、短径0.54m、深さ0.67mの隅丸方形の貯蔵穴が検出された。これもP3と同様に22号住居床面で検出したものである。

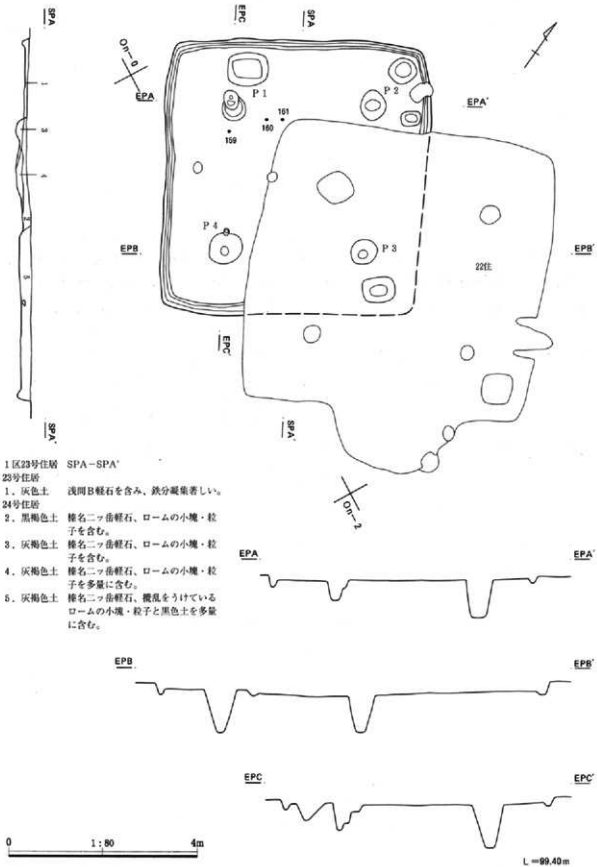
床面　床面ははぼ平坦である。住居北東隅には円形土坑3基、主柱穴P1の北側には長方形土坑が検出されているが、住居に伴うかどうかは判然としない。

遺物と出土状況　土師器台付甕台部(159・161)、手づくね土器(160)は主柱穴P1の南側床面直上で出土した。これら図示できた遺物のほか81点の土師器破片が出土した。

所見　出土遺物から古墳時代前期中葉～後葉の住居と考えられる。



第43図　1区23号住居出土遺物



1区23号住居　SPA－SPA'

23号住居

1．灰色土　浅間B軽石を含み、鉄分凝集著しい。

24号住居

2．黒褐色土　榛名二ッ岳軽石、ロームの小塊・粒子を含む。

3．灰褐色土　榛名二ッ岳軽石、ロームの小塊・粒子を含む。

4．灰褐色土　榛名二ッ岳軽石、ロームの小塊・粒子を多量に含む。

5．灰褐色土　榛名二ッ岳軽石、攪乱をうけているロームの小塊・粒子と黒色土を多量に含む。

第44図　1区23号住居

1区24号住居

（第45・46図　PL7・40・41　遺物観察表P.15・40）

位置　Do・p－2・3G

形状　隅丸正方形と推定されるが、南半分は調査区域外であるので、全体形状はとらえられなかった。また、北東隅には124号土坑(後出)が掘り込まれているが、住居隅の形状をとらえることはできた。

規模　長軸5.5m　短軸測定不能　壁高0.4m

面積　測定不能　**長軸方位**　N－96°－E

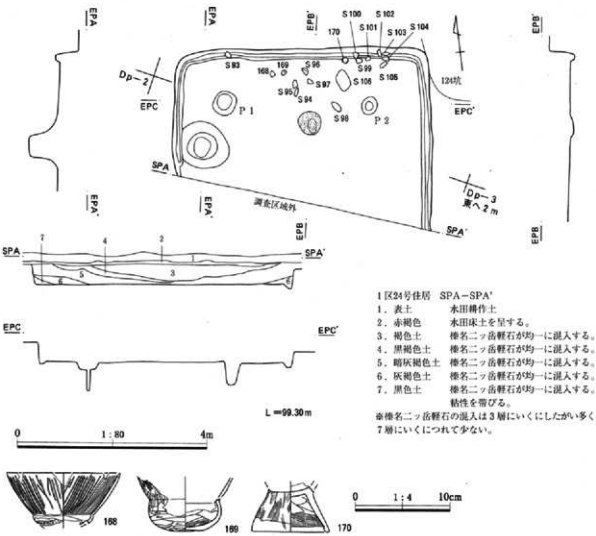
炉　住居中央北壁寄りに炉が検出された。P1とP2を結んだ線より内側である。炉の凹みは長径0.5m、短径0.49m、深さ0.06mの円に近い楕円形で、内部には焼土が形成されていた。

柱穴　主柱穴と思われるP1・P2を検出した。主柱穴は北壁から0.7～0.8m内側の位置にある。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が53×50×61cm、P2が40×34×48cmである。

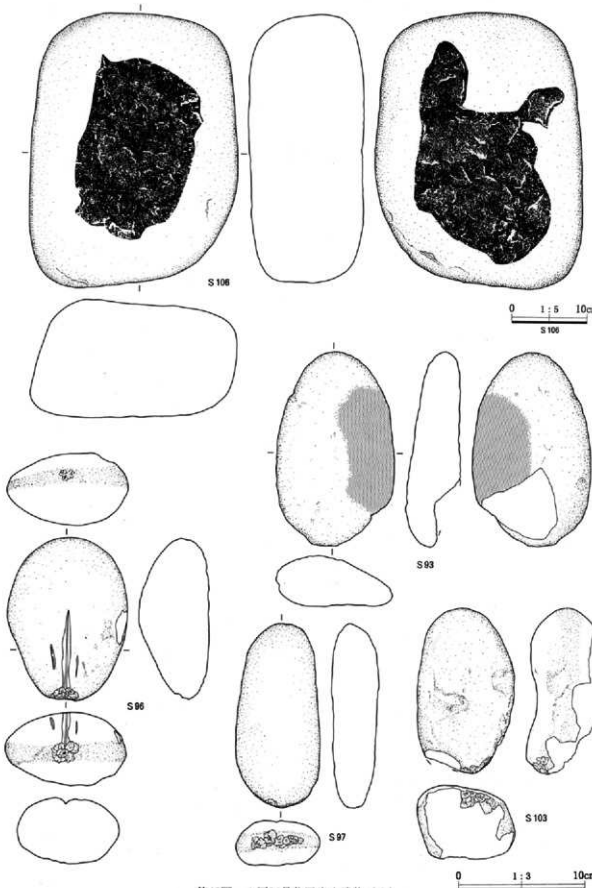
周溝　調査した範囲では周溝は全周する。周溝の幅は概ね14cm、深さは12cmである。

貯蔵穴　P1に近い西壁沿いに直径1m、深さ0.41mの円形の土坑が検出された。この土坑の掘り込みは西壁周溝とつながっていた。埋没土断面の観察はできなかったが、位置関係から貯蔵穴と判断した。出土遺物はない。　**床面**　ほぼ平坦である。

遺物と出土状況　遺物は北壁沿いに集中している。土師器小型丸底土器(168・169)、S字甕(170)は北壁際床面直上で出土した。また14点の礫石器および礫が北壁際にまとまって出土した。このうち5点が



第45図　1区24号住居と出土遺物（1）



第46図　１区24号住居出土遺物（２）

使用痕のある石器で、9点が使用痕跡のない棒状礫であり、これらの分布は混在していた。大型の台石（S106）はP2に近い位置に床面に4㎝ほど食い込んで、据えられていた。この台石の上下両面の中央には凹凸のある磨り面が形成されていた。砥石（S96）・敲き石（S97）は炉の北側に床面直上で出土した。磨り石（S93）・敲き石（S103）は北壁周溝内で出土した。使用痕のない他の棒状礫は図示しなかったが、そのほとんどが北壁沿いに床面直上で出土した。これら図示できた遺物のほか4点の土師器破片が出土した。

所見　出土遺物から古墳時代前期中葉～後葉の住居と考えられる。西壁に接して掘られていた貯蔵穴は本住居に伴うと考えたが、他の住居と比較すると、円形であること、住居隅に位置しないことが異なっている。住居に伴わない可能性もあるが、礫が多量に出土していること等と関連し、特異な住居内施設である可能性も否定できない。

1区26号住居

（第47・48図　PL7・42　遺物観察表P.15・16・40）

位置　C・Dg～i－19・1G

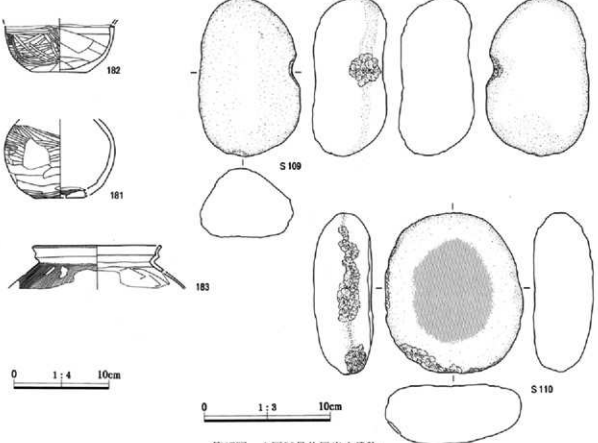
形状　隅丸正方形と推定されるが、住居北壁から中央部、南西隅にかけて後出する溝・土坑・竪穴状遺構が重複し、全容はとらえられなかった。

規模　長軸7.86m　短軸7.49m　壁高0.23m

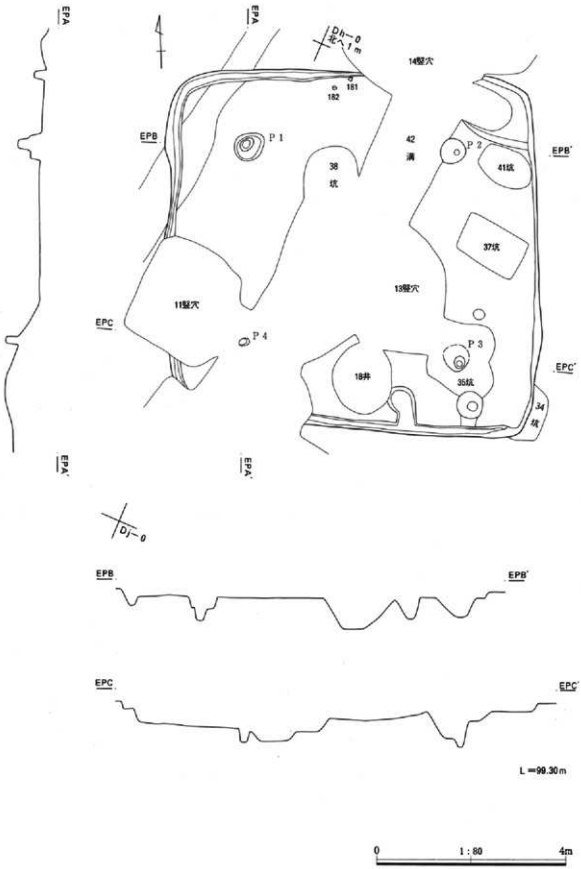
面積　58.20㎡　**長軸方位**　N－87°－E

炉　後出する遺構によって床面が広範囲に壊されており、床面の確認範囲には炉は検出できなかった。

柱穴　主柱穴と思われるP1・P2・P3・P4を検出した。P1・P2は調査できた範囲の床面で検出できたが、P3・P4はそれぞれ重複する11号竪穴状遺構、35号土坑の底面で柱穴の下半部を確認した。それぞれの規模（長径×短径×深さ）は、P1が67×60×50㎝、P2が53×50×47㎝、P3が57×不明×73㎝、P4が24×16×70㎝である。大きさは確認面から、深さは床面からの計測値である。



第47図　1区26号住居出土遺物



第48図　1区26号住居

周溝　周溝は北壁の西半分、西壁、南壁に掘られている。周溝の幅は概ね17cm、深さは6cmである。

貯蔵穴　北東隅が幅1.3mにわたって床面から15cmほど下がっている。14号竪穴状遺構と重複しており詳細は不明であるが、一段下がった内部が貯蔵穴状に掘り込まれていた可能性がある。

床面　床面は検出された範囲の中はほぼ平坦である。

遺物と出土状況　多くの遺物が出土したが、後出する遺構に攪乱されているため、住居に確実に伴うと思われる遺物は少ない。土師器甑(181)、鉢(182)は北壁際床面直上で出土した。土師器S字甕(183)、側縁敲打の敲き石(S109・S110)は埋没土中から出土した。これら図示できた遺物のほか417点の土師器・須恵器破片と1点の縄文土器破片が出土した。

所見　出土遺物から古墳時代前期中葉～後葉の住居と考えられる。

1区38号住居

（第49・50図　PL.7・8・42　遺物観察表P.16）

位置　Cf・g－10～12G

形状　隅丸正方形と推定されるが、北西部の一部と南西部が後出する溝や土坑に切られており、全体形状を検出することはできなかった。

規模　長軸7.14m　短軸6.88m　壁高0.19m

面積　48.06㎡　　**長軸方位**　N－90°－E

炉　住居中央やや北寄りに炉が検出された。P1とP2を結んだ線のすぐ内側の位置である。炉の西半分は59号溝に切られていて、全体形状を確認することはできなかった。炉の凹みは長径0.66m以上、短径0.68m、深さ0.06mの楕円形と推定される。

柱穴　主柱穴と思われるP1・P2・P3を検出した。もう1本の主柱穴は、59号溝に切られて確認できなかった。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が93×83×71cm、P2が54×49×65cm、P3が62×55×70cmである。

周溝　周溝は全周すると推定される。重複の状況から、後出する遺構で壊されている壁沿いにも周溝が施設されていたと判断した。周溝の幅は概ね14cm、深さは27cmである。

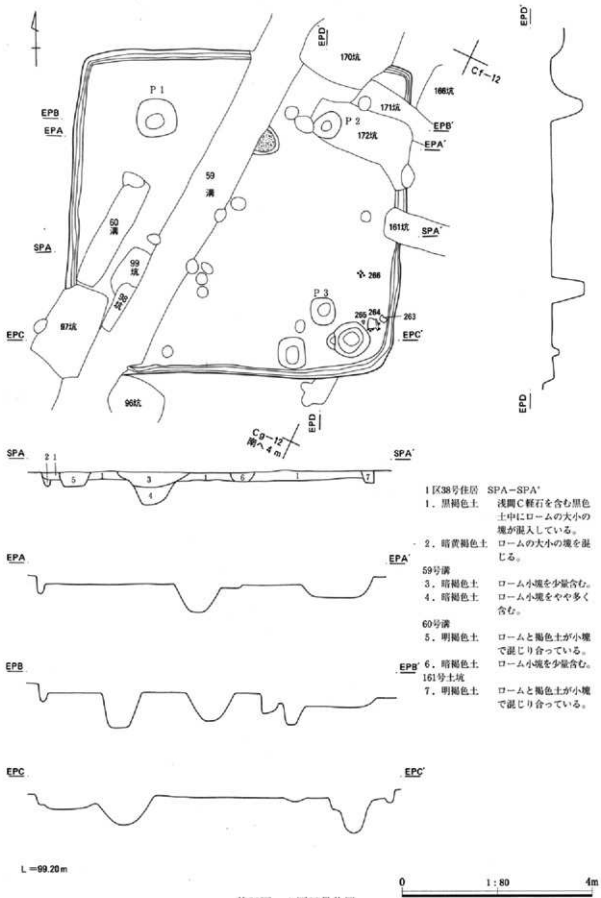
貯蔵穴　南東隅に長径0.76m、短径0.75m、深さ0.76mの円形の貯蔵穴が検出された。底面は長径0.34m、短径0.29mの楕円形である。西縁に直径0.3m、深さ0.25mほどの半円のピットが付いていた。同時に掘られたものかは不明である。

床面　床面ははぼ平坦である。南壁沿いの南東隅から1.9m西側のところに長径0.66m、短径0.55m、深さ0.47mの隅丸方形の土坑が検出された。出土遺物はなく断定できないが、土坑の位置からすれば住居に伴う土坑の可能性もある。

遺物と出土状況　図示可能な遺物は南東隅の貯蔵穴周辺にまとまって出土した。土師器壺口縁部(265)、小型甕(266)、甑(264)は、南東壁沿いに床面直上で出土した。土師器小型高坏(268)、甑底部(267)は埋没土中から出土した。これら図示できた遺物のほか60点の土師器破片が出土した。

所見　出土遺物から古墳時代前期中葉～後葉の住居と考えられる。北東壁際長方形土坑と北西壁際の楕円形土坑は住居に伴わない可能性もあるが、他住居でもこの位置に土坑が検出されている例があり、ここでは伴うものと判断し、記録した。

第49図　1区38号住居出土遺物



第50図　１区38号住居

1区43号住居（第51図　PL8・42　遺物観察表P.16）

位置　Cd－17・18G

形状　隅丸正方形と推定されるが、北部は75号溝、西部は44号住居に切られており、全体形状は判明しなかった。また南壁は明瞭な段差として確認できなかった。

規模　長軸4.8m以上　短軸4.0m以上　壁高0.05m

面積　測定不能　　**東壁方位**　N－41°－E

炉　調査できた床面の範囲内では、炉は検出できなかった。

柱穴　主柱穴と思われるP1・P2・P3を検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が36×30×36cm、P2が48×44×45cm、P3が40×34×62cmである。

周溝　周溝は施設されていない。

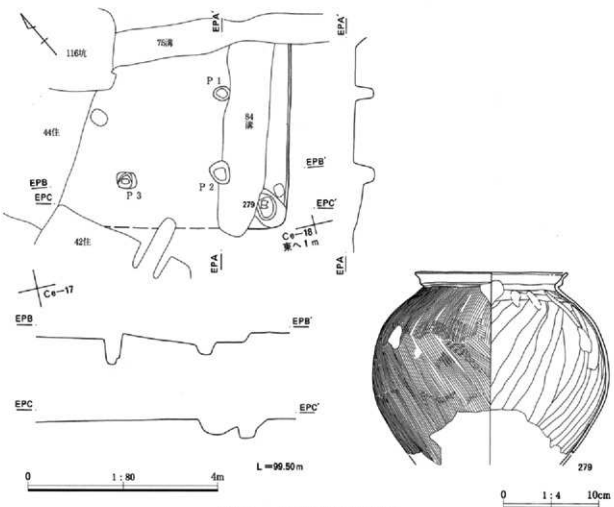
貯蔵穴　南東隅に長径0.8m以上、短径0.63m、深さ0.35mの楕円形と推定される貯蔵穴が検出された。貯蔵穴の北端は84号溝に切られており、全体形状はとらえられなかった。貯蔵穴からは土師器S字甕(279)が底面直上で出土した。

床面　ほぼ平坦である。東部は84号溝に壊されている。

遺物と出土状況　前述した貯蔵穴出土のS字甕(279)のほかは図示できる遺物は出土しなかった。このほか1点の土師器破片が出土した。

所見　出土遺物から古墳時代前期中葉～後葉の住居と考えられる。

P3北側のもう1本の主柱穴は検出漏れである。



第51図　1区43号住居と出土遺物

1区45号住居（第52図　PL.8　遺物観察表P.16）

位置　Cc－16・17G

形状　隅丸方形と推定される。後出する65・66号溝や116・118・121号土坑等に切られているため、住居北東隅から東壁の北半分を検出したにとどまった。

規模　長さは測定不能　壁高0.08m

面積　測定不能　　**長軸方位**　測定不能

炉　床面を確認した範囲では炉は検出されなかった。

柱穴　主柱穴と思われるピットは検出できなかった。小ピットは12基あるが主柱穴とは判断できない。

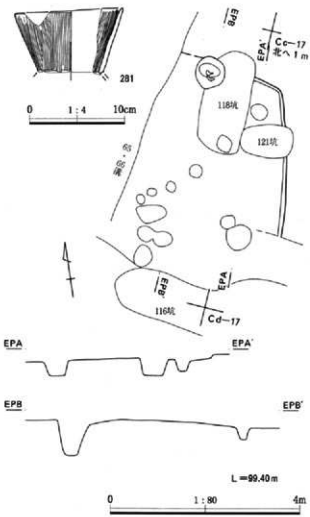
周溝　周溝は確認できなかった。

貯蔵穴　北壁を想定できる位置に、長径0.65m、短径0.63m、深さ0.75mの円形の土坑が検出された。他の住居では貯蔵穴の位置ではないが、出土遺物の時期から住居に伴う土坑と判断し、記録した。

床面　床面は複数の遺構に切られているために判然としなかった。

遺物と出土状況　前述した貯蔵穴内から土師器が出土しているが、遺物が不明である。また埋没土中から土師器坩(281)が出土した。

所見　上記の埋没土中からの出土遺物から古墳時代前期中葉～後葉の住居と考えたが、本住居は重複により破壊が著しく、決め手に欠けるのは否めない。



第52図　1区45号住居と出土遺物

1区80・81号溝（第53・54図

PL.8・37・42・43　遺物観察表P.16～18・41）

位置　Do～q－8・9G

1区の台地の東縁をほぼ平行する。西側を80号溝、東側を81号溝とした。新旧関係は不明である。

形状　80号溝はほぼ直線、81号溝はやや湾曲する。トレンチ状の調査区で検出したため、部分的な記録にとどまった。断面形はいずれも浅いU字形である。

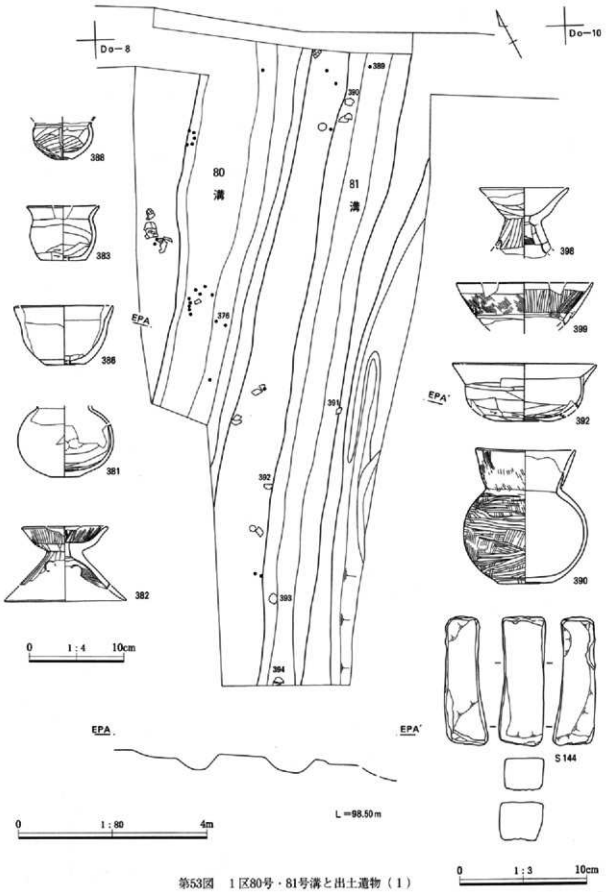
規模　80号溝　調査長　9.80m　幅1.70～2.28m
　　深さ　0.36m
　　81号溝　調査長　13.6m　幅0.96～1.36m
　　深さ　0.22m

走向　80号溝　N－44°－E
　　81号溝　N－36°－E

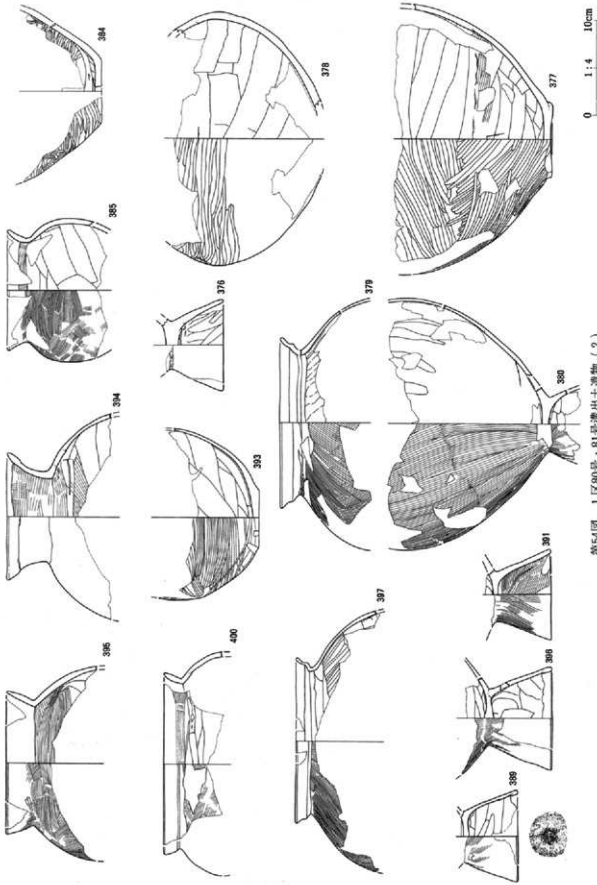
遺物と出土状況　遺物は古墳時代前期の土師器が大半を占める。出土層位は溝の確認面近くから埋没土で、溝底面より30～50cm浮いた位置である。古墳時代前期の遺物以外に板碑の破片（第Ⅱ分冊掲載予定）も一部に混入していた。

土師器は器種の偏りはほとんどなく、様々な器種の土器が完形に近い形で出土した。81号溝の東縁では砥石（S144）が出土している。

所見　80・81号溝は古墳時代前期の集落がある1区の台地東縁を回る位置に掘られている。この位置からすると居住域を区画する溝の可能性もあるが、限られた調査区であるので、判断することはできない。



第53図　1区80号・81号溝と出土遺物（1）



第54図　1区80号・81号溝出土遺物（2）

1区88号土坑（第55図　PL43　遺物観察表P.18）

位置　Cg・h－15G　　**形状**　隅丸長方形

規模　長軸3.78m以上　短軸1.3～1.6m

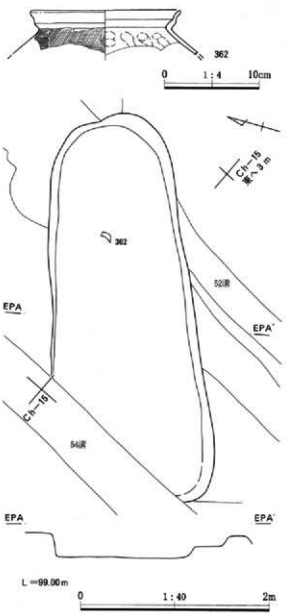
壁高0.24m　　**長軸方位**　N－66°－E

重複　北西隅を54号溝に切られている。

底面　ほぼ平坦である。

遺物と出土状況　S字甕(362)が東部の床面直上で出土した。ほかの出土遺物はない。

所見　出土遺物から古墳時代前期中葉～後葉の遺構と考えられる。弥生終末とした14号土坑と形態が似る。



第55図　1区88号土坑と出土遺物

2区2号住居（第56・57図

PL8・9・43・45　遺物観察表P.18・19・41）

位置　Id・e－9・10G

形状　隅丸正方形であるが、西壁北寄りや北東隅に攪乱があり、全体形状は判明しなかった。

規模　長軸4.7m　短軸4.5m　壁高0.28m

面積　20.44㎡　　**長軸方位**　N－83°－W

炉　住居のほぼ中央に炉が検出された。主柱穴を結んだ線より内側である。炉は長径2.02m、短径1.26m、深さ不明。楕円形の凹地とその西側に形成されている長径0.4m、短径0.34mの楕円形の焼土部分からなる。凹地および周辺の5カ所で炭化材が出土した。炭化材は炉北西側の主柱穴P1の周辺でも4カ所で出土した。炉凹地北側中央部の縁に棒状礫が1点置かれていた。炉の施設として置かれたかどうかは判断できなかった。

柱穴　主柱穴と思われるP1・P2・P3・P4を検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が40×32×80cm、P2が41×37×84cm、P3が33×30×56cm、P4が53×44×83cmである。

炉およびP1周辺には炭化材の破片がほぼ床面直上で出土した。　　**周溝**　周溝はない。

貯蔵穴　南東隅に長径1.17m、短径0.64m、深さ0.56mの隅丸長方形の貯蔵穴が検出された。貯蔵穴は二段になっていた。床面から16cm全体に下がった平坦面があり、さらに中央より西側で南壁に接したところに長軸0.48m、短軸0.22m、深さ0.40mの隅丸方形に掘り込まれていた。この掘り込み埋没土中位から遺物が出土している。

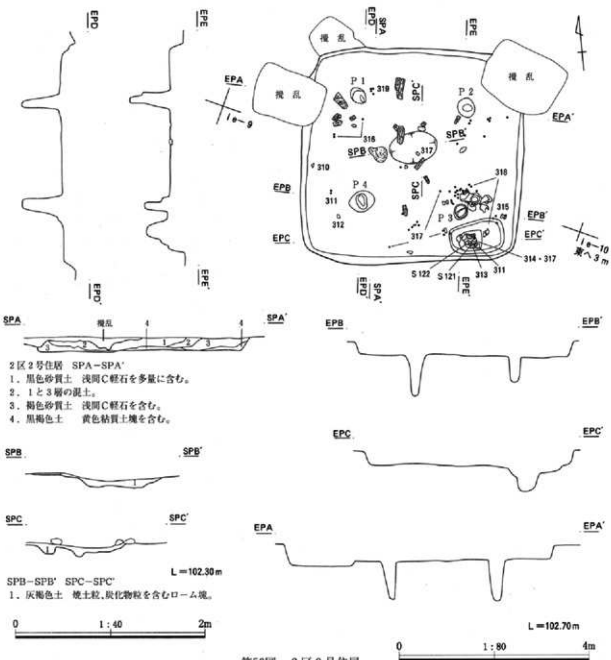
床面　床面は平坦である。

遺物と出土状況　貯蔵穴内とその北側に遺物が集中して出土した。貯蔵穴からは土師器壺口縁部(314)、台付甕(313)が埋没土中位で出土した。籠目の付着した土師器壺(318)は貯蔵穴北側床面直上に広がって出土した。貯蔵穴上段部で出土した破片も接合した。小型器台(315)は貯蔵穴北東縁床面直上で出土した。S字甕(317)は炉凹地や主柱穴P3、貯蔵穴西縁、貯蔵穴内から出土した破片が接合した。小型

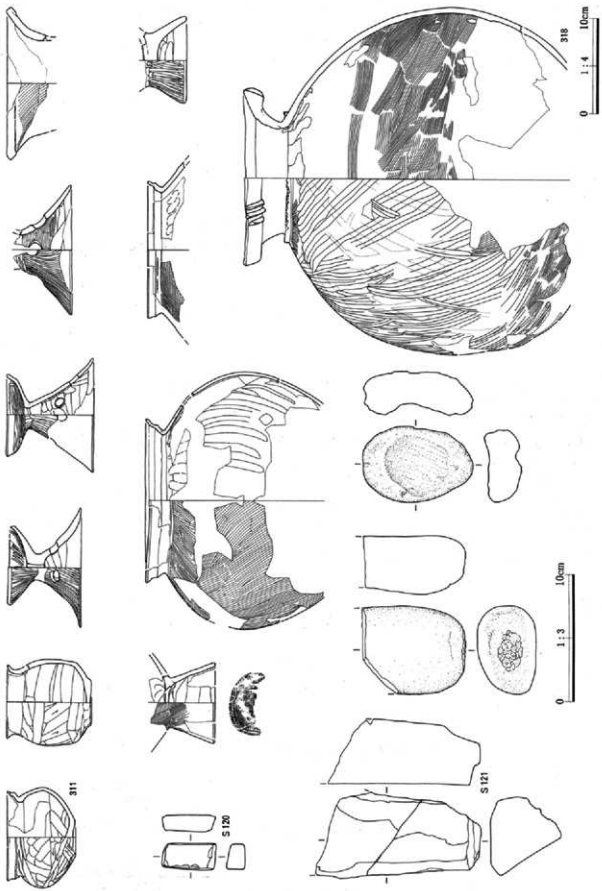
Ｓ字鉢(311)はＰ４西床面上５㎝出土の破片と貯蔵穴埋没土中の破片が接合した。小型器台(310)は西壁際床面上11㎝で出土した。小型甕(312)はＰ４南西部床面上15㎝と中央部床面直上の遺物が接合した。Ｓ字甕(316)は西壁際床面直上で出土した。小型器台(319)はＰ１東縁床面直上で出土した。小型の珪質粘板岩製の砥石(Ｓ120)は中央部南寄りに、同じ珪質粘板岩製の大型の砥石(Ｓ121)は貯蔵穴埋没土中から出土した。敲き石(Ｓ123)・凹み石(Ｓ122)も貯蔵穴埋没土中から出土した。

これら図示できた遺物のほかに縄文土器６点、土師器60点が出土した。

所見　出土遺物から古墳時代前期中葉～後葉の住居と考えられる。貯蔵穴およびＰ３周辺で出土した土器は完形に近く、大型のものが多い。特に壺(318)には籠目が残る。また炭化材が顕著に床面に残るが、上屋構造を積極的に議論する資料とはならない。樹種同定は実施できなかった。



第56図　２区２号住居


311
S120
S121
318
0
1:3
10cm
0
1:4
10cm

2区5号住居

（第58・59図　PL.9・10・44　遺物観察表P.19・41・45）

位置　Id・e−10・11G

形状　隅丸長方形であるが、南隅および南東壁の一部は2区1号住居に切られており、形状を明確にできなかった。

規模　長軸4.79m　短軸3.8m　壁高0.3m

面積　17.56㎡　**長軸方位**　N−22°−E

炉　住居のほぼ中央よりやや北東に炉が検出された。主柱穴を結んだ線より内側である。炉は長径0.82m、短径0.50mのC字形に焼土が形成されていた。中央部は3cmほど凹んでいた。焼土の厚さは3～9cmである。

柱穴　主柱穴と思われるP1・P2を検出した。それぞれの規模（長径×短径×深さ）は、P1が28×20×21cm、P2が25×25×7cmである。南東壁沿いの2本の主柱穴は検出できなかった。

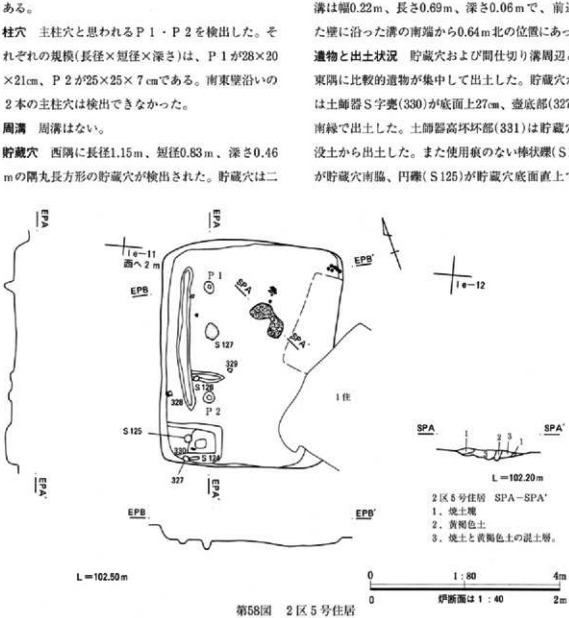
周溝　周溝はない。

貯蔵穴　西隅に長径1.15m、短径0.83m、深さ0.46mの隅丸長方形の貯蔵穴が検出された。貯蔵穴は二段になっていた。西半分は床面から10～14cm全体に下がった平坦面で、東半分はさらに長軸0.60m、短軸0.51m、深さ0.32mの隅丸方形に掘り込まれていた。この掘り込み埋没土中位から遺物が出土した。

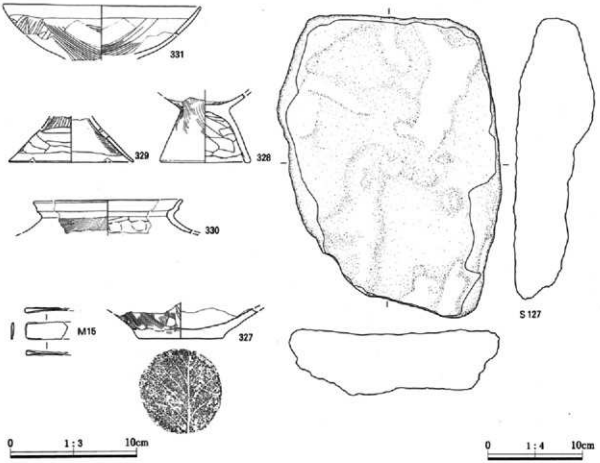
床面　床面は平坦である。東壁付近は床面が不明瞭で調査時にやや掘りすぎている。

また北西壁に沿って一条の溝と、それに直交する間仕切り溝が検出された。北西壁に沿った溝は、壁から23～48cm離れており南端がやや内側にカーブしている。溝の規模は幅0.2～0.28m、長さ3.04m、深さ0.07mである。この溝の南端から0.27mのところに先述した貯蔵穴がある。これに直交する間仕切り溝は幅0.22m、長さ0.69m、深さ0.06mで、前述した壁に沿った溝の南端から0.64m北の位置にあった。

遺物と出土状況　貯蔵穴および間仕切り溝周辺と、東隅に比較的遺物が集中して出土した。貯蔵穴からは土師器S字甕(330)が底面上27cm、壺底部(327)が南縁で出土した。土師器高坏坏部(331)は貯蔵穴埋没土から出土した。また使用痕のない棒状礫(S124)が貯蔵穴南脇、円礫(S125)が貯蔵穴底面直上で出



第58図　2区5号住居



第59図　2区5号住居出土遺物

土した。S124は被熱による剥落がある。土師器S字甕台部(328)は南西壁際床面上16cm、高坏脚部(329)は中央部床面上11cmで出土した。炉の東縁や住居東隅で土師器甕・壺の破片がまとまって出土したが、図化できるほど接合できなかった。間仕切り溝内からは使用痕のない棒状礫(S126)が出土した。また主柱穴P1・P2の間には大型の盤状礫(S127)が床面直上で出土した。顕著な使用痕はない。埋没土中から鉄片(M15)が出土している。

これら図示できた遺物のほかに縄文土器1点、土師器161点、石剥片3点が出土した。

所見　出土遺物から古墳時代前期中葉～後葉の住居と考えられる。北西壁沿いの溝や貯蔵穴、台石(S127)の配置は何らかの作業空間を彷彿とさせるが、詳細は判明しなかった。

2区6号住居

(第60～62図　PL10・44　遺物観察表P.20・41)

位置　If・g－8・9G

形状　隅丸長方形である。南壁の一部に攪乱が及んでいたため確認できない部分がある。

規模　長軸6.0m　短軸4.73m　壁高0.48m

面積　27.46m²　**長軸方位**　N－89°－E

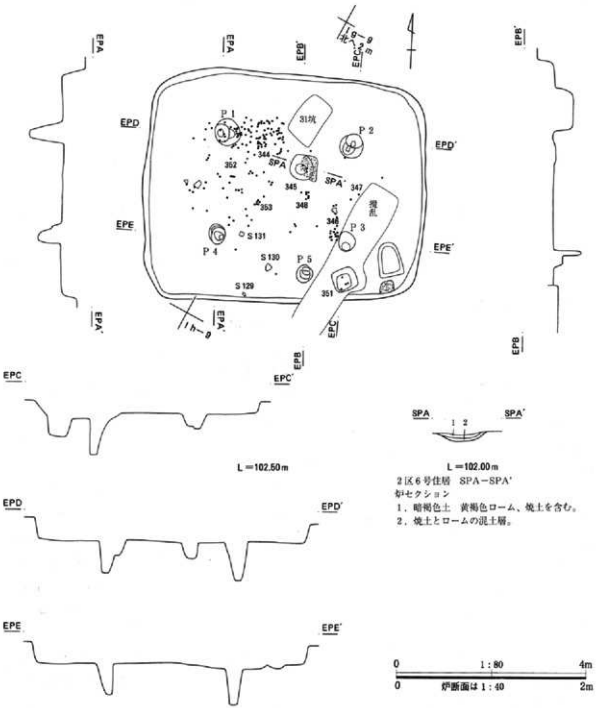
炉　住居のほぼ中央よりやや北西に炉が検出された。主柱穴のP1・P2を結んだ線より内側である。炉は長径0.58m、短径0.50m、深さ0.03mの楕円形で、東縁に幅10cmほどの焼土が形成されていた。焼土の厚さは7cmである。

柱穴　主柱穴と思われるP1・P2・P3・P4を検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が56×52×70cm、P2が53×49×87cm、P3が41×35×85cm、P4が43×35×66cmである。

周溝　周溝は検出されなかった。

貯蔵穴　南東隅に長径0.71ｍ、短径0.50ｍ、深さ0.06ｍの馬蹄形の落ち込みが検出された。深さがなく、形態や位置が定型的でないことから、貯蔵穴とするには疑問である。また主柱穴Ｐ３の南側に長軸0.50ｍ、短軸0.46ｍ、深さ0.53ｍの方形の土坑が検出された。住居内と同じ時期の土器が出土していることからこの土坑は住居に伴うと考えられる。貯蔵穴としてはこちらの土坑も定型的でない。

床面　床面は平坦である。南壁中央よりやや東寄りにＰ５が検出された。規模は長径0.39ｍ、短径0.34ｍ、深さ0.58ｍである。深い部分は北側に偏る。



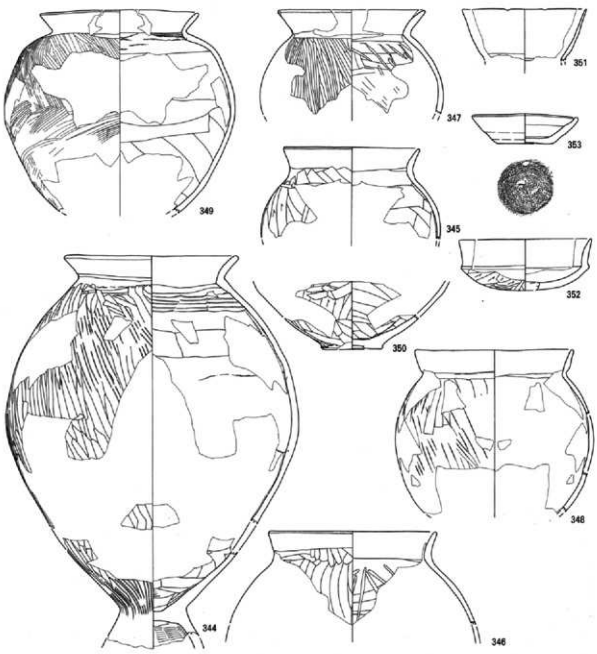
２区６号住居　SPA－SPA'
炉セクション
１．暗褐色土　黄褐色ローム、焼土を含む。
２．焼土とロームの混土層。

第60図　２区６号住居

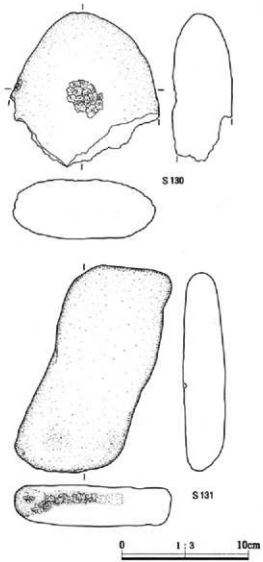
また炉の北側は後出する31号土坑に切られており、一部床面が検出できなかった。

遺物と出土状況　主柱穴で囲まれた範囲に比較的遺物が集中して出土した。土師器甕(348)はＰ１と炉の間に散在して床面直上で出土した。台付甕(344)はＰ１とＰ２の間の床面に散らばって出土した破片が接合した。甕(345)は炉内の使用面直上で出土した。甕(346)・壺(347)はＰ３周辺の床面直上で出土した。甕(348・349・350)は北西部の床面近くから出土したが、広く散在した遺物が接合した。鉢(351)はＰ３南の土坑の底面上42cmで出土した。土師器坏(352)、須恵器坏(353)は本住居に伴わないものであるが、それぞれ北西部床面直上、中央部床面直上で出土した。埋没時の混入と考えられる。

抉りのある敲き石(Ｓ130)は南中央部床面上８cm、扁平な敲き石(Ｓ131)は南西部Ｐ４脇の床面直上で



第61図　２区６号住居出土遺物（１）



第62図　２区６号住居出土遺物（２）

出土した。これら図示できた遺物のほかに縄文土器２点、土師器144点が出土した。

所見　出土遺物から古墳時代前期中葉～後葉の住居と考えられる。本住居の出土遺物は土師器甕が多く、床面に広く散在する傾向が顕著であった。また同様の出土状態で土師器坏(352)・須恵器(353)が出土している。これらのことから、すべての出土遺物が本住居の生活面に伴うかどうかは疑問である。器種が偏ること等から廃棄の可能性も考慮しなければならない。また荒い刷毛目成形の甕(348・349)や台付甕(344)は県内当該時期には類例の少ない成形技法であり、今後検討を要する。

２区東谷地土坑群

（第63～67図　PL10～12・45　遺物観察表P.20・21）

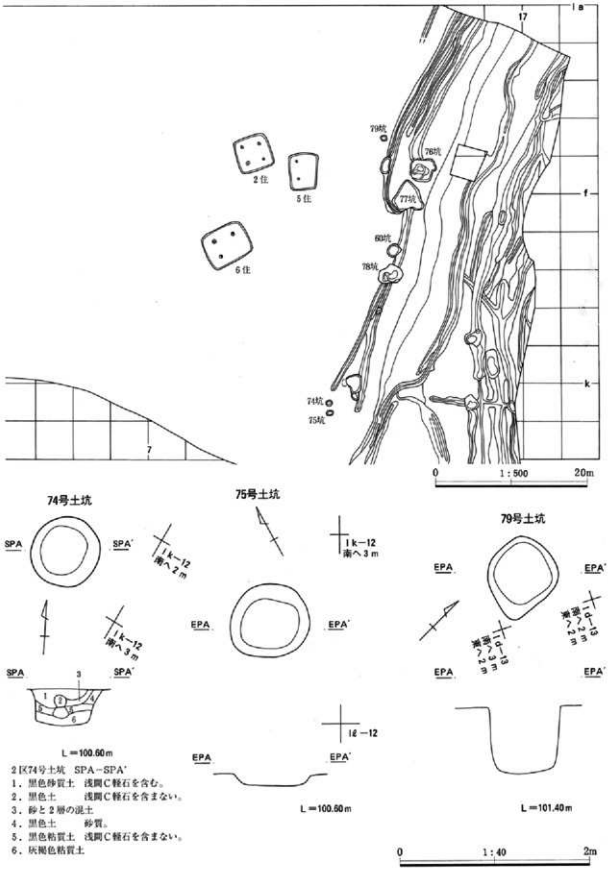
２区の東側には帯状の谷地が南北方向にあり、２区は東側に向かって傾斜している。この傾斜面に古墳時代前期のものと考えられる土坑群が検出された。これらの土坑群は、調査時に番号を付さなかったものも含めて、大型不定形のもの６基、小型円形のもの４基である。

このうち番号を付して記録したのは大型不定形の土坑は60・76・77・78号土坑の４基で、Ｉe－13グリッドとＩj・k－12グリッドの土坑も同類のものと考えられる。一方、小型円形は74・75・79号土坑の３基であるが、Ｉi－13グリッドにある円形土坑も同類と思われる。

土坑群のうち大型不定形の60・76・77・78号土坑埋没土からは古墳時代前期のＳ器が多く出土している。特に76号土坑のＳ字甕(407)は土坑底面直上で出土した。このことから、これらの土坑群は古墳時代前期のものと判断した。小型円形の土坑からの出土遺物はないが、先の不定形土坑群と同様の立地を示していること、下層の埋没土の状況が不定形土坑の埋没土と似ていることから、同時期の可能性が高いと判断し、本項で報告した。各土坑の位置・規模等は次頁の表４にまとめた。

これらの土坑群には東谷地の西側に沿って掘られている３～４条の細い溝が重複している。いずれの土層観察でも、砂で埋まった溝群よりも土坑の方が古いと観察されている。

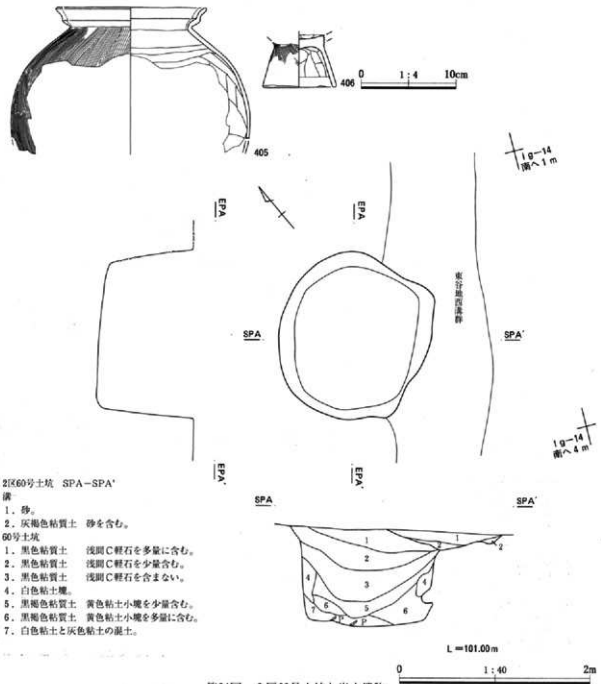
２区には古墳時代前期の住居が３軒あり、台地東端にまとまって位置している。本土坑群はその住居群の至近距離の傾斜面にあり、同時期の遺構としての蓋然性は高い。何らかの関係がある位置と考えられよう。その関係を示唆する遺物はないが、土坑群の類例を求めるならば、大型不定形の土坑は粘土採掘土坑の可能性があろう。土坑の最下部は地山の灰色・白色の粘土層まで達しており、この粘土の採取を目的としたと考えたい。埋没土は粘土を塊状に含む混土層である。



第63図　2区東谷地土坑群の位置と74号・75号・79号土坑

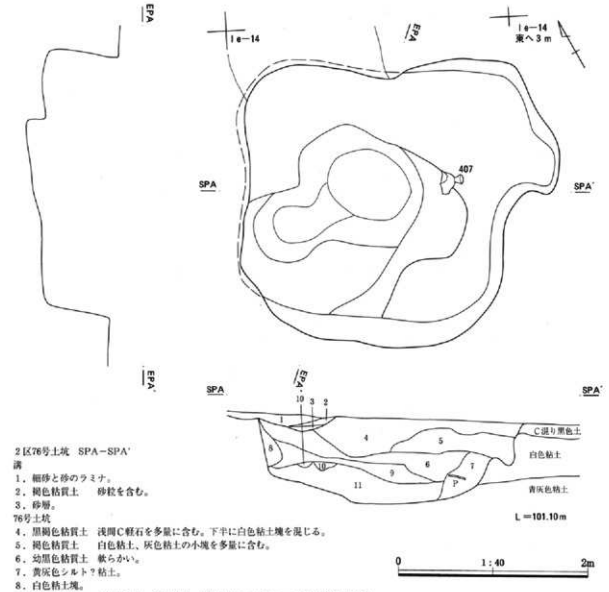
第４表　２区東谷地土坑群一覧表

番号	位置	形状	規模			出土遺物			特徴
			深	横	深さ	図化（出土位置）		非掲載	
60号土坑	Ig－13G	大型不定形	1.8	1.6	1.01	S字瓷605・406（黒土）		土師器15点	底面は平らである。
76号土坑	Ig－14G	大型不定形	3.6	3.4	0.91	S字瓷407（中央底面上）　番689（黒土）　瓷608（埋土）		須恵器15点　土師器15　須恵器1点	底面は四凸が著しい。
77号土坑	Ie－f－13－14G	大型不定形	4.02	3.6	0.99	赤井戸系瓷410（西部床面上11cm）		土師器13点	底面は平らである。
78号土坑	Ig－h－13G	大型不定形	3.2	2.32	1.02	S字瓷411（南隅確認面）		土師器32点	底面は四凸が著しい。
番号無し	Ie－13G	大型不定形	2.2	1.2	0.32				底面は平らである。
番号無し	Ij－k－12G	大型不定形	2.4	0.2	0.93				西壁は抉れている。
74号土坑	Ik－11G	小型円形	0.76	0.7	0.42				
75号土坑	Ik－11G	小型円形	0.86	0.8	0.13				
79号土坑	Id－13G	小型円形	0.92	0.76	0.71				
番号無し	Ih－13G	小型円形	0.88	0.76	0.79				

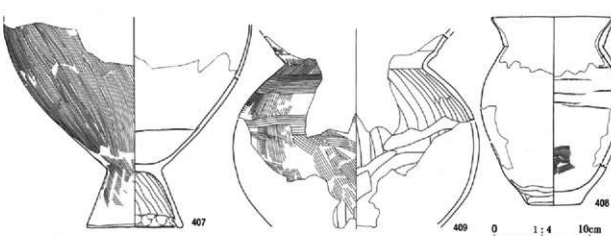


2区60号土坑　SPA－SPA'
溝
1．砂。
2．灰褐色粘質土　砂を含む。
60号土坑
1．黒色粘質土　　浅間C軽石を多量に含む。
2．黒色粘質土　　浅間C軽石を少量含む。
3．黒色粘質土　　浅間C軽石を含まない。
4．白色粘土層。
5．黒褐色粘質土　黄色粘土小塊を少量含む。
6．黒褐色粘質土　黄色粘土小塊を多量に含む。
7．白色粘土と灰色粘土の混土。

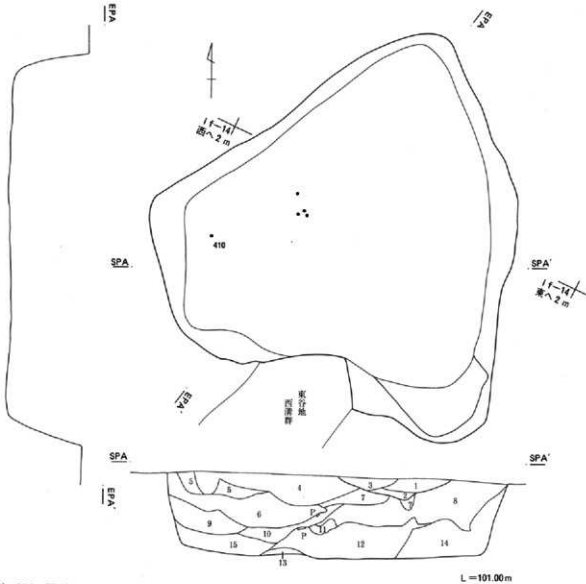
第64図　２区60号土坑と出土遺物



2区76号土坑　SPA−SPA'
溝
1．細砂と砂のラミナ。
2．褐色粘質土　砂粒を含む。
3．砂層。
76号土坑
4．黒褐色粘質土　浅間C軽石を多量に含む。下半に白色粘土塊を混じる。
5．褐色粘質土　白色粘土、灰色粘土の小塊を多量に含む。
6．幼黒色粘質土　軟らかい。
7．黄灰色シルト？粘土。
8．白色粘土塊。
9．黒褐色粘土　2層と似る。白色粘土、灰色粘土の小塊をマーブル状に多量に含む。
10．幼黒色粘質土　3層と似る。軟らかい。
11．黒色粘質土　白色粘土、黄色粘土の塊を斑点状に含む。



第65図　2区76号土坑と出土遺物



2区77号土坑　SPA－SPA'

溝

1．灰褐色粘質土　砂を含む。

2．砂のラミナ。

3．砂と浅間C軽石混じり黒の混土。

77号土坑

4．黒色粘質土　浅間C軽石を多量に含む。

5．黒色粘質土　浅間C軽石を少量含む。

6．黒色粘質土　浅間C軽石をほとんど含まない。

7．黒褐色粘質土　浅間C軽石と白色粘土塊を含む。

8．黒褐色粘質土　黄白色粘土小塊を少量含む。

9．6層の小塊を含む白色・黄色の粘土塊の混土。

10．黒褐色粘質土　黄色粘土塊を含む。

11．黄灰褐色粘質土

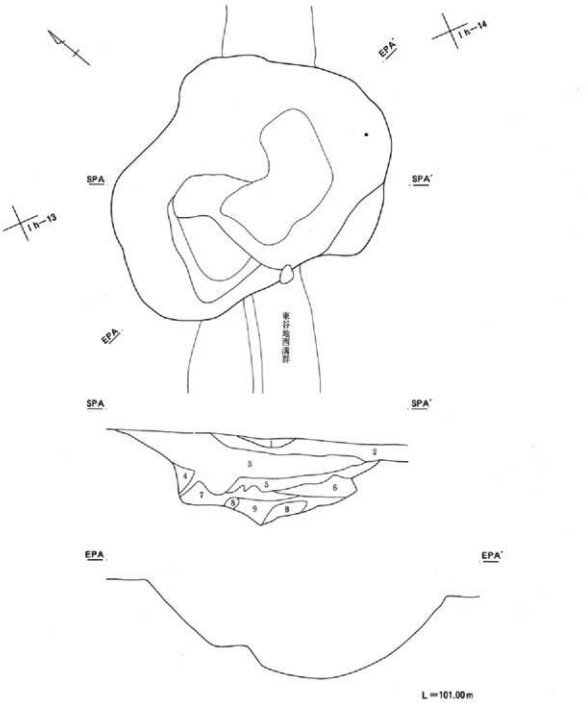
12．黄灰褐色粘質土　白色・黄色・灰色粘土の大塊を斑点状に混じる。

13．15層に似る。

14．灰黄色シルト。

15．9層に似る。6層と黄色粘土、白色粘土、14層塊の混土。

第66図　2区77号土坑と出土遺物



2区78号土坑　SPA－SPA'

溝

1．移。

78号土坑

2．黒色粘質土　　浅間C軽石を多量に含む。

3．黒褐色粘質土　浅間C軽石を含む。

4．白色粘土塊。

5．黒褐色土　　白色粘土・黄色粘土の塊を含む。

6．幼黒色粘質土

7．6層の小塊を含む白色粘土塊。

8．青灰色粘土塊。

9．黒褐色粘質土　白色粘土小塊を含む。

第67図　2区78号土坑と出土遺物

（3）周溝墓

2区1号周溝墓

（第68・69図　PL13・14・45　遺物観察表P.21・41）

位置　L・Iq～a－2～5G

形状　方形。東隅が1号溝に切られている。周溝は全周する。周溝内側は北辺および北西隅を除き、直線的に掘られている。北辺と北西隅は後世の攪乱により、内側が段状に削られていた。外側も北辺－北西隅－西辺－南西隅－南辺にかけて、少し膨らむような形状になっている。特に南西隅には五輪塔を廃棄した土坑が掘られており、その攪乱が及んでいる。確認面まで表土であり、盛土を確認できなかった。

規模　南北全長15.20m　南北方台部長10.16m

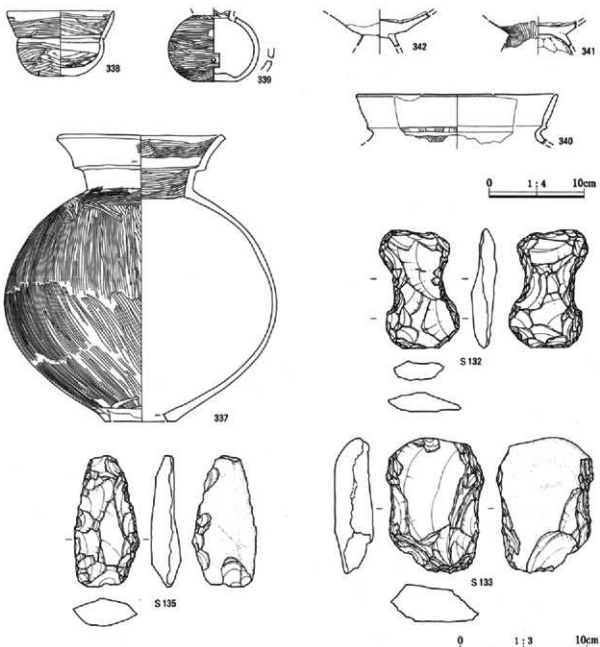
北周溝幅　2.60m　深さ 1.38m

南周溝幅　2.40m　深さ 1.14m

東西全長 15.12m　東西方台部長 10.24m

西周溝幅　2.80m　深さ 1.20m

東周溝幅　2.00m　深さ 1.16m



第68図　2区1号周溝墓出土遺物

SPA－SPA′　SPB－SPB′

1．黒色土　浅間C軽石を多く含む。
2．暗褐色土　茶味を帯び、全体に粗い粒子、軽石を含む。
2′．暗褐色土　黒味が強い。
3．黒褐色土　やや茶味を帯び、軽石は含まない。
3′．黒褐色土　より茶味が強い。
4．茶褐色土　軽石を含む状態は、2層に類似する。
5．茶褐色土　暗褐色土とロームの混土層
6．暗褐色土　ローム塊を散見。
7．茶褐色土　ソフトロームが崩落したもの。
8．茶褐色土　ハードロームが崩落したもの。黒色土の小塊を含む。
8′．茶褐色土　8層に類するが、混入塊が少なくなる。
9．茶褐色土　暗褐色土の小塊を含む。
9′．茶褐色土　茶味が強くなる。
10．茶褐色土　黒褐色土の小塊を含む。
11．黒褐色土　浅間C軽石を多く含む。しまりなし。
12．茶褐色土　黒褐色土の塊を含む。
13．黒色土　黒味が強く軽石を含む。
14．茶褐色土　黒色土の塊を含む。
15．暗褐色土　茶褐色土を混土。
16．茶褐色土　ハードロームが崩落堆積。
17．暗褐色土　軽石をまばらに含む。

SPC－SPC′

1．灰色味のある褐色土　軽石を少量含む。しまりなし。
2．黒褐色土　浅間C軽石をまばらに含む。
3．茶褐色土　浅間C軽石をまばらに含む。
4．黒褐色土　2層に類するが軽石は少なくなり、色調も黒味がより強い。
5．暗褐色土　黒味がやや残る。軽石はほとんどない。
6．暗褐色土　5層よりも茶味が強い。
7．茶褐色土　ロームが崩落したもの。
8．茶褐色土　ロームと暗黒褐色土の混土層。地山（ローム）の茶色に比して、濁りが著しい。

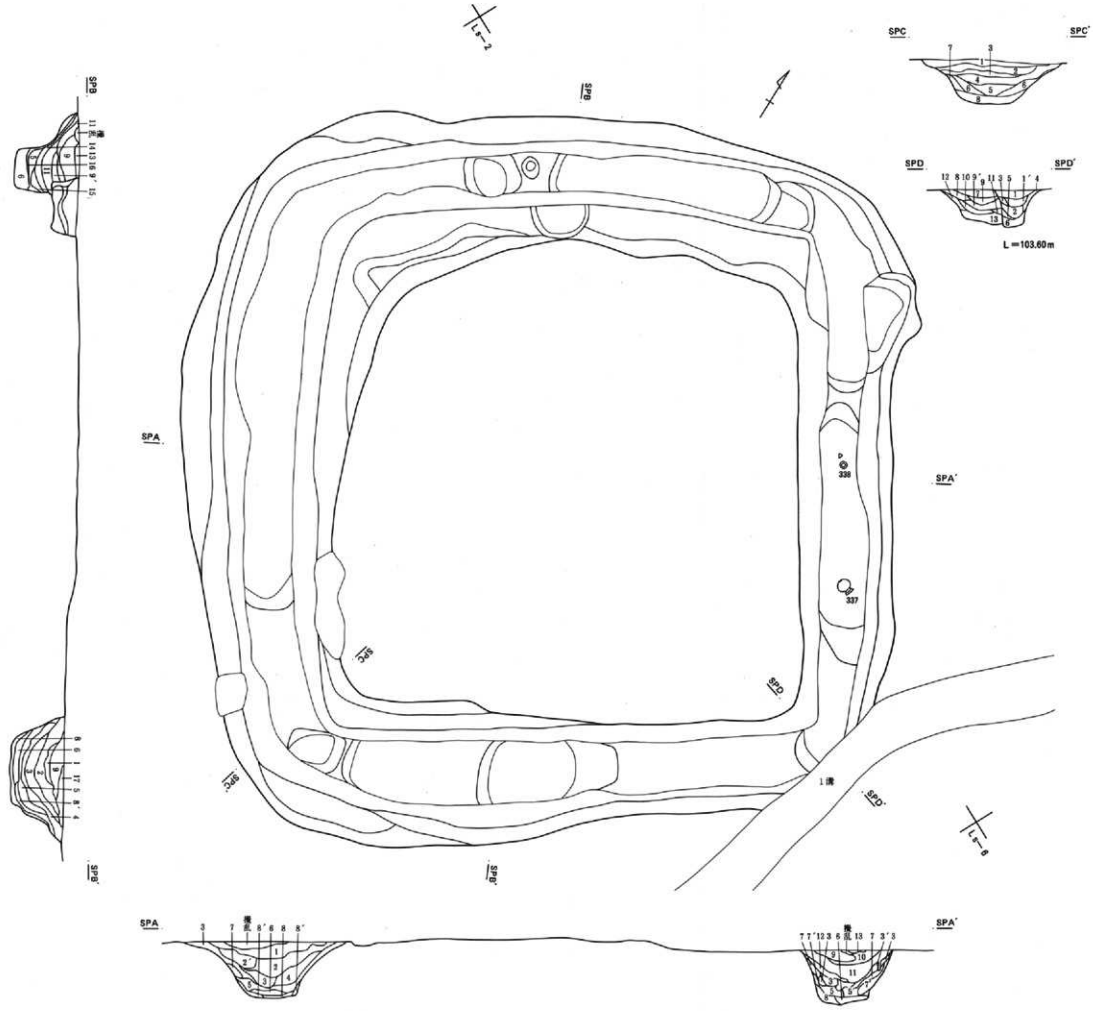
SPD－SPD′

1号溝

1．黒褐色土　軽石を含む。茶褐色土が塊で混入。
1′．黒褐色土　1層よりも黒味が強い。
2．黒褐色土　軽石なし。茶褐色土の混入が多くなる。
3．暗褐色土　砂質。
4．茶褐色土　小塊状。
5．暗褐色土　3層に類するが、黄味が強い。
6．茶褐色土　黒褐色土、ローム土の混土層。しまりなし。

1号方形周溝墓

7．茶褐色土　C軽石を多く含む。
8．暗茶褐色土　黒味をもつ。軽石あり。
9．黒色土　軽石を含む。
9′．黒色土　茶味が強くなり、軽石も多くなる。
10．黒褐色土　軽石は少ない。
11．黒褐色土　軽石が多い。
12．茶褐色土　ローム塊を含む。
13．茶褐色土　ローム塊を多く含む。茶味が強く濁りあり。



第69図　2区1号周溝墓図

長軸方位　N－32°－W

主体部　検出されなかった。

周溝　四周の底面とも1.0～1.1mほどの一定の幅をもつ。底面は平坦でなく、図示したように一部深くなっている。凹みは0.1～0.3mの深さで、南周溝の中央部が最も深くなっていた。周溝内の施設かどうかは判断できなかった。

埋没土　浅黒C軽石とローム塊を含む褐色土で埋まっていた。下層にいくにしたがって軽石の量は少なくなっていた。軽石の純堆積層はない。

遺物と出土状況　完形土器が東周溝を中心に出土した。土師器壺(337)は東周溝中央よりやや南側の底面上17cmのところで横倒した状態で出土した口縁部は周溝外側を向いていた。底部焼成前穿孔の壺である。土師器鉢(338)は東周溝中央部底面上41cmで、口縁部を下にした状態で出土した。土師器小型壺(339)は周溝北東隅の埋没土上層で出土した。この壺の胴部には小孔が焼成前に穿たれている。土師器S字甕(340・341)と高坏(342)は東周溝埋没土上層で出土した。一方、打製石斧(S132・S133)は西周溝埋没土上層、打製石斧(S135)は北周溝埋没土上層から出土した。これら図示できた遺物のほかに土師器16点が出土した。

所見　出土遺物から古墳時代前期中葉～後葉の遺構と考えられる。周溝墓に伴う土器は、東周溝に集中して出土している。これらの土器は東周溝に偏在すること、完形に近いこと、穿孔土器が含まれることから、墓の東部に置かれた供献土器が埋没途中の周溝に落ち込んだものと考えられる。打製石斧3点は埋没土上層で出土しており、墓に伴うかどうかは判断できない。

4．古墳時代中後期の遺構・遺物

（1）概要

古墳時代中後期の遺構は、住居33軒、土坑9基、古墳1基が検出されている。区ごとの内訳は1区で住居26軒、土坑8基、1北区で住居5軒、土坑1基、2区で住居2軒である。住居はほぼ5世紀前半から6世紀後半のもので、炉の住居も3軒含まれている。住居の分布は、1区では前期(4世紀)段階の住居と同様であるが、1北区に6世紀の住居の分布は拡大している。2区では住居の数が5世紀に1軒、6世紀前半に1軒となり、その後は墓域に変化する。土坑は明確にこの時期のものと断定するのは困難であったが、完形に近い遺物を出土したものや埋没土から古墳時代と推定できるものを本項で報告した。1区333号土坑として報告した土坑は、調査時には単独で残った住居の貯蔵穴として記録されたが、周辺を住居と認定する根拠に欠けるので、本項では土坑として報告した。この土坑縁からは土師器坏とともに刀子が出土している。柄および鞘の一部と思われるものが遺存している資料であるが、出土状態および帰属遺構が明確でないので注意を要する。

古墳は2区北東隅で1基が検出された。上層は削平され、石室下部および前庭付近の周溝しか検出できなかった。石室底面から耳環2個が出土した。

（2）竪穴住居と土坑

1区1号住居

（第70・71図　PL.14・46　遺物観察表P.22）

位置　Cn・o－11～13G

形状　正方形。隅は角張って掘られている。

規模　長軸6.18m　短軸6.08m　壁高0.15m

面積　37.30㎡　　**長軸方位**　N－89°－E

炉　住居のほぼ中央よりやや東に小ピットが検出された。位置的にはこれが炉の可能性があるが、焼土や灰等の顕著な痕跡は検出できなかった。

柱穴　主柱穴と思われるP1・P2・P3・P4を検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が26×23×26cm、P2が26×24×30cm、P3が35×30×35cm、P4が55×45×27cmである。

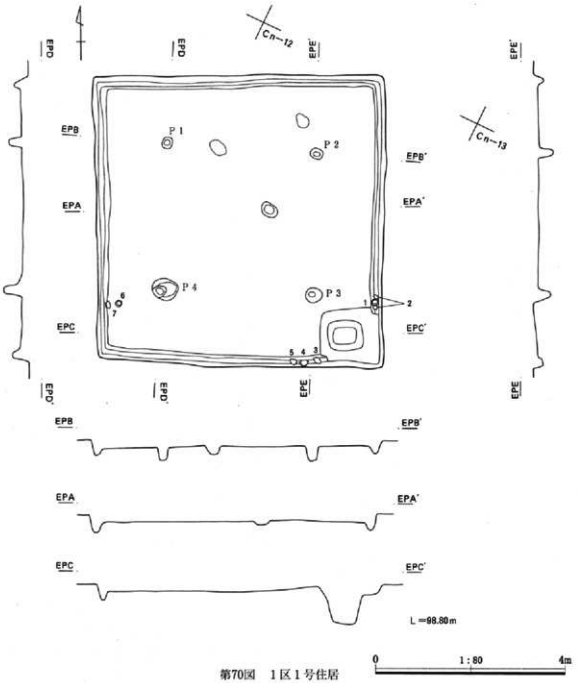
周溝　周溝は、南東隅の貯蔵穴部分を除いて全周していた。概ね幅は25cm、深さは12cmである。

貯蔵穴　南東隅に長軸1.22m、短軸1.07m、深さ1.05mの方形貯蔵穴が検出された。底面も長軸0.50m、短軸0.37mの方形で、やや西に偏っていた。形態や位置は方形を基調にした定型的な貯蔵穴である。

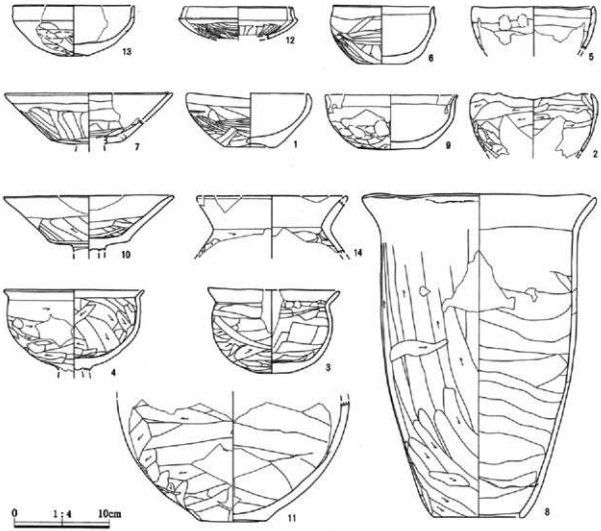
床面　床面は平坦である。

遺物と出土状況　遺物は住居南壁沿いに比較的集中して出土した。土師器鉢(1・2)は東壁貯蔵穴脇の周溝内底面直上で出土した。土師器鉢(3・5)・小型台付甕(4)は南壁貯蔵穴脇周溝内底面直上で出土した。土師器鉢(6)・高坏(7)は南西隅床面直上で出土した。土師器甑(8)は貯蔵穴埋没土から出土した。土師器甕(11・14)は埋没土中から出土した。なお坏(12)は埋土中から出土したが、混入と考えられる。これら図示できた遺物のほかに縄文土器3点、土師器60点が出土した。

所見　出土遺物から5世紀前半の住居と考えられる。角の張った規格的な方形の住居である。炉は明確な痕跡が確認できなかったが、検出漏れと考えられる。



第70図　1区1号住居



第71図　1区1号住居出土遺物

1区3号住居

（第72・73図　PL.15・46　遺物観察表P.22・23・41）

位置　Cj・k－9・10G

形状　隅丸正方形と推定されるが、北東隅が攪乱により壊されていた。また竈の煙道部も上半は26号溝に切られている。

規模　長軸5.16m　短軸4.26m　壁高0.25m

面積　23.67㎡　　**長軸方位**　N－89°－E

竈　住居東壁中央よりやや南寄りに竈が構築されていた。確認長1.08m、燃焼部幅0.32m。袖の残存長は向かって右側が0.6m、左側が0.64m。屋外に0.46m煙道が伸びる。焚き口部で土師器甕(15)が床面直上で出土した。

柱穴　主柱穴と思われるP1・P2・P3・P4を検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が70×57×45cm、P2が32×29×106cm、P3が47×35×52cm、P4が68×50×42cmである。

周溝　周溝は竈部分を除いて全周する。概ね幅は22cm、深さは8cmである。

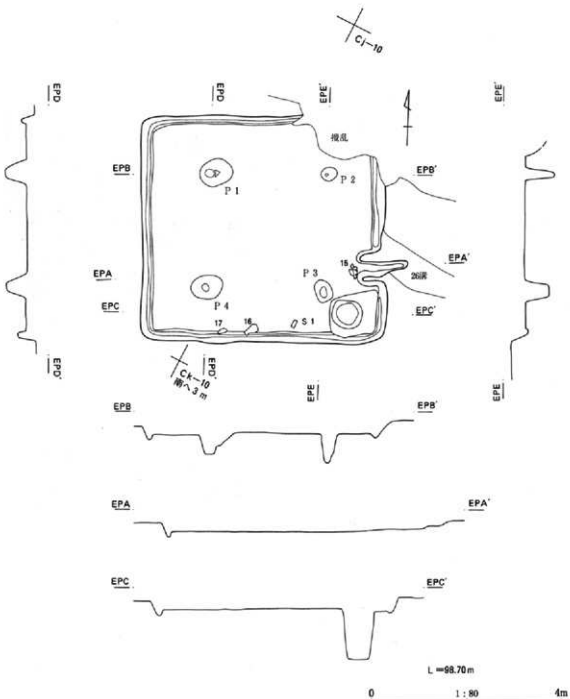
貯蔵穴　南東隅に長径1.1m、短径0.87m、深さ1.05mの貯蔵穴が検出された。貯蔵穴内は2段構造になっていた。深さ5cmで一段低い平坦面がつくられ、その平坦面の西寄りに長径0.65m、短径0.58m、深さ1.0mの楕円形の土坑が掘り込まれている。

床面　床面は平坦である。

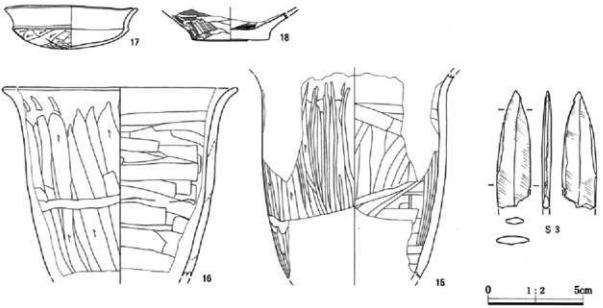
遺物と出土状況　南壁際に集中して遺物が出土した。

土師器甑(16)は南壁中央壁際床面直上で出土した。土師器坏(17)も南壁際床面直上で出土した。土師器壺底部(18)は竈埋没土中から出土した。剣形石製模造品(Ｓ３)は主柱穴Ｐ１の埋没土内から出土した。図示できた遺物のほかに土師器55点、須恵器１点が出土した。また南壁際床面直上と貯蔵穴埋没土から使用痕のない棒状礫が出土した。

所見　出土遺物から６世紀後半の住居と考えられる。主柱穴Ｐ１から出土した剣形石製模造品は滑石製で、茎部を欠損している。



第72図　１区３号住居



第73図　1区3号住居出土遺物

1区4号住居

（第74・75図　PL15・46・47　遺物観察表P.23・42）

位置　Ck・I－8G

形状　正方形と推定されるが、北西部は調査区域外のため、全体形状はとらえられなかった。また20号溝が南東隅を、21号溝が中央部を切っており、東壁の一部も検出できなかった。

規模　長軸4.05m　短軸測定不能　壁高0.35m

面積　測定不能　　**長軸方位**　N－2°－W

炉　住居のほぼ中央よりやや南に炉と思われる落ち込みが検出された。顕著な焼土や灰等は検出できなかった。北半分は21号溝に切られている。南西縁には大型磨り石（Ｓ９）が床面直上で出土した。

柱穴　主柱穴と思われるＰ１・Ｐ２を検出した。規模（長径×短径×深さ）は、Ｐ１が30×28×91cm、Ｐ２が54×40×29cmである。西側の主柱穴２本は調査区域外のため検出されていない。また南壁から0.53m内部に入った位置に小ピットＰ３を検出した。Ｐ３の規模は35×28×14cmである。

貯蔵穴　貯蔵穴は調査範囲内では検出されなかった。

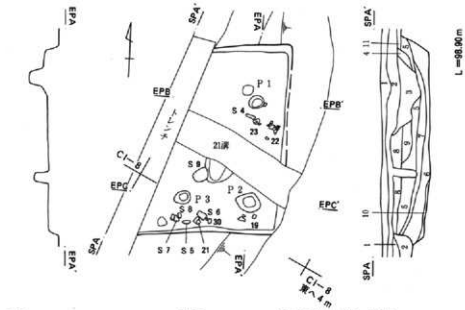
床面　床面は平坦である。　　**周溝**　周溝はない。

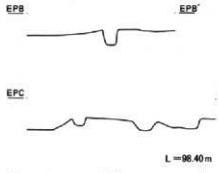
埋没土　埋没土中位には榛名二ツ岳火山灰と軽石を多量に含む暗灰色土が挟在していた。部分的に純堆積層のブロックも見受けられた。

遺物と出土状況　遺物は主柱穴Ｐ１と南壁沿いに集中して出土した。土師器広口壺(22)・高坏(23)はＰ１南側床面直上で出土した。土師器甕(19)は住居南東隅Ｐ２南床面直上で出土した。土師器坏(20・21)は南壁沿い床面上14cm、５cmで出土した。凹み石（Ｓ７）・砥石（Ｓ８）も南壁沿いＰ３南側床面直上で出土した。これら図示できた遺物のほかに縄文土器１点、土師器83点が出土した。また使用痕のない棒状礫・円礫（Ｓ４・Ｓ５・Ｓ６）が出土している。

所見　出土遺物から５世紀前半の住居と考えられる。埋没土中位に榛名二ツ岳火山灰の純堆積層に近い土層が挟まれるが、下層にも二ツ岳軽石が含まれるとの記載があるので、時期判定の鍵層とするには不十分である。

Ｐ３周辺の床面には凹み石（Ｓ７）や砥石（Ｓ８）をはじめとする礫が集中し、その北側には大型磨り石（Ｓ９）が置かれていた。特に砥石（Ｓ８）には金属研磨の痕跡と思われる条線が刻まれている。本住居では何らかの作業が行われていたと考えられるが、断定するにいたらなかった。



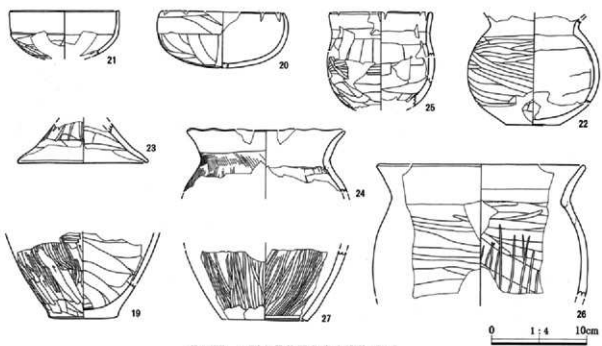


１区４号住居　SPA－SPA'

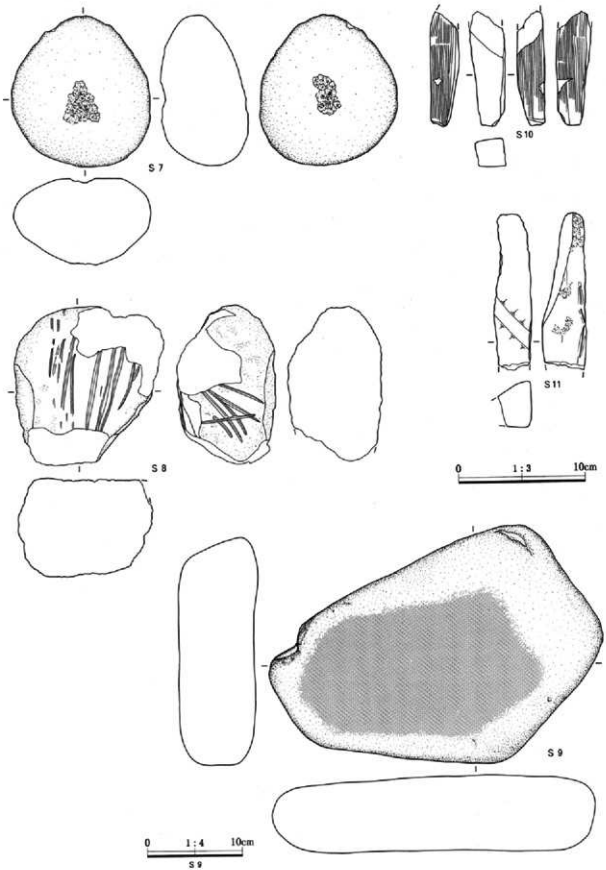
1．灰色土　水田耕作土。砂礫や角閃石安山岩粒を含むサラサラした土層。
2．灰色土　砂礫や鉄分凝集を多量に含むサラサラした土層。
3．暗灰色土　砂礫を多量に含むサラサラした土層。（21溝埋土）
4．灰褐色土　角閃石安山岩や鉄分を含むサラサラした土層。
5．灰褐色土　角閃石安山岩や鉄分を含む。ロームの小塊を含む。
6．暗褐色土　榛名二ツ岳軽石、ロームの小塊と粒子を含む。
7．暗灰色土　榛名二ツ岳軽石とFA火山灰を多量に含む。純層の所もある。
　　３×３×３㎝程の角閃石安山岩も含む。
8．黒褐色土　榛名二ツ岳軽石を多量に含み、更に焼土を含む。
9．黒褐色土　榛名二ツ岳軽石と焼土を多量に含む。
10．灰色土　白色の粒子と灰黒色土の小塊を含む、かたくしまった土層。
11．黒褐色土　榛名二ツ岳軽石を多量に含み、鉄分凝集も含む。

Ｂ土坑

1．灰色土　砂礫を多量に含み、鉄分凝集が著しいサラサラした土層。
2．暗灰色土　砂礫を多量に含むサラサラした土層。



第74図　１区４号住居と出土遺物（１）



第75図　1区4号住居出土遺物（2）

1区5号住居（第76図　PL15）

位置　Cl・m－8G

形状　隅丸方形と推定されるが、西半分の大半は発掘区域外のため、全体形状はとらえられなかった。20号溝との新旧関係は不明である。

規模　長軸4.13m　短軸測定不能　壁高0.48m

面積　測定不能　　**長軸方位**　N－86°－E

竈　住居東壁中央よりやや南寄りに竈が構築されていた。確認長0.74m、燃焼部幅0.44m。袖の残存長は向かって右側が0.76m、左側が0.63m。煙道は残存する範囲では屋外に伸びていない。

柱穴　主柱穴と思われるP1を検出した。規模（長径×短径×深さ）は、49×44×49cmである。西側の主柱穴3本は調査区域外。

周溝　周溝はない。

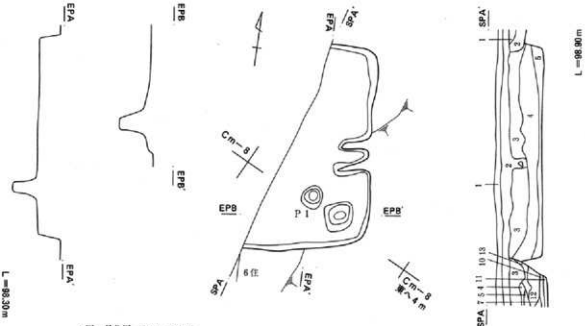
貯蔵穴　南東隅に長径0.61m、短径0.59m、深さ0.58mの不定方形の貯蔵穴が検出された。

床面　床面は平坦である。

埋没土　埋没土中位には榛名二ツ岳火山灰のブロックを多量に含む灰褐色土が挟在していた。

遺物と出土状況　図示できる遺物はない。埋没土中から土師器破片22点が出土した。

所見　埋没土の状況や6号住居より古いことから、5世紀後半から6世紀前半の住居と考えられる。



1区5号住居　SPA－SPA'
1．灰色土　水田耕作土。砂礫や角閃石安山岩粒を含むサラサラした土層。
2．灰色土　砂礫を多量に含み、鉄分凝集が著しいサラサラした土層。
3．黒褐色土　榛名二ツ岳軽石を多量に含み、更に焼土も含む。FA火山灰の塊が点在する。
4．灰褐色土　榛名二ツ岳軽石と焼土及びFA火山灰の小塊を含む。
5．暗灰色土　白色の小粒を多量に含み、更に焼土を含むしまった土層。
B土坑
1．灰色土　砂礫を多量に含み、鉄分凝集が著しいサラサラした土層。
2．暗灰色土　砂礫を多量に含むサラサラした土層。
6号住居
3．暗灰色土　榛名二ツ岳軽石とFA火山灰の小塊を含む。
4．灰褐色土　榛名二ツ岳軽石とFA火山灰の小塊、焼土を含む。
5．灰褐色土　榛名二ツ岳軽石とFA火山灰の小塊、焼土を少量含む。
7．灰褐色土　白色の粒子と焼土を多量に含む。
10．灰黒色土　ロームの小塊と炭化物、焼土を多量に含む。特に炭化物が層をなしている。
11．灰黒色土　ロームの小塊と炭化物、焼土を多量に含む。
12．ローム層　地山のロームが崩れたもの。
13．灰黒色土　白色粒子と焼土とを含む。

第76図　1区5号住居　0　1:80　4m

1区6号住居（第77図　PL15・47　遺物観察表P.23・42）

位置　Cm・n－8G

形状　隅丸方形と推定されるが、西半分の大半は発掘区域外のため、全体形状はとらえられなかった。

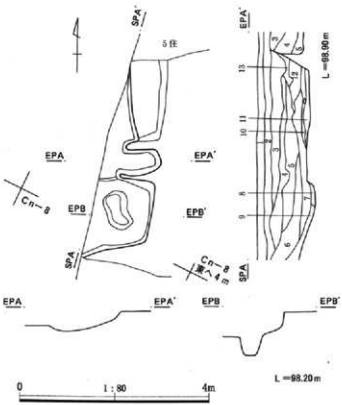
規模　長軸3.83m以上　短軸測定不能

壁高0.38m

面積　測定不能　　**長軸方位**　N－81°－E

竈　住居東壁中央よりやや南寄りに竈が構築されていた。確認長0.96m、燃焼部幅0.37m。袖の残存長は向かって右側が0.80m、左側が0.37m。煙道は残存する範囲で0.38m屋外に伸びている。

柱穴　主柱穴は調査範囲内で検出できなかった。



1区6号住居　SPA－SPA'

1．灰色土　水田耕作土。砂礫や角閃石安山岩を含むサラサラした土層。

2．灰色土　砂礫や鉄分凝集を多量に含むサラサラした土層。

3．暗灰色土　榛名二ッ岳軽石とFA火山灰の小塊を含む。

4．灰褐色土　榛名二ッ岳軽石とFA火山灰の小塊、焼土を含む。

5．灰褐色土　榛名二ッ岳軽石とFA火山灰の小塊、焼土を少量含む。

6．暗灰色土　白色の粒子が点在し、非常に粒子が細かく、やや粘性をおびる。

7．灰褐色土　白色の粒子と焼土を多量に含む。

8．灰黒色土　ロームの小塊と粒子と灰を多量に含む。

9．灰黒色土　ロームの小塊と炭化物を多量に含む。

10．灰黒色土　ロームの小塊と炭化物、焼土を多量に含む。特に炭化物が層をなしている。

11．灰黒色土　ロームの小塊と炭化物、焼土を多量に含む。

12．ローム層　地山のロームが崩れたもの。

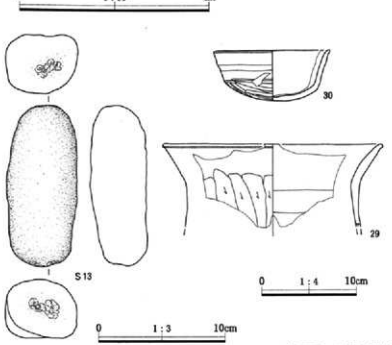
13．灰黒色土　白色粒子と焼土とを含む。

5号住居

3．黒褐色土　榛名二ッ岳軽石を多量に含み、更に焼土も含む。FA火山灰の塊が点在する。

4．灰褐色土　榛名二ッ岳軽石と焼土及びFA火山灰の小塊を含む。

5．暗灰色土　白色の小粒を多量に含み、更に焼土を含むしまった土層。



第77図　1区6号住居と出土遺物

周溝　周溝は検出されなかった。

貯蔵穴　南東隅に長径0.80m、短径0.52m、深さ0.42mの不定方形の貯蔵穴が検出された。

床面　竈石袖部の前で10cmほど北側の低い段差が検出された。

埋没土　埋没土中には榛名二ツ岳軽石や火山灰が多く含まれていた。土層の観察からは5号住居より新しい。

遺物と出土状況　遺物は埋没土中から出土した。土師器坏(30)、甕(29)、棒状の敲き石(S13)は埋没土中から出土した。図示した以外に土師器破片32点が出土した。

所見　出土遺物から6世紀中葉の住居と考えられる。竈左側の東壁は調査時に掘りすぎている。

1区11号住居

(第78・79図　PL15・16・47　遺物観察表P.24・42)

位置　Cr・s−13・14G

形状　基本的には正方形を想定していると思われるが、やや東壁が短くなっており、台形状を呈する。北東隅は32号溝に切られている。

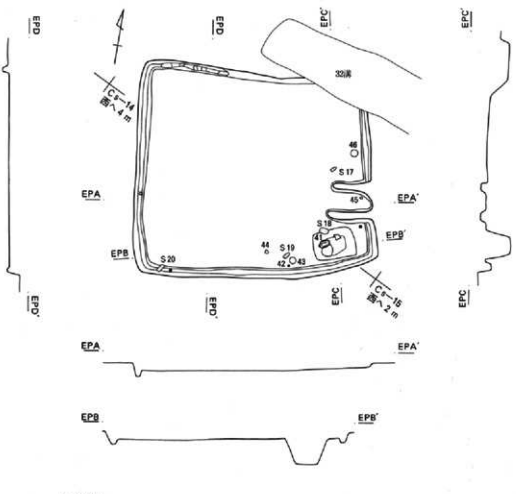
規模　長軸4.95m　短軸4.43m　壁高0.17m

面積　21.0㎡　　**長軸方位**　N−82°−E

竈　住居東壁中央よりやや南寄りに竈が構築されていた。確認長1.0m、燃焼部幅0.48m。袖の残存長は向かって右側が1.0m、左側が0.82m。残存する燃焼部は壁外に出ない。燃焼部奥に土師器手づくね土器(45)が使用面直上で出土した。

柱穴　柱穴は検出できなかった。

周溝　北壁沿い東半分と竈部分を除き全周する。概ね幅は22cm、深さは13cmである。



第78図　1区11号住居

北壁の西端部は周溝底面に長さ10cmほどの凹地が連なっていた。

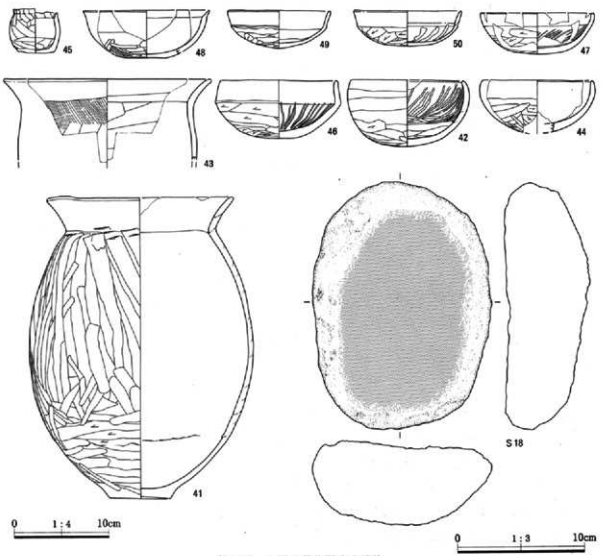
貯蔵穴　南東隅に長径0.8m、短径0.62m、深さ0.54mの隅丸方形の貯蔵穴が検出された。

床面　床面は平坦である。

遺物と出土状況　竈と貯蔵穴周辺に遺物が集中して出土した。土師器甕(41)はほぼ完形で、貯蔵穴から出土した。また貯蔵穴北縁には磨り石(S18)が貯蔵穴に落ち込むように出土した。また土師器坏(42)・甕(43)は貯蔵穴近くの床面直上で出土した。土師器坏(44)も南壁際床面直上で出土した。また土師器坏(46)は東壁際床面直上で完形で出土した。土師器坏(47・48・49・50)は埋没土中から出土した。使用痕跡のない棒状礫(S17・S19・S20)は竈左や南壁際の床面直上で出土した。

これら図示できた遺物のほかに土師器破片87点が出土した。

所見　出土遺物から5世紀後半の住居と考えられる。南東隅はやや北側に凹んだ不定型な形状を呈している。北壁西端の周溝底面の凹凸は何に起因するかは判断できなかった。大型の磨り石(S18)は粗粒輝石安山岩で、片面に顕著な磨り面が残っている。古墳時代の遺物としては少ないものであり、今後検討を要しよう。



第79図　1区11号住居出土遺物

1区14号住居（第80図　PL16・48　遺物観察表P.24・42）

位置　Cn・o－14・15G

形状　隅丸方形と推定されるが、西半分が後世の削平によって削られており、検出できなかった。また南西隅で4世紀の13号住居を切っている。

規模　長軸5.25m　短軸測定不能　壁高0.15m

面積　測定不能　　**長軸方位**　N－89°－E

竈　住居東壁中央よりやや南寄りに竈が構築されていた。確認長0.95m、燃焼部幅0.57m。袖の残存長は向かって右側が0.76m、左側が0.81m。残存する燃焼部は0.16m壁外に出ている。燃焼部に土師器甕の底部(64)が使用面直上で出土している。

柱穴　主柱穴と思われるＰ１を検出した。規模(長径×短径×深さ)は、26×26×11cmである。

周溝　竈部分を除き全周する。概ね幅は16cm、深さは5.2cmである。

貯蔵穴　南東隅に長径0.85m、短径0.83m、深さ0.55mの隅丸方形の貯蔵穴が検出された。底面は直径0.6mの円形である。

床面　床面は平坦である。

遺物と出土状況　主柱穴Ｐ１から竈、貯蔵穴周辺に遺物が集中して出土した。土師器坏(62)は貯蔵穴の埋没土上層で出土した。甕(63)は口縁部を欠くが、竈右袖外側で床面に食い込むような形で出土した。小型甕(66)は主柱穴Ｐ１南側床面直上で出土した。坩口縁部(65)は左袖脇床面直上で出土した。棒状の敲き石(Ｓ24)は東壁周溝内底面直上で出土している。隣接して使用痕跡のない棒状礫(Ｓ25)が出土している。またＳ23・Ｓ26も使用痕跡のない棒状礫で床面直上で出土した。Ｓ26には煤が付着していた。ほかは埋没土中の出土遺物である。図化できた遺物のほかに土師器破片26点が出土した。

所見　出土遺物から6世紀前半の住居と考えられる。竈右袖脇で出土した土師器甕(63)は口縁部を欠くが、袖の芯に使われていた可能性がある。また燃焼部で出土した土師器甕(64)は底部を上にして置かれており、支脚として使われていたとも推定できる。

1区16号住居

（第81図　PL16・17・48　遺物観察表P.25）

位置　C1～n－15・16G

形状　隅丸正方形と推定されるが、北西半分が30号溝および24号溝や後世の削平によって削られており、検出できなかった。

規模　長軸6.46m　短軸測定不能　壁高0.39m

面積　測定不能　　**長軸方位**　N－79°－E

竈　住居東壁中央よりやや南寄りに竈が構築されていた。確認長1.06m、燃焼部幅0.5m。袖の残存長は向かって右側が0.90m、左側が0.66m。残存する燃焼部は0.15m壁外に出ている。燃焼部ほぼ中央に使用痕のない礫が出土した。

柱穴　主柱穴と思われるＰ１・Ｐ２を検出した。規模(長径×短径×深さ)は、Ｐ１が56×42×42cm、Ｐ２が57×52×47cmである。

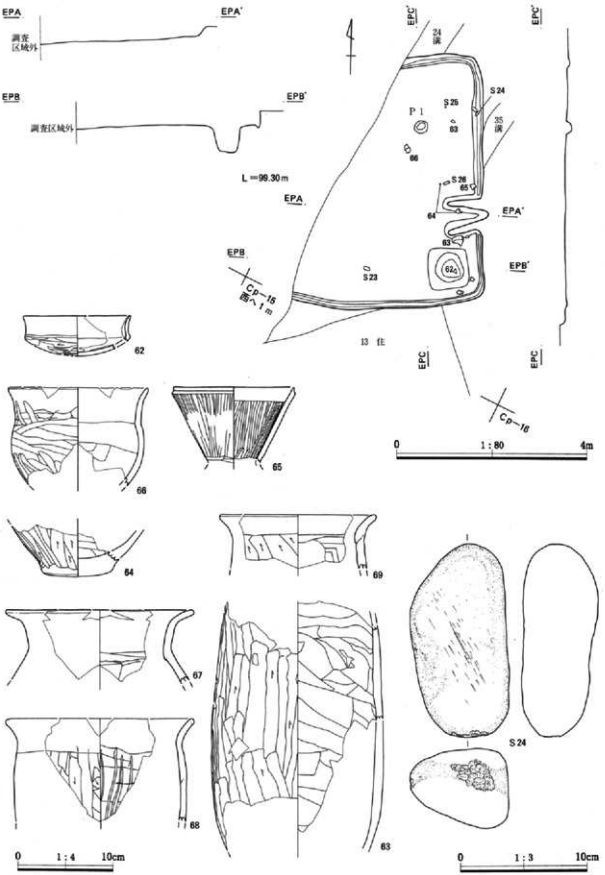
周溝　調査できた範囲では竈部分を除き全周する。概ね幅は33cm、深さは10cmである。

貯蔵穴　南東隅に長径0.8m、短径0.73m、深さ0.81mの隅丸方形の貯蔵穴が検出された。底面は長径0.48m、短径0.38mの隅丸方形である。底面直上で土師器甕破片が出土したが図化はできなかった。

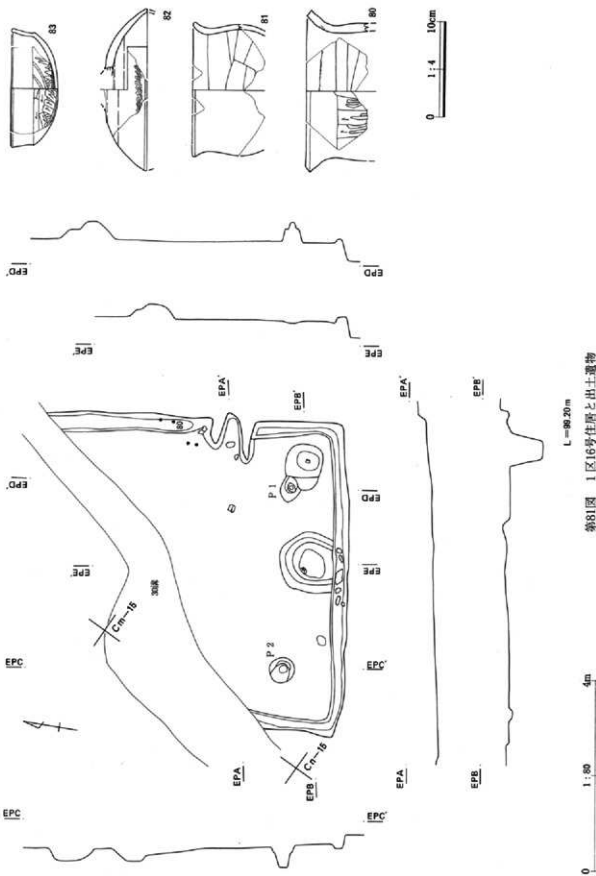
床面　南壁ほぼ中央に長径1.28m、短径1.10m、高さ３～５cmの馬蹄形状の施設が検出された。内部からは底面直上で土師器甕と坏の破片が小破片で図化できなかった。他の部分の床面は平坦である。

遺物と出土状況　主柱穴Ｐ１から竈、貯蔵穴周辺に遺物が集中して出土した。土師器小型甕(81)と須恵器長頸瓶(82)は貯蔵穴埋没土から、土師器坏(83)は住居埋没土から、甕(80)は東壁周溝内から出土した。南壁中央の馬蹄形状遺構に隣接する周溝内では棒状礫や扁平礫が6個集中して出土した。図化できた遺物のほかに土師器破片38点が出土した。

所見　出土遺物から6世紀前半の住居と考えられる。南壁の馬蹄形遺構は発掘調査区内では唯一の検出例である。機能については今回の調査では判断する所見は得られなかった。



第80図　1区14号住居と出土遺物



第81図　1区16号住居と出土遺物

1区18号住居（第82図　PL17・48　遺物観察表P.25・42）

位置　Co・p－17・18G

形状　正方形であるが、やや西壁が東壁より短く、台形を呈している。

規模　長軸3.95m　短軸3.83m　壁高0.34m

面積　14.48㎡　　**長軸方位**　N－80°－W

竈　住居東壁中央に竈が構築されていた。確認長1.08m、燃焼部幅0.5m。袖の残存長は向かって右側が0.78m、左側が0.83m。袖の先端および燃焼部の手前側には大型の角礫が崩落して出土した。燃焼部左壁沿いには打製石斧（S39）が出土した。被熱している。残存する燃焼部は0.24m壁外に出ている。

柱穴　主柱穴と思われるP1・P2・P3・P4を検出した。規模（長径×短径×深さ）は、P1が37×35×37cm、P2が37×33×38cm、P3が40×34×97cm、P4が40×40×40cmである。

周溝　竈部分を除き全周する。概ね幅は22cm、深さは7cmである。

貯蔵穴　南東隅に長径0.77m、短径0.55m、深さ0.67mの隅丸方形の貯蔵穴が検出された。堀り方は二段になっていて10cmほど掘り下げられた平坦面から、そのほぼ中央に直径0.45mの円形の土坑が掘り込まれていた。底面は直径0.28mの円形である。

床面　床面は平坦である。

遺物と出土状況　遺物は竈周辺と主柱穴P4の周辺に集中して出土した。土師器坏(89)はP4東側床面上6cmで出土した。土師器甕(88)は竈燃焼部から出土した破片とP4東側床面上7cmで出土した破片が接合した。土師器甕(87)は竈右袖前床面上9cmで出土した。隣接して出土した角礫（S38）は使用痕のない礫である。図化できた遺物のほかに土師器破片42点が出土した。

所見　出土遺物から6世紀中葉の住居と考えられる。竈から出土した打製石斧（S39）は被熱しており、竈の壁材として用いられたと考えられる。竈右前で出土した角礫（S38）も竈構築材として使われていたものであろう。

1区19号住居

（第83図　PL18・48　遺物観察表P.25・43・45）

位置　Cm～o－18・19G　　**形状**　隅丸正方形

規模　長軸6.76m　短軸6.2m　壁高0.37m

面積　42.27㎡　　**長軸方位**　N－89°－E

竈　住居東壁中央よりやや南側に竈が構築されていた。確認長1.30m、燃焼部幅0.49m。袖の残存長は向かって右側が0.87m、左側が0.82m。残存する燃焼部は0.47m壁外に出て、煙道部となっていた。竈からの出土遺物はない。

柱穴　主柱穴と思われるP1・P2・P3・P4を検出した。規模（長径×短径×深さ）は、P1が40×24×29cm、P2が38×35×54cm、P3が46×39×67cm、P4が39×37×40cmである。P1の北側には直径30cm、深さ44cmのピットが検出されている。

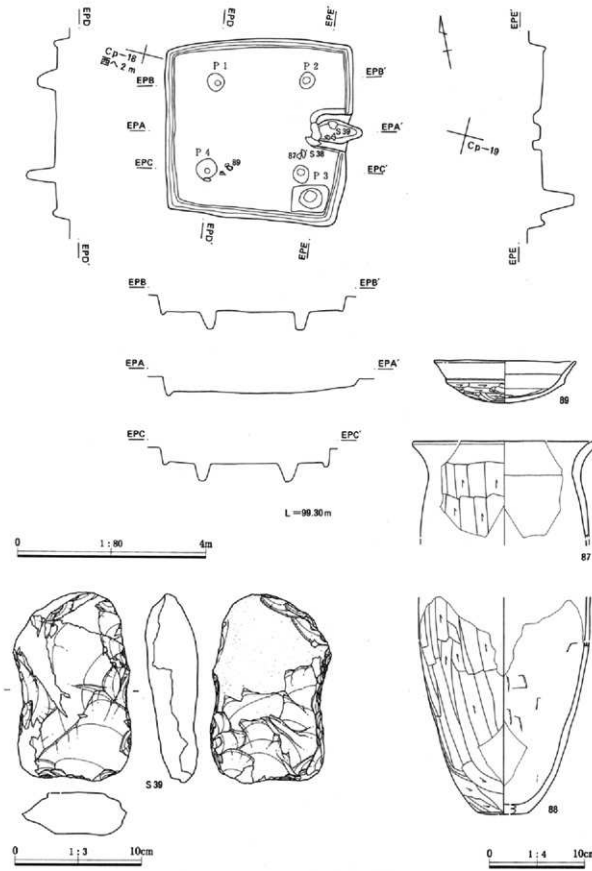
周溝　竈部分を除き全周する。概ね幅は28cm、深さは13cmである。

貯蔵穴　南東隅に長径1.5m、短径1.1m、深さ0.93mの隅丸長方形の貯蔵穴が検出された。堀り方は二段になっていて13cmほど掘り下げられた平坦面から、そのほぼ中央に長径0.67m、短径0.48m、深さ0.69mの隅丸方形の土坑が掘り込まれていた。

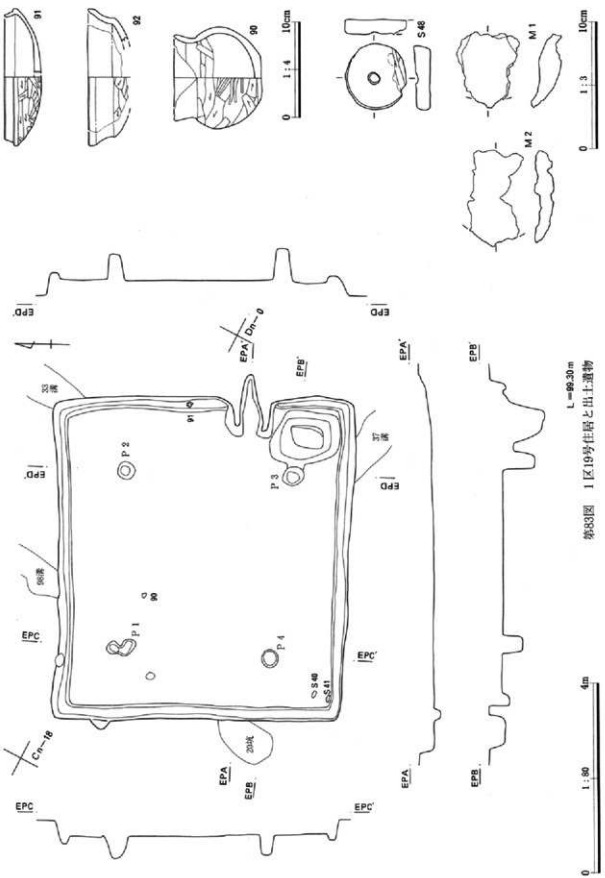
床面　床面は平坦である。

遺物と出土状況　出土遺物はあまり多くない。土師器坏(91)は東壁周溝内から出土した。土師器小型甕(90)は北西部床面直上で出土した。土師器坏(92)・軽石製紡錘車（S48）は埋没土中から出土した。また埋没土中から小形の椀形滓が2点出土した。住居南西隅には使用痕のない棒状礫2点が出土し、埋没土中からも6点の棒状礫が出土している。うち3点には被熱によるハゼが認められた。図化できた遺物のほかに土師器破片51点が出土した。

所見　出土遺物から6世紀前半の住居と考えられる。埋没土中から出土した椀形滓については本住居に伴うものとの確証はない。床面にも鍛冶遺構の痕跡は認められなかった。金属学的調査によれば、銅精錬の廃棄物と見られる。



第82図　1区18号住居と出土遺物



第33図　1区19号住居と出土遺物

1区22号住居

（第84・85図　PL7・19・49　遺物観察表P.25・26・43）

位置　Dl～n－0～2G

形状　隅丸正方形である。南壁中央に間口2.70m、南端幅1.80m、東西幅(奥行き)1.48mの張り出し部が施設されていた。また北西部には古墳時代前期中葉～後葉の23号住居と重複していた。

規模　長軸6.20m　短軸6.0m　壁高0.20m

面積　38.81㎡　**長軸方位**　N－63°－E

竈　住居東壁中央よりやや南側に竈が構築されていた。確認長0.93m、燃焼部幅0.70m。袖の残存長は向かって右側が0.56m、左側が0.55m。残存する燃焼部は0.38m壁外に出て、煙道部となっていた。竈燃焼部左脇から棒状礫が出土した。

柱穴　主柱穴と思われるP1・P2・P3・P4を検出した。規模(長径×短径×深さ)は、P1が80×69×50㎝、P2が45×39×48㎝、P3が33×30×37㎝、P4が40×36×53㎝である。

周溝　竈部分を除き、南張り出し部にも連続して全周する。概ね幅は19㎝、深さは6㎝である。

貯蔵穴　南東隅に一辺0.65m、深さ0.39mの正方形貯蔵穴が検出された。掘り方は二段になっていて8㎝ほど掘り下げられた平坦面から、そのほぼ中央に長径0.76m、短径0.68m、深さ0.38mの隅丸方形の土坑が掘り込まれていた。底面は一辺0.4mの隅丸正方形である。東縁から凹み石(S80)が底面直上で出土した。また使用痕のない棒状礫(S81)が貯蔵穴底面上4㎝で出土した。

床面　床面は平坦であるが、南張り出し部の床面はやや下がっていた。

遺物と出土状況　図示した土師器は本住居の埋没土中の出土遺物として取り上げられた遺物であるが、北西部に重複した23号住居の出土遺物である可能性が高い。一方、礫は22号住居南張り出し部周辺に集中して礫が数多く出土した。このうち使用痕のある石器は図示した5点である。敲き石(S79・S91)はそれぞれ竈周辺と中央部床面直上で出土した。両側縁に集合打痕による抉りのある礫(S92)は中央部床面上6㎝で出土した。敲き石・磨り石(S88)を始め、使用痕のない棒状礫6点は南張り出し部床面直上で出土した。S86やS90は煤が付着していた。図化できた遺物のほかに土師器破片171点が出土した。

所見　図化できなかった土器破片から6世紀前半の住居と考えられる。

また敲打痕のある礫は重複部分ではないところで出土したが、同種の遺物は古墳時代前期中葉～後葉の住居に出土している。6世紀段階までこれらの礫石器が使用されていたかどうかは検討を要する。

1区25号住居

（第86図　PL19・20・49　遺物観察表P.26・44）

位置　Dn・o－5・6G

形状　隅丸正方形である。北西隅は47号井戸に切られている。

規模　長軸4.90m　短軸4.61m　壁高0.48m

面積　20.43㎡　**長軸方位**　N－52°－E

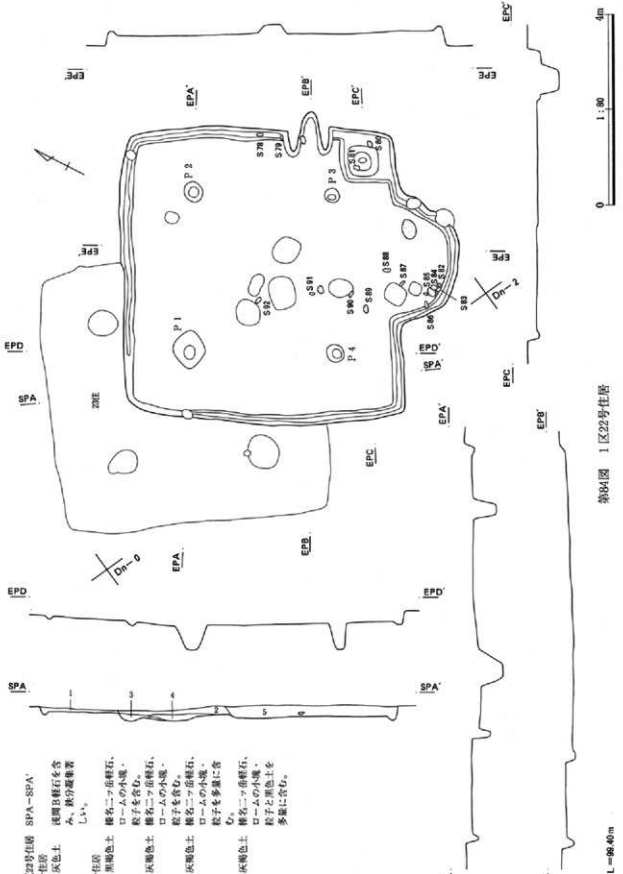
竈　住居南壁中央よりやや東側に竈が構築されていた。確認長1.01m、燃焼部幅0.50m。袖の残存長は向かって右側が0.73m、左側が0.74m。残存する燃焼部は0.27m壁外に出て、煙道部となっていた。竈左

袖の先端からは芯材として土師器甕(172)が倒立して使われていた。(PL19－7)また土師器坏(178)は172の内部埋没土から出土した。燃焼部中央には礫が据えられていた。(PL19－8)

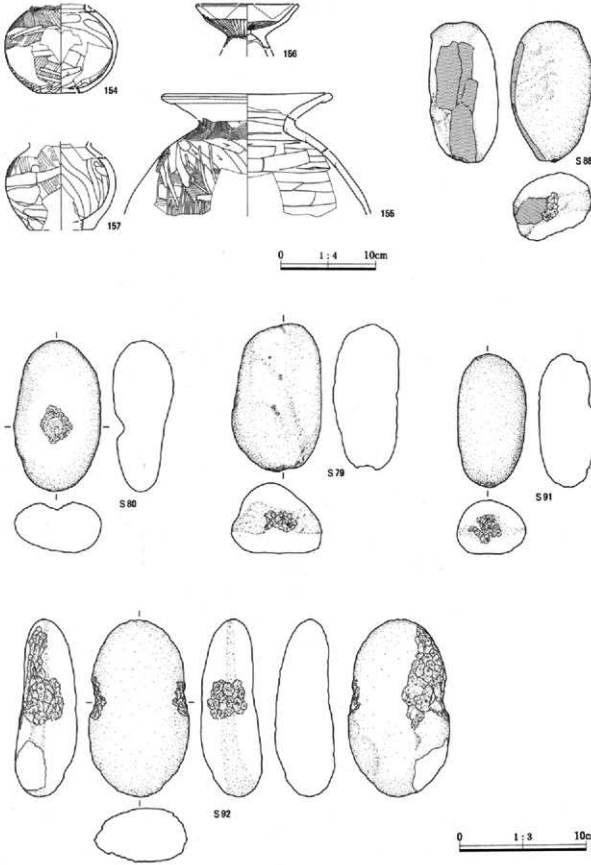
柱穴　主柱穴と思われるP1・P2・P3・P4を検出した。規模(長径×短径×深さ)は、P1が37×33×14㎝、P2が69×64×39㎝、P3が45×39×43㎝、P4が40×32×57㎝である。

周溝　竈部分を除き全周する。概ね幅は12㎝、深さは10㎝である。

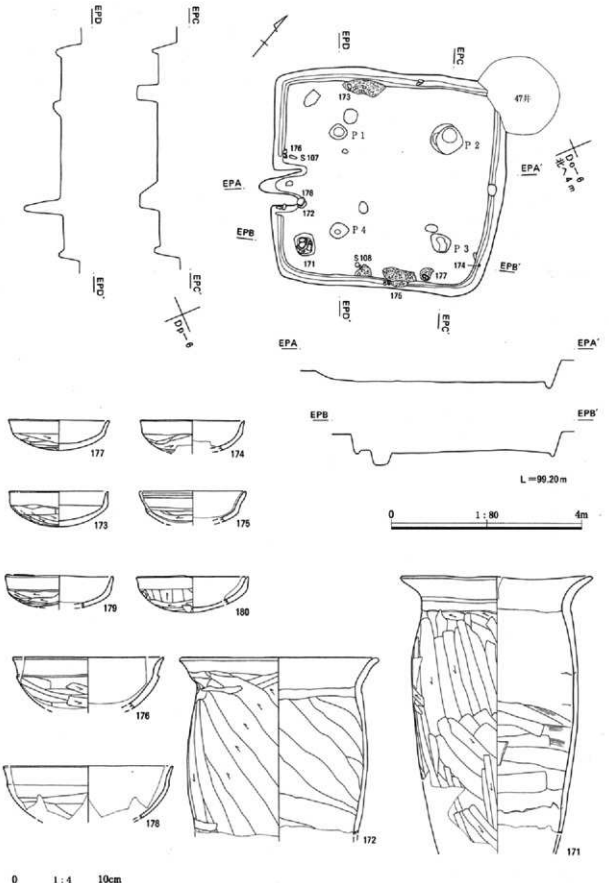
貯蔵穴　南東隅に長径0.49m、短径0.43m、深さ0.29mの隅丸方形の貯蔵穴が検出された。貯蔵穴からは土師器甕(171)が斜めに落ち込むように出土した。底部は欠損している。



第84図 1区22号住居



第85図　1区22号住居出土遺物



第86図　1区25号住居と出土遺物

床面　床面は平坦である。西壁際・東壁際に焼土塊が床面から出土している。

遺物と出土状況　遺物は竈から貯蔵穴、東壁際にかけて集中して出土した。土師器坏(176)は竈右壁際床面直上で出土した。土師器坏(174・175)は東壁周溝内から、坏(177)は東壁沿い床面上4㎝で出土した。坏(173)は西壁際床面上5㎝で出土した。また床面近くで14点の比較的大型の礫が出土したが、整理時に遺物の所在が不明で礫の詳細は把握できない。図化できた遺物のほかに土師器破片95点、須恵器破片1点が出土した。

所見　出土遺物から6世紀後半の住居と考えられる。本住居は発掘区域内では唯一の南竈の住居である。竈燃焼部に据えられた礫は支脚である。

1区27号住居

（第87図　PL20・50　遺物観察表P.26・27）

位置　Ch・i－8・9G

形状　隅丸正方形と推定されるが、南西半分は41号溝と後世の削平で削られていた。

規模　長軸4.45m　短軸測定不能　壁高0.32m

面積　測定不能　**長軸方位**　N－74°－E

竈　住居東壁中央よりやや南側に竈が構築されていた。確認長0.96m、燃焼部幅0.54m。袖の残存長は向かって右側が0.84m、左側が0.86m。残存する燃焼部は0.11m壁外に出ていた。竈から多くの出土遺物がある。土師器甕(227)は左袖および燃焼部左側中央で出土した遺物が接合した。甕(228・229)は燃焼部右側中央で出土した。同一個体と思われたので図上復元した。甑(184)は竈焚き口床面直上で出土。

柱穴　主柱穴と思われるP1・P2を検出した。規模(長径×短径×深さ)は、P1が27×22×48㎝、P2が27×23×33㎝である。

周溝　検出されなかった。

貯蔵穴　南東隅に直径0.55m、短径0.49m、深さ0.47mの楕円形の貯蔵穴が検出された。

床面　床面は平坦である。

遺物と出土状況　前述したように竈から多くの完形に近い遺物が出土した。土師器坏(185)、甕(186)は貯蔵穴埋没土中から出土した。土師器小型甕(187)は住居埋没土中から出土した。図化できた遺物のほかに土師器破片198点が出土した。

所見　出土遺物から6世紀前半の住居と考えられる。4本あると考えられる主柱穴であるが、南西部の主柱穴は削られて見つからなかった。しかし、南東部の主柱穴は検出漏れである。

1区28号住居

（第88図　PL20・21・50　遺物観察表P.27）

位置　Cf～h－8・9G

形状　隅丸長方形と推定されるが、北西部が調査区域外のため確認できなかった。

規模　長軸6.03m　短軸3.50m　壁高0.31m

面積　測定不能　**長軸方位**　N－2°－E

竈　住居東壁中央よりやや南側に竈が構築されていた。確認長1.20m、燃焼部幅0.60m。袖の残存長は向かって右側が1.0m、左側が0.96m。残存する燃焼部は0.24m壁外に出ていた。燃焼部中央に土師器高坏(197)が倒立して置かれていた。また燃焼部左壁沿いで土師器高坏坏部(199)が出土した。

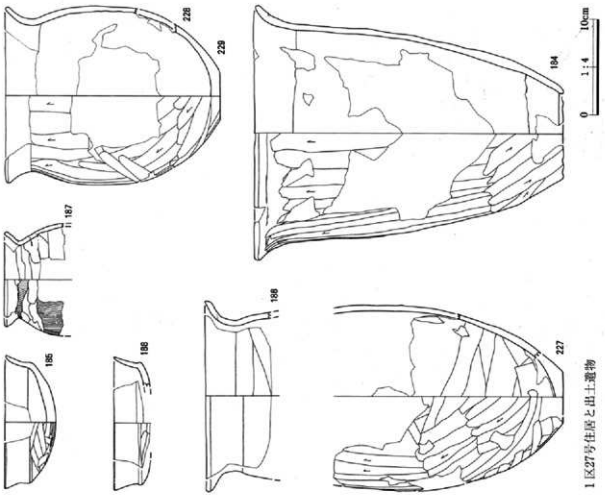
柱穴　主柱穴と思われるピットは検出されなかった。

周溝　調査できた範囲内では竈部分を除き全周する。概ね幅は23㎝、深さは10㎝である。

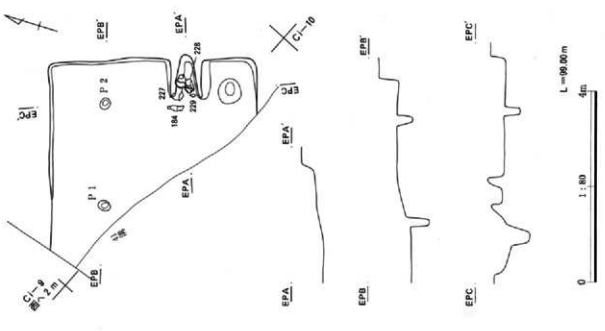
貯蔵穴　北東隅と南東隅に貯蔵穴と思われる土坑が検出された。北東隅の土坑は長径0.72m、短径0.70m、深さ0.52mの楕円形で、底面直上で土師器坩(190)が出土した。南東隅の土坑は長径0.98m、短径0.70m、深さ0.96mの隅丸長方形である。掘り方は二段になっていて西半分が13㎝ほど掘り下げられた平坦面から、東半分に直径0.70m、深さ0.79mの円形の土坑が掘り込まれていた。

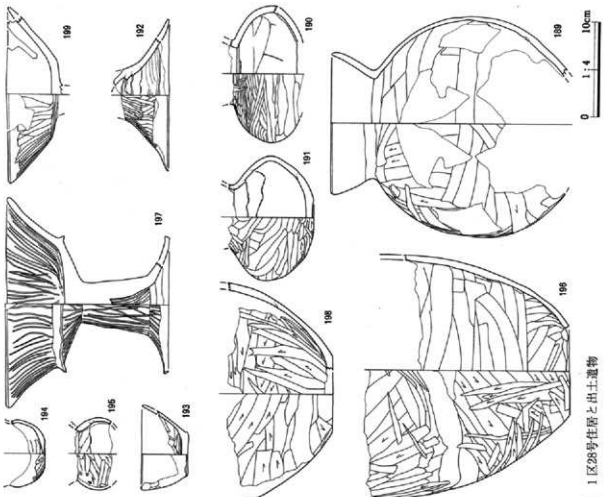
床面　床面は平坦である。

遺物と出土状況　出土遺物は竈と貯蔵穴周辺に集中して出土した。土師器甕(189)は竈北の東壁沿いに



第87図　1区27号住居と出土遺物





第88図　1区28号住居と出土遺物

出土した土器と南壁貯蔵穴西縁で出土した土器が接合した。土師器甑(196)は南壁周溝縁と東壁周溝から出土した破片が接合した。甕(198)は南壁周溝内から出土した。土師器坩(191)は南部壁寄り床面上10cmで出土した。手づくね土器３個体(193・194・195)は貯蔵穴西縁の南周溝内から出土した。竈前の床面直上で礫が２点出土しているが、整理時に遺物が不明であり、詳細は確認できなかった。

所見　出土遺物から５世紀後半の住居と考えられる。住居の形態は極端に長軸が長い長方形であり、形状に特徴がある。

１区29号住居

（第89・90図　PL21・50・51　遺物観察表P.28）

位置　Cf・g－17・18G

形状　基本は隅丸正方形であるが、南壁が短く台形。

規模　長軸3.91ｍ　短軸3.45ｍ　壁高0.18ｍ

面積　13.3㎡　　**長軸方位**　N－67°－E

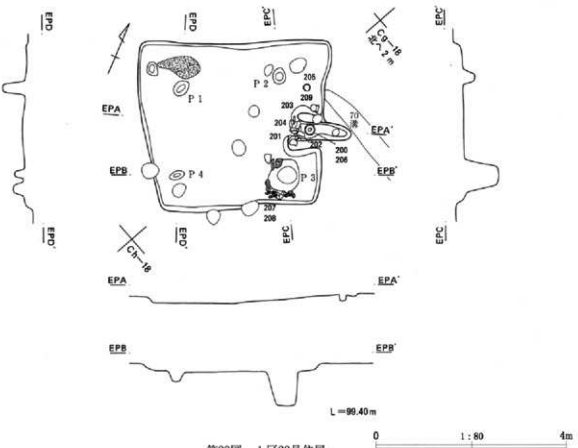
竈　住居東壁ほぼ中央に竈が構築されていた。確認長1.46ｍ、燃焼部幅0.46ｍ。袖の残存長は向かって右側が0.81ｍ、左側が0.67ｍ。残存する燃焼部は0.60ｍ壁外に出て、煙道部となっていた。竈からは多くの土器が出土している。

柱穴　主柱穴と思われるＰ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４を検出した。規模(長径×短径×深さ)は、Ｐ１が35×29×45cm、Ｐ２が35×27×24cm、Ｐ３が72×65×72cm、Ｐ４が34×18×22cmである。

周溝　周溝は検出されなかった。

貯蔵穴　貯蔵穴は検出されなかった。

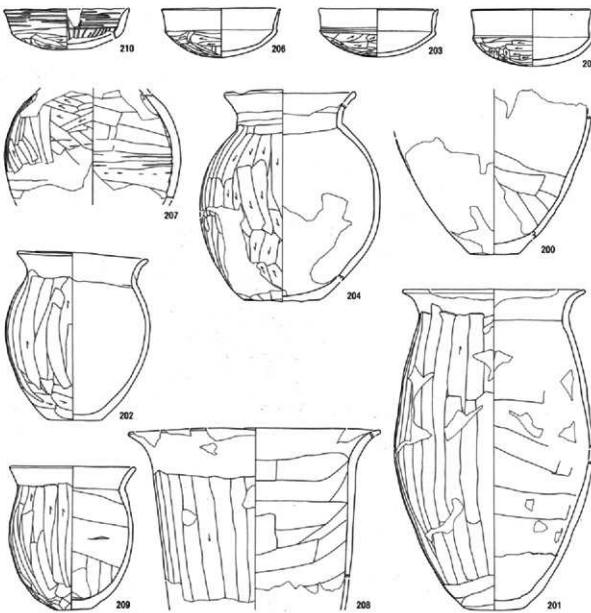
床面　床面は平坦である。新しいピットが多く掘られていて、住居の一部を壊している。北西隅のＰ１北側には炭化材が集中して出土したが、部材の構造を確認できるような出土状態ではなかった。



第89図　１区29号住居

遺物と出土状況　遺物は竈とＰ３を中心に出土している。燃焼部中央には棒状の礫の上に土師器坏(206)が伏せて置かれ、その上に土師器甕(200)がのっていた。竈焚き口には向かって左から土師器甕(204)・土師器小型甕(202)・土師器甕(201)が横位に連結されたものが崩落した状態で出土した。土師器坏(203)はその下の使用面直上で出土した。土師器坏(205)は竈左の床面直上で出土した。小型甕(209)は竈左袖脇床面直上でほぼ完形で出土した。土師器甕(207・208)はＰ３南縁の床面直上で出土した。Ｐ３西側や竈周辺から礫が出土しているが、整理時に遺物が不明で詳細は確認できなかった。図化できた遺物のほかに縄文土器破片４点、土師器破片83点が出土した。

所見　出土遺物から５世紀後半の住居と考えられる。平面形状が台形になってしまっているが、南西隅は掘り足らなかった可能性がある。Ｐ３は１基のみ規模が大きく特異である。南東部の貯蔵穴の可能性も考えられるが、主柱穴の柱通りを重視して主柱穴とした。



第90図　１区29号住居出土遺物

1区30号住居

（第91図　PL21・22・51　遺物観察表P.28）

位置　Cg・h－18・19G

形状　基本形は隅丸長方形であるが西壁より東壁の方が長くなっており台形を呈する。南壁の一部は50号溝に切られていて全体形状を検出できなかった。

規模　長軸4.45m　短軸3.37m　壁高0.14m

面積　14.2㎡　　**長軸方位**　N－70°－E

竈　住居東壁ほぼ中央に竈が構築されていた。確認長0.97m、燃焼部幅0.46m。袖の残存長は向かって右側が0.93m、左側が0.97m。残存する燃焼部は壁外には出ない。燃焼部中央から土師器高坏(211)が倒立して出土した。

柱穴　主柱穴と思われるピットは検出されなかった。

周溝　竈部分と貯蔵穴周辺を除き全周する。概ね幅は18cm、深さは7cmである。

貯蔵穴　南東隅に貯蔵穴が検出された。堀り方は二段になっていて長径1.10m、短径1.04mの範囲を13cmほど掘り下げられた平坦面から、一辺0.56m、深さ0.53mの隅丸正方形土坑が掘り込まれていた。

床面　床面は平坦である。新しい時期のピットが多数検出され、床面を壊している。

遺物と出土状況　出土遺物はあまり多くない。竈から出土した土師器高坏(211)が唯一図化できた遺物である。このほかに土師器破片37点が出土した。

所見　出土遺物から5世紀後半の住居と考えられる。

1区31号住居

（第92・93図　PL22・50・51　遺物観察表P.28・29・44）

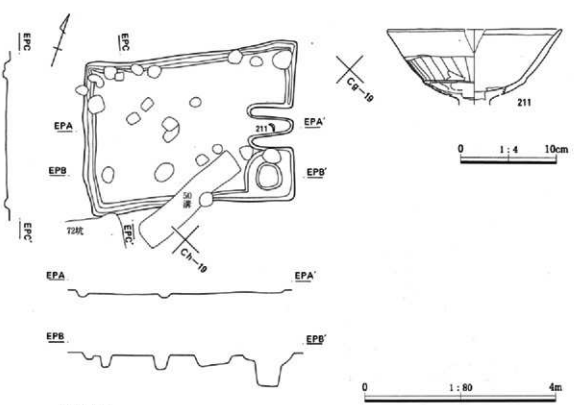
位置　Cg～i－17・18G

形状　隅丸正方形と推定されるが、南壁は33号住居に切られており、確認できなかった。西壁の中央部は74号土坑に切られており、確認できなかった。また南東隅は73号土坑に切られて確認できなかった。

規模　長軸5.39m　短軸測定不能　壁高0.22m

面積　測定不能　　**長軸方位**　N－83°－E

竈　住居東壁中央よりやや南側に竈状の粘土の広が



第91図　1区30号住居と出土遺物

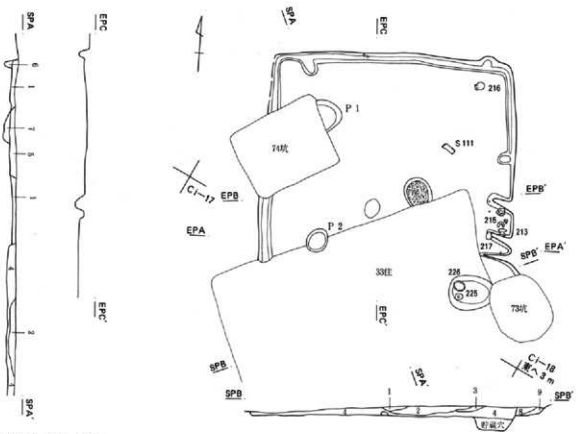
りが検出された。竈として記録した。確認長0.55m、幅1.38m。袖と思われる粘土の帯は全体で3列検出された。新旧2時期の竈を示すのか、崩落粘土を袖としたかについては明確でない。この粘土帯の残存長は向かって右側から0.63m、0.58m、0.58mである。残存する燃焼部は壁外に出ていない。この竈状の部分からは土器が集中して出土した。土師器高坏(213)は中央部使用面直上から、甕(215)はその左側使用面上4cmで出土した。高坏(217)は広がりの右端から使用面直上で出土した。また坏(214)は竈埋没土から出土した。

柱穴　主柱穴と思われるP1・P2を検出した。規模(長径×短径×深さ)は、P1が43以上×67×18cm、P2が53×44×16cmである。

周溝　調査できた範囲では竈部分を除き全周する。概ね幅は22cm、深さは15cmである。

貯蔵穴　南東隅に長径0.97m、短径0.76m、深さ0.51mの楕円形の貯蔵穴と考えられる土坑が検出された。

床面　床面は平坦である。中央部よりやや竈よりのところに長径0.57m以上、短径0.57m、深さ0.04m



1区31号住居　SPA－SPA'

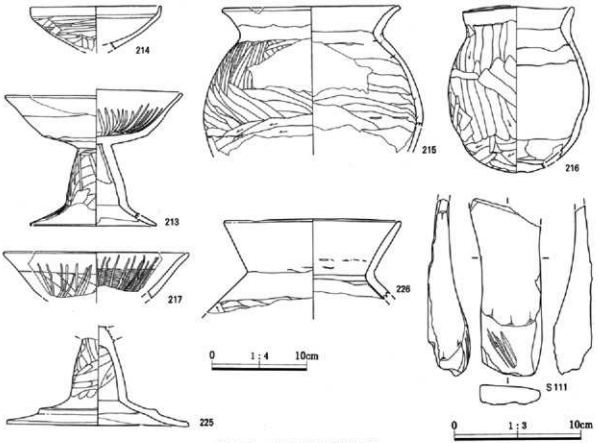
31号住居

5．褐色土　ロームの小塊を少量含む。
6．暗黄褐色土　ロームの大小の塊が詰まっている。
7．暗褐色土　ロームと黒色土が混じり合っている。
8．明褐色土　ロームと焼土を少量含む。
9．黒色土　浅間C軽石を含む。

33号住居

1．黒色土　浅間C軽石を含む。
2．黄褐色土　ロームの大小の塊を多量に含む。焼土を少量含む。
3．黒色土　浅間C軽石を含み、ローム小塊を少量含む。
4．明褐色土　ロームの小塊を多く含む。

第92図　1区31号住居



第93図　1区31号住居出土遺物

の楕円形の凹地が検出され、内部は焼土化していた。これが炉であるかどうかは判断できなかった。

遺物と出土状況　出土遺物は竈周辺に出土した。土師器甕(226)は貯蔵穴底面上19cmで、高坏脚部(225)も貯蔵穴底面上15cmで出土した。土師器小形甕(216)は北東隅床面直上ではほぼ完形で出土した。砥石(S111)は北東部床面直上で出土した。

所見　出土遺物から5世紀中葉の住居と考えられる。73号土坑の西側に検出された土坑は本住居の貯蔵穴の可能性が大きく、P1・P2の位置から推してもこの土坑の南縁が、住居の南壁のラインになると考えられる。P1・P2は浅く他と異質であるが、その位置から主柱穴とした。中央部の焼土の凹地については炉の可能性も否定できない。出土遺物の時期や竈が明瞭でなかったことを考えると、竈の導入期の可能性があり、両者の併用も考えられよう。

1区33号住居

(第94・95図　PL22・52　遺物観察表P.29)

位置　Ch・i−17・18G

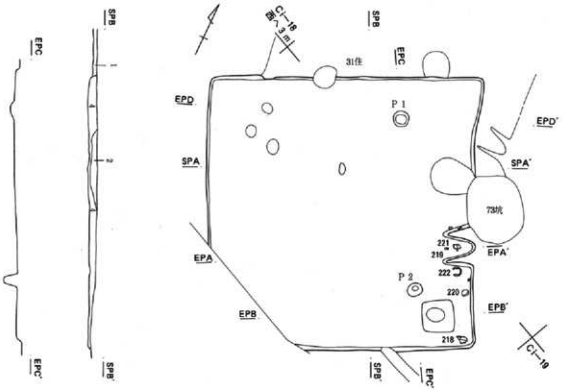
形状　隅丸正方形である。南西部は後世の削平によって削られていた。また竈左脇の東壁は73号土坑に切られていた。

規模　長軸5.76m　短軸5.65m　壁高0.13m

面積　32.75㎡　　**長軸方位**　N−67°−E

竈　住居東壁中央よりやや南に竈が構築されていた。確認長0.63m、燃焼部幅0.52m。袖の残存長は向かって右側が0.63m、左側が0.62m。残存する燃焼部は0.06m壁外に出ていた。燃焼部中央から土師器甑(219)と坏(221)が使用面直上で出土した。

柱穴　主柱穴と思われるP1・P2を検出した。規模(長径×短径×深さ)は、P1が33×32×7cm、P2が32×28×20cmである。西側の主柱穴2本は検出できなかった。



1区33号住居　SPA－SPA'

31号住居

5．褐色土　　ロームの小塊を少量含む。

6．暗黄褐色土　ロームの大小の塊が混まっている。

7．暗褐色土　　ロームと黒色土が混じり合っている。

8．明褐色土　　ロームと焼土を少量含む。

9．黒色土　　浅間C軽石を含む。

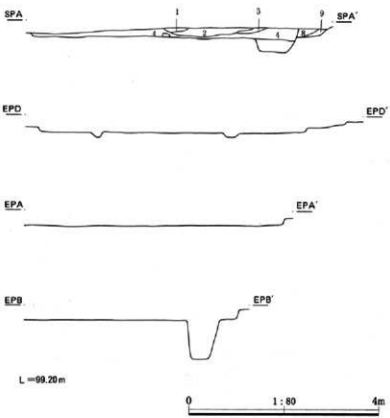
33号住居

1．黒色土　　浅間C軽石を含む。

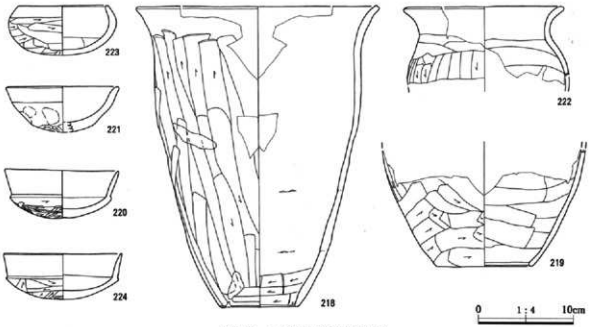
2．黄褐色土　　ロームの大小の塊を多量に含む。焼土を少量含む。

3．黒色土　　浅間C軽石を含み、ローム小塊を少量含む。

4．明褐色土　　ロームの小塊を多く含む。



第94図　1区33号住居



第95図　1区33号住居出土遺物

周溝　周溝は検出されなかった。

貯蔵穴　南東隅に長径0.69m、短径0.67m、深さ0.83mの隅丸正方形の貯蔵穴が検出された。

埋没土　浅間C軽石とローム粒を含む黒色土・褐色土で埋まっていた。

遺物と出土状況　遺物は竈と貯蔵穴周辺に集中して出土した。土師器甕(222)は竈右袖脇に接して床面直上で出土した。土師器坏(220)は貯蔵穴近くの東壁際に床面上5cmで出土した。土師器甑(218)は南東隅壁際床面上7cmで出土した。坏(224)は竈埋没土中から出土した。図化できた遺物のほかに縄文土器3点、土師器破片51点が出土した。

所見　出土遺物から6世紀初頭の住居と考えられる。北東部は31号住居と重複している部分で、壁部分が不明瞭であり、北東隅はやや東に膨らむようになったが、本来は直線的になると考えられる。検出された柱穴は2本とも深度が浅く、異質である。掘り足らなかった可能性も否定できない。北西部には小ピットが3基検出されている。深さはP1と同程度であるが、全体の位置関係から主柱穴とはしなかった。

1区36号住居（第96図　PL23　遺物観察表P.29）

位置　Cg・h－16・17G

形状　隅丸正方形と推定されるが、南半分を37号住居に切られており、全体形状は確認できなかった。また、北東隅は129号土坑に切られている。北西部は51号溝に切られていた。また縄文時代の82号土坑が床面で検出された。

規模　推定東西長5.20m　壁高0.02m

面積　測定不能　　**東壁方位**　N－38°－E

竈　住居東壁に竈が構築されていた。確認長0.90m、燃焼部幅0.53m。袖の残存長は向かって右側が0.92m、左側が0.92m。残存する燃焼部は0.05m壁外に出ていた。

柱穴　主柱穴と思われるピットは検出されなかった。

周溝　周溝は検出されなかった。

貯蔵穴　貯蔵穴は検出されなかった。

床面　床面は平坦である。

遺物と出土状況　出土遺物はあまり多くはない。土師器坏(231)は竈右袖上部から出土した。図化できた遺物のほかに土師器破片21点が出土した。

所見　出土遺物と37号住居との重複関係から6世紀前半の住居と考えられる。

１区333号土坑（第96図　PL23・52　遺物観察表P.29・46）

位置　Ch－17G

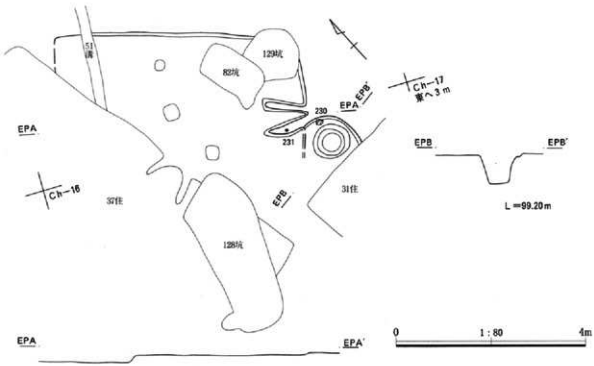
形状　円形。南東部は31号住居に切られている。

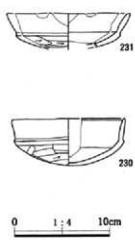
規模　長径0.80m　短径0.73m　壁高0.59m

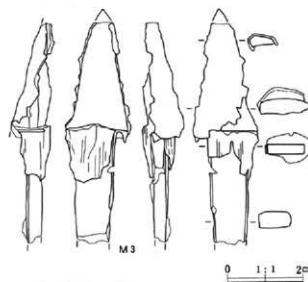
断面形　底面は平らで、斜め上方に開くように掘られていた。北西部には10cmほど外側に５～６cmの高さの段が回っている。

遺物と出土状況　北縁で土師器坏〔230〕が底面直上で出土した。この土坑周辺から鉄製刀子〔Ｍ３〕が出土した。

所見　当初１区36号住居に先行する住居の貯蔵穴だけが残ったとの所見で調査したが、住居と確定できないことから単独の土坑として報告した。刀子（Ｍ３）は茎の木質部と鞘状の物質（材質は不明）が残存している。鉄の金属学的調査では古墳時代の鉄と理解できる分析値が出ている。







第96図　１区36号住居・333号土坑と出土遺物

1区37号住居

（第97～99図　PL23・52・53　遺物観察表P.30・31・44）

位置　Cg～i－15・16G

形状　正方形と推定されるが、北西隅は88号土坑・52号溝・53号溝・54号溝に切られている。北壁東半分は86号土坑に切られている。南壁ほぼ中央は75号土坑に切られている。南東隅は128号土坑と重複しており、南壁は不明瞭であった。128号土坑は本住居に先行するが時期は不明である。

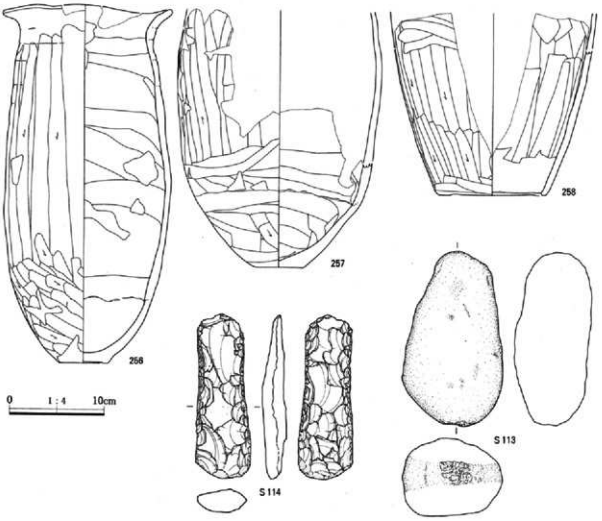
規模　長軸7.31m　短軸7.19m　壁高0.13m

面積　51.75m²　　**長軸方位**　N－13°－W

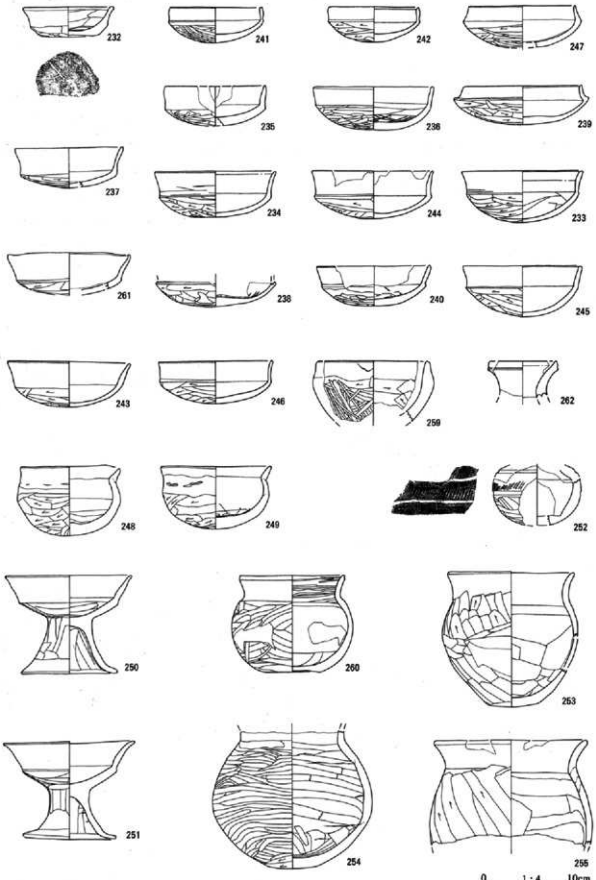
竈　住居東壁中央よりやや南側に竈が構築されていた。確認長0.67m、燃焼部幅0.84m。袖の残存長は向かって右側が0.80m、左側が0.62m。残存する燃焼部は壁外に出ていない。燃焼部は土師器坏(245)、焚き口部で坏(247)が使用面直上で出土している。

柱穴　主柱穴と思われるP1・P2・P3・P4を検出した。規模(長径×短径×深さ)は、P1が23×13×22cm、P2が52×20×33cm、P3が35×30×26cm、P4が43×35×27cmである。P1は52号溝底面で検出したため浅い。4本想定される主柱穴のうち南東隅の柱穴は検出できなかった。P3・P4は隣接している。　**周溝**　周溝は検出されなかった。

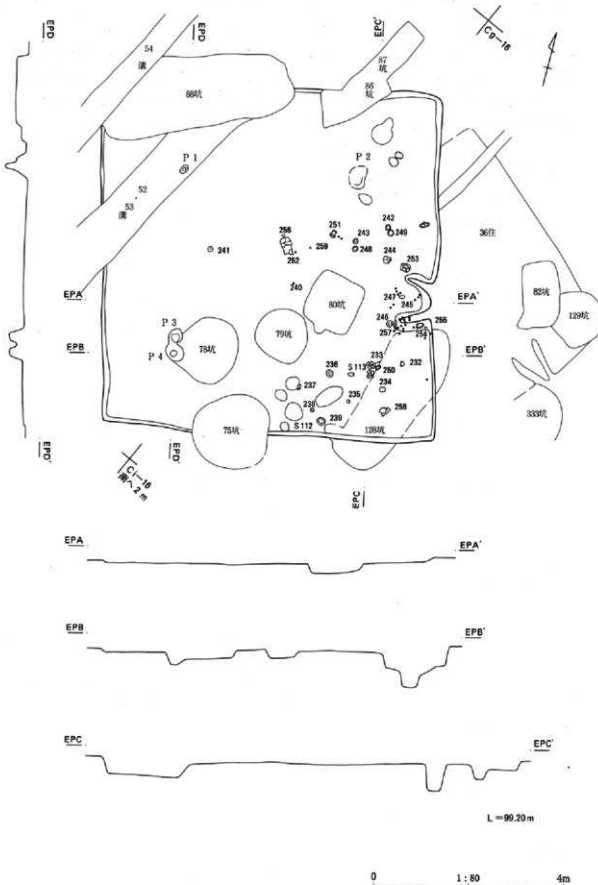
貯蔵穴　貯蔵穴があったと予想される南東隅には128号土坑が重複しており、明確に貯蔵穴を確認することはできなかった。



第97図　1区37号住居出土遺物（1）



第98図　1区37号住居出土遺物（2）



第99図　1区37号住居

床面　床面は平坦である。南半部には78号・79号・80号土坑が重複し、床面を壊している。

遺物と出土状況　出土遺物は竈を中心として住居南東部に集中して出土している。土師器坏は図化できるだけでも17個体を数える。坏(232・233・234・235・236・237・238・239)はほぼ南東隅床面直上で出土した。土師器高坏(250)は南東隅床面直上で出土した。甑(258)も南東隅床面直上で出土した。なおこの土器は1区27号住居貯蔵穴出土の土器と接合した。坏(246)は竈右袖前床面直上で出土した。土師器壺(254)・甕(255)は竈右脇床面上7㎝と3㎝で出土した。土師器坏(240・241・243)・土師器鉢(248)・土師器高坏(251)は中央部床面直上で出土した。また須恵器甕(252)・土師器甕(256)・鉢(259)は中央部床面上10㎝前後で出土した。土師器坏(242・244)・鉢(249)・小型甕(253)は中央部東より竈左脇の床面直上で出土した。敲き石(S113)は南東隅床面上4㎝で出土した。また掘没土中から打製石斧(S114)が出土した。図化できた遺物のほかに縄文土器破片2点、土師器破片161点、須恵器破片1点が出土した。

所見　出土遺物から6世紀前半の住居と考えられる。多量の土器が完形に近い状態で出土した。特に坏の数は多い。本住居と128号土坑の関係は最終的には土坑が住居より古いと判断した。当初住居の南壁は不明瞭で掘り過ぎてしまい、128号土坑の南端を検出した。住居南東隅では住居床面のレベルで完形に近い土器が出土したため、本住居の床面および東壁を確認することができた。

1区128号土坑（第106図）

位置　Ch－16G

形状　楕円形。37号住居南東隅に先行する。

規模　長径3.46m　短径1.23m

壁高南半0.36m　北半0.88m

長軸方位　N－22°－E

断面形　底面の南半は平坦で、北半は二段に掘り込まれている。北半は長径1.46m、短径0.96m、深さ0.13mの楕円形に掘られた北西隅が直径0.5m、深さ0.26mの円形に掘り込まれている。

遺物と出土状況　確実に本土坑に伴う遺物はない。

所見　本土坑の時期は、埋没土上位で37号住居の床面が確認されたことから、6世紀前半以前である。

1区39号住居

（第100図　PL.23・53　遺物観察表P.31・32）

位置　Ce・f－17・18G

形状　隅丸正方形と推定されるが、南壁付近を71号溝、中央部を72号溝、北壁を79号溝に切られる。

規模　長軸5.64m　推定短軸5.56m　壁高0.15m

面積　測定不能　　**長軸方位**　N－50°－E

竈　調査した範囲のなかでは竈は検出できなかった。

柱穴　主柱穴と思われるP1・P2と東壁際にP3を検出した。規模(長径×短径×深さ)は、P1が47×43×93㎝、P2が66×52×41㎝、P3が51×47×17㎝である。P1には炭化材が残っていた。P3西縁にも炭化材が残り、内部からは土師器壺(269)がほぼ完形で出土した。胴部下位には焼成後穿孔がある。

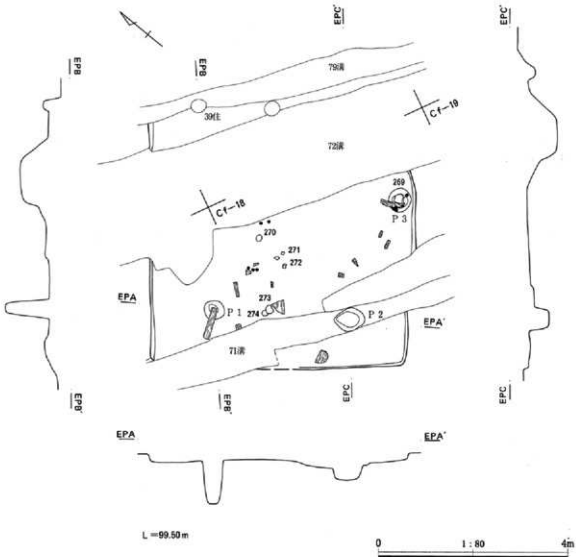
周溝　周溝は検出されなかった。

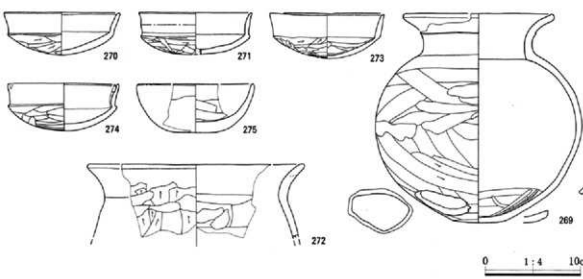
貯蔵穴　貯蔵穴は検出されなかった。

床面　床面は新しい遺構に切られて、部分的にしか検出できなかった。また床面は不明瞭で硬化面を全体にとらえることはできなかった。住居中央部の床面からは炭化材が複数出土した。

遺物と出土状況　中央部で土器が出土している。土師器坏(270)は中央部床面直上、坏(271)は中央部床面上8㎝、坏(273)は中央部床面上9㎝、坏(274)は中央部床面上12㎝で出土した。また土師器甕(272)も中央部床面上9㎝で出土した。坏(275)は北西の攪乱ピットの中から出土した。図化できた遺物のほかに縄文土器破片1点、土師器破片76点が出土した。

所見　出土遺物から6世紀前半の住居と考えられる。ほとんどが床面から数㎝上で出土していると記録されたが、床面のレベルも不明瞭で床面は下がり過ぎている可能性もある。





第100図　1区39号住居と出土遺物

1区40号住居

（第101図　PL.24・53　遺物観察表P.32）

位置　Cf−16・17G

形状　隅丸方形と推定されるが、住居の大半は新しい土坑に切られており、住居の南東隅が検出できたにとどまる。

規模　長軸測定不能　短軸測定不能　壁高0.09m

面積　測定不能　　**東壁方位**　N−24°−W

竈　調査できた範囲の中では竈は検出できなかった。

柱穴　主柱穴と思われるP1・P2を検出した。規模（長径×短径×深さ）は、P1が58×38×36cm、P2が47×32×13cmである。

周溝　周溝は検出されなかった。

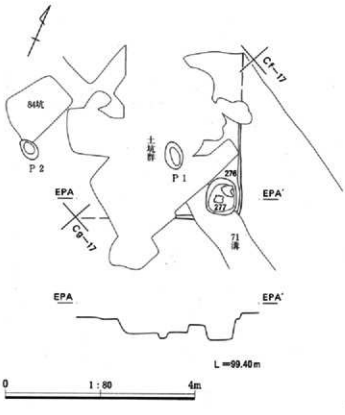
貯蔵穴　南東隅に長径0.78m、短径0.64m、深さ0.53mの隅丸長方形の貯蔵穴が検出された。内部から土師器甕（276・277）がそれぞれ底面上21cm、9cmで出土した。

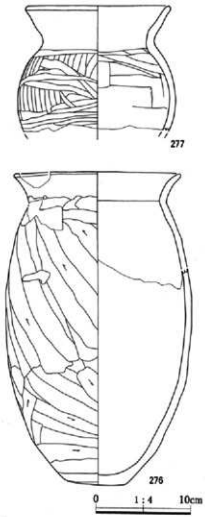
床面　床面はほとんど検出されなかった。

遺物と出土状況　新しい遺構に削られているため、出土遺物はほとんど無い。前述した貯蔵穴出土の土器以外に図示できる遺物はなかった。また図化できた遺物のほかに、土師器破片5点が出土した。

所見　出土遺物から5世紀後半の住居と考えられる。P2は新しい遺構に削られた部分で検出された。深さが浅いので主柱穴とするには疑問が残るが、P1との位置関係から柱穴とした。

また、北東隅の主柱穴についても、土坑群のなかに痕跡かと思わせる位置に小ピットが確認できるが、北西隅のピットも対応せず確証が乏しいので、今回の報告からは除いた。





第101図　1区40号住居と出土遺物

1区41号住居（第102図　PL24）

位置　De・f−19G

形状　隅丸方形と推定されるが、住居の大半は新しい土坑や溝に切られており、住居の南東隅が検出できたにとどまる。

規模　長軸測定不能　短軸測定不能　壁高0.08m

面積　測定不能　　**北壁方位**　N−80°−W

竈　調査できた範囲の中では竈は検出できなかった。

柱穴　調査できた範囲の中では主柱穴は検出できなかった。

周溝　周溝は検出されなかった。

貯蔵穴　貯蔵穴は検出されなかった。

床面　床面は北東隅を除き、ほとんど検出されなかった。

遺物と出土状況　新しい遺構に削られているため、出土遺物はほとんど無い。図化できる遺物はなく、土師器破片24点が出土したのみである。

所見　破片遺物から6世紀代の住居と考えられる。

1区42号住居

（第103図　PL24・53　遺物観察表P.32）

位置　Cd・e−16・17G

形状　基本的には隅丸長方形と推定されるが、西壁は削平されており不明瞭であった。東壁は西壁より短くなっており台形を呈する。

規模　長軸（東西長）4.0m以上

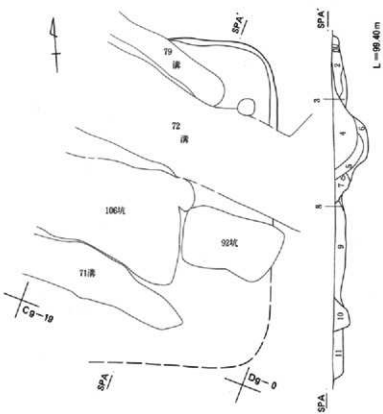
短軸（南北長）3.26〜3.80m　　壁高0.22m

面積　測定不能　　**長軸方位**　N−64°−E

竈　住居東壁中央よりやや南側に竈が構築されていた。確認長1.38m、燃焼部幅0.47m。袖の残存長は向かって右側が0.64m、左側が0.65m。残存する燃焼部は0.73m壁外に出て、煙道部となっていた。

柱穴　主柱穴と思われるP1・P2・P3・P4を検出した。規模（長径×短径×深さ）は、P1が29×26×19cm、P2が51×34×26cm、P3が74×54×53cm、P4が40×37×19cmである。P3には内部に大型礫が出土した。

周溝　削られた西壁沿いと、竈部分を除き全周する。



第102図　1区41号住居

1区41号住居　SPA−SPA'

2．褐色土　砂質。ローム塊・礫を混入する。

3．褐色土　シルト質。一部にローム塊を含む。

11．黄褐色土　全体にローム塊を均一に含む。しまりのない土層。

72号溝

4．茶褐色土　砂質。ローム塊、ローム粒子を均一で多量に含む。角閃石安山岩が一部に入る。

5．暗褐色土　砂質。4層からローム層をのぞいた土層。

6．暗黄褐色土　僅かに粘性がある。ローム塊・角閃石安山岩を含む。

7．攪乱土　ローム塊・石等を含む。砂質。

106号土坑

8．茶褐色土　ローム塊を僅かに含む。

9．暗茶褐色土　ローム塊・角閃石安山岩を全面に均一に含む。砂質。

71号溝

10．茶褐色土　全体に角閃石安山岩を均一に混入する。砂質。

0　1：80　4m

概ね幅は25cm、深さは4cmである。

貯蔵穴　貯蔵穴は検出されなかった。

床面　床面は平坦である。一部に新しい柱穴や122号土坑が重複し、床面を壊している。

遺物と出土状況　遺物は東壁沿いに少量出土した。土師器坏(278)は竈左東壁周溝内から出土した。また東壁周溝から土師器甕破片が出土したが図化できなかった。図化できた遺物のほかに縄文土器破片1点、土師器破片21点、須恵器破片1点が出土した。

所見　出土遺物から6世紀中葉の住居と考えられる。南東隅にある主柱穴P3は、規模や深さが他の主柱穴より大きく異質である。これが貯蔵穴の可能性もあるが、全体の位置関係から見て柱穴とした。

1区44号住居（第104図　PL24　遺物観察表P.32）

位置　Cd－16・17G

形状　隅丸方形と推定されるが、住居の大半は新しい土坑や後世の削平に切られており、住居の南壁の西半と南西隅が検出できたにとどまる。また南西隅に後出する42号住居が壊し、南壁は穿孔する43号住居を切っている。

規模　長軸測定不能　短軸測定不能　壁高0.06m

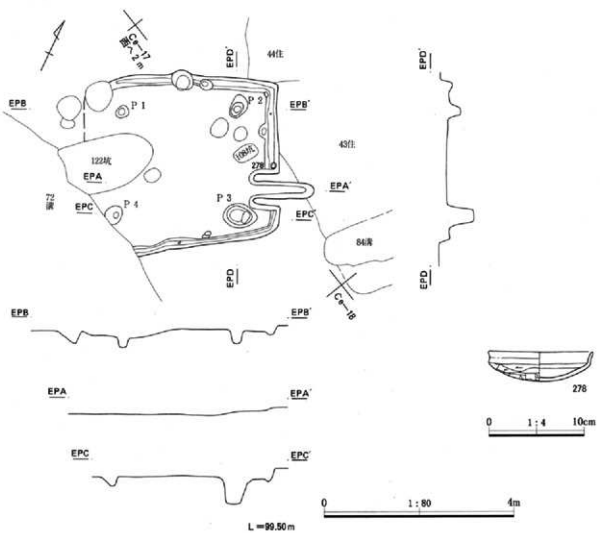
面積　測定不能　　**南壁方位**　N－56°－E

竈　調査範囲の中では竈は検出できなかった。

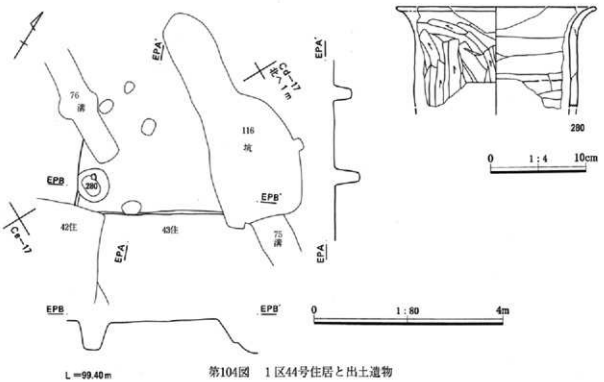
柱穴　調査範囲の中では主柱穴は検出できなかった。

周溝　調査範囲の中では周溝は検出されなかった。

貯蔵穴　南西隅に長径0.72m、短径0.66m、深さ



第103図　1区42号住居と出土遺物



第104図　1区44号住居と出土遺物

0.57mの楕円形の貯蔵穴が検出された。内部から土師器甕(280)が底面上52cmで出土した。

床面　床面はほとんど検出されなかった。

遺物と出土状況　新しい遺構に削られているため、出土遺物はほとんど無い。前述した貯蔵穴出土の土器以外に出土遺物はなかった。

所見　42号住居・43号住居との重複関係から6世紀前半の住居と考えられる。

1区46号住居

（第105図　PL24・53　遺物観察表P.32）

位置　Ca・Et−17〜19G

形状　基本的には隅丸正方形であるが、271号土坑との重複の影響で北壁東端が膨らみ、台形を呈する結果となった。東壁は269号土坑に切られ一部確認できなかった。また南西隅は266号・267号土坑に切られ、一部確認できなかった。

規模　長軸6.83m　短軸6.2m　壁高0.17m

面積　41.4㎡　　**長軸方位**　N−77°−E

竈　住居東壁中央よりやや南側に竈が構築されていた。確認長1.23m、燃焼部幅0.41m。袖の残存長は向かって右側が0.90m、左側が0.91m。残存する燃焼部は0.34m壁外に出て、煙道部となっていた。

柱穴　主柱穴と思われるP1・P2・P3・P4を検出した。規模(長径×短径×深さ)は、P1が35×25×18cm、P2が38×33×26cm、P3が44×40×56cm、P4が46×41×44cmである。P1の東側には36×33×18cmのP5が検出されている。

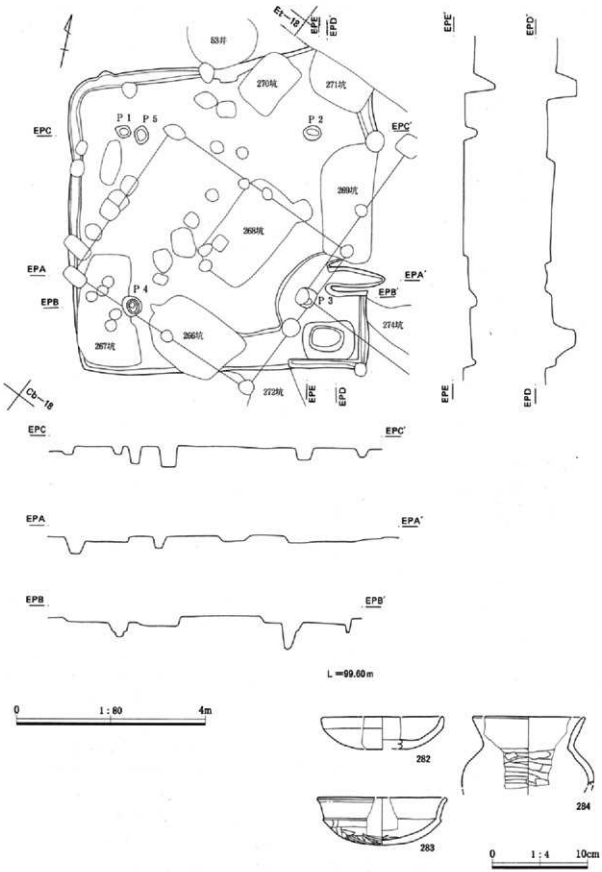
周溝　北壁東半、南西隅から南壁西半分を除き全周する。概ね幅は24cm、深さは12cmである。

貯蔵穴　南東隅に長径1.1m、短径0.76m、深さ0.47mの隅丸長方形の貯蔵穴が検出された。

床面　床面は建物の柱穴や土坑に切られ、広範囲に残っていなかった。竈前から貯蔵穴の西側にかけて8〜13cmほどの段差で一段低くなっていた。

遺物と出土状況　出土遺物はあまり多くない。床面直上の出土遺物もなかった。図示した土師器坏(282・283)、甕(284)はいずれも埋没土中からの出土遺物である。ほかに土師器破片24点が出土した。

所見　出土遺物から6世紀前半の住居と考えられる。P3の西半分は掘立柱建物の柱穴である。



第105図　1区46号住居と出土遺物

1区196号土坑（第106図　PL54　遺物観察表P.33）

位置　Cd－13G

形状　不定楕円形。

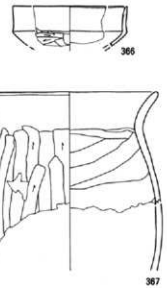
規模　長径3.46m　短径1.23m　壁高0.38m

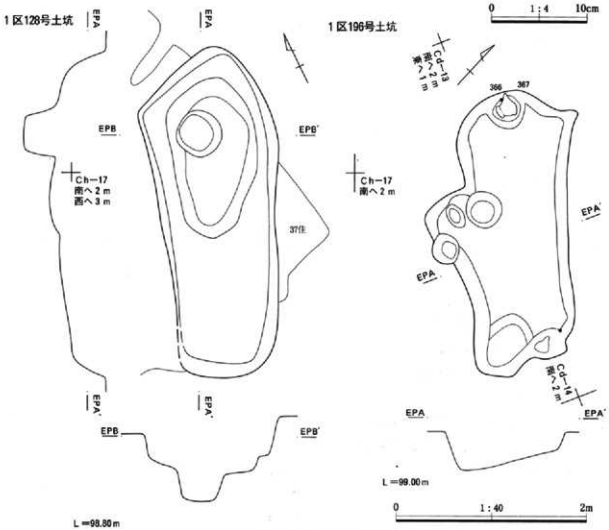
長軸方位　N－44°－W

断面形　底面の両端と南辺中央部には小ピットが掘り込まれ、不定形となっている。

遺物と出土状況　確実に本土坑に伴う遺物はない。

所見　出土遺物から6世紀初頭の土坑と考えられる。ピットの位置に規則性はなく土坑の性格は不明と言わざるを得ない。前述した128号土坑も不定楕円形で形状が似るが、時期は6世紀前半の37号住居に先行する。いずれも古墳時代の土坑と考えられるが詳細は不明である。ほかに334号土坑で土師器甑(第107図418)の完形が出土している。





第106図　1区128号土坑・196号土坑と出土遺物

1区80号土坑（第107図　遺物観察表P.33）

位置　Ch－16G　1区37号住居床面で検出した。

形状　隅丸方形。南辺にある小ピットは伴うものかどうかは明らかにできなかった。

規模　長径1.30m　短径1.10m　壁高0.20m

長軸方位　N－14°－E

断面形　箱形に掘られていた。

遺物と出土状況　須恵器提瓶肩部破片(468)が底面上5cmで出土した。

埋没土　ローム塊・黒褐色土塊を含む黄褐色土で埋まっていた。焼土粒や炭化物粒、浅間C軽石・榛名二ツ岳軽石と思われる白色軽石粒を多く含む。

所見　6世紀前半の37号住居に重複・後出する土坑である。出土遺物および埋没土の状況から、古墳時代の土坑と考えたい。塊状の土が堆積しており、一括埋墳の様相と見られる。

1区334号土坑（第107図　PL55　遺物観察表P.33）

位置　Ci－12G　　**形状**　楕円形

規模　長径0.58m　短径0.47m　壁高0.51m

長軸方位　N－75°－E

断面形　筒形。底面は平坦である。

遺物と出土状況　土師器甑(418)がほぼ完形で出土した。甑は口縁部を上に向け、やや斜めに傾いた状態で出土した。他に出土した遺物はない。

埋没土　浅間C軽石・榛名二ツ岳軽石と思われる白色軽石粒を多く含む黒褐色土で埋まっていた。

所見　出土遺物から5世紀後半のピットと考えられる。同様な甑の半完形品(401)が1北区5号土坑から、また土師器甕上半部が1区196号土坑北端ピット中から出土している。ピットの性格は不明であるが、これらは、集落内の住居以外の施設を考える上で、重要な事例となろう。

1区73号土坑（第107図）

位置　Ch－18G

重複　1区31号・33号住居を切っている。

形状　隅丸方形

規模　長径1.43m　短径1.15m　壁高0.58m

長軸方位　N－30°－W

断面形　箱形を呈する。

遺物と出土状況　土師器破片10点が出土した。いずれも小破片で、図化できる遺物はない。鬼削りされた胴部破片や、土師器坩形土器の破片を含む。

埋没土　ローム粒・ローム塊・黒色土塊を多く含む黄褐色土で埋まっていた。浅間C軽石・榛名二ツ岳軽石と思われる白色軽石粒を多く含む。

所見　6世紀初頭の33号住居の東壁に重複・後出する土坑である。出土遺物および埋没土の状況から、古墳時代の土坑と考えたい。塊状の土が堆積しており、一括埋墳された可能性がある。

1区75号土坑（第107図）

位置　Ch・i－16G

重複　1区37号住居南壁を切っている。

形状　円形。東辺に重複する小ピット2基は、土坑に伴うかどうかは明確にできなかった。

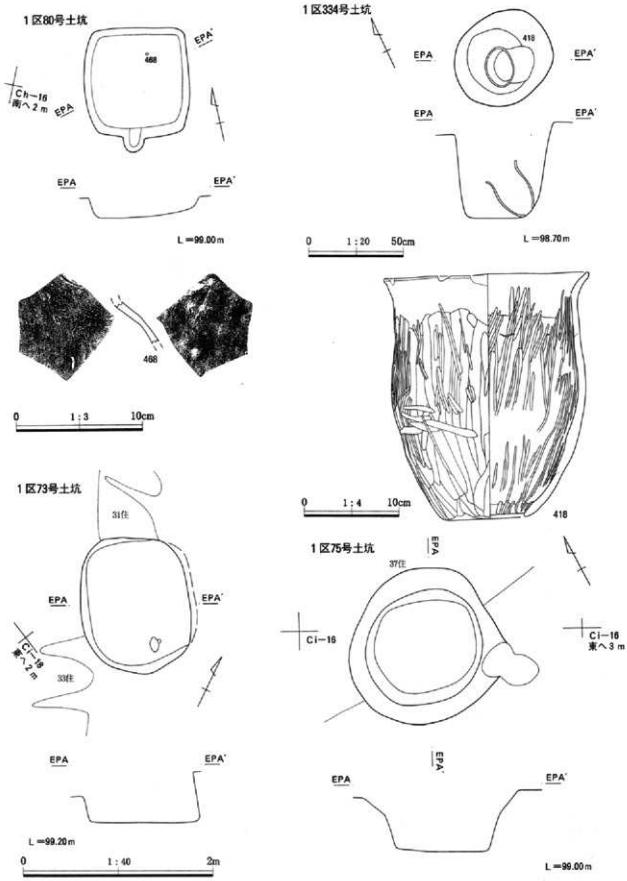
規模　長径1.64m　短径1.58m　壁高0.68m

断面形　浅いすり鉢形を呈する。底面は平坦である。

遺物と出土状況　出土遺物はない。

埋没土　ローム粒・ローム塊を多く含む黄褐色土で埋まっていた。浅間C軽石・榛名二ツ岳軽石と思われる白色軽石粒を多く含む。

所見　6世紀前半の37号住居に重複・後出する土坑である。出土遺物から土坑の時期を考えることはできないが、埋没土の特徴から古墳時代の土坑と考えたい。1区37号住居周辺には、73号・75号・80号・128号・333号土坑と古墳時代の可能性のある土坑が集中している。何らかの遺構が住居廃絶後、構築された可能性もあるが、今回の調査では削平されており、詳細を確認できなかった。



第107図　1区73号・75号・80号・334号土坑と出土遺物

1北区1号住居（第108～110図

PL24～26・54・55　遺物観察表P.33・34・44）

位置　Fh・i－5・6G

形状　隅丸正方形であるが、南東隅は調査区域外のため確認できなかった。

規模　長軸4.85m　短軸4.59m　壁高0.24m

面積　20.49㎡　　**長軸方位**　N－44°－W

竈　住居北東壁中央よりやや南側に竈が構築されていた。確認長1.70m、燃焼部幅0.44m。袖の残存長は向かって右側が0.94m、左側が0.84m。残存する燃焼部は0.28m壁外に出ていた。竈からは多くの遺物が出土した。土師器甕(288)は竈右袖先端の芯材として倒立して置かれていた。甕(287)は竈左袖先端の芯材として倒立して置かれていた。甕(289)は焚き口部の中央に横転して使用面直上で出土した。また甕(290)は燃焼部中央の支脚礫の上にのった状態で出土した。この甕の右脇の使用面直上で土師器坏(285)が出土した。支脚の礫は竈堀り方を充填する前に置かれ、礫を押さえるように堀り方が埋められていた。竈の堀り方は二つの半円形の土坑が重なったような形状である。

柱穴　主柱穴と思われるP1・P2・P3・P4を検出した。規模(長径×短径×深さ)は、P1が30×29×28㎝、P2が38×34×34㎝、P3が38×33×50㎝、P4が38×34×36㎝である。

周溝　周溝は検出されなかった。

貯蔵穴　東隅に長径0.75m、短径0.71m、深さ0.18mの隅丸方形の貯蔵穴が検出された。

床面　床面は平坦で、竈前を中心に硬化していた。貯蔵穴南西部に奥行き1.36m、幅1.34mの馬蹄形状の凹地が検出された。中心よりやや南西部に幅0.4m、長さ0.94m、深さ0.07mの帯状の溝が掘り込まれていた。出土遺物はない。

また堀り方の調査を行ったところ、厚さ15㎝ほどの暗褐色土やローム塊を混じる黒色土で堀り方は埋まっていた。その上面に床面がつくられている。堀り方は中央部が次第に深くなっており、深さ0.5mにおよぶ部分もあった。

遺物と出土状況　土器は竈周辺に集中して出土した。土師器坏(286・295・296)・鉢(297)・甑(291・293)・小型甕(292)は竈左脇床面直上で出土した。南部には礫が3点出土したが、S118は磨石で床面直上で出土した。他の2点は使用痕のない円盤状・棒状礫である。図化できた遺物のほかに土師器破片43点が出土した。

所見　出土遺物から5世紀末の住居と考えられる。竈やその周辺に、使用当時のままと推定される出土状態で土器が出土した。

1北区2号住居（第111図　PL26　遺物観察表P.34）

位置　Fh・i－3～5G

形状　基本的には隅丸正方形であるが北東隅がやや凹んでおり、不定形となった。また南東隅は後世の削平のため確認できなかった。

規模　長軸5.82m　短軸5.77m　壁高0.17m

面積　30.32㎡　　**長軸方位**　N－36°－E

竈　住居北東壁中央よりやや東側に竈が構築されていた。確認長1.08m、燃焼部幅0.46m。袖の残存長は向かって右側が0.58m、左の痕跡が0.37m。残存する燃焼部は0.62m壁外に出て、煙道部となっていた。右袖の先端には芯材として礫が使われていた。竈の主軸は住居壁方向よりやや東に傾いていた。竈からの出土遺物はない。

柱穴　主柱穴と思われるP1・P2・P3を検出した。規模(長径×短径×深さ)は、P1が13×13×33㎝、P2が18×15×74㎝、P3が23×20㎝×不明、である。P3は本住居を切っている6号土坑の底面で検出した。深さは記載漏れである。

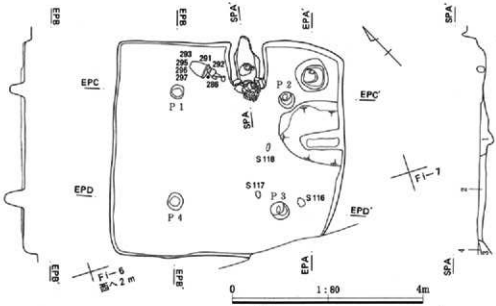
周溝　周溝は検出されなかった。

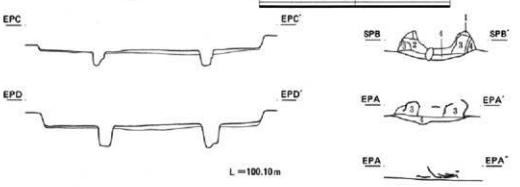
貯蔵穴　貯蔵穴は検出されなかった。

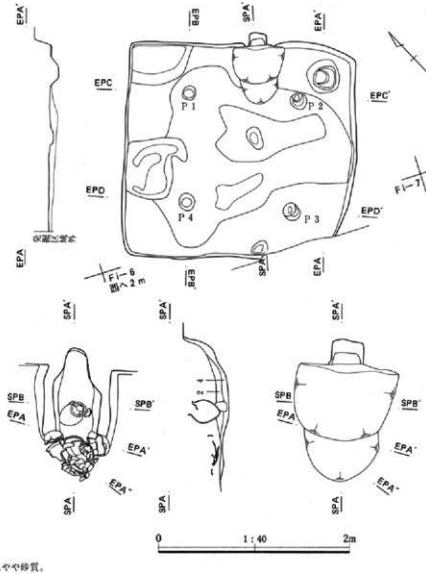
床面　床面は新しい溝や土坑に切られており、一部しか確認できなかった。

遺物と出土状況　出土遺物はあまり多くない。土師器坏(298)は竈右脇床面直上で出土した。図化できた遺物のほかに土師器破片52点が出土した。

所見　出土遺物から6世紀後半の住居と考えられる。







1北区1号住居　掘り方セクション

1．黒色混土　黒色土（白色のパミスを含む）の中に暗クリーム色、暗チョコ色、暗褐色土の塊（3㎝大が最も多い）を多量に含む。

2．黒色土　暗褐色の塊（2～4㎝大）、白色のパミス粒を含む。やや粘質。

3．黒色土　暗赤褐色の地山塊を含む。

4．黒色土　褐色の地山粒を少量含む。

カマドセクション

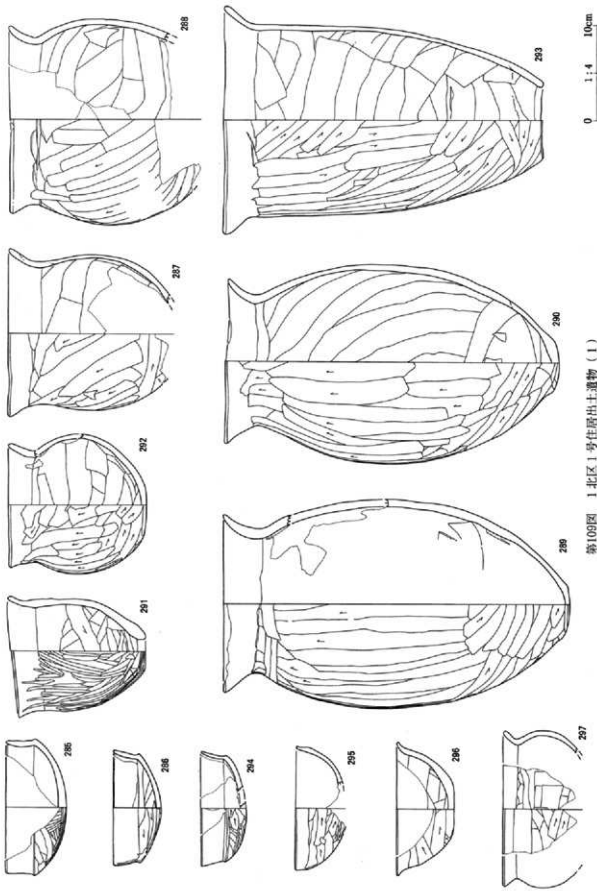
1．黄褐色土　白色軽石を混じる。

2．焼土

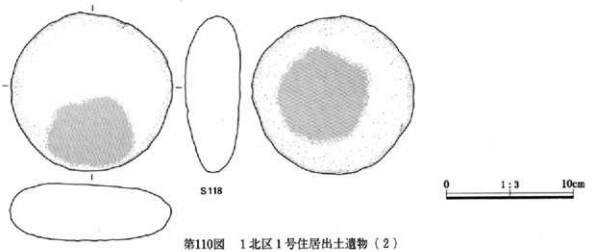
3．黄色粘土　袖構築材。

4．黒色土　白色軽石、焼土粒を含む。やや砂質。

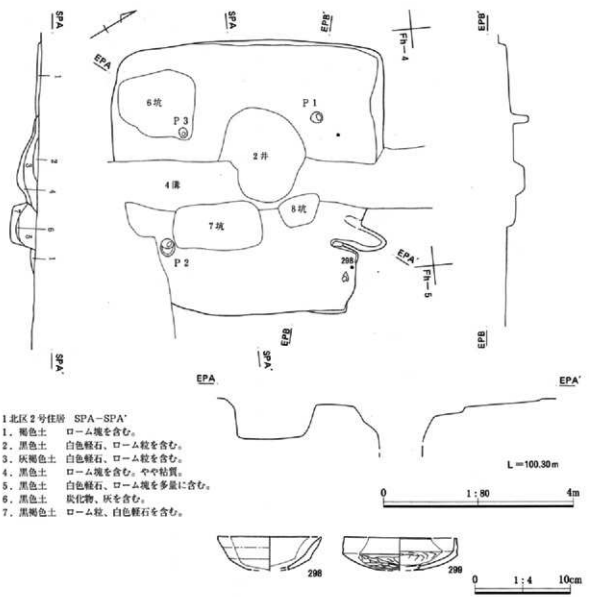
第108図　1北区1号住居



第109図　1北区1号住居出土遺物（1）



第110図　1北区1号住居出土遺物（2）



1北区2号住居　SPA－SPA'
1．褐色土　ローム塊を含む。
2．黒色土　白色軽石、ローム粒を含む。
3．灰褐色土　白色軽石、ローム粒を含む。
4．黒色土　ローム塊を含む。やや粘質。
5．黒色土　白色軽石、ローム塊を多量に含む。
6．黒色土　炭化物、灰を含む。
7．黒褐色土　ローム粒、白色軽石を含む。

第111図　1北区2号住居と出土遺物

１北区３号住居

（第112図　PL26・27・55　遺物観察表P.34・44）

位置　ＥＦｐ・ｑ－19・０Ｇ

形状　隅丸正方形と推定されるが、東壁および南東隅は３号溝・１号井戸に切られて確認できなかった。

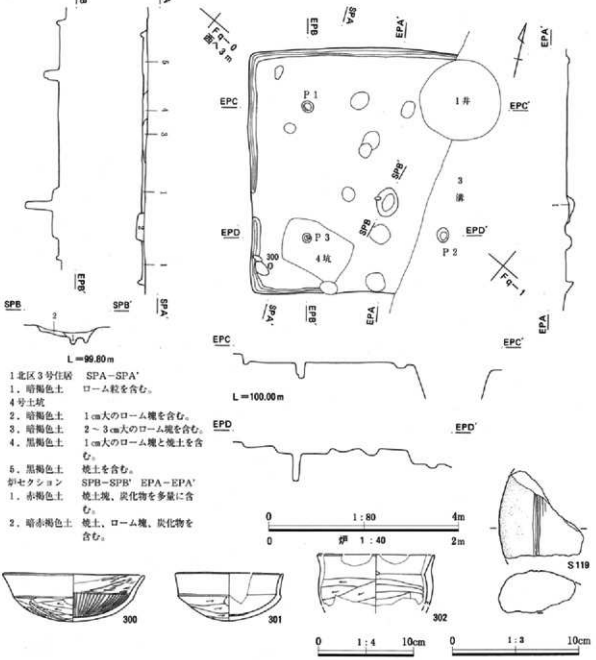
規模　長軸5.12ｍ　短軸4.25ｍ以上　壁高0.15ｍ

面積　測定不能　　**長軸方位**　Ｎ－14°－Ｗ

竈　調査できた範囲の中では竈は検出されなかった。

炉　住居中央よりやや南に寄ったところに炉が検出された。主柱穴Ｐ２とＰ３を結んだ線より内側である。炉の凹みは長径0.62ｍ、短径0.45ｍ、深さ0.18ｍの楕円形で、焼土の厚さは６㎝ほどである。西縁に小型の棒状礫が据えられていた。

柱穴　主柱穴と思われるＰ１・Ｐ２・Ｐ３を検出した。規模（長径×短径×深さ）は、Ｐ１が29×24×32㎝、Ｐ２が32×25×36㎝、Ｐ３が20×20×73㎝であ



第112図　１北区３号住居と出土遺物

る。P３は住居より新しい４号土坑底面で検出した。

周溝　竈部分を除き全周する。概ね幅は14㎝、深さは９㎝である。

貯蔵穴　調査できた範囲の中では検出されなかった。

床面　床面は平坦であるが、新しい小ピットが床面を壊している。P１の東側に長径0.42ｍ、短径0.36ｍの楕円形の範囲に焼土が形成されている。

遺物と出土状況　土師器坏(300)は南西隅床面直上で出土した。坏(301)・小型甕(302)・条線状の研磨痕のある砥石(S119)は埋没土中から出土した。図化できた遺物のほかに土師器破片122点が出土した。

所見　出土遺物から６世紀前半の住居と考えられる。北東隅の主柱穴は１号井戸で掘られた位置に当たっていると考えた。また南西隅に大型礫が２個出土したが、整理時に所在が不明であり、詳細は確認できなかった。出土遺物から推せば、本住居には竈が構築されていたと考えるのが妥当であり、炉との併用が想定できる。この炉の用途については判断できる所見は得られなかった。

１北区４号住居（第113図　PL27）

位置　Fr・s－０G

形状　隅丸方形と推定されるが、南半分は３号土坑と後世の削平によって削られていた。西半分も１号土坑や削平によって削られており、住居北西隅と竈の北半分が確認できたにとどまった。

規模　長軸測定不能　短軸測定不能　壁高0.02ｍ

面積　測定不能　　**東壁方位**　N－6°－E

竈　東壁に竈が構築されていた。南半分は後世の削平で削られており確認できなかった。確認長1.06ｍ、焼土検出幅0.28ｍ。袖の残存長は向かって左が0.30ｍ。残存する燃焼部は0.27ｍ壁外に出て、煙道部となっていた。竈からの出土遺物はない。

柱穴　主柱穴と思われるP１を検出した。規模(長径×短径×深さ)は、26×25×48㎝である。

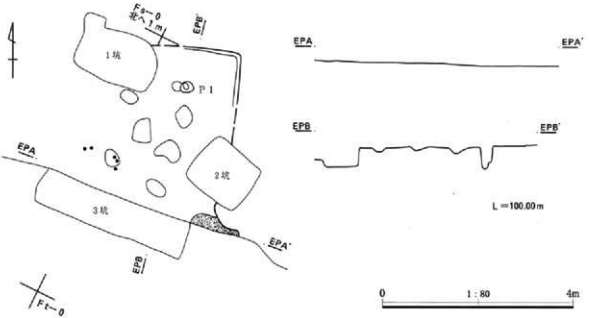
周溝　調査できた範囲の中では検出されなかった。

貯蔵穴　調査できた範囲の中では検出されなかった。

床面　床面は凹凸が著しく、検出されなかった。

遺物と出土状況　出土遺物はほとんど無く、図示できる遺物もなかった。出土した遺物は土師器破片６点である。

所見　図示できる遺物はなかったが、出土した破片遺物からは６世紀の住居と考えられる。



第113図　１北区４号住居

1北区5号住居

（第115図　PL27・55　遺物観察表P.34）

位置　Fj・k－0G

形状　隅丸正方形と推定されるが、細長い調査区だったことに加え、2号溝に切られており、全体形状をとらえることはできなかった。

規模　長軸6.80m　短軸測定不能　壁高0.39m

面積　測定不能　　**東壁方位**　N－13°－E

埋没土　発掘区の西壁の土層断面を検討した結果、上層は2号溝が大きく本住居の埋没土をえぐりとっているものと解釈された。最下層の12～15層が本住居の埋没土である。

竈　調査できた範囲の中では検出されなかった。床面の一部で竈状の焼土の固まりや地山の掘り残しは確認したが、竈とは確定できなかった。2号溝に破壊されてしまったものと判断した。

柱穴　調査できた範囲の中では検出されなかった。

周溝　調査できた範囲の中では検出されなかった。

貯蔵穴　調査できた範囲の中では検出されなかった。

床面　床面は段差があり、南側が下がっている。本住居の最下層には硬化した床面や柱穴等は検出できなかった。

遺物と出土状況　住居南東隅に土器が集中して出土した。土師器甕(303)は南東隅床面直上で出土した。甕(304・306)・坏(305)は南東部床面直上で出土した。土師器甕(307)は北壁際床面直上で出土した。図化できた遺物のほかに土師器破片20点が出土した。

所見　出土遺物から6世紀前半の住居と考えられる。全体形状が不明であり、住居とするには躊躇するが、部分的に床面があること、遺物がまとまって出土したことから住居として報告した。

1北区5号土坑

（第114図　PL27・55　遺物観察表P.35）

位置　Fn・o－1G

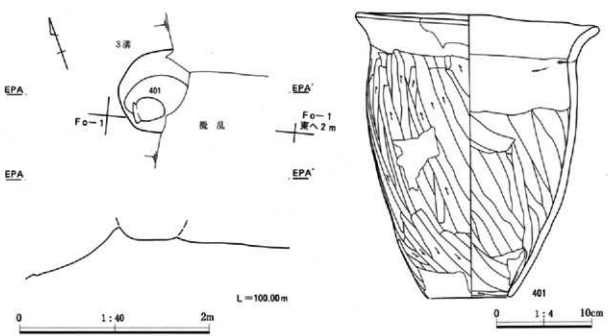
形状　楕円形と推定されるが、南部を新しい土坑に切られているので全体形状を確認できなかった。上半部は3号溝に切られていた。

規模　長径0.74m以上　短径0.80m　壁高0.52m

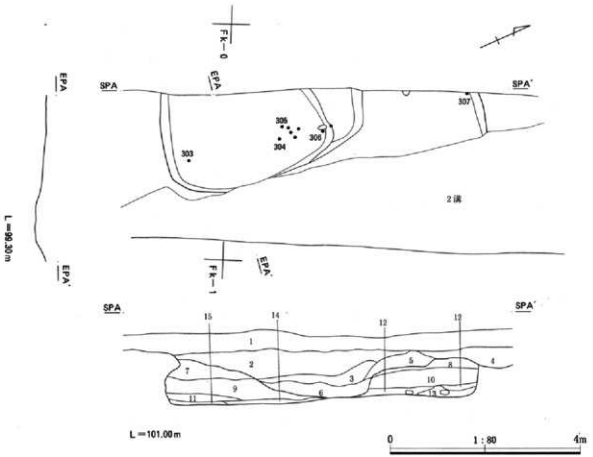
長軸方位　N－82°－W

断面形　底面はほぼ平坦である。

遺物と出土状況　土師器甑(401)が底面上6cmの位置でほぼ完形で出土した。図化できた遺物のほかに

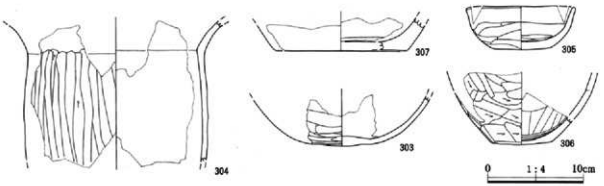


第114図　1北区5号土坑と出土遺物



1北区5号住居　SPA－SPA'

1．表土
2．褐色土　　明褐色土塊（1～4cm大）、暗褐色土が少量混じる。
3．褐色混土　　明褐色土塊（2～3cm大）が多量に入り、黒色土塊が少量入る。
4．黒褐色混土　　褐色土・暗褐色土の小塊を含む。塊は小さく混ぜられている。
5．黒褐色土　　暗褐色土塊（1～4cm大）が僅かに入る。
6．暗黒褐色土　　ラミナ有り。暗褐色の地山粒層と暗黒褐色のやや粘質の地山粒層の互層。2号溝の覆土。
7．黒褐色混土　　明褐色土塊・黒色土塊が少量混じる。30×30cm大の石が5～6個出土。
8．明褐色混土　　明褐色土を主体に黒褐色土塊が少量入る。
9．暗褐色混土　　暗褐色を主体に明褐色土塊（5mm～1cm大）を多く含む。
10．暗チョコ色混土　暗褐色土に暗黄灰色土塊（5mm～4cm大）が多量に入る。埋め土と思われる。
11．暗褐色土　　9層に類するが褐色土塊が多く、暗灰褐色土との互層があり、ラミナ状を呈している。
12．黒褐色混土　　黒褐色土に明褐色の塊が入る。
13．明褐色混土　　明褐色土に黒褐色の塊が入る。
14．黒褐色土　　明褐色土塊（1～3cm大）を含む。焼土を含んでいる。
15．明褐色土　　黒色土塊を少量含む。



第115図　1北区5号住居と出土遺物

土師器破片16点が出土した。

所見　出土遺物から6世紀前半の土坑と考えられる。

2区1号住居

（第116図　PL27・28・55　遺物観察表P.35）

位置　Ie－11G

形状　隅丸方形と推定されるが、南側を後世の攪乱で削られており、全体形状を確認できなかった。

規模　長軸5.69m以上　短軸2.49m　壁高0.30m

面積　測定不能　　**長軸方位**　N－61°－E

竈　住居東壁中央よりやや南側と推定される位置に竈が構築されていた。確認長0.59m、燃焼部幅0.40m。袖はほとんど構築されていなかった。竈の両縁に棒状礫が残っていたが、これを芯として袖を構築していたかどうかは判断できなかった。土師器坏(309)・甕(308)が燃焼部埋没土中で出土した。

柱穴　主柱穴は検出できなかった

周溝　周溝は検出されなかった。

貯蔵穴　貯蔵穴は検出されなかった。

床面　床面は平坦である。

遺物と出土状況　出土遺物はあまり多くない。竈から土師器坏(309)・甕(308)が出土した。

図化できた遺物のほかに土師器破片13点が出土。

所見　出土遺物から6世紀中葉の住居と考えられる。

2区3号住居（第117図　PL28・55　遺物観察表P.35）

位置　Ic・d－8・9G

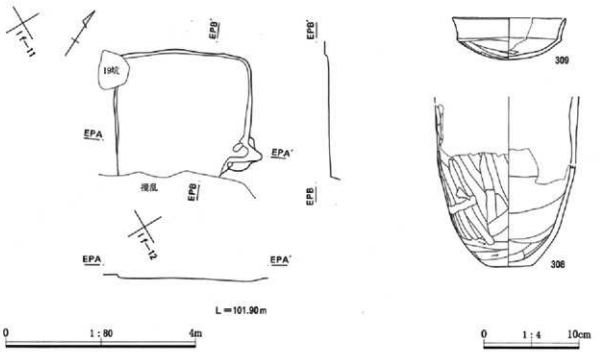
形状　隅丸長方形と推定される。南壁ほぼ中央は攪乱がおよび全体形状をとらえられなかった。

規模　長軸5.46m　短軸4.28m　壁高0.12m

面積　22.22㎡　　**長軸方位**　N－79°－W

炉　住居のほぼ中央に炉が検出された。長軸0.67m、短軸0.60m、深さ0.02mの楕円形に焼土が形成されていた。

柱穴　主柱穴と思われるP1・P2・P3とその外側に対応するP4・P5・P6を検出した。北西隅の柱穴は検出できなかった。それぞれの規模（長径×短径×深さ）は、P1が24×23×12cm、P2が26×26×62cm、P3が25×23×18cm、P4が38×29×67cm、P5が79×55×51cm、P6が70×40×20cmで



第116図　2区1号住居と出土遺物

ある。外側の柱穴の方が概ね大きく深い。

周溝　周溝はない。

貯蔵穴　貯蔵穴は検出されなかった。

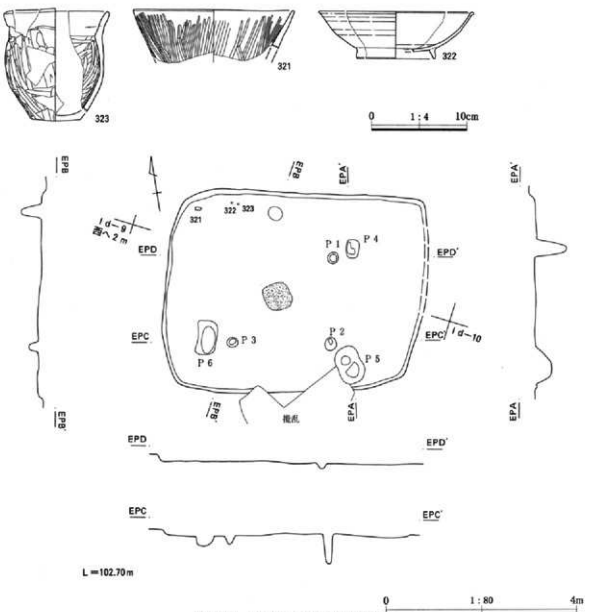
床面　床面は明確に検出できなかった。

遺物と出土状況　出土遺物は少ない。土師器壺(321)・小型甕(323)は北西隅壁際床面直上で出土した。

併載した灰釉陶器高台付碗(322)も上記土師器に隣接して出土したが、これは混入と考えたい。これら図示できた遺物のほかに縄文土器破片6点、土師器破片60点が出土した。

所見　本住居の時期を考えるのは困難である。壺の口縁と考えた土師器(321)は、器形を想定しにくい土器であるが、大型の坩とすれば5世紀代もあり得よう。小型甕(323)は内面の整形が丁寧なため5世紀代の土器と考えたいが、6世紀代の小型甕の可能性もある。炉が施設された長方形の住居形態からは5世紀前半の住居とも考えられるが、ここでは5世紀後半としておきたい。

また本住居の柱穴は内側の小型の柱穴とその外側に対応するやや大型の柱穴が施設されている。拡張住居の可能性もあるが、それを判断できる所見を得られなかった。



第117図　2区3号住居と出土遺物

（3）古墳

2区1号古墳

（第118・119図　PL.28～30・55　遺物観察表P.35・46）

位置　Ln・o－14・15G

2区のある台地の東端にある。古墳の東半分は台地崖線の削平によって消失し、かろうじて石室と前庭・周溝の一部が残存していた。

形状　西側の一部に残った周堀の形状から、円墳と考えられる。当初、遺構確認面では大型の礫が散乱した状態が見られるだけで、古墳との認識ではなかったが、土層観察用ベルト(SPA－A′・SPB－B′)を残して掘り下げたところ、上半部を削平された石室を確認した。

墳丘と外部施設　本古墳の墳丘規模は不明である。周堀から直径を推定することはできない。盛り土も削平されており確認できなかった。

石室の開口部には長径2.82m、短径1.72m、深さ0.51mの楕円形の掘り込みが残っていた。前庭と考えられるこの掘り込みの長軸は、石室入り口から西に傾いている。東側は削平が進み、深さは20cm前後になっている。東側にどの程度前庭部が広がっていたかどうかは判断できない。前庭の埋没土は、下半部は軽石を含む黒色土で最下層にはローム塊を多く含んでいた。上半部は黒褐色土で灰色を帯び、石室からの礫が転落していた。

周堀は前庭西側に接して、幅1.05m、長さ2.85mの一部が残っていた。深さは西端部で7～27cmである。東端部の前庭に接する部分は幅が2.54mまで広がって、深さは32cmで東に傾斜していた。

主体部の構造　輝石安山岩の割れ石を乱石積みした両袖型横穴式石室である。開口方向はS－14°－Wである。石室の規模は全長4.27mを測る。羨道の長さは2.07mで、開口部における幅0.68m、玄室寄りの幅0.75mである。玄室は長さ2.20mで、その幅は最大で1.17m、奥壁寄りで1.0m、羨道寄りで1.05mである。

玄室はやや胴張りを有する。上半部は削平されているが、奥壁・右壁は1石、一部で2石、左壁は良好な部分で3石を残す。調査時には玄室内に奥壁の第2石がのめり込み、裏込めの石も多く入り込んでいた。玄門は玄室入口に比較的細長い礫を直立させている。袖部は短く、羨道の幅に比して玄室の幅が狭い。奥壁はやや大きさの違う2石を横に並べて根石としている。側壁は幅0.4～0.5mの石を小口に積んでいる。

羨道は開口部がやや左に湾曲するような形状で、右壁は1石、左壁は2～3石が残る。左壁中央は比較的大型の石を用い、2石分の高さを積んでいる。

床面は小礫が敷き詰められていた。掘り方面との差は0.1～0.15m、側壁・奥壁の根石は半分が床面下に隠れていたことになる。床面の高さは羨道の方が玄室より20cmほど高く、敷かれた石は直径0.1～0.2mで玄室内よりも大きい。玄室の床面は玄門寄りと奥壁寄りが中央部より0.2cm高くなっていた。玄室の床石は0.1～0.2mの石を置き、間隙を0.05m程の小礫で埋めていた。

玄室と羨道の境には0.7mの円礫を4個、梱石状に並べていた。開口部の框石はなかった。

出土遺物　石室の床面直上で耳環が2個(M114・M115)出土した。また羨道の前から須恵器甕口縁部破片(343)が出土した。

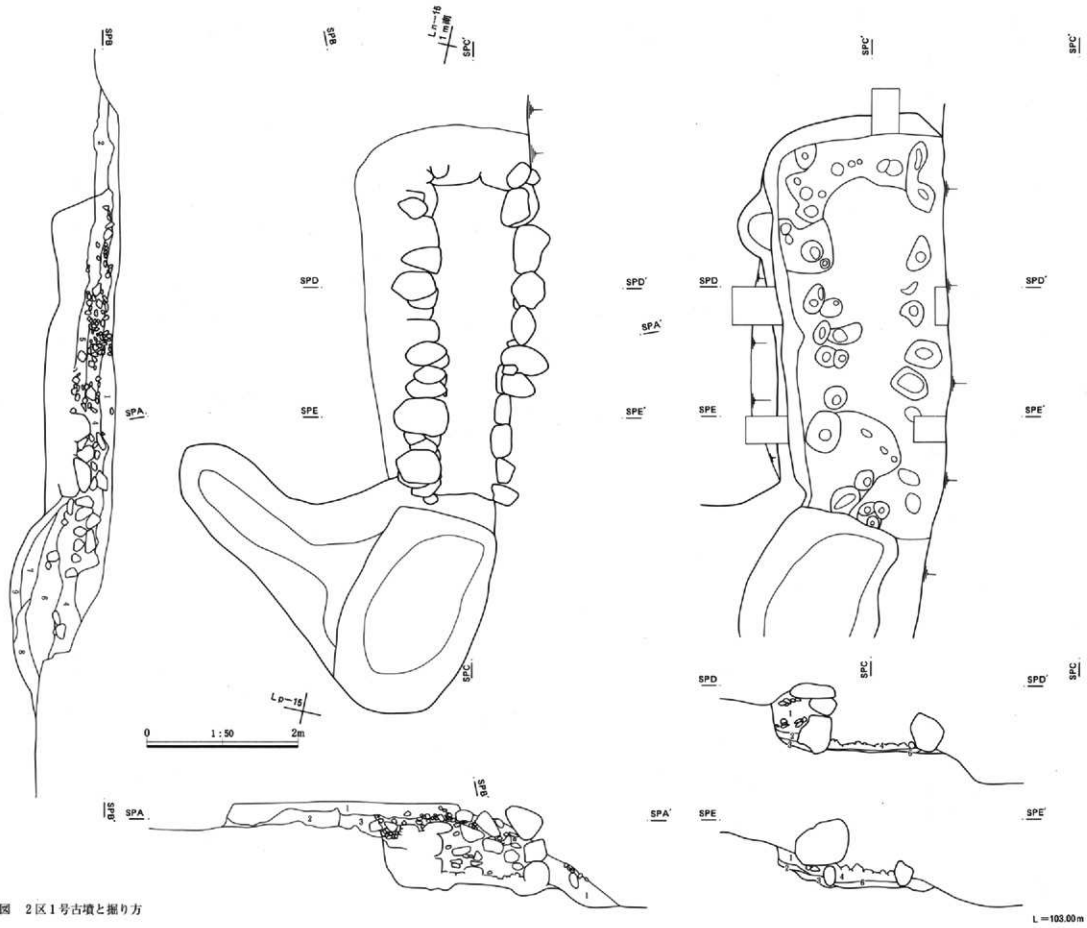
石室の構築状況　石室は長方形の竪穴を掘り、その底面に根石を置いている。掘り方の規模は縦5.39m、横2.4m以上の長方形で、東側の法面は削平のため確認できなかった。残存壁高は1.4～1.6mである。底面には根石を据えた深さ3～5cmの凹地が残っていた。

裏込め材には礫と、ローム塊を含む黒色土、黒褐色土が入れられていた。床面と掘り方底面の間は約0.2mで、小石が充填されていた。

所見　石室の形態や埴輪が周辺で出土していないことから、7世紀後半の古墳と考えられる。石室から出土した耳環は銅芯金張製と思われるが、その型式も断面が扁平になるタイプであり、鍍鄰がない。羨道から出土した須恵器破片は6～8世紀に比定できるもので石室に伴う可能性もある。

SPA－SPA′　SPB－SPB′

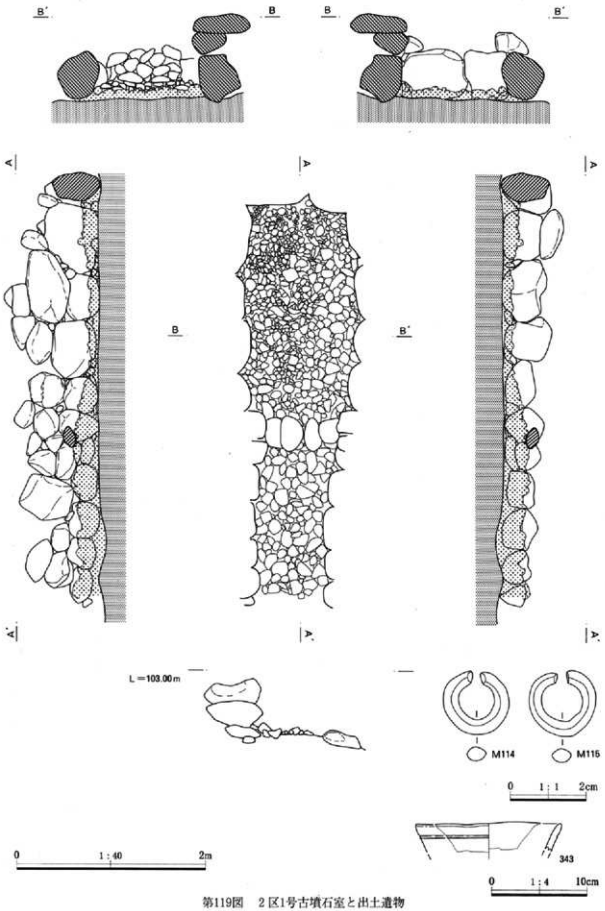
1．攪乱
2．黒色土　白色軽石を含む。
3．黒色土　2層より赤色味が強い。
4．黒褐色土　裏込めの小礫を多く含む。
5．黒色土　裏込めの小礫を多く含む。
6．黒褐色土　灰色味を帯び締まっている。
7．黒色土　軽石を含む。
8．黒色土　軽石・ローム小粒を含む。
9．ローム塊を主体とし、黒色土塊を混じる。



SPC－SPC′　SPD－SPD′　SPE－SPE′

1．暗褐色土　黒色土塊、黄褐色土塊を含む。
2．暗褐色土　ローム塊を多く含む。
3．暗褐色土　夾雑物はあまりない。
4．小礫
5．黒色土　軽石を少量含む。
6．暗褐色土

第118図　2区1号古墳と掘り方



第119図　2区1号古墳石室と出土遺物

５．遺構外の出土遺物

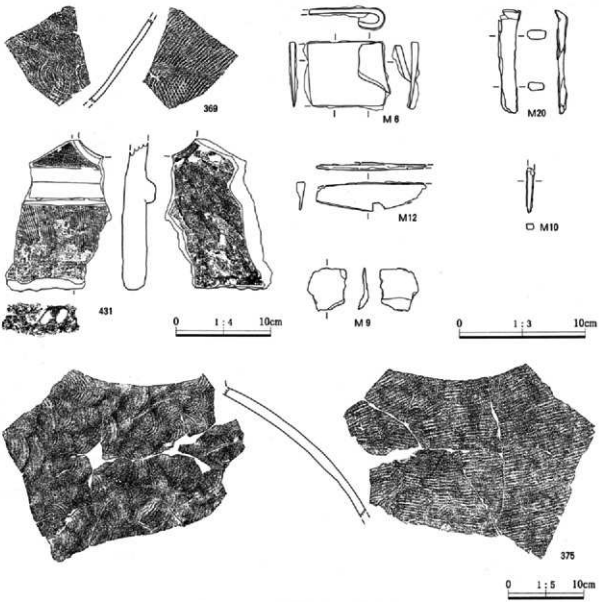
（第120～124図　PL55～58　遺物観察表P.35～37、44～46）

本項では遺構に伴わない形で出土した遺物について、１区は第120～123図(PL55～57)、２区は第124図(PL58)にまとめた。

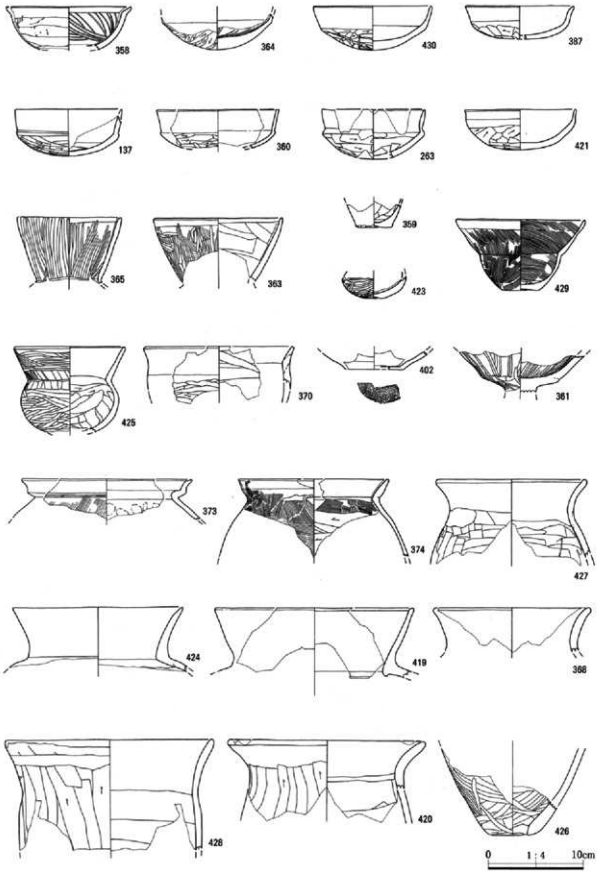
１区で出土した鉄製品のうちＭ６は鉄製方形鍬・鋤先の半欠品である。１区11号溝から出土した。１区８号住で出土した完形品(Ｍ５)と同型のものと思われ、古墳時代前期のものであろう。円筒埴輪(431)は１区の浅間Ｂ軽石下水田の耕土から出土した。２区で古墳が確認されているが、この古墳に埴輪は施設されていなかった。土師器は古墳時代のものを中心に住居や土坑・溝の埋没土内から出土した。

石器は幅の細い打製石斧や小口や表面を敲打した敲き石のほか、古墳時代前期中葉～後葉の住居で出土例の多かった側縁に抉りのある礫が出土している。また軽石製の紡錘車が出土した。

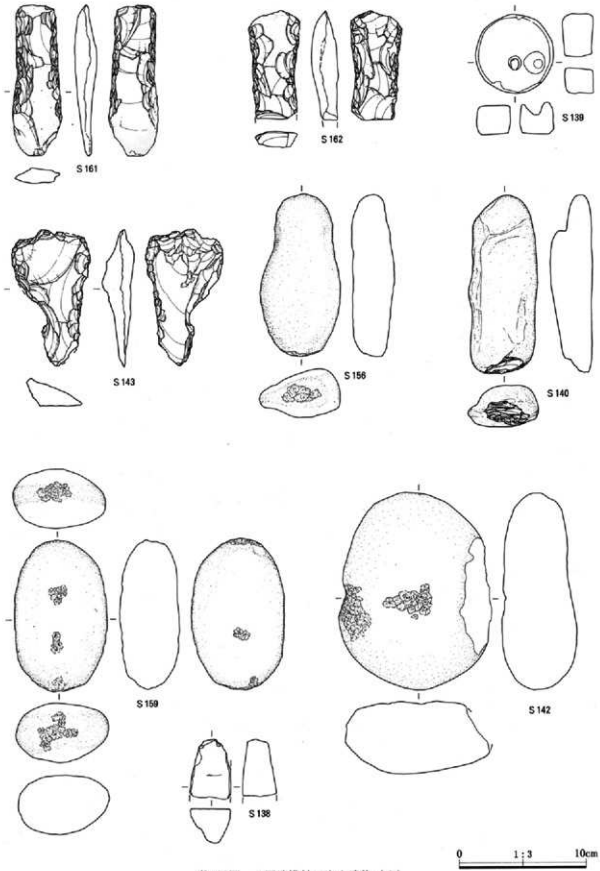
２区でも１区と同様な遺物が出土しているが、石鏃３点が出土しているのが特筆される。４区でも石鏃は１点出土した。それぞれの石鏃は形態が異なっており散漫な出土状況である。



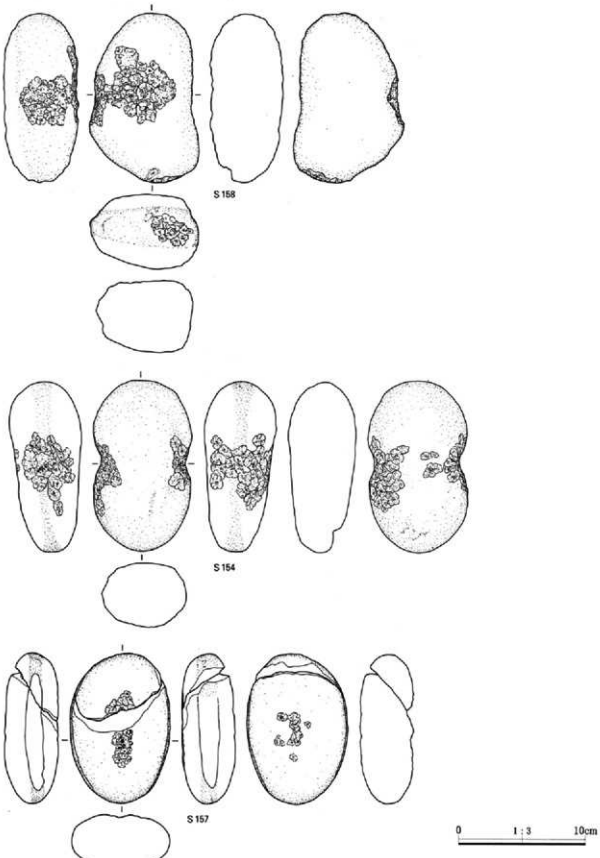
第120図　１区遺構外の出土遺物（１）



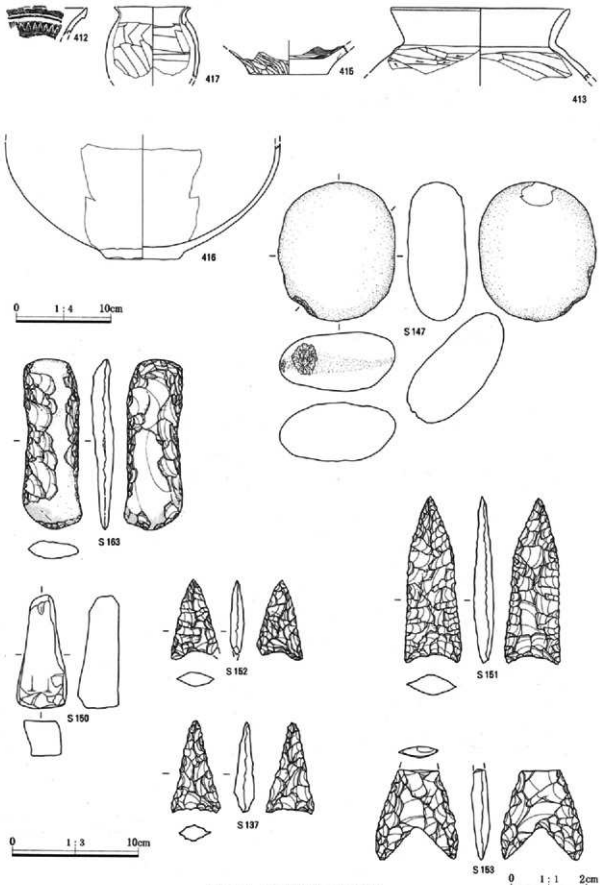
第121図　1区遺構外の出土遺物（2）



第122図　１区遺構外の出土遺物（３）



第123図　1区遺構外の出土遺物（4）



第124図　2区遺構外の出土遺物

第５章　科学分析報告

出土遺物の組成に基づく荒砥宮田遺跡古墳時代出土鉄器の分類とその意味

岩手県立博物館　赤沼　英男

1　はじめに

群馬県前橋市に所在する荒砥宮田遺跡は、県営荒砥北部圃場整備事業に伴い昭和58年に発掘調査された遺跡である。調査の結果、４世紀～６世紀代に比定可能な住居跡が確認され、型式学的に４世紀代と推定される方形鏃・鋤先[1]、４世紀代の可能性がある板状鉄製品、６世紀代の可能性がある刀子が検出された[2]。群馬県下における古墳時代出土鉄器の金属考古学的調査例は乏しく、鉄器製作に使用された地金の組成に基づく分類はなされていない。鉄生産関連遺構の検出例も希薄なため、鉄器地金の製造方法についても未解明である。

古墳時代における鉄器の普及状況を解明するための基礎資料を得ることを目的として、荒砥宮田遺跡の古墳時代の遺構から出土した鉄器および６世紀代の住居跡埋土中から出土した鉄滓の金属考古学的調査を行った。特に、４世紀代と推定される２点の方形鏃・鋤先については、刃部から基部に至る切断試料を準備し、断面構造を調べた。その結果、２点の方形鏃・鋤先は共析鋼(炭素量約0.8%の鋼)に近い組成の鋼を用いて製作されていたこと、それぞれ同世紀、６世紀代に比定される板状鉄製品、刀子の素材となった鋼とは化学組成が異なっていた可能性が高いことが判明した。古墳時代、群馬県には複数の地域から製品鉄器または鉄器製作の素材として使用された原料鉄がもたらされたとみることができたわけである。以下に、荒砥宮田遺跡出土資料の金属考古学的調査結果について報告する。

2　調査資料

金属考古学的調査を行った資料は、４世紀代と推定される方形鏃・鋤先２点(No.１・No.２)、４世紀代に比定される２区５号住居跡の埋没土中から検出された板状鉄製品１点(No.３)、６世紀代の可能性がある刀子１点(No.４)、および６世紀代に比定される１区19号住居跡の埋没土中から検出された鉄滓２点(No.５・No.６)の６資料である。No.５、No.６鉄滓は６世紀代の可能性があるものの、時期の特定は困難とされた。２点の方形鏃・鋤先のうち、No.２は約半分が喪失しており、刃部から基部にいたる身幅もNo.１に比べ約１cm短くなっている。刃先部分も失われた資料と推定された。調査資料の概要は表１に示すとおりである。

3　調査試料片の摘出

方形鏃・鋤先についてはX線透過観察を行い、メタルがよく残っている領域を切断試料摘出位置とした。シリコンを用いて摘出部分の型をとった後、ダイヤモンドカッターを装着したハンドドリル(以下、ハンドドリルという)を使って２つに切断した。一方の切断面から試料厚が５mm程度になるよう刃先から基部に向かって再度切断し、切断試料を得た。予め作成したシリコンの型にエポキシ樹脂を流し込み、摘出した試料とほぼ同形状の部材を作成した後、切断した試料に貼り合わせ整形した。整形後、アクリル樹脂を減圧含浸し、十分に乾かしアクリル絵の具で古色して、切断前の状態に復元した。上記切断試料とは別に、資料の外観形状を損ねることのないよう細心の注意を払いながら、刃部および基部それぞれ２箇所(Eg_{1-2}、Bs_{1-2})から約0.2ｇの試料を摘出し、化学成分分析用試料とした。

鉄滓についてはハンドドリルで深さ1～2cmの切り込みを入れ、一方の切り込み面から約1gの試料を切り取った。摘出した試料をさらに2分し大きい方を組織観察に、小さい方を化学成分分析に供した。試料摘出位置は図1～図7に示すとおりである。

4　調査方法

組織観察用試料についてはエポキシ樹脂に埋め込み、エメリー紙、ダイヤモンドペーストを使って研磨した。研磨面を金属顕微鏡で観察し、地金の製造方法を推定するうえで重要と判断された鋼製鉄器に残存する非金属介在物、および鉄滓中の鉱物相をエレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー(EPMA)で分析した。No.1、No.2についてはナイタール(硝酸2.5mlとエチルアルコール97.5ml溶液)で腐食し切断面の炭素濃度分布を調べた後、メタルフローと呼ばれる方法で折り返し鍛錬、合わせ鍛え等、機械的加工実施の有無について調査した。

化学分析用試料は表面に付着する土砂、錆をハンドドリルで丹念に削り落とし、エチルアルコール、アセトンで超音波洗浄した。洗浄した試料を130℃で2時間以上乾燥し、ほぼメタルからなる試料については直接、錆および鉄滓についてはメノー乳鉢で粉砕した後テフロン分解容器に秤量し、塩酸、硝酸、およびフッ化水素酸を加え、マイクロウェーブ分解装置で溶解した。溶液にホウ酸を加え、再びマイクロウェーブ分解装置に供した後、蒸留水で定溶とし、T.Fe(全鉄)、Cu(銅)、ニッケル(Ni)、コバルト(Co)、マンガン(Mn)、リン(P)、チタン(Ti)、けい素(Si)、カルシウム(Ca)、アルミニウム(Al)、マグネシウム(Mg)、バナジウム(V)、砒素(As)、アンチモン(Sb)の12元素を高周波誘導結合プラズマ発光分光分析法(ICP－OES法)で分析した。

5　調査結果

5－1　鉄器の化学組成

表2に鉄器から摘出した試料の化学成分分析結果を示す。No.1 Bs_1・Eg_2・Bs_2、No.2 Bs_1・Eg_2から摘出した試料のT.Feは94.08～99.28%で、主としてメタルからなる試料が分析されている。No.2 Bs_2のT.Feは86.00%でメタルと錆が混在した試料、他の4試料は53.42～62.68%で錆化が進んでいる。

No.3を除く9試料からは0.01%を上回るCu、Ni、Coが検出され、No.4からは0.71%のPが分析されている。錆化が進んだ試料に含有される微量元素を検討する場合、埋蔵環境からの富化を考慮する必要があるが[4]、遺物を埋蔵する土砂に100ppm(0.01%)以上のCu、Ni、およびCoが含有されることはまずない[5]。金属考古学的調査を行った鉄器に、銅またはその合金をはじめとする異種金属の付着がみられなかったこと[6]を考慮すると、0.01%以上のCo、Ni、Cuが検出された試料については、検出された三成分のほとんどが錆化前の地金に含まれていたと判断される。

一方、Pについては埋蔵環境下から富化されることがある[6]。錆化した試料に含有されるPの分析値を評価する場合、遺物を取り囲んでいた土壌中のP含有量、またはほぼ同じ埋蔵環境下にあったとみることのできる他の鉄器のP含有量を調べ、それらの結果を比較して富化の有無を検討する必要がある。しかし、0.71%のPが検出されたNo.4については、同じ埋蔵環境下にあったとみなすことができる他の鉄器の分析値がないためその実施は難しい。ここではNo.4に相当量のPが含有されていた可能性があることを指摘するにとどめる。

5－2　鉄器の組織観察結果

No.1[図1(1)a_1]切断試料のマクロエッチング組織を図1(1)b_1、図1(2)b_{1-2}に示す。図1(1)b_1、図

1・(2) b_1はメタルフロー、図1(2) b_2はナイタールによる腐食組織である。試料断面中央部分にはメタルが残存しており、その周縁部は錆で覆われている。ナイタールでは木を装着したと推定される部位とは反対側の部位にわずかに金属光沢を呈する領域がみられ、それ以外は全域がほぼ一様に黒く腐食されている。メタルフローでは腐食の差異がナイタールよりも明瞭に現れていて、刃先部分にわずかに残存するメタル部分が最も黒く腐食されており、断面中央部には黒く腐食された部分と金属光沢を呈する領域が層状に分布する。図1(1) b_1領域R_1には強く腐食された領域とそれほど腐食されない領域が層状に並ぶ様子が観察される[図1(1) c_1]。領域R_2およびR_3はほぼ全域が一様に腐食されている[図1(1) c_{2-3}]。図1(2) b_2領域R_3は共析鋼に近い組成の鋼、領域R_2、R_1はそれぞれ炭素量0.6~0.7%、0.5~0.6%の鋼と推定される[図1(2) c_{1-3}][7]。

No.2[図2(1) a_1]切断試料断面中央部のナイタールによるマクロエッチング[図2(2) b_3]は、基部のメタルに金属光沢を呈する領域がみられるものの、他はほぼ一様に腐食されている。図2(1) b_1、図2(2) b_1のメタルフローでは、木を装着する部位に強く腐食された組織が分布し、その外側にはそれほど腐食されない領域の中に強く腐食された領域が薄層状に分布する組織が観察される。図2(1) c_{1-3}のミクロ組織には上記の状況が明瞭に現れている。図2(2) c_{1-3}のミクロエッチング組織によると、図2(2) b_3の領域R_1は炭素量0.4~0.5%の鋼、領域R_{2-3}はそれぞれ炭素量0.5~0.6%、0.6~0.7%の鋼と推定される。No.1およびNo.2の曲部(木を装着し固定する部分、図3のMd)から摘出した試料の中央部には、ともに炭素量0.5%程度の鋼が配されている。

No.1およびNo.2の炭素量が異なる組織の境界部分には、それぞれ刃部から基部方向に層状に伸びたやや暗灰色を呈する領域(Ol)と微細な結晶を内包するガラス化した領域(Ma)からなる非金属介在物、または黒色を呈するガラス質けい酸塩(Gl)からなる非金属介在物が残存する。やや暗灰色を呈する領域OlはFe-Ca-Si-O系化合物[(Fe,Ca)-かんらん石]と推定され、領域Glは$FeO-CaO-Al_2O_3-K_2O-MgO-SiO_2$系である(図4)。

No.4から摘出した試料はその全域が錆からなり、いたるところに亀裂や空隙がみられる。マクロ組織枠で囲んだ内部には灰色の粒状領域が点在し、EPMAによってウスタイト(Wü:化学理論組成FeO)と推定された(図5)。No.3から摘出した試料は錆化が著しく、中心部分は失われている。錆化前の組織を推定できる領域を見出すことはできなかった(図6)。

5－3　鉄滓の化学組成

No.5およびNo.6のT.Feはそれぞれ31.24%、41.03%で、他に23.3%、19.3%のSi、3.44%、2.16%のCa、5.12%、4.08%のAlを含有する。酸化鉄に富む鉄滓である(表3)。酸化鉄と粘土状物質の反応生成物と推定される。

5－4　鉄滓から摘出した試料片の組織観察結果

No.5の凸部表面は青灰色を呈し、部分溶融した粘土状物質が固着している。摘出した試料にはいたるところに空隙がみられる。マクロ組織枠内部のEPMAによる組成像(COMP)には、灰色の粒状化合物ウスタイト(Wü)、やや暗灰色のFe-Mg-Si-O系化合物[Fa:マグネシムを固溶した鉄かんらん石[$2(Fe,Mg)O \cdot SiO_2$]と推定される]、暗灰色をしたFe-Al-O系領域(Ha)、および微細な化合物を内包する黒色領域(Ma)が観察された(図7)。No.6もほぼ同様の鉱物組成をとる(図7)。

6　考察

6－1　方形鍬・鋤先の断面構造

5－2で述べた断面組織観察結果から明らかなように、No.1の刃先先端部分から基部に向かう約1㎝の領域には、共析鋼に近い組成の鋼が配されていたと推定される。No.2の刃先部から基部にいたる身幅はNo.1に比べ1㎝程度短く、刃先部にNo.1と同程度の炭素量の鋼が配されていたかどうかは不明である。No.1およびNo.2の試料断面中央から刃先にいたる部分は、主として炭素量0.5%程度またはそれ以上の鋼によって構成され、メタルフロー組織によって、それらは層状に分布することが確認された。折り返し鍛錬を施こして、あるいは複数の鋼を合わせ鍛えて鍬・鋤先の形状に加工された可能性がある。残存するメタルには、(Fe,Ca)－かんらん石とガラス化した領域、またはガラス質けい酸塩によって構成される非金属介在物(鋼の製造過程で除去されずに残った不純物)が、刃部から基部に薄層状に伸びた状態で分布する。鋼を鍛伸する過程で薄層状を呈したものと推定される。メタルフローにみられる層状組織の境界線上に主としてウスタイトからなる非金属介在物がみられないことから、折り返し鍛錬、あるいは合わせ鍛えのいずれが行われたとしても鋼がよく鍛着されたと推定される。メタルの両側を覆う錆部分の炭素量が不明であるため、方形鍬・鋤先の鍛造法について詳述することは難しい。俵国一によって明らかにされた古墳時代出土直刀にみられる、高炭素鋼を炭素量0.2～0.3%程度の低炭素鋼が挟んだ、あるいは刃先部分に他の部位よりも炭素量の高い鋼が配された断面構造[8]を想定することができる。この点については残存状態の良好な資料で同様の調査を重ね、明らかにする必要がある。

なお、No.3およびNo.4については、錆化前の地金の状態を推定できる組織を見出すことはできなかったため、鉄器の製作方法について言及することはできない。

6－2　調査鉄器地金の分類

6－3で述べるように、古代には複数の鋼製造法があった可能性がある。いずれの方法が用いられたとしても、多段階の工程を経て目的とする鋼が製造されたことは間違いない。出発物質として同一の製鉄原料が使用されたとしても、製造方法や製造条件に応じ、製造される鋼の化学組成にばらつきが生じる。従って、表2の分析結果を単純に比較するという解析方法では、実態を反映した資料の分類結果を得ることは難しい。

表2の中で、Cu、Ni、Coの三成分は鉄よりも錆にくい金属のため、一度メタル中に取り込まれた後はそのほとんどが鉄中にとどまる。従って、合金添加処理が行われていなかったとすると、その組成比は鋼製造法の如何に係わらず製鉄原料の組成比に近似すると推定される。図8a・bはそれぞれ鋼製鉄器から摘出された10試料のうち、Ni、Coが100ppm(0.1%)未満にあるNo.3を除く9試料の(mass%Co)／(mass%Ni)と(mass%Cu)／(mass%Ni)、(mass%Ni)／(mass%Co)と(mass%Cu)／(mass%Co)を求め、その値を黒丸(●)でプロットしたものである。図8aではNo.1 Bs_1、No.1 Eg_2・Bs_4、No.2 Eg_1・Eg_3、No2Bs_5・Bs_2の7試料が左下にほぼまとまって分布し、No.1 Eg_1はその左周縁部、No.4は上部の離れた位置にある。図8bにおいてもNo.1 $Bs_{1\cdot2}$、No.1 Eg_1、No.2 Eg_1・Bs_1、No.2 Eg_3・Bs_2の7試料は左方中央付近にほぼまとまって分布するのに対し、No.1 Eg_1およびNo.4はそれぞれ図の左上方、右中央の離れた位置にプロットされる。この結果に、表2の化学成分分析値を加味すると、以下の4点を指摘できる。

①No.4はNo.1およびNo.2とは異なった組成の原料鉱石を用いて製造された鋼を素材として製作された可能性が高い。No.4には0.04%のSbが含有されているが、No.1およびNo.2はいずれも0.01%未満である。この分析結果もそれを支持している。

②Ni、Coがともに0.01％未満のため図８にプロットできなかったNo. 3には、0.28％のAsが含有されている。他の３資料から摘出した試料のAs含有量が0.01％未満であることを加味すると、No. 3はNo. 1 、No. 2 、およびNo. 4とは異なった組成の原料鉱石を始発原料として、または異なった方法で製造された鋼を用いて製作された可能性がある。

③No. 1およびNo. 2から摘出した試料のCu、Ni、およびCo三成分比はNo. 1の刃先部から摘出した試料を除きほぼ同じである。No. 1を除く７試料については、同一の原料鉱石を用いて製造された鋼を素材として製作された可能性が高い。

④No.1刃先部から摘出した試料の三成分比がNo. 1から摘出した他の３試料と異なる理由として、刃先部に異なった原料鉱石を用いて製造された鋼を配し鍬・鋤先が製作された、または刃先部分が消耗したため、後代に別の鋼で補修した、という２点を考えることができる。図８ｂにおいて、No. 1 Eg_1とNo. 1およびNo. 2から摘出した７試料は原点を通る直線上に、図８ａではNo. 1 Eg_1は他の７点に近接して分布する。Cu、NiおよびCo含有量は異なるものの三成分比は８試料ともほぼ同じ可能性がある。この点については鋼の炭素量とNi、Co含有量の関係を検討する中で吟味したい。

６－３　古代における鋼の製造

古代の鋼製造法については幾つかの方法が提案されており、見解の一致をみるにいたってはいない。その主因は、原料鉱石(砂鉄もしくは鉄鉱石[8])を製錬して得られる主生成物の組成についての見解の相違にある。

製錬産物である鉄は炭素量に応じ、鋼と銑鉄の２つに分類される。製錬炉で得られた鉄から極力鋼部分を摘出し、含有される不純物を除去するとともに、炭素量の増減を行って目的とする鋼を製造する。そのようにして製造された鋼を使って、製品鉄器が製作されたとする見方がある[1]。製錬炉で直接に鋼が造り出されるという意味で、この方法は近世たたら吹製鉄における鍛押法[9]によって生産された鉄塊を純化する操作に近似する。また、この方法によって得られた鉄〔炭素量が不均一で鉄滓が混在した鉄(主として鋼からなるが銑鉄も混在すると考えられている)〕を精製し目的とする鋼に変える操作は、精錬鍛冶[1]と呼ばれている。古代に鋼を溶融する技術は未確立であったと考えられるので(溶融温度は炭素量によって異なるが、炭素量0.1～0.2％の鋼を溶融するためには炉内温度を1550℃以上に保つ必要がある[7])、主として鋼から成る鉄から鉄滓を分離・除去する際の基本操作は加熱・鍛打によったと推定される。組成が不均一な鉄から純化された鋼を得る操作に精錬鍛冶という用語が用いられたのは、上述によるものと推察される。

一方、夥しい数の鉄仏や鉄鍋、鉄釜をはじめとする鋳造鉄器の普及が示すように[10][11]、遅くとも９世紀には銑鉄を生産する技術、すなわち銑鉄を炉外に流し出す製錬法が確立されていたとする見方が出されている[10]。得られた銑鉄を溶解し鋳型に注ぎ込むことによって鋳造鉄器が製作される。また、生産された銑鉄を脱炭することにより鋼の製造も可能となる。この方法は銑鉄を経由して鋼が製造されるという意味で、間接製鋼(鉄)法[6]に位置づけられる。また、福岡県春日市赤井手遺跡にみるように、弥生時代の遺構から棒状銑鉄が検出されていること[12]、古墳時代前期初頭に比定される、千葉県八千代市沖塚遺跡では銑鉄を脱炭して鋼を製造したとみることのできる鉄生産関連遺構が検出されていること[13]をふまえると、既に古墳時代には原料銑鉄が流通していた可能性がある。

銑鉄を脱炭する方法の一つとして、近世たたら吹製鉄における大鍛冶[1]がよく知られている。たたら吹製鉄には銑押法と鍛押法の２つの方法がある。後者における主生産物は鍛鉄(主として鋼からなる鉄塊)、前者は炉外に流し出される銑鉄で、副生成物として炉内に鍛鉄もできる。銑押法において鍛鉄は操業の妨げにな

るので、鉄棒をたえず炉内に入れ炉外に取り出すようつとめたという。このようにして生産された銑鉄は鍛冶場に運ばれる。そこではまず火床炉の炉底に木炭を積み、その上に銑鉄を羽口前にアーチ形に積み重ね、さらに小炭で覆った後底部に点火する。積み重ねられた銑鉄は内部にあるものから溶融し、滴下する。この時、羽口付近の酸化性火焔にふれ酸化され、鋼(左下鉄)となる。ここまでの操作は「左下」と呼ばれる。左下鉄は製錬時の副生成物である鍛鉄とともに再度同じ火床炉にアーチ状に積まれ、上述と同様にして脱炭が図られる。脱炭が十分に進んだところで金敷の上にのせられ、加熱・鍛打によって鉄滓の除去と整形がなされる。後者は「本場」と呼ばれる。上記の「左下」と「本場」、2つの操作を経て包丁鉄を造る方法が大鍛冶と呼ばれている[26]。上述から明らかなように、大鍛冶における「本場」の操作内容は出発物質が異なるものの、基本的に先に述べた精錬鍛冶とほぼ同じとみることができる。

大鍛冶では空気酸化により局所的に銑鉄の脱炭が図られるが、溶銑(溶融した銑鉄)を準備し、大鍛冶と同じ原理によって脱炭する方法が古代に行われていたとする見方が出されている[20]-[24]。この方法の場合、溶銑の確保とそれを脱炭するための設備・道具が不可欠であり、現在その点についての検討が進められている。

上記から明らかなように、鉄に関する生産設備として少なくとも①製錬炉、②溶解炉、③精錬炉、④鍛冶炉の4つがあった可能性がある。さらに、製錬炉としては主として銑鉄を生産するための炉と主として鋼を生産するための炉が、精錬炉については銑鉄を局所的に溶融し脱炭するための炉と溶銑を準備した後それを脱炭して鋼を製造するための炉が、鍛冶炉については精錬鍛冶と鍛錬鍛冶炉または小鍛冶炉があった可能性があり、検出された炉跡の残存状況と出土資料の形状でただちにその機能を決定することはきわめて危険である。以下ではこの点に留意し、考古学の発掘調査結果と出土鉄滓の金属考古学的解析結果を基に、金属考古学的解析を行った2点の鉄滓の成因について検討する。

6－4　鉄滓の成因

既述のとおり、No.5・No.6椀形滓はともに1区19号住居跡の埋土中から出土した資料であり、それらの時期を6世紀に特定することは難しい。1区19号住居跡内およびその周辺から鉄関連炉跡は検出されておらず、鉄関連炉跡との関係で成因を議論することはできない。ここでは鉄滓の形状と組成を基に、その成因について検討する。

2資料ともに凸部には局所的に溶融または部分溶融した粘土状物質が固着している。凸部内側は主としてガラス化した領域からなる鉄滓が、その内側にはウスタイト、鉄かんらん石、Fe－Al－O系領域が残存した酸化鉄に富む鉄滓が残存する。2資料ともに曲率を有していることをふまえると、鉄滓が生成した設備または道具が同様の形状を呈していたと推定される。No.5およびNo.6は酸化鉄と溶融または部分溶融した粘土状物質が反応して生成した資料とみることができ、6－3に基づけば、製錬、精錬鍛冶、または精錬操作に伴って生成した資料と考えられる。

製錬を想定した場合、原料鉱石としてTiをほとんど含まない塊鉱または粉鉱を考える必要がある。遺跡周辺にそれらに合致する鉄資源が賦存しないこと[3]、酸化鉄の還元に不可欠な機密性が確保された炉跡が未確認であることをふまえると、発掘調査区域内で製錬が実施されていたことを主張することはできない。

精錬鍛冶における出発物質は主として鋼からなり、相当量の鉄滓が混在した組成が不均一な鉄である[20]。木炭の燃焼熱による炉内到達可能温度を考慮すると、主として鋼からなる鉄を溶解することは困難であり、純化は基本的に加熱・鍛打によったとみなければならない。この操作では鉄塊に付着または鉄塊中に固着する鉄滓が破砕され除去される。その過程で飛散した鉄滓が炉内に入り、炉材粘土と反応しながら溶融もしくは部分溶

融した後、炉底にたまり固化する。精錬鍛冶の立場に立った場合、2点の椀形滓はその形状から、炉底部において生成したとみなければならない。その場合、熱源である木炭が共存しているので、鉄滓中にある程度の木炭が噛み込まれるはずである。上記2点の鉄滓には木炭の噛み込みや固着はみられない。熱源である木炭と反応サイトとが分離された状況下において生成した鉄滓の可能性があり、精錬鍛冶ではその形状を説明することが難しい。

椀形を呈すること、木炭と反応サイトとが離れた位置にあった可能性が高いことを考え合わせると、粘土状物質を用いて製作された椀形容器の中に溶銑を準備し、主として空気酸化によって溶銑を脱炭して鋼を製造する操作(精錬)が行われていた可能性が高いと筆者は考える。2点の椀形滓に残存する酸化鉄、鉄かんらん石、またはFe－Al－O系化合物は、溶銑の再酸化物質と粘土状物質との反応生成物とみることによってその説明が可能となる。

精錬を想定した場合、銑鉄の入手方法が問題となる。精錬鍛冶の出発物質である組成が不均一な銑はしばしば「荒鉄」と呼ばれる[11]が、最近の文献資料の研究によってそれは「銑鉄」であり、その流通は平安末まで遡る可能性のあることが指摘されている[12]。No.5、No.6鉄滓が6世紀代の資料であったとすると、既に古墳時代に群馬県下にも銑鉄または鋳造鉄器がもたらされていた可能性を考えることができる。古墳時代には鋼素材である鉄鋌の流通は知られているが、銑鉄の流通をも考慮に入れ、鉄器製作の素材となった原料鉄の組成を吟味することによって、群馬県はもとより北関東地域の古墳時代における鋼製鉄器普及の実態に迫ることができるものと思われる。

7　まとめ

荒砥宮田遺跡から出土した遺物の金属考古学的調査をとおして、検出された方形鍬・鋤先は刃部に他の部位に比べ炭素量の高い鋼を配して、あるいは炭素量の高い鋼を炭素量の低い鋼で挟んで鍛着し、製作されたと推定された。

方形鍬・鋤先、方形鍬・鋤先とほぼ同時期に使用された可能性がある板状鉄製品、および6世紀代の可能性がある刀子の製作に使用された鋼の化学組成には明瞭な差異がみられた。古墳時代には製品鉄器、または製品鉄器製作に不可欠な原料鉄(銑鉄または鋼)が複数の地域からもたらされていたと推定される。今後、同時代に比定される鉄関連資料の金属考古学的調査を進めることにより、北関東地域の古墳時代における鉄器普及の実態に迫ることができるにちがいない。

註

1）鍬鋤先の名称については、岩崎卓也[13]によった。

2）岩崎卓也「鉄製鍬・鋤先の周辺」『日本史の黎明』株式会社六興出版、1985、pp.413－433。

3）財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　小島敦子氏からのご教授による。

4）佐々木稔、村田朋美「古墳出土鉄器の材質と地金の製法」季刊考古学、8、1984、pp.27－33。

5）岩手大学教育学部土谷信高助教授からのご教授による。

6）佐々木稔、伊藤薫「川合遺跡出土の鉄斧、鉄鎌ならびに鋤先の金属学的調査」『静岡県埋蔵文化財調査研究所　研究紀要Ⅱ』静岡県埋蔵文化財調査研究所、1987、pp.63－73。

7）『鉄鋼の顕微鏡写真と解説』丸善株式会社、1968。

8）俵国一『日本刀の科学的研究』日立印刷、1982。

9）各種の岩石、とりわけ火成岩中の主として磁鉄鉱と含チタン磁鉄鉱を構成鉱物とする粒子が岩石の風化に伴って分離し、現地残留や風および水などの淘汰集積作用などで濃縮したものが砂鉄鉱床といわれている[10]。従って砂鉄を構成する主要鉱物は磁鉄鉱であり、鉄鉱石と区別して扱うことには岩石鉱物学上誤解を招く恐れがあるが、ここでは上述によって生成した鉱床から採取された、磁鉄鉱および含チタン磁鉄鉱を主成分とする粒子を砂鉄、他の成因によって生成した鉄鉱床から採掘されたものを鉄鉱石と呼ぶことにする。

10）『鉄鋼便覧』日本鉄鋼協会編、丸善、1981。

11）大澤正巳「古墳供献鉄滓からみた製鉄の開始時期」季刊考古学、８、1984、pp.36－40

12）河瀬正利「中国地方におけるたたら製鉄の展開」『たたらから近代製鉄へ』平凡社、1990、p.11。

13）五十川伸矢「古代・中世の鋳鉄鋳物」国立歴史民俗博物館研究報告第46集、1992、pp.１－79。

14）五十川伸矢「古代から中世前半における鋳鉄鋳物生産」季刊考古学、57、1996、pp.57－60。

15）関清「古代末の北陸－富山湾岸部の遺跡群－」季刊考古学、57、1996、pp.30－32。

16）空気酸化により鉄鉄中の炭素を脱炭した場合、操作方法によってはただちに α Feに近い組成の鉄が得られた可能性がある。古代の鋼製鉄器によく使用される亜共析鋼が銑鉄を精錬してただちに得られたかどうかについては不明なため、本論では間接製鋼(鉄)法という表現をとった。

17）『赤井手遺跡　春日市文化財調査報告書第６集』福岡県春日市教育委員会　1980

18）荻原恭二・佐々木稔「八千代市沖塚遺跡の再検討」『千葉県史研究』９号　(財)千葉県史料研究財団　2001、p.114。

19）村上英之助「村上・中澤の往復書簡」たたら研究、36・37、1996、p.78－88。

20）福田豊彦「近世における「和鉄」とその技術－中世の「和鉄」解明のために－」『製鉄史論文集　たたら研究会創立四十周年記念』たたら研究会、2000、pp.195－228。

21）福田豊彦「近世前期,和鉄の生産と流通の基本形態」たたら研究、39、1999、pp.15－24。

22）赤沼英男「みちのくの地から中世の鉄をみる」ふぇらむ、Vol.２ No.１、社団法人日本鉄鋼協会、1997、pp.44－51。

23）赤沼英男、佐々木稔、伊藤薫「出土遺物からみた中世の原料鉄とその流通」『製鉄史論文集 たたら研究会創立四十周年記念』たたら研究会編、2000、pp.553－576。

24）赤沼英男「中世後期における原料鉄の流通とその利用」『鉄と鋼の生産の歴史』株式会社雄山閣、2002、pp.97－115。

25）遺跡直轄の製錬所が別途確保されていて、そこで生産された組成不均一な鉄塊が精錬鍛冶場に運び込まれていた、あるいは組成不均一な鉄が広域的に流通していたことを前提として、精錬鍛冶の実施が可能となる。流通品は価値換算を容易に行えるよう、組成や形状が規格化されている必要がある。組成が不均一で形状が不定形な鉄が商品として広域的に流通していたとは考えにくい。精錬鍛冶の実施には、遺跡直轄の製錬所の確保が不可欠であったと筆者は考える。

26）福田豊彦「鉄を中心にみた北方世界―海を渡った鉄」『中世の風景を読む　第一巻　蝦夷の世界と北方交易』新人物往来社　1995、pp.154－198。

表1　調査資料の概要

No.	検出遺構		資料番号	資料名	推定年代
	遺構名	層位			
1	1区11溝	埋土	M5	方形瓶・鋤先	4世紀末
2	1区11溝	埋土	M6	方形瓶・鋤先	不明（4世紀末か）
3	2区5住居	埋土	M15	板状鉄製品	不明（住居は4世紀後半）
4	1区35住居	貯蔵穴周辺	M3	刀子	6世紀か
5	1区19住居	埋土	M1	鉄滓	不明（住居は6世紀前半）
6	1区19住居	埋土	M2	鉄滓	不明（住居は6世紀前半）

注）　No.は分析番号、検出遺構、資料番号、資料名、推定年代は
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　小島敦子氏による。

表2　鉄器の分析結果

No.	Sa	資料名	化学組成(mass%)														n.m.i.
			T.Fe	Cu	Ni	Co	Mn	P	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V	As	Sb	
1	Eg_1	方形瓶・鋤先	62.68	0.021	0.076	0.012	0.002	<0.05	0.003	0.62	0.021	0.138	0.010	<0.001	<0.01	<0.01	(Ol,Ma)(Gl)
	Bs_1		94.08	0.021	0.078	0.023	<0.001	<0.05	<0.001	0.36	<0.001	<0.001	<0.001	<0.001	<0.01	<0.01	
	Eg_2		94.42	0.017	0.075	0.020	0.001	<0.05	<0.001	0.29	0.024	0.021	<0.001	<0.001	<0.01	<0.01	
	Bs_2		96.73	0.018	0.068	0.020	<0.001	<0.05	<0.001	0.22	0.003	<0.001	<0.001	<0.001	<0.01	<0.01	
2	Eg_1	方形瓶・鋤先	61.53	0.019	0.088	0.021	0.006	0.02	0.007	0.82	0.103	0.184	0.014	0.003	<0.01	<0.01	(Gl)
	Bs_1		94.81	0.019	0.074	0.022	<0.001	<0.05	<0.001	0.39	0.012	0.004	<0.001	<0.001	<0.01	<0.01	
	Eg_2		99.28	0.024	0.103	0.027	<0.001	<0.05	<0.001	0.10	0.004	0.005	<0.001	<0.001	<0.01	<0.01	
	Bs_2		86.00	0.017	0.057	0.016	<0.001	<0.05	<0.001	0.21	0.005	<0.001	<0.001	<0.001	<0.01	<0.01	
3	－	板状鉄製品	61.07	0.004	0.001	0.001	0.001	0.04	0.001	0.76	0.024	0.086	0.004	<0.001	0.28	<0.01	no
4	－	刀子	53.42	0.126	0.148	0.038	0.006	0.71	0.033	1.70	0.155	0.765	0.076	<0.001	<0.01	0.04	Wü

注1）　No.は表1に対応。Saはサンプル摘出位置。化学成分分析はICP－OES法による。
注2）　n.m.i.は非金属介在物組成。Wüはウスタイト、Olは(Fe,Ca)－かんらん石、Glはガラス質けい酸塩、Maはマトリックス、noは見出されず。

表3　鉄滓の分析結果

No.	化学成分(mass%)												鉱物組成
	T.Fe	Cu	Mn	Ni	Co	P	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V	
5	31.24	0.006	0.088	0.140	0.001	0.002	0.205	23.3	3.44	5.12	1.19	<0.001	Wü,Fa,Ha,Ma
6	41.03	0.023	0.075	0.110	0.003	0.005	0.154	19.3	2.16	4.08	0.925	<0.001	Wü,Fa,Ha,Ma

注1）Wü：ウスタイト(化学理論組成FeO)、Fa：FeO-MgO-SiO_2系化合物、:Ha：Fe-Al-O系領域、
Ma：マトリックス。

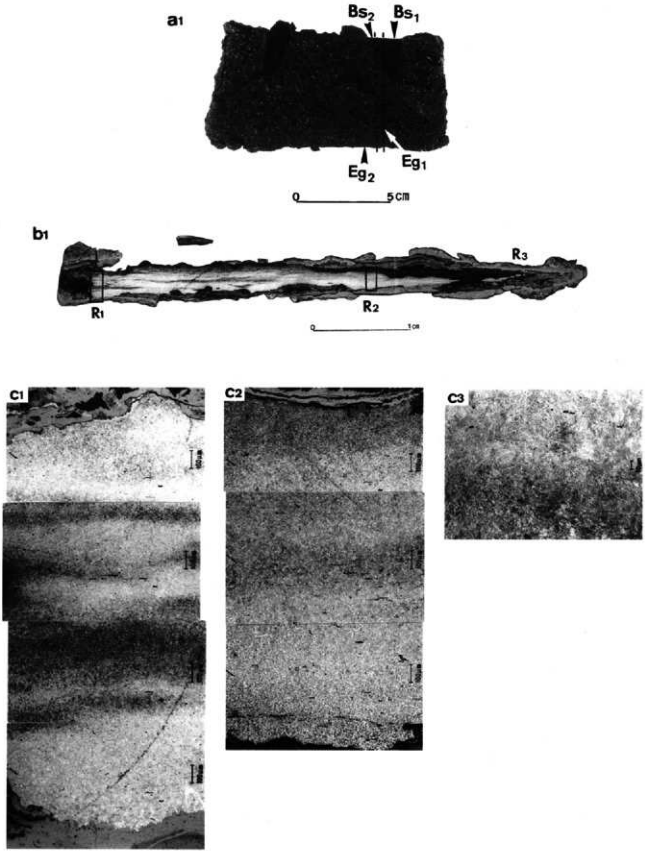


図1　No.1の外観と切断試料の組織観察結果(1)
a_1：外観の破線で示した位置を切断。Eg_{1-2}、Bs_{1-2}は化学分析用試料摘出位置。
b_1：切断試料のメタルフローによるマクロエッチング組織。拡大写真は図1(2)b_1。
c_{1-3}：それぞれb_1領域R_{1-3}内部のミクロエッチング組織。

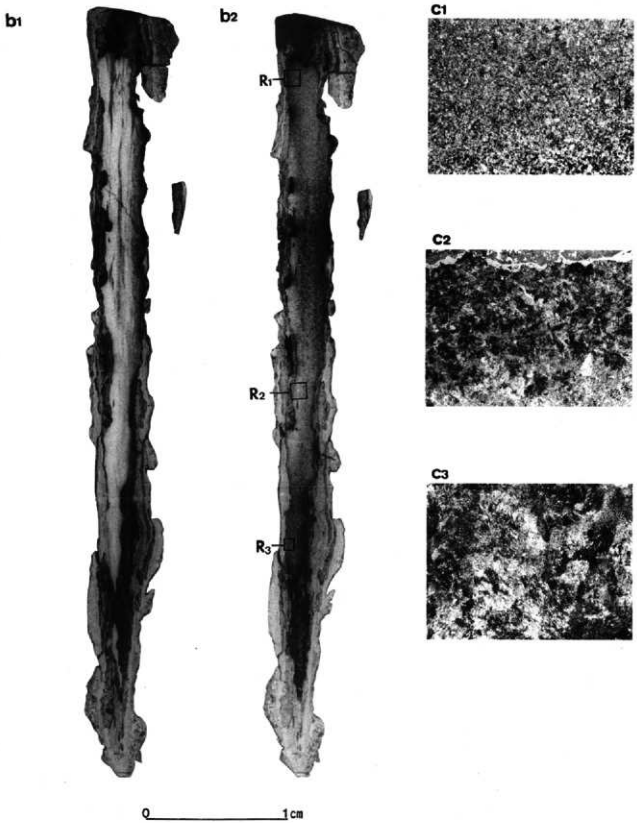


図1　No. 1切断試料の組織観察結果(2)
b_1：メタルフロー、b_2：ナイタール。$c_{1\text{-}3}$：それぞれb_2領域$R_{1\text{-}3}$のミクロエッチング組織。

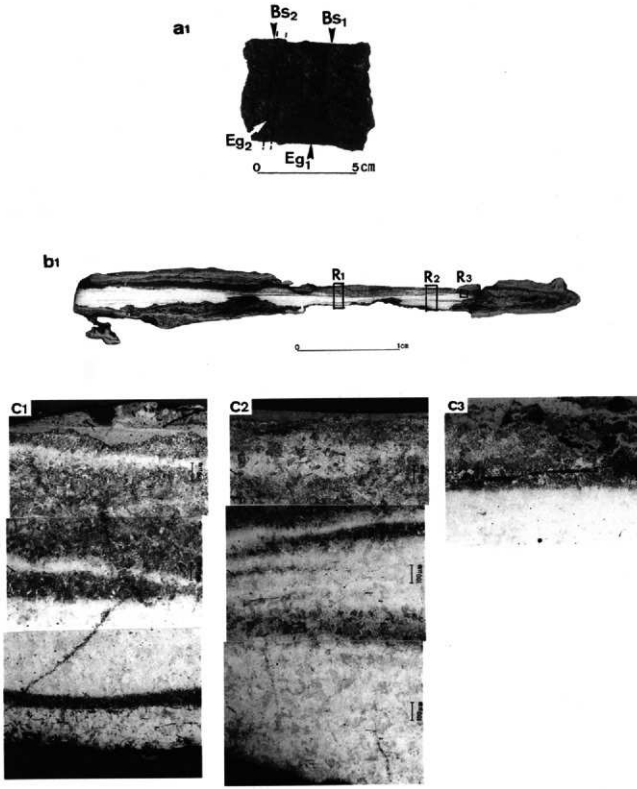


図2　No.2の外観と切断試料の組織観察結果(1)
a_1：外観の破線で示した位置を切断。Eg_{1-2}、Bs_{1-2}は化学分析用試料摘出位置。
b_1：切断試料のメタルフローによるマクロエッチング組織。拡大写真は図2(2)b_1。
c_{1-3}：それぞれb_1領域R_{1-3}内部のミクロエッチング組織。

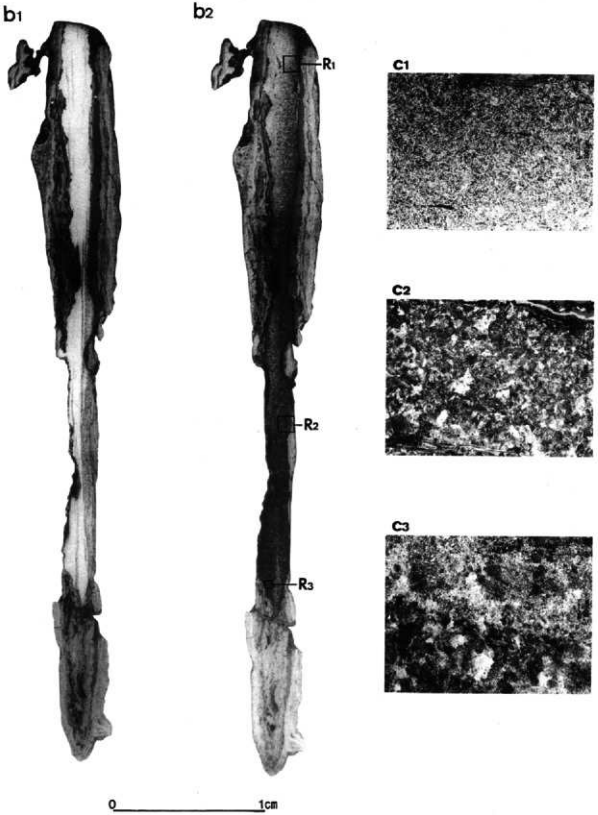


図２　No. 2 切断試料の組織観察結果（２）
b_1：メタルフロー、b_2：ナイタール。$c_{1\text{-}3}$：それぞれb_2領域$R_{1\text{-}3}$のミクロエッチング組織。

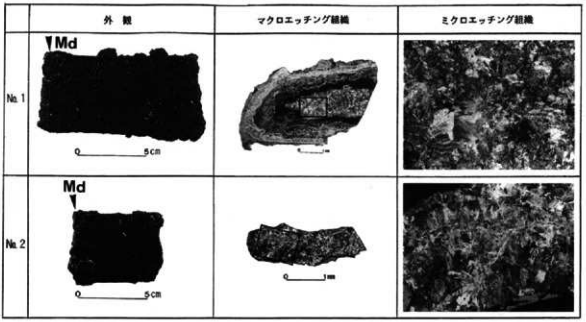


図3　No. 1およびNo. 2の曲部(図1および図2のMd部)から摘出した試料の組織観察結果。
外観の矢印は試料摘出位置。エッチングはナイタールによる。ミクロエッチング組織はマクロエッチング組織枠内部。

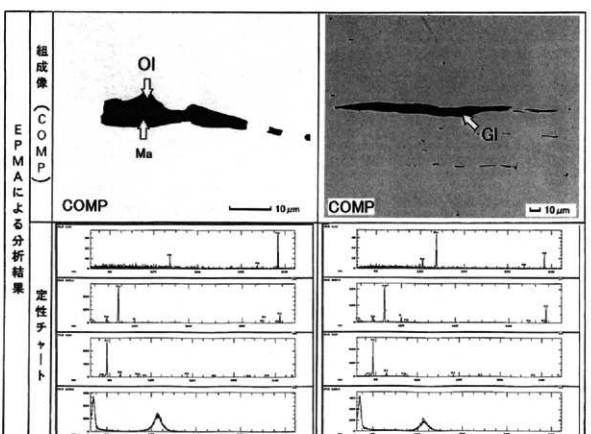


図4　No. 1およびNo. 2のメタルに残存する非金属介在物のEPMAによる分析結果
Ol：Fe−Ca−Si−O系化合物、Gl：ガラス質けい酸塩、Ma：マトリックス。

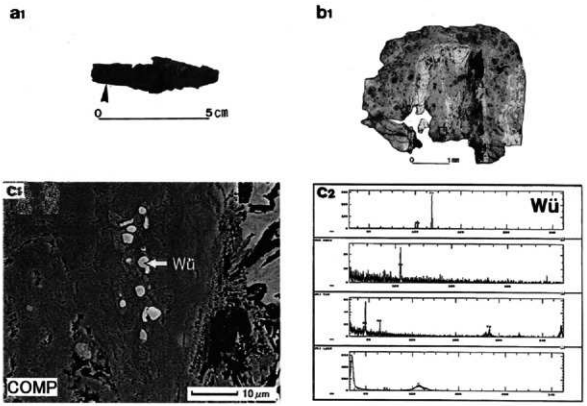


図5　No. 4の外観と摘出した試料の組織観察結果
a₁：外観の矢印は試料摘出位置。b₁：摘出した試料のマクロ組織。
c₁₋₂：b₁枠内部に残存する非金属介在物のEPMAによる組成像(COMP)と定性分析結果。

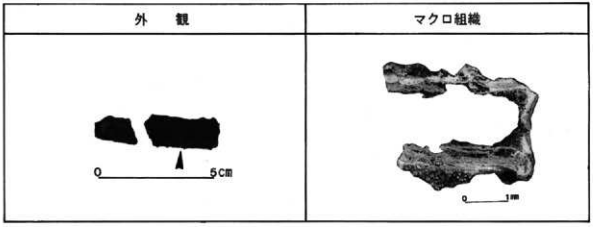


図6　No. 3の外観と摘出した試料のマクロ組織。

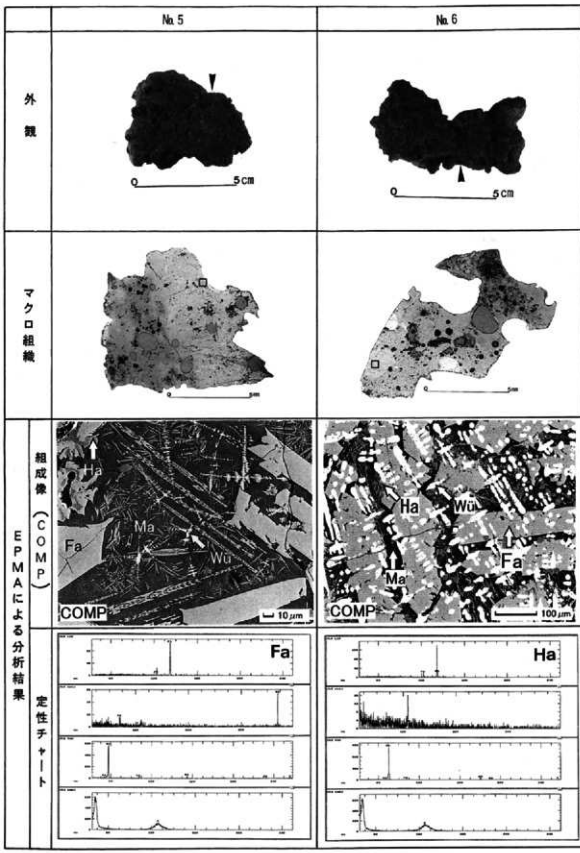
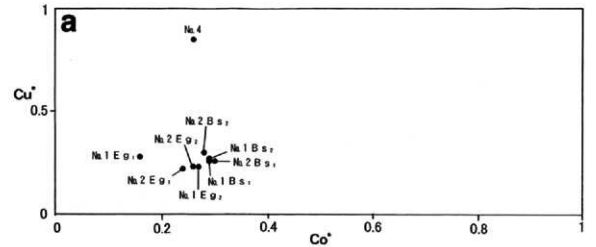


図7　No. 5・No. 6の外観と摘出した試料の組織観察結果
外観の矢印は試料摘出位置。EPMAによる組成像はマクロ組織の枠内部。
Wü：ウスタイト、Fa：Fe−Mg−Si−O系化合物、Ha：Fe−Al−O系化合物、Ma：マトリックス。



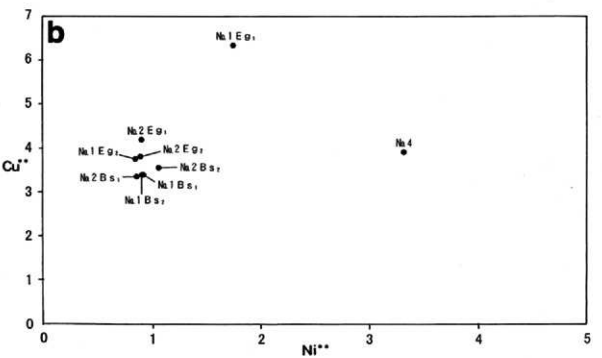


図8　鋼製鉄器に含有されるCu・Ni・Co三成分比

No.は表2に対応。

Cu*：(mass%Cu)／(mass%Ni)、　Co*：(mass%Co)／(mass%Ni)、

Cu**：(mass%Cu)／(mass%Co)、　Ni**：(mass%Ni)／(mass%Co)。

第６章　調査の成果と問題点

１．荒砥宮田遺跡の遺構分布とその変遷

荒砥宮田遺跡は赤城山麓に立地する縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。第Ⅰ分冊では縄文時代から古墳時代の遺構について報告した。ここでは各時期の遺構分布や変遷をまとめる。

縄文時代　縄文時代の遺構・遺物は少なく、縄文時代前期の住居１軒と土坑・細別時期不明の落し穴が４基検出されただけである。赤城山南麓の縄文時代前期集落分布の特徴は１～数軒の住居で構成されることである。一時期あたりの住居数も多く、重複が著しい中期の大集落とは対照的である。荒砥宮田遺跡１区の住居や土器出土状態は、このような赤城山南麓の前期集落構造に合致している。そのなかでも遺構・遺物の量は少なく、当時の主要な居住域ではなかったのであろう。

縄文時代前期より古い時期は、早期野島式土器の破片が２区で１点出土したのみであり、詳細は不明である。周辺の早期の遺跡としては、東方１㎞弱のところにある前橋市下鵜ケ谷遺跡や柳久保遺跡群で早期後半の包含層が検出されている。

縄文時代中期以降の遺構は調査区のなかでは検出できなかった。２区では中期加曽利Ｅ３式土器や後期堀之内２式土器が数点出土しているが、居住域としての土地利用ではなかったのだろう。２区東谷地および４区で合計４点の石鏃が出土している。狩猟空間であったのであろう。

弥生時代　今回の荒砥宮田遺跡の調査では、弥生時代の遺構は検出されなかった。しかし、１区14号土坑では群馬県西部に分布の中心がある樽式土器が半完形で出土した。この土器は口縁部がやや内碗気味に広がり、緩やかに屈曲する頸部から胴部下位はやや凹んで底部に至る。器形としてはやや古い様相を残す甕形土器である。口縁部から胴部上半にかけて櫛描き波状文が６条、間隔をあけずに施文されている。頸部に簾状文はなく、口縁部に折り返し部はない。これらの特徴から若狭編年のＶ－３期にあたると見たいが、共伴した土器は外来系と見られる無文の短頸甕で、今のところ時期を明らかにしがたい。

荒砥地域の炉付設住居の出土土器を概観すると、小型器台やＳ字甕と共伴して文様を施した樽式土器や赤井戸式土器が出土する住居の数は少なくない。古墳時代初頭にはまだ弥生土器がかなり使われていたのが実態であろう。そして北陸系の土器を多く使う荒砥上ノ坊遺跡のような集落も混在しているのである。これらの土器をどう位置づけるかは弥生土器から土師器への変化をどう考えるかに関連すると思われる。その過程を明確にする作業が必要と考えられるが、古墳時代に残る弥生土器の細分と共伴する外来系を含めた土師器自体の編年が急務であろう。

このような現状で荒砥宮田遺跡１区14号土坑出土の土器については、やや古い様相を残す器形を重視して、弥生時代終末期とした。今後の編年研究の進展を待ち、改めて位置づけたいと考えている。

一方、赤城山南麓の弥生時代の遺跡分布は希薄だといわれる。弥生時代後期の遺跡が少ないことは事実である。弥生時代後期住居の検出がいくつか報告されているが、南関東系土器を出土する荒砥前原遺跡を除き、その出土土器が、古墳時代に残存する弥生土器である可能性は大きい。それらの主体をなす赤井戸式土器も埼玉県北部から群馬県南西部に分布する吉ケ谷式土器の地域型で、本地域には弥生時代最終末から古墳時代初頭にしか分布しないという意見が近年提出されている。[注1] 赤城山南麓で検出されている弥生時代後期の住居の時期について再検討が迫られているのである。赤城山南麓では弥生時代中期後半から帯状沖積地の周辺に集落がつくられる。これらの住民が聞いたと考えられる水田は後期まで保持されないのであろうか。本地域の農耕社会定着の様相は未解明のまま残されている。

古墳時代前期　荒砥宮田遺跡の古墳時代の住居群は、1区から2区にかけての南北に細長いローム台地に分布していた。このうち古墳時代前期の遺構は、住居・土坑・溝・方形周溝墓が検出されている。

1区の遺構の分布は南西部の低地との境に沿うように16軒の大型の住居と小型の住居が混在していた。1区13号住居と15号住居、1区43号住居と45号住居のように近接する住居があることから、同時存在の住居は少ないと思われる。低地に接した台地縁辺に、大小混在した数軒の住居群が存在したと推定される。1北区には古墳時代前期の住居が確認できなかったので、住居の分布は1区45号住居を最北とし、台地の内部には及んでいなかったと考えられる。

この住居群の東側は浅間C軽石の堆積する狭い谷地に面している。台地斜面にこの谷地に沿って検出された80・81号溝は住居と同時期の遺物を出土しており、居住域の東辺を画する溝の可能性もある。この溝の延長は未確認で、南から南西部にかけての台地縁辺には溝は検出されなかった。また、1区北西部は台地の西縁辺まで調査が及んでいないので、古墳時代前期の居住域が西に広がる可能性は残されている。

2区の住居は3軒が東谷地の縁辺に偏在していた。台地縁辺に住居が偏在するありかたは本地域の農耕集落の典型的なものといえる。台地の頂部には1辺15mの方形周溝墓が1基単独で検出された。この周溝墓の時期は1区や2区の住居と同様な時期と考えられる。

2区東谷地でも浅間C軽石直下面を検出した。浅間C軽石は谷底の狭い範囲にしか残っていなかった。浅間C軽石直下のプラントオパール分析は実施できなかったが、谷が狭く畦・水路等の施設も確認できなかったので、水田化されていた可能性はほとんどないと思われる。東谷地を望む住居の時期は土器の様相から、浅間C軽石降下以降と考えられるので、この東谷地は軽石降下後、4世紀後半代に水田化され、1108年の浅間B軽石降下までその耕作は継続されたものと考えたい。この際浅間C軽石の下半部は耕作による攪乱が及ばないで残されたと考えられよう。

また2区東谷地の西縁には6基の大型不定形の粘土採掘坑とそれに付随すると考えられる4基の小型円形土坑が検出された。小型円形の土坑は出土遺物がないが、大型不定形の粘土採掘坑の埋没土と酷似しており、同時期のものと考えている。小型円形土坑は作業用の水溜め等の用途が推定される。大型不定形の土坑からはS字甕等、住居と同時期と考えられる土器が出土している。

群馬県では近年、古墳時代前期の粘土採掘坑がいくつかの遺跡で検出されている。荒砥宮田遺跡の南東5kmにある波志江中宿遺跡(注3)では、66基の大型方形の粘土採掘坑が検出された。居住域との有機的関連は不明であるが、当該期の土器生産のあり方に迫る遺構であり、注目していく必要があろう。

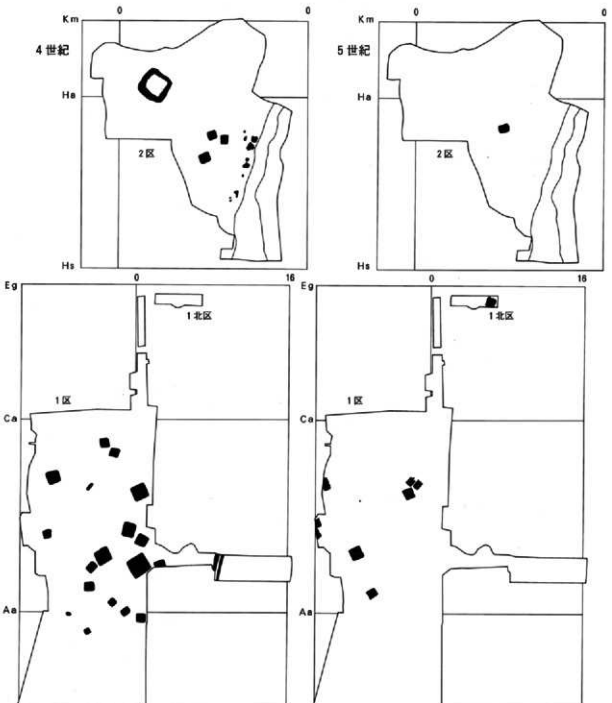
4区の西側低地でも浅間C軽石を確認した。ここでも帯状の谷地形の緩斜面に厚さ5～10cmの堆積を残しているのみであった。直下に平坦面はなく、畦・水路等の施設も検出されなかったので水田化されていたとは考えにくい。この低地に面する西側台地は、浅間C軽石降下より新しい時期の古墳時代前期集落である荒砥諏訪西遺跡の1区・2区である。この集落の水田耕地があるとすれば、平坦面が期待できる荒砥川寄りの低地であろう。しかしこの低地は古代のものと考えられる洪水堆積物に覆われており、古墳時代の水田面を確認することは現状では困難である。なお4区でもプラントオパール分析は実施できなかった。

古墳時代中後期　荒砥宮田遺跡の古墳時代中後期の遺構は、住居33軒、土坑9基、古墳1基が検出された。区ごとの内訳は1区で住居26軒、土坑8基、1北区で住居5軒、土坑1基、2区で住居2軒である。住居は出土土器から5世紀前半から6世紀後半と考えられるもので、炉の住居も3軒含まれている。

1区の古墳時代中期(5世紀)の住居分布は、ほとんど前期段階の住居と同様であるが、竈があり5世紀後半と考えられる1北区1号住居が台地内部に偏っ

た分布を見せる。5世紀の住居規模の違いは、4世紀に比べて明確でないように見える。古墳時代後期(6世紀)の住居分布は、前段階と同様に台地内部に広がっていく傾向が看取できる。また重複も著しく継続的な居住があったものと推定される。7世紀以降の住居は発掘区内では検出されなかった。この間に土地利用の変化があったものと考えられる。

1区南西部の水田域は第Ⅱ分冊で報告するが、検出された最も古い水田面は天仁元(818)年と推定される洪水堆積物に覆われたものである。台地上には古墳時代前期から集落が存在するので、低地が水田化されていたことは充分推定可能であろう。洪水砂で水田が甚大な被害を受けるまで、徐々に傾斜地に水田域を拡大させながら水田耕作を継続させてきた



のであろう。

2区では5世紀の住居が1軒、6世紀前半の住居が1軒と、住居の数は急激に少なくなる。その後は7世紀後半に小さな円墳1基がつくられ、居住域から墓域に変化していることが判明した。

この2区1号古墳は、発掘区北東隅で単独で検出された。上層は削平され、石室下部および前庭付近の周溝しか検出できなかった。この古墳は昭和8年に実施された上毛古墳綜覧漏れの古墳である。小低地を隔てて隣接する荒砥諏訪西遺跡では同時期の古墳が3基確認されている。用石材の様相、掘り方を有する点は荒砥地域によく見られる石室構築状況である。

荒砥宮田遺跡の周辺には、発掘された古墳時代の

第125図　1・2区の遺構分布の変化

集落遺跡の報告例が増えている。また上武道路建設に伴う発掘調査によって隣接地の新しい発掘成果も上がっている。[注4] これらの成果を総合化することによって、本地域の古墳時代社会構造がより明らかになるだろう。

2．荒砥宮田遺跡の出土遺物

（1）古墳時代前期の土器

荒砥宮田遺跡の古墳時代前期の遺構から出土する土器群については、1区13号住居と15号住居、1区43号住居と45号住居のように近接する住居があることから、新旧2時期あることが推定できるが、顕著な差を看取することができない。欠落する器種が多く変化を追うことが困難で、本遺跡の出土土器のみでは土器編年を整理することはできなかった。

その中で全体的な特徴を概観すれば、漏斗状の器受部と裾部を頂部で連結した形状の小形器台（第37図115）や小型丸底鉢（第37図106）、肩部の横方向刷毛目のないS字甕（第51図279）を含んでおり、概ね布留式および廻間Ⅲ式併行期と考えるのが妥当であろう。また、小型器台が含まれていること、S字甕肩部に横方向刷毛目のあるものがごく少ないこと、屈折脚の高坏が含まれていないこと等から、群馬県内の先行研究に照らせば、深沢編年[注5]の4期にほぼ対応すると考えられる。

当該時期の土器の暦年代については当地域にそれを確定しうる資料はない。近畿・東海地域との年代交差も確定したとは言い難いが、上記の土器の諸特徴から本遺跡から出土した土器は、4世紀でも中葉～後半の時期と考えられよう。

（2）古墳時代前期の礫石器

荒砥宮田遺跡では、古墳時代の住居から59点という比較的多くの礫石器が出土した。第5表は、これらの礫石器の出土状況を、各種類ごとにあらわしたものである。4世紀では19軒中8軒、5世紀では4軒中2軒、6世紀では29軒中6軒の住居から何らかの礫石器が出土している。これらは床面直上で出土した例が多く、異なる時期の遺物の混入ではなく、古墳時代に使われていたものと考えられる。

出土した礫石器は、敲き石・砥石・磨り石・台石と側縁に集中敲打して抉りを入れた礫の5種に大別できる。特に側縁に集中敲打による抉りを入れた礫が特徴的に4世紀の住居から出土している。それぞれの形態の特徴や出土類向は次の通りである。

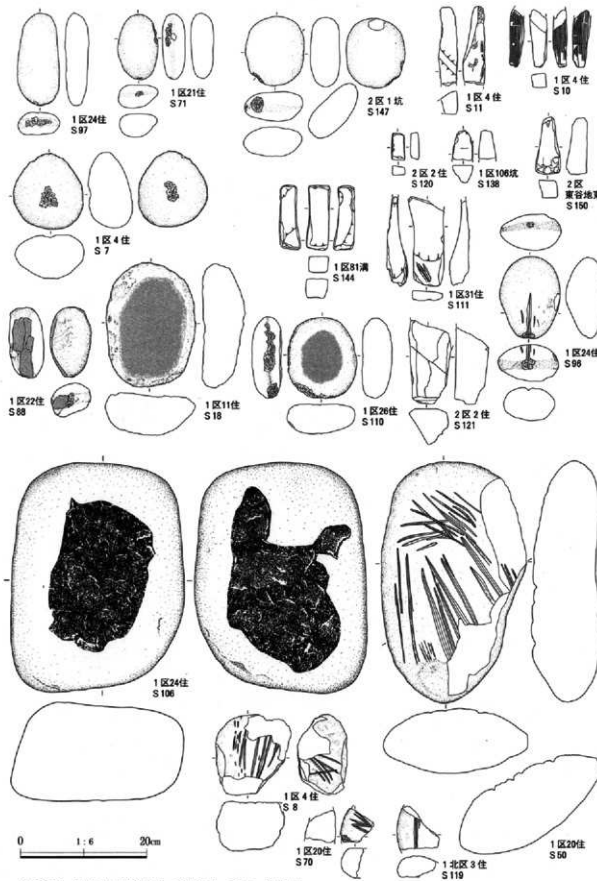
敲き石　敲き石は棒状（A）・楕円盤（B）・円盤（C）の3種があり、使用痕跡で重分類すると小口および側面のほぼ中央に集中する敲打痕の組み合わせが認められる。すなわち、A類には、小口にのみ敲打痕が残るもの（Aa）、小口の他側面のほぼ中央や側縁端部にも敲打痕が併存するもの（Ab）、側面に条線状の研磨痕を残すもの（Ac）が存在する。これは棒状の礫を握って対象物を敲くに際して、持ち方や角度を変えて多目的に使用した状況を看取できる。ただし小口にのみ敲打痕を残すものが全体22点のうち14点を占めていることから、縦方向に握って敲く方法が主体的であったと推定される。楕円盤形・円盤形には側面ほぼ中央に集中した敲打痕が残るものしか確認できなかった。しかし、出土量も棒状のものに比べて少なかったので、これ以外の使用法を否定することはできないだろう。敲き石は全部で22点出土したが、4世紀と6世紀の出土量の差はない。ただし6世紀には棒状のもので側面に敲打痕の残るものは出土しなかった。出土量が少ない上、本遺跡のみのデータで結論はだせないが、古墳時代を通じて棒状の敲き石は使用されていたと考えられる。

砥石　砥石は小型の角柱状をしたいわゆる砥石と、大形礫の平らな面に細い条線状の研磨痕跡を残したものの2種が出土している。小型角柱状の砥石は5点出土したが、2区2号住居（4世紀）S121、1区31号住居（5世紀）S111は床面直上から出土した。他の3点は埋没土中の出土である。

大型礫の平らな面に細い条線状の研磨痕跡を残したものは破片も含めて4点が出土した。研磨痕跡は上巾2.5～4.5㎜、深さ2～4㎜、断面三角形の溝状

第５表　遺構出土縄石器種一覧　来面出土は太字

		時期	敲き石					砥石		磨り石	白石	抉り入り縄							合計
			Aa	Ab	Ac	B	C	小型砥石	大型砥石			1	2	2a	3	4	4a	5	個数
1区	2	住居	4世紀																
1区	7	住居	4世紀																
1区	8	住居	4世紀																
1区	9	住居	4世紀																
1区	12	住居	4世紀																
1区	13	住居	4世紀																
1区	15	住居	4世紀									31	29・32・34	28・37	30・35			33	9
1区	17	住居	4世紀																
1区	20	住居	4世紀						50・70			54			66	52	56		6
1区	21	住居	4世紀	77		71								73	76				4
1区	23	住居	4世紀																
1区	24	住居	4世紀	97・103					96	93	106								5
1区	26	住居	4世紀					110				109							2
1区	38	住居	4世紀																
1区	43	住居	4世紀																
1区	45	住居	4世紀																
2区	2	住居	4世紀	123			122		121										3
2区	5	住居	4世紀								127								1
2区	6	住居	4世紀	131											130				2
1区	1	住居	5世紀																
1区	4	住居	5世紀					7	10・11	8	9								5
1区	28	住居	5世紀																
1区	31	住居	5世紀						111										1
1北区	1	住居	6世紀							118									1
1北区	2	住居	6世紀																
1北区	3	住居	6世紀						119										1
1北区	5	住居	6世紀																
1区	3	住居	6世紀																
1区	5	住居	6世紀																
1区	6	住居	6世紀	6															1
1区	11	住居	6世紀							18									1
1区	14	住居	6世紀	24															1
1区	16	住居	6世紀																
1区	18	住居	6世紀																
1区	19	住居	6世紀																
1区	22	住居	6世紀	79・91・86			80			88			92						6
1区	25	住居	6世紀																
1区	27	住居	6世紀																
1区	29	住居	6世紀																
1区	30	住居	6世紀																
1区	33	住居	6世紀																
1区	35	住居	6世紀																
1区	36	住居	6世紀																
1区	37	住居	6世紀	113															1
1区	39	住居	6世紀																
1区	40	住居	6世紀																
1区	41	住居	6世紀																
1区	42	住居	6世紀																
1区	44	住居	6世紀																
1区	46	住居	6世紀																
2区	1	住居	6世紀																
1北区	4	住居	6世紀																
その他の遺構			140・142・156	159		157・158							154		138・158				9
合計個数			14	1	1	4	2	5	4	5	2	3	5	3	7	1	1	1	59



第126図　荒砥宮田遺跡出土の敲き石・砥石・磨り石

で、その底面は比較的鋭角である。溝の長さは礫の大きさによって異なる。1区4号住居S8は欠損しているが最長7.3cmを測る。一方床面に据えられた1区20号住居S50は大型で、最長の研磨痕は18cmである。研磨痕跡が比較的鋭い断面形状を残していることから、金属器の研磨も視野に入れる必要があろう。しかしこの砥石で研磨したと推定できる金属器や、住居内での金属器製造あるいは修理の痕跡を確認することはできなかった。

磨り石　磨り石は5点出土しているが、1区24号住居S93を除き、床面直上から出土した。このうち1点は4世紀、1点は5世紀の住居、3点は6世紀の住居から出土している。形態は側縁に磨り面があるものと、中央部に磨り面の残るものがある。1区4号住居S9は床面に据えられた状態で使われたと思われる。

台石　1区24号住居S106は大型礫の表裏面に何らかの幅広の金属工具によると見られるハツリ痕跡が残る。重さは29kgあり、床面に据えて使われたと推定できる。2区5号住居S127も板状の礫で6.5kgである。こちらは明瞭な使用痕は確認できないが、やや上面がへこみ、何らかの作業に使われたと推定される。いずれも4世紀代の住居の、中央より北寄りの位置に据えられていた。

抉り入り礫　ここでは側縁のほぼ中央に集合打痕が残された礫石器を抉り入り礫と呼ぶ。全体で21点が出土した。このうち4世紀の住居から17点が出土している。6世紀の住居から出土した1区22号住居S92は、床面上5.5cmで出土しており、埋没土への混入の可能性が高い。したがってこの抉り入り礫が4世紀の住居に偏在しているのは、明らかである（第5表）。また、2点以上の抉り入り礫が出土した1区15号住居・20号住居・21号住居はそれぞれ一辺7.6m、10.4m、6.5mの大型の住居であることも特筆される。石材は棒状あるいは厚みのある楕円盤状の粗粒輝石安山岩で、1点だけ薄い円盤状のもの（1区15住S37）がある。

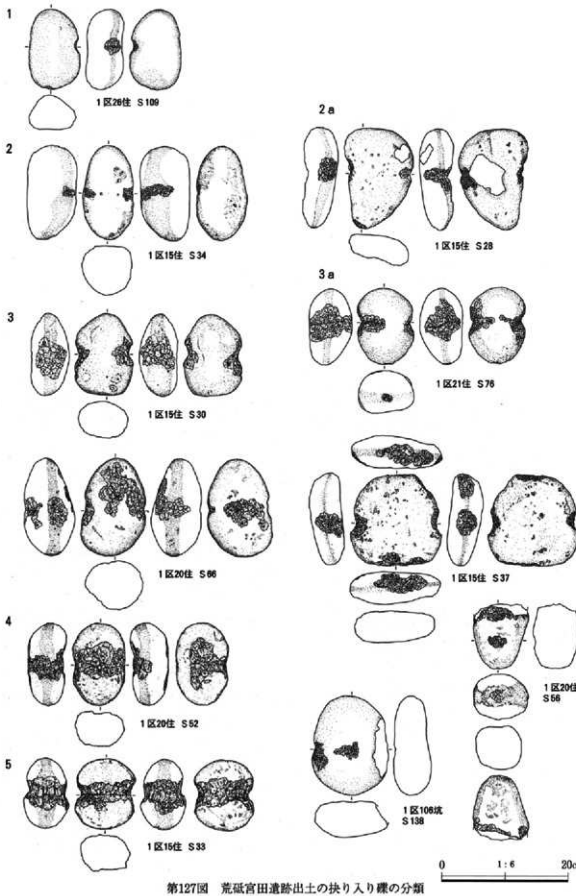
抉りの位置から抉りが一側縁のみに残されたもの(1)、両側縁に抉りのあるもの(2)、抉りが中央部にも及んだもの(3)、側縁と中央部の抉りが連続したもの(4)、抉りが全周したもの(5)の5種類に大きく分類できる。2類から5類の一部には小口にも打痕が残るもの（各a類）も存在するが、この抉り入り礫は、概ね礫の長軸側縁中央の一部あるいは全周に抉りをいれた石器であるといえる。1～5類は敲打痕の位置で分類したものであるが、これは敲打の及ぶ範囲の拡大を示していると見ることもできる。

本石器の機能・用途を考える上で、この抉りが、A）抉りを作ることを目的とした「成形」痕跡であるのか、B）使用の経過および結果を示している「使用」痕跡なのかが問題となろう。前述したように1～5類の形態差は、敲打の及ぶ範囲の拡大であることを考えると、Aの場合は1～4類の各形態が5類をつくるための未成品と考えられ、Bの場合は「使用」の頻度や「使用法」の相違・多様性と考えられる。小口の敲打痕もいわゆる敲き石との兼用であると説明できる。

Bの敲き石としての用途ならば、礫の側縁の敲打と表裏面中央の敲打とでは、その対象物が異なることが予想される。しかし、本石器の敲打痕を観察すると、側縁と中央部のそれは、直径5～8mm程度の小さな打痕の集合であり、あまり相違はないように見受けられる。とすれば側縁で敲きやすい、角張っているものや突起のあるものを、側縁・表裏面ともに同様な意識で敲いたとする方が説明しやすい。すなわち、Aの「成形」痕跡と考え、側縁あるいは中央部全周に抉りをいれて、この形状をつくることが目的であったと考えることも可能となる。この場合完成形である1区15号住居S33は、抉り内の打痕の上から抉りの奥を成形しているように見える部分がある。

現状では、この礫石器の機能を特定することはできないが、石材形状と敲打痕の関係等や石器の大きさ・重さを詳細に観察することで解明する糸口がつかめるかもしれないと考えている。

この形態の石器は、群馬県内では類例がない。県



第127図　荒砥宮田遺跡出土の抉り入り礫の分類

外に目を向けると、静岡県静岡市駿府城三の丸遺跡[注6]や沼津市雌鹿塚遺跡[注7]、南伊豆町日詰遺跡[注8]などで出土している大型の「礫石錘」に形態が似ているものがある。これらは海や沼での漁具と考えられている。

沼津市雌鹿塚遺跡のものは砂岩製で、側縁に打ち欠きがはいるもので、その打ち欠きが全周するものはない。一方、南伊豆町日詰遺跡のものは輝石安山岩製で、本遺跡例と同様に「溝」が全周するものと、一部に「溝」をつけただけのものがある。また、小口に敲打痕を持つものもあり、形態や石材に荒砥宮田遺跡の出土例と共通点が多い。6点出土しているうち4点が方形周溝墓の溝から出土しているのも特筆される。しかし、静岡県の例には、荒砥宮田遺跡例の、長さ約2倍、重さ約4倍に達する資料が含まれており、用途の違いを示唆している。

今のところ、荒砥宮田遺跡で出土した扶り入り礫の機能・用途を特定することはできない。したがって、本報告書では「石錘」という名称を避けている。静岡県では漁猟具として考えているが、このような1kg前後の礫を錘にするような漁法を群馬県では考えにくい。類例も乏しいので、ここでは資料提示にとどめ、漁猟具だけに限定せずに、類例の増加をまって、今後検討していきたい。

以上のように、荒砥宮田遺跡では古墳時代前期の住居から、比較的多くの礫石器が出土した。弥生時代からの道具の鉄器化によって、縄文時代以来の石器使用の比率は大きく低下するが、古墳時代になっても、礫石器の一部は使われている。今回も機能・用途が明確にできなかったものもあるが、他資料を丹念にみていくことによって、古墳時代の石器の実態を明らかにすることができると思われる。

（3）鉄製方形鍬・鋤先について

方形鉄製鍬・鋤先は、弥生時代後期から古墳時代中期にかけて使われた、農具につける鉄の刃先である。鍬か鋤かという用途論があり、名称が複数付けられているが、ここでは鍬か鋤か特定できないという説に拠り[注9]、「方形鍬・鋤先」と呼ぶ。「鍬・鋤先」にはU字形のものもあるが、これは古墳時代中期以降に使われたもので、方形からU字形へ転換したと考えられている。

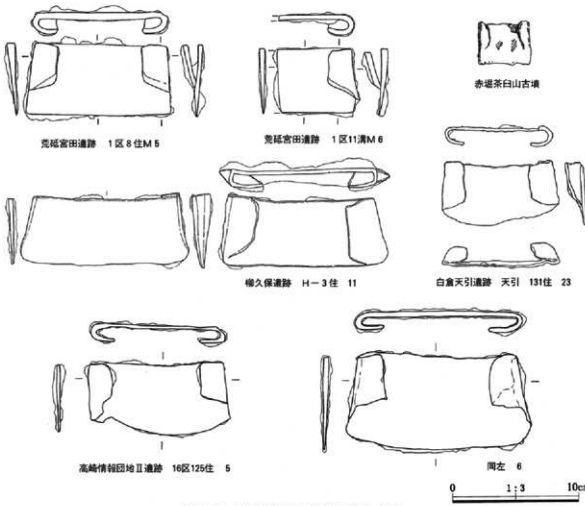
荒砥宮田遺跡では、2点の鉄製方形鍬・鋤先が出土した。一つは1区8号住居貯蔵穴東縁の床面直上で出土した。これは調査時には南東隅に重複する11号溝の出土遺物とされたが、整理時に上記のような出土状態が確認できたので本住居の遺物とした。もう1点は同じく11号溝から出土したが、こちらについては詳細な出土位置が不明であるので、本書では11号溝出土遺物として扱った。

方形鍬・鋤先は、北部九州を中心とする西日本で多く出土している。関東地域でも出土例はあるが、古墳の副葬品として出土している例が多く、住居から出土したのは、埼玉県番清水遺跡2号住居例や千葉県市原市番後台035号住居例が知られているだけであった[注10]。近年では千葉県で集成作業がおこなわれ、28例の出土があることが確認されている。

群馬県では、最近の集落調査で荒砥宮田遺跡の他に、下記の3遺跡5点の出土が確認されている。1点は前橋市柳久保遺跡H－3号住居例[注11]、もう1点は甘楽郡甘楽町白倉下原・天引向原遺跡天引131号住居例[注12]、あとの2点は高崎市高崎情報団地Ⅱ遺跡16区125号住居例[注13]である。いずれも出土土器から5世紀前半と考えられる住居[注14]で、ほぼ完形に近い方形鍬・鋤先が出土している。特に柳久保遺跡は荒砥宮田遺跡の東方約1.2kmの至近距離にある。

また、古墳の出土例は、古くから知られていた赤堀町の赤堀茶臼山古墳の石室から出土した例1点[注15]、独立行政法人東京博物館が所蔵する高崎市柴崎蟹沢古墳石室出土遺物のなかに、方形鍬・鋤先の破片と推定されるものが含まれていることが判明している。（高崎市市史編さん室ご教示）したがって群馬県では、集落出土の方形鍬・鋤先が5点、古墳出土のものが2点出土していることになる。

この鍬・鋤先は、他の鉄製農具とともに、弥生時代から古墳時代にかけての農耕地開発との関連性や、その所有形態から営農主体の問題に迫る遺物として



第128図　群馬県出土の鉄製方形鍬・鋤先

注目されてきた。しかし、東日本では、出土例が少ないことから、明確な位置づけが定まっていないのが現状である。群馬県でも上記のように出土例が増加しており、今後、古墳時代農耕集落の実態に迫る一資料となろう。

さらに、荒砥宮田遺跡の方形鍬・鋤先について、その製作技法を解明するために、金属学的調査を実施した。詳細な調査結果及びその解析は、本書第5章に掲載した。この調査で明らかになったのは、次の2点である。

第1点はこの方形鉄製鍬・鋤先が、異なる炭素量の鋼を合わせ鍛えてつくられていたことである。切断資料の組織観察によれば、刃部にはもちろんのこと、木部に装着する面にも炭素量の高い鋼が使われていた。また、外側の曲げられる面には刃部に比べ炭素量の低い軟らかい鋼が配されていた。刃部と木部装着面の高炭素鋼が一帯のものであるかどうかは、境界部に錆びがあり、確認することはできなかった。

古墳に副葬された大刀類の分析では、合わせ鍛えの状況が判明しつつあるが、[注16]古墳時代前期の農具の断面組織観察資料は多くない。今後の問題意識をもった分析とその結果の解析を経た資料の増加を待つことにしたい。

第2点は同一資料から摘出した試料であっても錆びの進行状態によって、分析結果に著しい差異が生じることを再確認したことである。鉄製品の分析にあたっては、埋蔵環境下からの汚染等を考え、錆部ではなくメタル残存部分での分析が望ましいことは以前からいわれていた。しかし遺跡から出土する鉄製品は錆びて、メタル部分の残存の有無と、有の場

第6表　錆とメタルの分析値の比較

遺物番号	分析番号	Sa		化学組成(mass%) T.Fe	Cu	Ni	Co	Mn	P	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V
M5	No.10	Eg	前　回	62.68	0.021	0.076	0.012	0.002	<0.05	0.003	0.62	0.021	0.138	0.01	<0.001
			再分析	94.42	0.017	0.075	0.02	0.001	<0.05	<0.001	0.29	0.024	0.021	<0.001	<0.001
M6	No.11	Eg	前　回	61.53	0.019	0.088	0.021	0.006	0.02	0.007	0.82	0.103	0.184	0.014	0.003
			再分析	99.28	0.024	0.103	0.027	<0.001	<0.05	<0.001	0.1	0.004	0.005	<0.001	<0.001

合の部位を外見から判断することは困難である。しかし採取した試料が錆部かメタル部かによって明らかに異なる分析値を示す元素がある。荒砥宮田遺跡の鉄製品分析では、切断によってメタル部分を確定し分析試料を再採取したことから、メタル部分と錆部分の成分分析値を比較することができた。

第6表に分析値を示した。T.Feが94.42%と分析されたM5の再分析値と前回(T.Fe62.68%)の分析値を比較すると、Ti・Si・Al・Mg・Vに富化が認められた。また、T.Feが99.28%と分析されたM6の再分析値と前回(T.Fe61.53%)の分析値を比較すると、Mn・Ti・Si・Al・Mg・Vに富化が認められた。元素によっては錆びの状況によって分析値が大きく異なることがわかる。一方、Cu・Ni・Coの3元素については錆びによって化学成分分析値の大きな変動は認められなかった。この3元素の成分比については岩手県立博物館の赤沼英男氏が注目しており、製品鉄器分類の重要な指標として扱われている[注17]。元素成分比による産地推定はこれまでいくつか試みられているが、この3元素についても今後、原料鉱石との対応関係が明確になれば、原料の流通や、鉄製品製作工程の解明につながると思われる。

一方、前述のようにメタル部分でも製品の部位によっては、炭素量や他の元素の量に違いが現れる。刃先のある鋼製鉄器については、刃部と棟部の両方を分析すべきことは従来からいわれていたが、今回、地金の外側と内側でも炭素量が違うことが判明した。鉄製品の分析にあたっては、鉄製品の形態・製造過程と分析値の総合的な解析が不可欠である。

以上をふまえると、切断調査をおこなって、メタル部分を確認した上で、分析試料を摘出することが最も多くの有益な情報の入手につながるといえるが、すべての遺物を切断することは困難である。したがって、分析および結果の解析にあたっては、分析試料の採取部位を充分考慮・選択した上で、実施しなければならない。

以上、鉄製鍬・鋤先について、成果をまとめた。類例の増加を待って、古墳時代集落における農具の位置づけを考えていきたい。

（4）1区333号土坑出土刀子について

1区333号土坑とした遺構周辺から刀子（M3）が出土した。この刀子の茎には木質部、刃部には鞘状の物質が残存している。

333号土坑は、当初隣接する1区36号住居に先行する住居の貯蔵穴だけが残ったとの所見で調査した。しかし、住居に伴うと確定できる根拠に乏しいことから、本書では単独の土坑として報告した。周辺からは土師器坏(第96図230・231)が出土しており、これらは6世紀代の遺物と考えられるものである。本刀子は厳密には出土位置が明確でなく、古墳時代の遺物と断定することはできない。しかし、周辺の同じ層位出土の土師器坏からすれば、古墳時代の遺物である可能性が高いと考えている。

刀子の形態は、刀身が小さく、研ぎ減ったと見られる三角形をしている。刃部の根元はやや抉られるように減っている。関は両関で、茎の刀身寄りには柄木が残る。刀身の片側には、鞘材が残っている。鞘の残存状況からして、呑口式である。柄木の棟側の側面には刀身側の端から外側に小さく曲がった金具が付けられており、きわめて特異な形態を示している。

柄木と鞘材は錆びが著しく、材の同定および分析

作業はしていない。鞘材は研ぎ減った刀身に密着した形で錆びており、柔軟性に富んだ製品であったと推察される。また鞘材の拡大写真を撮影したところ、横斜め方向にあく小孔が点在するのが確認できる。この小孔については、動物の毛穴の可能性を考えているが、その是非や動物の同定作業は今後の課題である。

また刀身の金属学的調査を実施した。詳細は本書第5章の分析および解析結果を参照していただきたい。この調査では、茎から試料を採取し、T.Fe53.42%の分析値が得られた。錆びが進んだ試料である。しかし、土壌汚染では考えにくいレベルの、Cu(0.126%)とNi(0.148%)が含まれていることが判明した。Coは0.038%で、これら3元素の成分比は類例がほとんどない領域にプロットされる。今後の分析値の蓄積に待つ他はないが、形態の特異性とともに注目される遺物である。

注

1．若狭　徹1996「群馬県地域」『弥生土器を語る会20回到達記念論文集』
2．若狭　徹1998「群馬の弥生土器が終わるとき」「人が動く・土器も動く」かみつけの里博物館第2回特別展図録
3．財団法人財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2001『波志江中宿遺跡』
4．財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2000『年報19』
5．深沢敦仁1998「上野における土器の交流と画期」庄内式土器研究XII
6．静岡市立登呂博物館1998『特別展　登呂の時代シリーズ　コメづくりの中の漁り－弥生農耕の周辺－』
7．沼津市教育委員会1990『蟹鹿塚遺跡発掘調査報告書Ⅰ(遺構編)・Ⅱ(遺物編)』
8．南伊豆町教育委員会1978『南伊豆下賀茂　日詰遺跡発掘調査報告』
9．岩崎卓也1985「鉄製鍬・鋤先の周辺」『日本史の黎明－八幡一郎先生頌寿記念考古学論集』六興出版
　松井和幸1987「日本古代の鉄製鍬先、鋤先について」考古学雑誌第72巻第3号
10．財団法人千葉県文化財センター2002『房総における原始古代の農耕』研究紀要23
11．前橋市埋蔵文化財発掘調査団1985『柳久保遺跡群Ⅰ　昭和59年度調査概要』
12．財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1994『白倉下原・天引向原遺跡Ⅲ《弥生・古墳時代本文編》』
13．高崎市教育委員会2002『高崎情報団地Ⅱ遺跡』
14．出土遺物の年代観は筆者に拠る。
15．帝室博物館1933『赤堀茶臼山古墳』
16．静岡県袋井市教育委員会1999『石ノ形古墳』
17．赤沼英男2000「三ツ木皿沼遺跡出土鉄関連遺物の金属考古学的調査結果」
　『三ツ木皿沼遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
　Hideo Akanuma 2001 "Iron objects from stratum Ⅱ at Kaman-Kalehöyük correlation between conposition and archaeological levels". Anatolion Archaeological Studies Vol.X,pp.181-190.

参 考 文 献

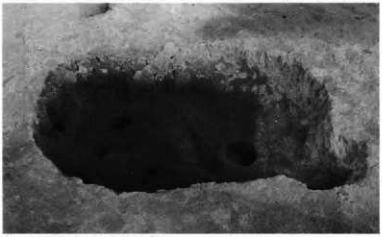
足利市文化財総合調査団1981『足利市文化財総合調査団　昭和55年度　年報Ⅱ』
前橋市教育委員会1979『富田遺跡群・西大室遺跡群・清里南部遺跡群』
前橋市教育委員会1981『富田遺跡群』
前橋市教育委員会1982『富田遺跡群・西大室遺跡群』
前橋市教育委員会1980『鶴谷遺跡群発掘調査概報』
前橋市教育委員会1981『鶴谷遺跡群発掘調査概報Ⅱ』
前橋市教育委員会1982『鶴谷遺跡群Ⅱ』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団1986『梅木遺跡』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団1990『横俠遺跡群Ⅰ』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団1991『横俠遺跡群Ⅱ』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団1991『横俠遺跡群Ⅲ』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団1992『横俠遺跡群Ⅳ』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団1985『柳久保遺跡群Ⅰ』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団1988『柳久保遺跡群Ⅵ』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団1988『柳久保遺跡群Ⅶ』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団1993『横俠遺跡群Ⅵ』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団1987『小稲荷遺跡』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団1994『地田梨Ⅲ遺跡』
大胡町教育委員会1981『天神風呂遺跡』
大胡町教育委員会1992『中川原遺跡群小林・山神・大畑遺跡』
大胡町教育委員会1992『中川原遺跡群上ノ山遺跡』
大胡町教育委員会1994『西小路遺跡』
大胡町教育委員会1999『上大屋南部遺跡群上大屋下組遺跡・上大屋中組遺跡・上大屋天王山遺跡』
大胡町教育委員会2001『茂木山神Ⅱ遺跡』
群馬県教育委員会1978『荒砥五反田遺跡』
群馬県教育委員会1984『山崎遺跡・寺東遺跡・寺前遺跡・東前田北遺跡・東原西遺跡・新山遺跡』
群馬県教育委員会1985『堤東遺跡』
群馬県教育委員会1991『舞台・西大室丸山』
群馬県教育委員会1991『富士山Ⅰ遺跡１号古墳』
群馬県教育委員会1992『丸山・北原』
群馬県教育委員会1992『上諏訪山Ａ・Ｂ・中山Ａ・東原Ａ・Ｂ』
群馬県教育委員会1996『下境Ⅰ・Ⅱ』
群馬県教育委員会1997『西大室丸山遺跡』
群馬県教育委員会1998『諏訪西遺跡・諏訪遺跡・柳久保遺跡・川籠皆戸遺跡・向原遺跡』
群馬県教育委員会1999『上西原遺跡』
群馬県教育委員会2000『村主遺跡・谷津遺跡』
群馬県教育委員会2001『北田下遺跡・中畑遺跡・中山Ｂ遺跡』

群馬県教育委員会2002『山王遺跡・大道遺跡・阿弥陀井戸道上遺跡・天神遺跡・元屋敷遺跡』
群馬県教育委員会2003『中屋敷Ⅰ遺跡・明神山遺跡・伊勢山遺跡・中島遺跡・西裏遺跡』
群馬県企業局1991『萱野・下田中・矢場遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1979『荒砥東原遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1982『荒砥上川久保遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1984『荒砥島原遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1985『荒砥洗橋遺跡・荒砥宮西遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1985『荒砥二之堰遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1985『荒砥前原遺跡・赤石城址』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1986『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1988『荒砥天之宮遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1988『二之宮宮下東遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1991『荒砥北三木堂遺跡Ⅰ』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1993『今井白山遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1993『荒砥宮川遺跡・荒砥宮原遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1994『白倉下原・天引向原遺跡Ⅲ《弥生・古墳時代本文編》』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1994『荒砥大日塚遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1994『今井道上遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1994『笂井八日市遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1994『小島田八日市遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1995『荒砥上ノ坊遺跡Ⅰ』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1995『今井道上・道下遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1996『荒砥上ノ坊遺跡Ⅱ』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1999『荒砥下押切Ⅱ遺跡・荒砥中屋敷Ⅱ遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2000『荒砥荒子遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2002『荒砥諏訪西遺跡Ⅰ』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2003『荒砥諏訪西遺跡Ⅱ　荒砥諏訪遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2000『年報19』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2001『年報20』

写　真　図　版

1　1区10号住居全景（東から）

2　1区10号住居遺物出土状態（東から）



3　1区62号土坑全景（西から）

4　2区33号土坑全景（北東から）

5　2区56号土坑全景（北西から）

6　2区58号土坑全景（北西から）

7　2区59号土坑全景（西から）

8　1区1号竪穴土層断面（東から）

9　1区1号竪穴全景（東から）

1　1区2号住居全景（南から）

2　1区7・10号住居全景（東から）

3　1区7号住居全景（東から）

4　1区8号住居全景（西から）

5　1区8号住居炉全景（東から）

6　1区8号住居貯蔵穴全景（東から）

7　1区9号住居全景（南から）

8　1区9号住居西半床面（北東から）

1　1区9号住居東半床面（北東から）

2　1区9号住居貯蔵穴遺物出土状態（南東から）

3　1区9号住居貯蔵穴遺物出土状態（西から）

4　1区12号住居全景（西から）

5　1区12号住居貯蔵穴全景（西から）

6　1区13号住居全景（西から）

7　1区13号住居貯蔵穴全景（西から）

8　1区13号住居北東隅遺物出土状態（南西から）

1　1区15号住居全景（南から）

2　1区15号住居炉全景（西から）

3　1区15号住居北壁土坑全景（東から）

4　1区15号住居西壁土坑全景（北から）

5　1区15号住居床面遺物出土状態

6　1区15号住居北西隅遺物出土状態（西から）

7　1区15号住居南東隅遺物出土状態（東から）

8　1区15号住居南西部遺物出土状態（西から）

1　1区17号住居全景（西から）

2　1区20号住居全景（北から）

3　1区20号住居南西部近景（東から）

4　1区20号住居炉全景（西から）

5　1区20号住居南東隅土坑全景（東から）

6　1区20号住居南西隅遺物出土状態（東から）

7　1区20号住居南西隅遺物出土状態（西から）

8　1区20号住居南西隅遺物出土状態（北から）

1　1区20号住居南西部遺物出土状態（北西から）

2　1区21号住居全景（北西から）

3　1区21号住居炉全景（北東から）

4　1区21号住居貯蔵穴全景（北西から）

5　1区21号住居北壁土坑全景（北西から）

6　1区21号住居北西壁土坑全景（北東から）

7　1区21号住居北東壁間仕切溝全景（北から）

8　1区21号住居貯蔵穴遺物出土状態（北東から）

1　1区22・23号住居全景（西から）

2　1区23号住居北西隅遺物出土状態（南から）

3　1区24号住居全景（東から）

4　1区24号住居土層断面（北から）

5　1区24号住居炉全景（南から）

6　1区26号住居全景（西から）

7　1区38号住居全景（北から）

8　1区38号住居炉全景（西から）

1　1区38号住居南東隅土坑・柱穴検出状況（西から）

2　1区38号住居南東隅遺物出土状態（北から）

3　1区43号住居全景（西から）

4　1区43号住居南隅土坑全景（北から）

5　1区45号住居北東柱穴遺物出土状態

6　1区東谷地80・81号溝全景（北から）

7　2区2号住居全景（東から）

8　2区2号住居炉全景（東から）

1　2区2号住居炉土層断面（東から）

2　2区2号住居貯蔵穴遺物出土状態（東から）

3　2区2号住居貯蔵穴東脇遺物出土状態（東から）

4　2区2号住居南東隅遺物出土状態（北から）

5　2区2号住居西壁際遺物出土状態（北から）

6　2区2号住居南隅遺物出土状態（南から）

7　2区5号住居全景（南東から）

8　2区5号住居炉土層断面（西から）

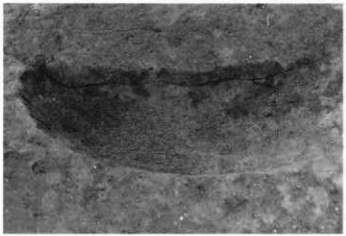
1　2区5号住居焼土脇遺物出土状態（北東から）

2　2区5号住居中央部礫(S127)出土状態（東から）

3　2区5号住居南西隅遺物出土状態（南東から）

4　2区6号住居遺物出土状態（東から）

5　2区6号住居全景（東から）



6　2区6号住居炉土層断面（南西から）

7　2区60号土坑全景（南西から）

8　2区60号土坑土層断面（西から）

1　2区東谷地西溝群全景（北から）

2　2区74・75号土坑全景（南東から）

3　2区東谷地西溝群作業風景

4　2区76号土坑全景（北東から）

5　2区76号土坑土層断面（北東から）

1　2区76号土坑S字甕(407)出土状態（北東から）

2　2区76号土坑S字甕(407)出土状態（北東から）

3　2区77号土坑全景（東から）

4　2区77号土坑全景（東から）

5　2区77号土坑土層断面（北東から）

6　2区77号土坑遺物出土状態（東から）

7　2区80号土坑全景（南から）

8　2区80号土坑土層断面（南東から）

1　2区1号周溝墓全景（北東から）

2　2区1号周溝墓南西溝A－A′土層断面（南東から）

3　2区1号周溝墓北東溝A－A′土層断面（南東から）

4　2区1号周溝墓北西溝B－B′土層断面（南西から）

5　2区1号周溝墓南東溝B－B′土層断面（南西から）

1　2区1号周溝墓南隅溝C—C′土層断面（西から）

2　2区1号周溝墓北東溝壺(337)出土状態（北から）

3　2区1号周溝墓北東溝壺(337)出土状態（南から）

4　2区1号周溝墓北東溝坩(338)出土状態（南から）

5　2区1号周溝墓作業風景（東から）

6　1区1号住居全景（南から）

7　1区1号住居貯蔵穴全景（西から）

8　1区1号住居南西壁際遺物出土状態（東から）

1　1区3号住居全景（南から）

2　1区3号住居竈全景（西から）

3　1区3号住居竈・貯蔵穴全景（西から）

4　1区3号住居竈・貯蔵穴全景（北から）

5　1区4・5・6号住居全景（北から）

6　1区4号住居南半全景（西から）

7　1区5号住居全景（西から）

8　1区11号住居全景（西から）

1　1区11号住居竈全景（西から）

2　1区11号住居貯蔵穴遺物出土状態（西から）

3　1区11号住居貯蔵穴周辺遺物出土状態（西から）

4　1区14号住居全景（西から）

5　1区14号住居竈全景（西から）

6　1区14号住居竈全景（北から）

7　1区14号住居竈周辺遺物出土状態（西から）

8　1区16号住居全景（西から）

1　1区16号住居竈全景（西から）

2　1区16号住居貯蔵穴全景（北から）

3　1区16号住居竈左脇遺物出土状態（西から）

4　1区18号住居南周溝内遺物出土状態（西から）

5　1区18号住居全景（西から）

6　1区18号住居竈全景（西から）

7　1区18号住居貯蔵穴全景（西から）

8　1区18号住居南西部遺物出土状態（北から）

1　1区19・20号住居全景（北から）

2　1区作業風景

3　1区作業風景

4　1区作業風景

5　1区19号住居全景（西から）

6　1区19号住居竈全景（西から）

7　1区19号住居竈全景（北から）

8　1区19号住居竈・貯蔵穴全景（西から）

1　1区22・23号住居全景（西から）

2　1区22号住居竈・貯蔵穴全景（西から）

3　1区22号住居南東張出部全景（南西から）

4　1区22号住居南西壁検出状況（北西から）

5　1区25号住居全景（北東から）

6　1区25号住居竈全景（北東から）

7　1区25号住居竈袖断ち割り土層断面（北東から）

8　1区25号住居竈支脚断ち割り土層断面（北東から）

1　1区25号住居貯蔵穴全景（東から）

2　1区25号住居南壁炭化物出土状況

3　1区27号住居全景（西から）

4　1区27号住居竈全景（西から）

5　1区28号住居全景（西から）

6　1区28号住居竈全景（西から）

7　1区28号住居竈遺物出土状態（西から）

8　1区28号住居貯蔵穴周辺遺物出土状態（北から）

1　1区28号住居貯蔵穴周辺遺物出土状態（西から）

2　1区29号住居全景（西から）

3　1区29・30号住居全景（西から）

4　1区29・30号住居全景（北から）

5　1区29号住居竈全景（西から）

6　1区29号住居貯蔵穴全景（西から）

7　1区29号住居北西隅炭化材出土状態（南西から）

8　1区30号住居全景（西から）

1　1区30号住居竈全景（西から）

2　1区30号住居貯蔵穴全景（西から）

3　1区31・33号住居全景（北から）

4　1区31号住居竈全景（西から）

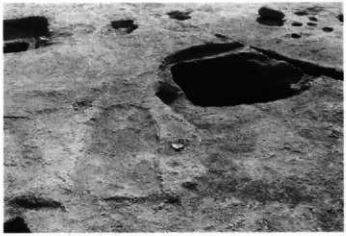
5　1区31号住居焼土範囲全景（西から）

6　1区31号住居北東隅壁(216)出土状態（西から）

7　1区33号住居竈全景（西から）

8　1区33号住居貯蔵穴全景（西から）

1　1区36号住居全景（北から）



2　1区333号土坑全景（北から）

3　1区37号住居竈全景（西から）

4　1区37号住居全景（西から）

5　1区37号住居中央部遺物出土状態（西から）

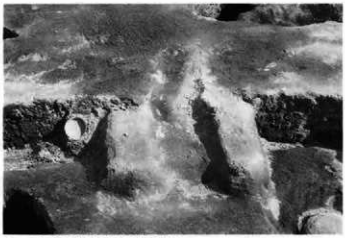
6　1区37号住居南東部遺物出土状態（西から）

7　1区39号住居全景（南西から）

8　1区39号住居南東壁際遺物出土状態（南西から）

1　1区40号住居貯蔵穴土層断面（南から）

2　1区41号住居全景（西から）



3　1区42号住居竈全景（西から）

4　1区42号住居全景（西から）

5　1区42号住居貯蔵穴全景（西から）

6　1区44号住居南西隅土坑全景（北から）

7　1区46号住居全景（北から）

8　1北区1号住居全景（南西から）

1　1北区1号住居竈全景（南西から）

2　1北区1号住居竈全景（東から）

3　1北区1号住居竈袖断ち割り状況（南西から）

4　1北区1号住居竈縦断断ち割り土層断面（南東から）

5　1北区1号住居竈遺物出土状態（南西から）

6　1北区1号住居竈右脇遺物出土状態（南西から）

7　1北区1号住居竈脇遺物出土状態（北西から）

8　1北区1号住居掘り方全景（南西から）

1　1北区1号住居掘り方土層断面（北西から）

2　1北区1号住居竈掘り方（南西から）

3　1北区2号住居全景（南西から）

4　1北区2号住居竈全景（西から）

5　1北区3号住居全景（東から）

6　1北区3号住居土層断面（東から）

7　1北区3号住居炉全景（東から）

8　1北区3号住居炉土層断面（北東から）

1　1北区3号住居炉掘り方全景

2　1北区4号住居全景1・2・3号土坑（北西から）

3　1北区5号住居全景（南東から）

4　1北区5号土坑土層断面（西から）

5　1北区5号土坑甕(401)出土状態（北西から）

6　1北区5号土坑甕(401)出土状態（北東から）

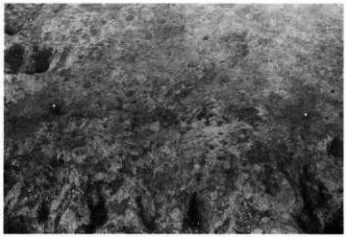
7　2区1号住居全景（西から）

8　2区1号住居竈遺物出土状態（西から）

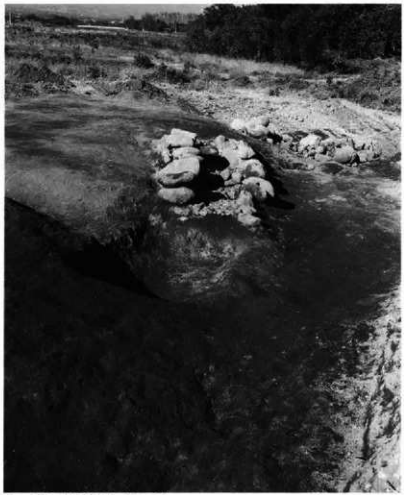
1　2区1号住居竈全景（西から）

2　2区3号住居全景（東から）

3　2区3号住居炉全景（東から）



4　2区3号住居炉土層断面（南から）



5　2区1号古墳全景（南から）

1　2区1号古墳残存状況（北から）

2　2区1号古墳残存状況（南西から）

3　2区1号古墳石室全景（南から）

4　2区1号古墳石室全景（東から）

5　2区1号古墳石室全景（北から）

1　2区1号古墳左側壁玄室南側部分（南東から）

2　2区1号古墳左側壁玄室北側部分（南東から）

3　2区1号古墳玄室から羨道部分（北から）

4　2区1号古墳羨道部右壁掘り方裏込土層断面（南から）

5　2区1号古墳掘り方全景（東から）

6　2区1号古墳掘り方全景（南から）

7　2区1号古墳掘り方近景（南から）

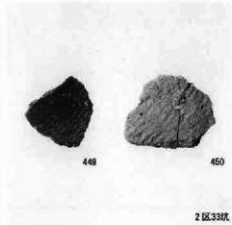
8　2区1号古墳右壁掘り方（南から）

9　2区1号古墳奥壁裏込掘り方土層断面（南から）

1区10住:40

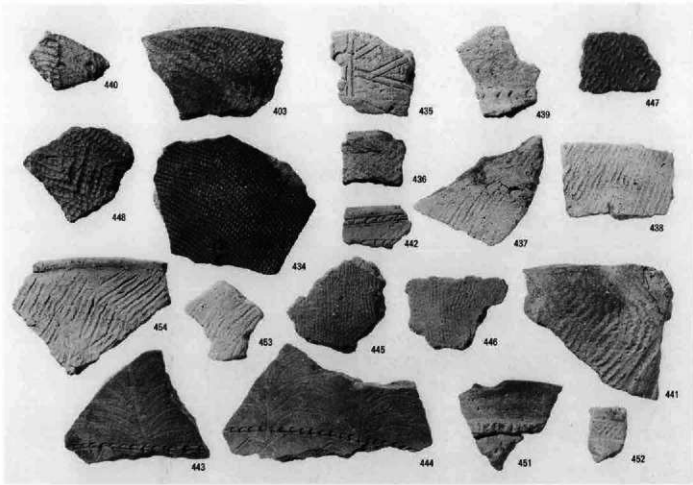
1区10住:S 14

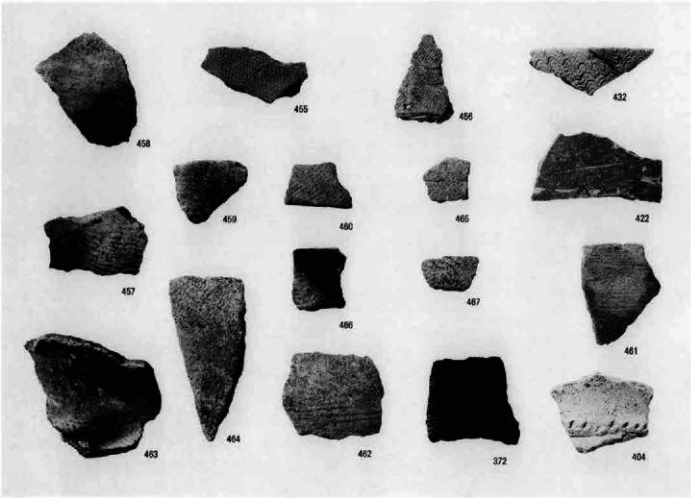
1区10住:S 15



2区33住

2区58住:S 146





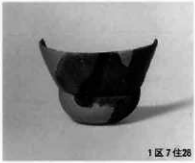
1 区14坑355

1 区14坑356

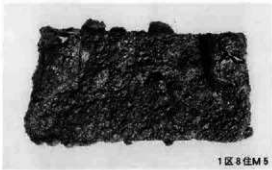
1 区 1 竪穴371

1 区 8 住32

1 区14坑354


1 区 7 住26

1 区 8 住31


1 区 8 住M 5

1区9住33

1区9住37

1区9住36

1区9住39

1区9住34

1区9住35

1区12住52

1区12住53

1区13住59

1区13住56

1区13住57

1区13住S22

1区13住S21

1区15住76

1区15住74

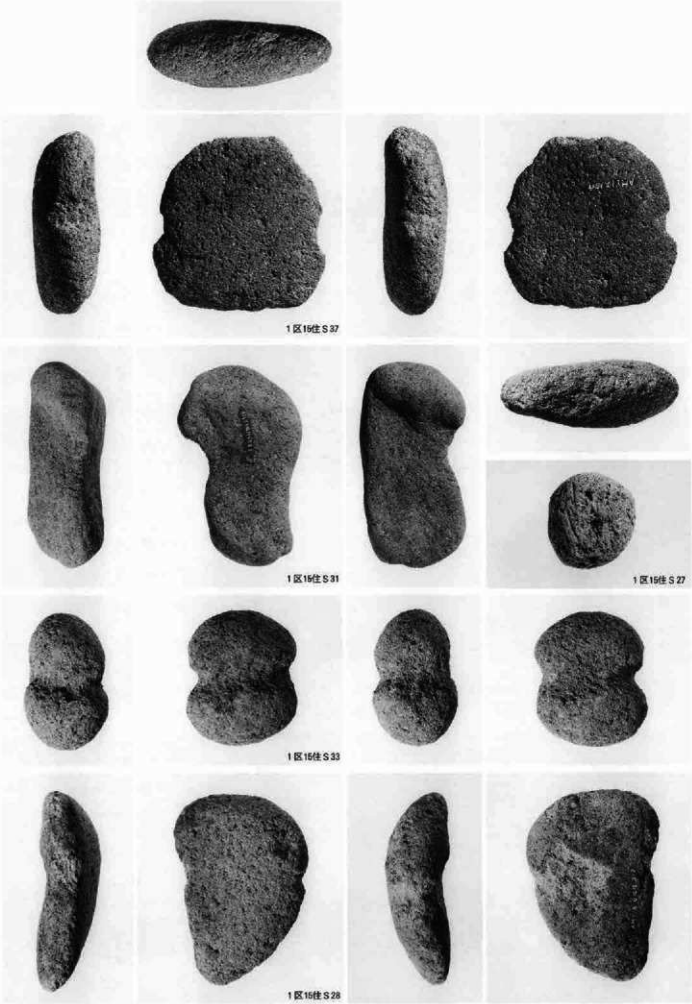
1区15住70

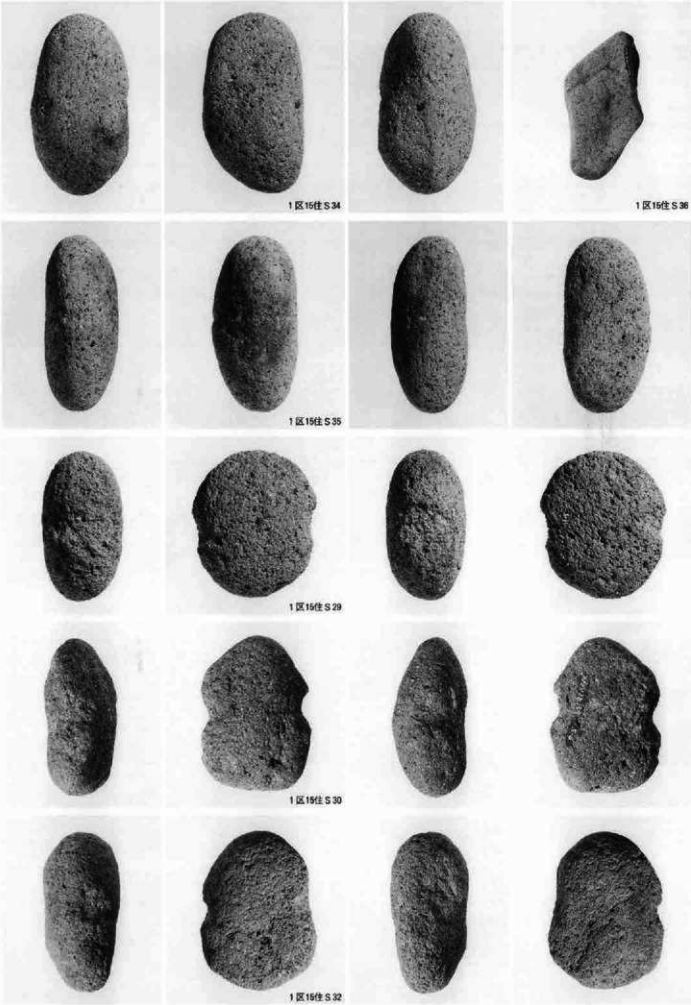
1区15住73

1区15住72

1区15住75

1区15住78


1 区15住 S 37
1 区15住 S 31
1 区15住 S 27
1 区15住 S 33
1 区15住 S 28


1区15住S34
1区15住S36
1区15住S35
1区15住S29
1区15住S30
1区15住S32

1 区17住88

1 区20住105

1 区20住102

1 区20住103

1 区20住139

1 区20住106

1 区20住125

1 区20住115

1 区20住129

1 区20住107

1 区20住128

1 区20住138

1 区20住120

1 区20住94

1 区20住111

1 区20住131

1 区20住99

1 区20住100

1 区20住109

1 区20住116

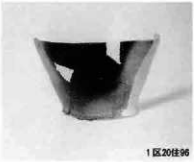
1 区20住142

1 区20住101

1 区20住95

1 区20住127

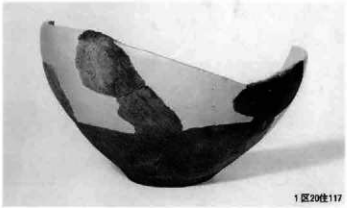
1 区20住113


1 区20住96

1 区20住124

1 区20住97

1 区20住133


1 区20住117

1 区20住114

1 区80溝377

1区20住130

1区20住119

1区20住122

1区20住104

1区20住93

1区20住118

1区20住S 64

1区20住S 63
1区20住S 62
1区20住S 61
1区20住S 60

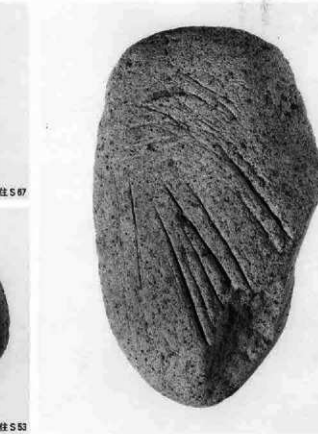
1区20住S 54
1区20住S 68
1区20住S 55

1 区20住 S 62

1 区20住 S 66

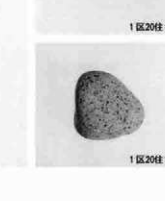
1 区20住 S 56

1 区20住 S 67

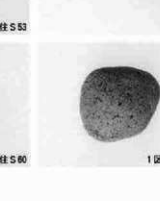


1 区20住 S 50

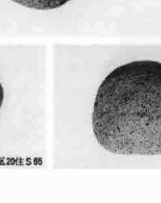
1 区20住 S 53



1 区20住 S 60



1 区20住 S 65



1 区20住 S 59

1区21住S 149

1区21住S 147

1区21住S 71

1区21住S 74

1区21住S 73

1区21住S 76

1区21住S 77

1区21住S 72

1区21住S 75

1区23住164

1区23住160

1区23住162

1区23住165

1区24住169

1 区24住 S 96

1 区24住 S 97

1 区24住 S 103

1 区24住 S 93

1 区24住 S 102

1 区24住 S 105

1 区24住 S 104

1 区24住 S 98

1 区24住 S 94

1 区24住 S 101

1 区24住 S 99

1 区24住 S 95

1 区24住 S 106

1区26住S 109

1区26住S 110

1区26住181

1区26住182

1区26住183

1区38住268

1区38住266

1区43住270

1区80溝383

1区80溝381

1区80溝379

1区80溝382

1区80溝385

1区80溝380

1区81溝398

1区81溝395

1区81溝397

1区81溝392

1区81溝394

1区81溝S 144

1区81溝390

1区88坑362

2区2住312

2区2住311

2区2住S 122

2区2住317

2区2住310

2区2住315

2区2住S 120

2区2住S 123

2区2住S 121

2区2住318

2区5住328

2区5住329

2区5住327

2区6住S131

2区6住S130

2区5住S127

2区6住349

2区6住345

1区6住348

2区5住M15

2区5住S125

2区5住S126

2区6住353

2区5住S124

2区6住344

2区76坑407

2区78坑409

2区76坑408

2区77坑410

1区20住158

2区2住319

1区20住132

2区1号周溝墓338

2区1号周溝墓339

2区1号周溝墓S132

2区1号周溝墓337

2区1号周溝墓S135

2区1号周溝墓S133

1区1住1

1区1住9

1区1住6

1区1住8

1区1住10

1区1住7

1区1住3

1区1住4

1区3住17

1区3住S 3

1区4住21

1区4住20

1区3住S 2

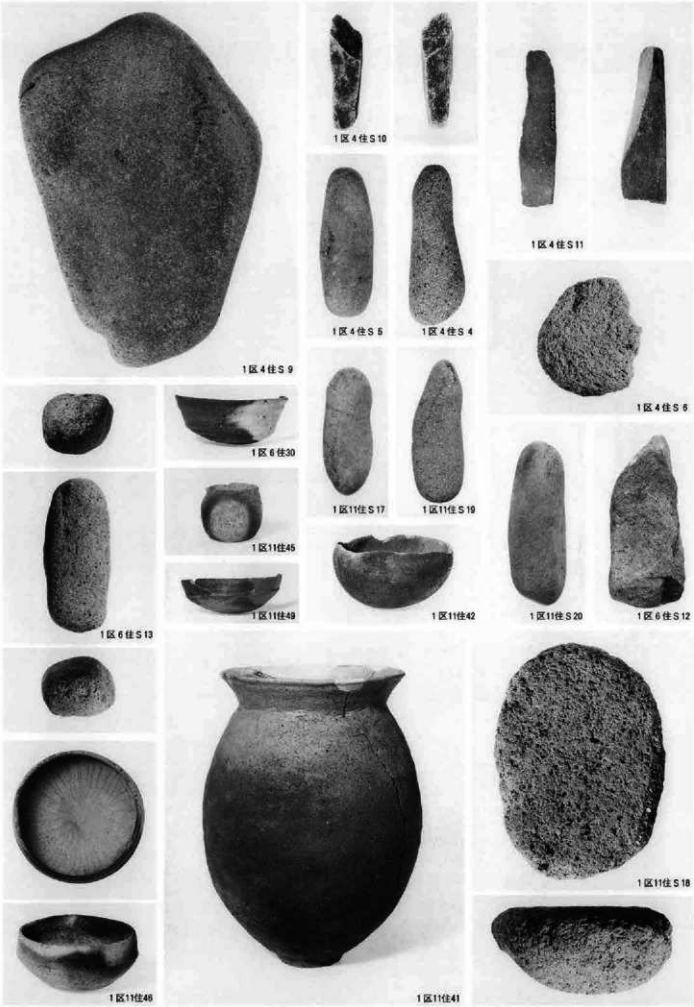
1区3住S 1

1区4住22

1区4住24

1区4住S 8

1区4住S 7


1区4住S 9
1区4住S 10
1区4住S 11
1区4住S 5
1区4住S 4
1区4住S 6
1区6住30
1区11住S 17
1区11住S 19
1区11住45
1区11住49
1区11住42
1区11住S 20
1区6住S 12
1区6住S 13
1区11住S 18
1区11住46
1区11住41

1区14住62

1区16住81

1区14住S26

1区14住S23

1区14住S25

1区14住S24

1区18住S38

1区18住S39

1区19住S48

1区19住90

1区19住S40

1区19住S47

1区19住S43

1区19住91

1区19住S44

1区19住S41

1区19住S45

1区19住M 1

1区19住M 2

1区19住S49

1区19住S46

1区19住S42

1区22住154

1区22住S 88

1区22住S 79

1区22住S 91

1区22住S 83

1区22住S 80

1区22住S 85

1区22住S 92

1区22住S 89

1区22住S 78

1区22住S 82

1区22住S 84

1区22住S 90

1区22住S 86

1区22住S 81

1区22住S 87

1区25住171

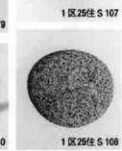
1区25住172

1区25住177

1区25住179

1区25住180

1区25住S 107


1区25住S 108

1区27住187

1区27住185

1区28住191

1区28住190

1区29住205

1区29住210

1区29住203

1区29住206

1区27住184

1区28住199

1区28住197

1区28住189

1区28住196

1区31住215

1区29住208

1区29住209

1区29住202

1区29住204

1区29住201

1区31住213

1区31住225

1区30住211

1区29住200

1区31住228

1区31住216

1区31住S 111

1区31住S 115

1区33住224

1区33住220

1区333坑230

1区333坑M 3

1区33住223

1区33住222

1区37住262

1区37住232

1区37住241

1区37住242

1区37住239

1区37住236

1区37住234

1区37住243

1区37住245

1区37住246

1区37住233

1区37住244

1区37住237

1区37住240

1区37住261

1区37住248

1区37住249

1区37住260

1区37住254

1区37住251

1区37住250

1区37住255

1区37住253

1区37住258

1区37住S114

1区37住S112

1区37住S113

1区39住271

1区39住270

1区40住277

1区39住273

1区39住274

1区42住278

1区40住283

1区39住280

1区40住276

1北区1住286

1北区1住294

1北区1住285

1北区1住296

1北区1住292

1北区1住287

1北区1住289

1区198抗367

1北区1住288

1北区1住293

1北区1住291

1北区1住S117

1北区1住290

1 北区 1 住 S 118

1 北区 1 住 S 116

1 北区 3 住300

1 北区 3 住301

1 北区 3 住 S 119

1 北区 5 住305

1 北区 5 坑401

2 区 1 住309

2 区 1 号墳M114

2 区 3 住323

2 区 1 号墳M115

2 区 1 号墳343

1 区334坑418

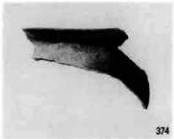
430

137

263

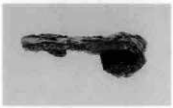
429

421


374

425

431



M 6

M20

M12

M 9

M10

S 161

S 143

S 138

S 162

S 139

S 70

S 160

S 159

S 156

S 140

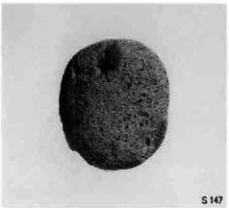
S 158

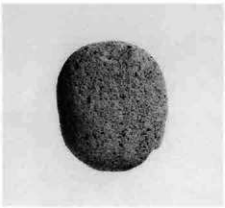
S 154

S 157

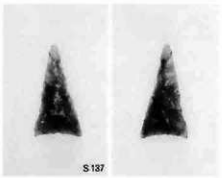
S 142

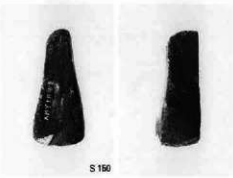
P L 58


S 147

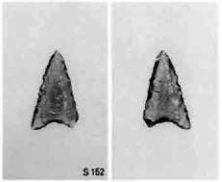


S 163


S 137


S 150

S 151


S 152

S 153

報告書抄録

ふ り が な	あらとみやたいせきいち
書　　名	荒砥宮田遺跡Ⅰ　縄文・古墳時代の調査
副 書 名	昭和58年度県営圃場整備事業荒砥北部地区に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団報告
シリーズ番号	第324集
編 著 者	小島敦子　穂江秀夫　赤沼英男
編 集 機 関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
所 在 地	〒377-8555　群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784－2　　TEL0279-52-2511
発行年月日	2003年10月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
荒砥宮田 (あらとみやた)	群馬県 (ぐんまけん) 前橋市 (まえばし) 荒口町 (あらくちまち)	10201		36″ 2′ 44″	139″ 5′ 43″	19830823～ 19840324	20265	県営圃場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
荒砥宮田	集落遺跡	縄文 古墳	竪穴住居 土坑 竪穴住居 土坑 周溝墓 古墳	縄文土器 打製石斧 石鏃 土師器 須恵器 鉄製方形鍬 ・鋤先 鏡形土製品	群馬県中央部にある赤城山の南麓に立地する。 縄文時代から中近世にかけての複合遺跡。縄文時代前期の住居１軒と、古墳時代の住居55軒の集落が検出された。古墳時代前期の住居から鉄製方形鍬・鋤先が出土した。

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査報告書第324集

荒砥宮田遺跡 I

縄文・古墳時代の調査
《本文・写真図版編》

昭和58年度県営圃場整備事業荒砥北部
地区に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書

平成15年10月24日　印刷
平成15年10月31日　発行

編集・発行／群馬県教育委員会
〒371-8570　群馬県前橋市大手町1丁目1番1号
電話（027）223－1111（代表）

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒377-8555　群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2
電話（0279）52－2511
ホームページアドレス　http://www.gunmaibun.org/

印刷／松本印刷工業株式会社